

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

下伊那郡高森町地内その2

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県

信州大学附属図書館



3470342209

木忠書
鈴茂蔵

長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—下伊那郡高森町地内 その2—

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会

序

昭和47年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、下伊那郡高森町その2地区（主として山吹）5遺跡の発掘調査が、7月24日から11月9日にかけて実施された。

この高森町山吹地帯は、木曾山脈山麓に形成された扇状地帯が、山際深く展開し、東に続く数段の段丘崖を経て天竜川氾濫原に接する低位段丘にいたるまで、遺跡分布が濃厚な所として古くから考古学上注目された地域のひとつである。殊に、中央自動車道の通過する山麓地帯は、先土器時代から歴史時代にかけての濃厚な遺跡地帯と予想され、昨年度の市田地区の発掘調査の成果が多大であり、特に、北部の増野地帯は下伊那地区有数の縄文時代集落地と予想されるので、今回の発掘調査には大きな期待が持たれていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、神庄裏遺跡の縄文時代早期の土器片集中とその立地、増野新切遺跡の縄文時代中期の集落立地とその構成、増野川子石遺跡の縄文時代早期の土器片、石器の集中縄文時代中期の集落立地等成果が大である。特筆される事として、傾斜度の高い山麓台地に70軒以上の住居址と、150以上の土埴の密集を確認した増野新切遺跡である。縄文時代中期の集落立地・構成の確認は言うまでもなく、個々の住居の形態、複合状況から見た住居址の纏年条件等示唆の多い遺構の把握は、学界に新知見をもたらすものも多く、調査の成果は、極めて多大であった。

報告書刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公園名古屋支社、岡飯田工事事務所、炎暑のきびしい7月から寒さが身にしみる11月にかけて、長期闊この調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査にご協力いただいた、長野県飯田市中央道事務所、下伊那郡高森町当局等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和48年3月20日

長野県教育委員会教育長 小松孝志

例 言

1. 本書は、昭和47年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、下伊那郡高森町地区その2（山吹）の調査報告書である。
2. 本書は、契約期間内（昭和48年3月20日）にまとめることが義務づけられており、なお、調査回（飯田班）は三か所の調査及び整理をしているため、整理期間内に資料をまとめるのがやっとであり、その上、本年は飯田本部のなくなることもあって、調査結果についての充分検討、研究することはできない。調査によって検出された遺構、遺物をより多く図示することに重点をおいた。本年は住居址内出土石器については図示をセレクトした。石器種別の出土数については表を参照してほしい。層集は神杖があった。
3. 遺構図においてドットは焼土を示す。埋没は○と◎（伏壘）で表示してある。ピットの深さは数字で表示してある。縮尺については図に示してある。
4. 図面作成については、調査員が全員であった。
5. 石器の実測図の中で「特殊磨石」については、A面——巾0.5～3cm前後の磨面、B面——A面以外の磨面、C部——敲打器として使用している面、D部——凸石として使用された凸部、E部——台石として使用されたダメージ部、と区別して、A～Eの記号で表示してある。
6. 遺跡の担当者の分担は、調査員協議して決め、それぞれの文末に文責を記した。
7. 遺物や関係図面、諸記録は、飯田市仲之町の下伊那教育会実習館の土蔵に保管しており、遺物の一部は同所の教育参考館に展示してある。

目 次

○はしがき

I 調査状況

1 調査にいたるまで	1
1) 中央道関係の経過	1
2) 発掘調査委託契約	9
3) 発掘調査開始までの準備	14
2 調査の実施と経過	16
1) 調査の開始と経過	16
2) 発掘調査協力者	17
3) 現地指導・現地視察者	18
3 発掘調査の方法	18

II 高森地区の状況

1 高森地区の位置と環境	19
2 高森地区の遺跡	21
1) 今までの調査	21
2) 中央道周辺の遺跡	22
3) 中位段丘上の遺跡	23
4) 下位段丘上の遺跡	24
5) 市田地区の遺跡	24

III 調査遺跡

1 鎌崎原A遺跡	28
1) 位置	28
2) 調査	28
2 神田裏遺跡	29
1) 位置	29
2) 遺構と遺物	29
A B 地点 イその他の遺物	29
3) まとめ	30
3 新田西高遺跡	31
1) 位置	31
2) 遺構と遺物	31

ア溝	イその他の遺物	31		
3)	まとめ	31		
4	増野新切遺跡	32		
1)	位置	32		
2)	遺構と遺物	32		
ア住所址	イ土城	ウその他の遺物	33	
3)	まとめ	59		
5	増野川子石遺跡	60		
1)	位置	60		
2)	遺構と遺物	60		
アA地点	イ住居址	ウ墓壇	エその他の遺物	60
3)	まとめ	65		
あとがき		66		

插图目次

第 1 图	高森地区道跡分布图	84
第 2 图	高森町地内中央道用地区内道跡分布图及び地形区	85
第 3 图	高森町地内各道跡地形区	86
第 4 图	神庄裏道跡B 地点及び新田西裏道跡溝状遺構	87
第 5 图	増野新切道跡遺構全体图	88
第 6 图	増野新切道跡住居址床面海拔高度位置图	89
第 7 图	増野新切道跡B 1号・2号住居址	90
第 8 图	増野新切道跡B 3号・4号住居址	91
第 9 图	増野新切道跡B 5号・6号・30号住居址	92
第 10 图	増野新切道跡B 7号・8号住居址	93
第 11 图	増野新切道跡B 9号・10号住居址	94
第 12 图	増野新切道跡B 11号・12号・15号・29号住居址	96
第 13 图	増野新切道跡B 13号・14号・16号・19号住居址	96
第 14 图	増野新切道跡B 17号・18号住居址	97
第 15 图	増野新切道跡B 20号・21号・22号住居址	98
第 16 图	増野新切道跡B 23号・24号・25号住居址	99
第 17 图	増野新切道跡B 26号・27号・28号住居址	100
第 18 图	増野新切道跡D 1号・2号住居址	101
第 19 图	増野新切道跡D 3号・4号住居址	102
第 20 图	増野新切道跡D 8号・9号・10号住居址	103
第 21 图	増野新切道跡D 11号・19号・29号住居址	104
第 22 图	増野新切道跡D 7号・12号・13号住居址	105
第 23 图	増野新切道跡D 14号・15号住居址	106
第 24 图	増野新切道跡D 16号・17号・31号住居址	107
第 25 图	増野新切道跡D 20号・21号住居址	108
第 26 图	増野新切道跡D 22号・23号・28号住居址	109
第 27 图	増野新切道跡D 24号・25号住居址	110
第 28 图	増野新切道跡D 26号・27号住居址	111
第 29 图	増野新切道跡D 30号・32号住居址	112
第 30 图	増野新切道跡D 33号・34号・35号住居址	113
第 31 图	増野新切道跡D 36号・37号住居址	114

第 32 区	増野新切遺跡D 38号・39号・40号・41号・42号・43号・44号住居址	115
第 33 区	増野新切遺跡D 45号・46号・47号・48号住居址	116
第 34 区	増野新切遺跡土壌分布区	117
第 35 区	増野新切遺跡B 区土壌断面図	118
第 36 区	増野新切遺跡D 区土壌断面図	119
第 37 区	増野新切遺跡D 区土壌断面図	120
第 38 区	増野川子石遺跡A 地点土器・石器出土位置図	121
第 39 区	増野川子石遺跡遺構全体図及び1号住居址	122
第 40 区	増野川子石遺跡2号・3号・4号住居址及び1号土壌図	123
第 41 区	錦鏡原A 遺跡出土土器及び神田裏遺跡B 地点出土土器・石器	124
第 42 区	神田裏遺跡・新田西裏遺跡及び増野新切遺跡出土土器	125
第 43 区	増野新切遺跡B 2号住居址出土土器	126
第 44 区	増野新切遺跡B 3号住居址出土土器	127
第 45 区	増野新切遺跡B 4号住居址出土土器	128
第 46 区	増野新切遺跡B 5号・B 7号住居址出土土器	129
第 47 区	増野新切遺跡B 8号住居址出土土器	130
第 48 区	増野新切遺跡B 8号・B 10号住居址出土土器	131
第 49 区	増野新切遺跡B 9号住居址出土土器	132
第 50 区	増野新切遺跡B 9号住居址出土土器	133
第 51 区	増野新切遺跡B 11号住居址出土土器	134
第 52 区	増野新切遺跡B 12号・B 14号住居址出土土器	135
第 53 区	増野新切遺跡B 13号・B 15号・B 19号住居址出土土器	136
第 54 区	増野新切遺跡B 16号住居址出土土器	137
第 55 区	増野新切遺跡B 20号・B 21号住居址出土土器	138
第 56 区	増野新切遺跡B 22号住居址出土土器	139
第 57 区	増野新切遺跡B 23号住居址出土土器	140
第 58 区	増野新切遺跡B 24号住居址出土土器	141
第 59 区	増野新切遺跡B 25号住居址出土土器	142
第 60 区	増野新切遺跡B 26号住居址出土土器	143
第 61 区	増野新切遺跡B 28号住居址出土土器	144
第 62 区	増野新切遺跡B 27号・B 29号・B 30号住居址出土土器	145
第 63 区	増野新切遺跡D 1号・D 2号住居址出土土器	146
第 64 区	増野新切遺跡D 3号・D 4号・D 7号住居址出土土器	147
第 65 区	増野新切遺跡D 8号住居址出土土器	148
第 66 区	増野新切遺跡D 8号住居址出土土器	149
第 67 区	増野新切遺跡D 9号・D 10号住居址出土土器	150

第 68 区	増野新切遺跡D 11号住居址出土土器	151
第 69 区	増野新切遺跡D 12号住居址出土土器	152
第 70 区	増野新切遺跡D 13号住居址出土土器	153
第 71 区	増野新切遺跡D 14号住居址出土土器	154
第 72 区	増野新切遺跡D 14号住居址出土土器	155
第 73 区	増野新切遺跡D 15号・D 16号住居址出土土器	156
第 74 区	増野新切遺跡D 17号・D 19号・D 20号住居址出土土器	157
第 75 区	増野新切遺跡D 21号・D 22号住居址出土土器	158
第 76 区	増野新切遺跡D 23号・D 26号住居址出土土器	159
第 77 区	増野新切遺跡D 24号住居址出土土器	160
第 78 区	増野新切遺跡D 24号住居址出土土器	161
第 79 区	増野新切遺跡D 25号住居址出土土器	162
第 80 区	増野新切遺跡D 26号住居址出土土器	163
第 81 区	増野新切遺跡D 27号・D 28号住居址出土土器	164
第 82 区	増野新切遺跡D 29号・D 31号・D 33号住居址出土土器	165
第 83 区	増野新切遺跡D 30号上住居址出土土器	166
第 84 区	増野新切遺跡D 30号下住居址出土土器	167
第 85 区	増野新切遺跡D 32号住居址出土土器	168
第 86 区	増野新切遺跡D 34号・D 35号住居址出土土器	169
第 87 区	増野新切遺跡D 36号住居址出土土器	170
第 88 区	増野新切遺跡D 37号住居址出土土器	171
第 89 区	増野新切遺跡D 38号・D 39号・D 40号住居址出土土器	172
第 90 区	増野新切遺跡D 42号・D 44号住居址出土土器	173
第 91 区	増野新切遺跡D 45号・D 46号・D 47号住居址出土土器	174
第 92 区	増野新切遺跡D 48号住居址及びD 区上境内出土土器	175
第 93 区	増野新切遺跡出土土器	176
第 94 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	177
第 95 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	178
第 96 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	179
第 97 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	180
第 98 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	181
第 99 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	182
第 100 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	183
第 101 区	増野川子石遺跡A 地点出土土器	184
第 102 区	増野川子石遺跡1号・4号住居址出土土器	185
第 103 区	増野川子石遺跡2号・4号住居址出土土器	186

第 104 区	増野川子石遺跡 3 号・4 号住居址出土石器	187
第 105 区	増野川子石遺跡 3 号住居址出土石器及びその他の石器	188
第 106 区	神出裏遺跡及び新日西裏遺跡その他出土石器	189
第 107 区	増野新切遺跡出土石器	190
第 108 区	増野新切遺跡出土石器	191
第 109 区	増野新切遺跡出土石器	192
第 110 区	増野新切遺跡出土石器	193
第 111 区	増野新切遺跡出土石器	194
第 112 区	増野新切遺跡出土石器	195
第 113 区	増野新切遺跡出土石器	196
第 114 区	増野新切遺跡出土石器	197
第 115 区	増野新切遺跡出土石器	198
第 116 区	増野新切遺跡出土石器	199
第 117 区	増野新切遺跡出土石器	200
第 118 区	増野新切遺跡出土石器	201
第 119 区	増野新切遺跡出土石器	202
第 120 区	増野新切遺跡出土石器	203
第 121 区	増野新切遺跡出土石器	204
第 122 区	増野新切遺跡出土石器	205
第 123 区	増野新切遺跡出土石器	206
第 124 区	増野新切遺跡出土石器	207
第 125 区	増野新切遺跡出土石器	208
第 126 区	増野新切遺跡出土石器	209
第 127 区	増野新切遺跡出土石器	210
第 128 区	増野新切遺跡出土石器	211
第 129 区	増野新切遺跡出土石器	212
第 130 区	増野新切遺跡出土石器	213
第 131 区	増野新切遺跡出土石器	214
第 132 区	増野新切遺跡出土石器	215
第 133 区	増野新切遺跡出土石器	216
第 134 区	増野新切遺跡出土石器	217
第 135 区	増野新切遺跡出土石器	218
第 136 区	増野新切遺跡出土石器	219
第 137 区	増野新切遺跡出土石器	220
第 138 区	増野新切遺跡出土石器	221
第 139 区	増野新切遺跡出土石器	222

第 140区	増野新切遺跡出土石器	223
第 141区	増野新切遺跡出土石器	224
第 142区	増野新切遺跡出土石器	225
第 143区	増野新切遺跡出土石器	226
第 144区	増野新切遺跡出土石器	227
第 145区	増野新切遺跡出土石器	228
第 146区	増野新切遺跡出土石器	229
第 147区	増野新切遺跡出土石器	230
第 148区	増野新切遺跡出土石器	231
第 149区	増野新切遺跡出土石器	232
第 150区	増野新切遺跡出土石器	233
第 151区	増野新切遺跡出土石器	234
第 152区	増野新切遺跡B 区土壌出土石器	235
第 153区	増野新切遺跡D 区土壌出土石器	236
第 154区	増野新切遺跡住居址出土石器	237
第 155区	増野新切遺跡住居址出土石器	238
第 156区	増野新切遺跡土壌及びその他出土石器	239
第 157区	増野新切遺跡出土石棒	240
第 158区	増野新切遺跡その他出土石器	241
第 159区	増野新切遺跡その他出土石器	242
第 160区	増野新切遺跡その他出土石器	243
第 161区	増野新切遺跡出土石器	244
第 162区	増野新切遺跡出土石器	245
第 163区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	246
第 164区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	247
第 165区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	248
第 166区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	249
第 167区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	250
第 168区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	251
第 169区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	252
第 170区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	253
第 171区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	254
第 172区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	255
第 173区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	256
第 174区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	257
第 175区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	258

第 176 区	増野川子石遺跡A 地点出土石器	259
第 177 区	増野川子石遺跡出土石器	260
第 178 区	増野川子石遺跡出土石器	261
第 179 区	増野新切遺跡出土土偶	262
第 180 区	増野新切遺跡出土土偶	263
第 181 区	増野新切遺跡出土土偶	264
第 182 区	増野新切遺跡出土土偶	265
第 183 区	増野新切遺跡出土土偶	266
第 184 区	増野新切遺跡出土土偶	267
第 185 区	増野新切遺跡出土土偶	268
第 186 区	増野新切遺跡出土土偶	269
第 187 区	増野新切遺跡出土土偶	270
第 188 区	増野新切遺跡出土土製品	271
第 189 区	増野新切遺跡出土小型土器	272
第 190 区	増野新切遺跡、増野川子石遺跡出土土製品及び石製品	273
第 191 区	増野新切遺跡出土土製円板	274
第 192 区	増野新切遺跡出土土製円板	275
第 193 区	増野新切遺跡、増野川子石遺跡出土土製円板	276
第 194 区	増野川子石遺跡出土土製円板	277
第 195 区	増野新切遺跡住居址、土城出土海浜石	278
第 196 区	増野新切遺跡埋壘状態区	279
第 197 区	増野新切遺跡埋壘状態区	280
第 198 区	増野新切遺跡埋壘状態区	281
第 199 区	増野新切遺跡埋壘状態区	282
第 200 区	増野新切遺跡埋壘状態区	283
第 201 区	増野新切遺跡埋壘状態区	284
第 202 区	増野新切遺跡埋壘状態区	285

図 版 目 次

第一図	高森町山吹地区遺跡	286
第二図	山吹地区、神田裏遺跡	287
第三図	神田裏・新田西裏遺跡遺構	288
第四区	増野新切遺跡	289
第五区	増野新切遺跡住居址	290
第六区	増野新切遺跡出土土器	291
第七区	増野新切遺跡住居址	292
第八区	増野新切遺跡住居址	293
第九区	増野新切遺跡住居址	294
第十区	増野新切遺跡住居址	295
第十一区	増野新切遺跡住居址	296
第十二区	増野新切遺跡出土土器	297
第十三区	増野新切遺跡出土土器	298
第十四区	増野新切遺跡住居址	299
第十五区	増野新切遺跡住居址	300
第十六区	増野新切遺跡住居址	301
第十七区	増野新切遺跡出土土器	302
第十八区	増野新切遺跡住居址群	303
第十九区	増野新切遺跡住居址	304
第二十区	増野新切遺跡住居址	305
第二一区	増野新切遺跡住居址	306
第二二区	増野新切遺跡出土土器	307
第二三区	増野新切遺跡住居址	308
第二四区	増野新切遺跡住居址	309
第二五区	増野新切遺跡住居址	310
第二六区	増野新切遺跡出土土器	311
第二七区	増野新切遺跡住居址	312
第二八区	増野新切遺跡出土土器	313
第二九区	増野新切遺跡住居址	314
第三〇区	増野新切遺跡住居址	315
第三一図	増野新切遺跡住居址	316
第三二図	増野新切遺跡住居址	317

第三三圖	增野新切遺跡住居址	318
第三四圖	增野新切遺跡住居址	319
第三五圖	增野新切遺跡住居址	320
第三六圖	增野新切遺跡住居址	321
第三七圖	增野新切遺跡住居址	322
第三八圖	增野新切遺跡住居址	323
第三九圖	增野新切遺跡住居址	324
第四〇圖	增野新切遺跡住居址	325
第四一圖	增野新切遺跡出土土器	326
第四二圖	增野新切遺跡住居址	327
第四三圖	增野新切遺跡住居址	328
第四四圖	增野新切遺跡住居址	329
第四五圖	增野新切遺跡住居址	330
第四六圖	增野新切遺跡出土土器	331
第四七圖	增野新切遺跡住居址	332
第四八圖	增野新切遺跡出土土器	333
第四九圖	增野新切遺跡住居址	334
第五〇圖	增野新切遺跡住居址	335
第五一圖	增野新切遺跡住居址	336
第五二圖	增野新切遺跡住居址	337
第五三圖	增野新切遺跡住居址	338
第五四圖	增野新切遺跡住居址	339
第五五圖	增野新切遺跡住居址	340
第五六圖	增野新切遺跡住居址	341
第五七圖	增野新切遺跡出土土器	342
第五八圖	增野新切遺跡住居址	343
第五九圖	增野新切遺跡土器	344
第六〇圖	增野新切遺跡土器	345
第六一圖	增野新切遺跡出土土器	346
第六二圖	增野新切遺跡出土土器	347
第六三圖	增野新切遺跡出土土器	348
第六四圖	增野新切遺跡出土土器	349
第六五圖	增野新切遺跡出土土器	350
第六六圖	增野新切遺跡出土土器	351
第六七圖	增野川子石遺跡	352
第六八圖	增野川子石遺跡出土狀態	353

第六九区	増野川子石遺跡出土石器	354
第七〇区	増野川子石遺跡出土石器	355
第七一區	増野川子石遺跡出土石器	356
第七二區	増野川子石遺跡出土石器	357
第七三區	増野川子石遺跡出土石器	358
第七四區	増野川子石遺跡出土石器	359
第七五區	増野川子石遺跡出土石器	360
第七六區	増野川子石遺跡出土石器	361
第七七區	増野川子石遺跡出土石器	362
第七八區	増野川子石遺跡住居址	363
第七九區	増野川子石遺跡住居址	364
第八〇區	増野川子石遺跡住居址	365
第八一區	調査関係者	366
第八二區	スナップ	367

表 目 次

第1表	高森町内遺跡一覧表	25
第2表	高森町地内その2 遺構一覧表	67
第3表	高森町地内その2 遺跡別遺物一覧表	67
第4表	高森町地内その2 住居址一覧表	68
第5表	土壌一覧表	73
第6表	土製瓦板一覧表	80

1 調査状況

1 調査にいたるまで

1) 中央道関係の経過

ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線を西の宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼ぶ。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定され、その後道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那谷に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓を通過して山梨県に至るやく122kmとなっている。

昭和41年、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道施設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・巾杭設置として用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実には遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ヶ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊された例のあったことである。

イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪3地区で開きその対策を打合せ。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区112遺跡、諏訪地区90遺跡計349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡（含斜坑広場）、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という）の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の4県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団社の業務進捗がまちまちであり、各県の取り組み方も一律でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、A・路線計画からははずすもの、B・路線計画の中に入れるが保護するもの、C・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するもの3区分されている。それに基づいて、中央自動車道地内遺跡についても、A・B・Cの3区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局190遺跡すべてCとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」で定められている。しかし、県教育委員会では、営営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団を置いて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年3月に、飯田市上飯田地区の2遺跡（さつみ・古屋垣外）の発掘調査が行われた。この調査は、年度未も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年4月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課（後に文化課に独立）では、担当指導主事を2名増員し、4名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、6月と7月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、7月には「長野県中央道遺跡調査会」を再結成した。

昭和45年度は、8月に下伊那郡阿智村地内7遺跡（調査費179万円）、9月に飯田地内その1地区10遺跡（調査費1590万円）の発掘調査委託契約を相次いで結び、9月2日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の導入式を挙行している。翌9月3日から2班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡富田村地内その1地区6遺跡（調査費500万円）の発掘調査委託契約を結び、昭和46年3月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、4月に、上伊那郡飯島町内その1地区（調査費1224万円）、8月に下伊那郡高森町内その1地区（調査費3120万円）、9月に下伊那郡阿智村圓新坑広場その1杉の木平遺跡（調査費730万円）

の発掘調査委託契約が結ばれ、発掘調査が進められている。なお上伊那郡中田切川橋梁工事先行に伴う上伊那郡飯島町内その2久根平遺跡(調査費123万円)の発掘調査委託契約が、9月に結ばれ、特設調査団が組織され調査を完了している。

昭和47年度は、買収契約も進展し、上下伊那郡下の各工区において工事発注が続出する年とあって、県教育委員会文化課においては、担当指導主事を3名増員し、4班編成の調査団を組織し、飯出・下伊那地区に2班、伊那・上伊那地区に2班ずつ常駐させて発掘調査に当たっている。4月に飯田市内その2地区17遺跡(調査費2367.5万円)、上伊那郡飯島町内その3地区8遺跡(調査費677.1万円)、伊那市西森近地区18遺跡(調査費3361.6万円)の発掘調査委託契約が成立し、広範囲にわたる発掘調査が開始されている。さらに、下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(調査費2002万円)、下伊那郡松川町内12遺跡(調査費1864.3万円)、駒ヶ根市内8遺跡(調査費563.5万円)の発掘調査委託契約が7月に成立している。8月には、上伊那郡南箕輪村内その1地区5遺跡(調査費1051.5万円)の発掘調査委託契約が結ばれている。さらに飯田市山本地籍石子原遺跡において多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器として、その重要性が認められて第2次調査の再協議が成立し、飯田市内その3(調査費410万円)として発掘調査委託契約が結ばれている。10月には上伊那郡南箕輪村内その2地区4遺跡(調査費514.4万円)と、上伊那郡の天竜川橋梁工事と辰野町平出陸橋工事に伴う辰野町内その1地区3遺跡(調査費497.2万円)の発掘調査委託契約が成立している。本年度調査された遺跡は、数にして81、面積にして132180㎡と広大であるばかりでなく、遺構・遺物の発見も膨大にして、発掘調査の成果も多大である。45年発掘調査開始以来3年目を終ろうとしている今日、出土遺物の累積も予期以上に多く、関係市町村当事者や、考古学者等からその資料の保存・活用の方途についての要望が提出されている。中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査も、昭和48年度の七伊那地区北平と、諏訪地区の調査や、やがて予想される長野線の発掘調査を含めて、新しい局面を迎えているように思える。

ウ 中央道関係の経過一覧

この経過一覧は、前項のものと重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央道建設法案とそれに基づく機関、県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・研究会、発掘調査に関する経過については全部収録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。なお、発掘調査委託契約地区名について、昭和47年度から呼称が変っているか、ここでは従来例にならっている。

- 32・4・16 国土開発縦貫自動車道建設法の公布(施行同年7月31日)
- 32・7・25 中央自動車道予定路線を定める法律制定
- 39・6・16 国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正
- 41・7・25 5縦貫道整備計画決定、道路整備地行命令が日本道路公団に出る。
- 8・12 長野県中央自動車道対策協議会開催
- 8・12 志那川トンネル立入調査開始
- 9・22 中央自動車道長野県建設協力会開催
- 9・30 下伊那郡阿智村の一部、飯田市、瑞町(14km)ルート発表

- 41・11・16 長野県中央道建設対策本部設置、県企両部に中央道課および飯田中央道事務所設置
 #・12・15 中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
- 42・2・14 中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
 #・2・21 " " " "（上伊那地区）
 #・2・22 " " " "（諏訪地区）
- #・3・23 恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
 #・3・28 下伊那郡上郡町・飯田市聖光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
 #・3・31 恵那山トンネル補助トンネル工事着工
- #・4・15 文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ開催
 #・5・4 伊那中央道事務所設置
 #・5・30 中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費用庫補助申請
- #・6・13 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回 長野県庁）
 #・8・1 下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 147
 ~12 (団長 大沢和夫)
- #・11・1 上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
 #・11・10 上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 112
 ~26 (団長 林 茂樹)
- #・11・27 諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 90
 ~12・15 (団長 藤森栄一)
- #・12・16 下伊那郡阿智村殿高・智里地区（5.66km）ルート発表
- 43・2・27 公園名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
 #・3・5 公園本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
 #・7・23 下伊那郡阿智村智里殿高地区、県内のトップをきって用地買収契約成立
 #・10・12 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回 松本市）
- 44・3・18 " " " (第3回 岐阜市)
 #・7・15 公園名古屋支社と協議（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
 #・8・12 上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
 #・10・3 飯田市上飯田地区3遺跡について公園名古屋支社から意見聴取（県教委回答 12・11）
 #・10・8 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
 #・10・20 飯田市上飯田地区3遺跡について公園名古屋支社との現地協議
 #・10・31 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
 #・11・11 恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
 #・12・11 公園名古屋支社と協議（45年の発掘調査について）
- 45・1・29 諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
 #・2・2 公園名古屋支社と協議（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
 45・2・23 岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- ※・2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- ※・3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- ※・3・5 飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（团长 大沢和夫）
- ※・3・31 飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行
- ※・4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- ※・4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- ※・5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- ※・5・14 中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）
- ※・6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- ※・6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- ※・6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・埴町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- ※・6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- ※・6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- ※・6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- ※・7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- ※・7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- ※・8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- ※・9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- ※・9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査献入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- ※・9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）
- ※・9・3 岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- ※・9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ※・9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- ※・9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ※・9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- ※・10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- ※・10・28 公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察
- ※・10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察
- ※・11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター)

- 45・11・17 公団名古屋支社との協議（昭和46年度発掘調査地区の選定について）
- ※ 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催（下伊那郡阿智村智里東小学校）
- ※ 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催（上伊那郡宮田村福祉センター）
- ※ 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部（12.4km）ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了
- 46・1・12 伊沢泉教育長、下伊那郡碓町山岸遺跡視察
- ※ 2・1 公団名古屋支社と協議（昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察）
- ※ 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（昭和46年度発掘調査地区決定）
- ※ 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※ 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会開催（公団・各事務所・市町村教委に対して）
- ※ 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催（一般公開）
- ※ 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※ 4・1 飯島町地内その1地区（七久保）7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1224万円）
- ※ 4・12 飯島町地内その1地区（七久保）発掘調査団結式挙行（飯島町役場）
- ※ 4・13 飯島町地内その1、7遺跡（新物師原・鳩尾天白・鳴翠・尾越・道満・北原東・小段遺跡）の発掘調査開始（終了46・7・3）
- ※ 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催（伊那市上伊那郷土館）
- ※ 5・24 恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催（公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会）
- ※ 6・7 下伊那郡阿智村園原杉の水平・見の宮遺跡緊急分布調査（～8）
- ※ 6・16 公団本社・同名名古屋支社と協議（下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について）
- ※ 7・1 公団名古屋支社から恵那山トンネル飯五方斜坑立場（杉の水平遺跡）埋蔵文化財について意見聴取
- ※ 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催（飯島町役場七久保支所）
- ※ 7・20 公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議（恵那山トンネル斜坑土捨場問題について）
- ※ 8・1 下伊那郡高森町地内その1（10遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 3120万円）
- ※ 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会（高森町役場）
- ※ 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡（馬矢・黒緑堂・神堂垣外・鎌崎原A・環崎寺前・大鳥山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原I）発掘調査開始（9・14中断、10・23再開、終了47・1・14）
- ※ 8・18 恵那山トンネル飯田方斜坑立場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

- 46・8・30 公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- #・8・31 公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- #・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鑄鋳原遺跡視察
- #・9・10 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）
- #・9・13 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- #・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鑄鋳原遺跡視察
- #・9・16 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- #・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額123万円）
- #・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- #・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑞雲寺遺跡視察
- #・11・19 長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町高森センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡朝町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- #・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、富田町地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- #・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- #・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書発行
- #・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書発行
- #・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書発行
- #・3・20 下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書発行
- #・3・25 下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）
- #・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- #・3・27 園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- #・4・1 飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額2367.5万円）
- #・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額677.1万円）
- #・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額3361.6万円）
- #・4・3 飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- #・4・10 飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結式挙行（飯田合同庁舎）
- #・4・10 飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき登・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・守山・六反田・滝沢川尻・小垣外・三壺塚・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- #・4・24 上伊那地区発掘調査団結式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- #・4・25 伊那市西春近地区、18遺跡（和手・富士山下・富士塚・落窪沢・南丘A・南丘B・名畑産・名畑東古墳・名畑・白沢原・山寺屋外・網ヶ谷B・百敷刈・北丘B・大塚・山の根・城平・

城平上)の発掘調査開始。(終了47・12・14)

- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ＊・6・20 公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第2次調査について協議(県庁教育次長室)
- ＊・6・22 公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第2次調査について現地協議。
- ＊・7・3 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額2,002万円)
- ＊・7・6 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,864.3万円)
- ＊・7・6 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額563.5万円)
- ＊・7・7 駒ヶ根市内8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地)の発掘調査開始。(終了47・9・1)
- ＊・7・12 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立。(委託金額410万円)
- ＊・7・14 下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。(松川町福祉センター)
- ＊・7・24 下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘鐮原A)の発掘調査開始。(終了47・11・9)
- ＊・7・24 下伊那郡松川町内12遺跡(里見Ⅱ・里見Ⅴ・坂の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ)の発掘調査開始。(終了47・11・11)
- ＊・8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議。
- ＊・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査閉結式。(飯田教育事務所)
- ＊・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始。(終了47・9・30)
- ＊・8・21 上伊那郡南箕輪村内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,051.5万円)
- ＊・9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。(南箕輪村公民館)
- ＊・9・4 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区9遺跡(南原・二本木原・曾利目・左家・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始。(終了47・12・9)
- ＊・10・9 上伊那郡南箕輪村内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額514.4万円)
- ＊・10・9 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額497.2万円)
- ＊・10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査閉結式と発掘調査打合せ会。(辰野町公民館)
- ＊・10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反田・越道・平出山の神)の発掘調査開始。(終了47・11・30)
- ＊・11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ＊・12・4 公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。(公団伊那工事事務所)
- ＊・12・5 公団名古屋支社と伊那市内その2地区(4遺跡)・箕輪町内(3遺跡)・辰野町内その2地区(14遺跡)・諏訪郡富士見町内(7遺跡)について現地協議。
- ＊・12・15 上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。(上伊那地方事務所大会議室・～・16 一般公開)
- ＊・12・16 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査報告会開催。(辰野町公民館)

- 48・3・16 上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催。(飯島町公民館)
- ◆・3・18 飯田市内その2・その3地区発掘調査報告会開催。(下伊那教育参考誌)
- ◆◆◆◆ 下伊那郡高森町内その2地区発掘調査報告会開催。()
- ◆◆◆◆ 下伊那郡松川町内発掘調査報告会開催。()
- ◆・3・19 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催。(南箕輪村公民館)
- ◆・3・24 駒ヶ根市内発掘調査報告会開催。(駒ヶ根市役所大会議室)
- ◆・3・26 伊那市西春近地区発掘調査報告会開催。(伊那市福祉センター)

2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接洽のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があって、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

ア 発掘調査委託契約書

1 委託事務の名称	中央道埋蔵文化財発掘調査(松川町内)
2 委託期間	昭和47年7月7日から 昭和48年3月20日まで
3 委託金額	¥18,643,000円也
4 委託金支払場所	日本道路公団名古屋支社

日本道路公団(以下「甲」という。)、長野県教育委員会(以下「乙」という。)に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、滞滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受領した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業箇所作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調査を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調査書其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本業の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の前金で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

昭和47年7月6日

委託者 名古屋市中区栄4丁目1番1号（中日ビル11～12階）
日本道路公団名古屋支社
支社長 平野和男

受託者 長野県教育委員会
教育長 小松孝志

イ 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度初めの理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和47年度役員・松川町内地区調査団組織はつぎのとおりである。

⑦ 長野県中央道遺跡調査会規約

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は長野県中央道遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名

事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるものうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者 (2) 関係学会の役員
(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者 (4) 関係市町村教育委員会の教育長
(5) 関係行政機関の職員

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること。 (2) 発掘調査の受託に関すること。
(3) 規約の改正に関すること。 (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員任期)

第10条 役員任期は一年とする。ただしその職にあるのみをもつて委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くはか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和47年11月現在)

顧問	一志 茂樹 (県文化財専門委員)		
会長	小松 孝志 (県教育長)		
理事	金井喜久一郎 (県文化財専門委員)	米山 一致 (県文化財専門委員)	
	藤沢 宗平 ()	藤森 栄一 (長野県考古学会会長)	
	原 嘉藤 (長野県考古学会委員)	宮嶋 進 (下伊那教育会会長)	
	木下 術 (上伊那教育会会長)	福田 幹人 (諏訪教育会会長)	
	小泉兵次郎 (県教育次長)	飯島 丁巳 (県文化課長)	
	佐藤 唯重 (飯田教育事務所長)	徳永 正人 (伊那教育事務所長)	
	小林 彰 (阿智村教育長)	新井 良男 (黒町教育長)	
	矢亀 勝俊 (飯田市教育長)	中塚 伝次 (高森町教育長)	
	北原 保彦 (松川町教育長)	斎藤 三夫 (飯島町教育長)	
	北沢 照司 (駒ヶ根市教育長)	細田 義徳 (富田村教育長)	
	松沢 美 (伊那市教育長)	安積 正一 (南箕輪村教育長)	
	熊谷 大一 (辰野町教育長)	羽生 保吉 (下伊那地区教委協議会会長)	
	坂井 喜夫 (上伊那地区教委協議会会長)	木川 千年 (諏訪地区教委協議会会長)	
	林 茂樹 (上伊那郡中川東小学校教頭)		
監事	岡沢 幸朝 (県文化課課長補佐)	田中 富雄 (飯田市社会教育課長)	
幹事	金井 滋次 (県文化課文化財係長)	前沢富実保 (県文化課文化財係長)	
	西沢 情 (* 専門主事)	浅川 欽一 (* 専門主事)	
	矢島 太郎 (* 専門主事)	佐藤 文武 (飯田教育事務所総務課長)	
	佐藤 隆 (飯田教育事務所主幹)	下平 久雄 (* 主事)	
	松島 勇 (伊那教育事務所総務課長)	小林 正次 (伊那教育事務所主幹)	
	鈴木 長次 (* 主事)	今村 善典 (県文化課指導主事)	
	桐原 健 (県文化課指導主事)	神村 透 ()	
	宮沢 栞之 (*)	丸山敏一郎 (*)	
	岡田 正彦 (*)	堀内規矩雄 (* 主事)	

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団 (飯田班)

調査団長	大 沢 和 夫			
調査主任	神 村 透 (高森町)	岡 田 正 彦 (松川町)	今 村 善 典 (総括)	
調 査 員	今 村 正 次	佐 藤 睦 信		
	木 下 平 八 郎	矢 口 忠 良		
	池 那 藤 藤 呂	松 永 澄 夫		
	嶋 海 本 昭	市 沢 英 利		
	金 井 正 彦	小 林 正 春		
	酒 井 幸 嗣	八 木 光 則		
	小 平 和 夫	宮 下 典 彦		
	・ 条 隆 良			

調査補助員	飯 島 洋 一	小 林 昭 治	鈴 木 次 郎	田 口 英 次
	竹 内 三 夫	竹 村 和 紀	徳 永 忠 雄	三 浦 光 一
	宮 沢 富 夫	濱 辺 重 良		

3) 発掘調査までの準備

飯田市地内その2の調査が終わってから、調査団は2班にわかれて、高森町土吹地区と松川町の調査に入ることにした。頭初の予定では飯田市地内その2の調査を7月25日におえ、引きついで高森町を計画したが、かぶき知遺跡と大門涼日遺跡の追加買収がすすまず、予定通りに調査できなく、その終了を早め6月中にし、7月1日から高森町に入ろうと考えたが、伊賀良ではインター内の遺跡に予期以上に遺構があり、山本では石子原遺跡で石器の出土もあって、6月中に終了できず、7月に入って上の金谷遺跡を調査した。こども遺構が多く、その上連日のように雨が降り、終了の予定がなかなかつかめなかった。

6月末になって、高森町と松川町の教育委員会に連絡をとり、7月に入ったら調査に入ることの了解をとり、作業員などの募集についての協力をお願いする。

7月10日に入るのを目標にしたが、7月4日から連日雨が降り調査が終らない。一方、県教委と公園との契約交渉もおくれており、契約ができたのは7月3日であった。

7月10日、調査についての計画を立てなおすとともに、調査用具の購入をする。

高森町は昭和46年度の市田地区に続いての調査であるので、教育委員会はなれており、用地買収も早くすすんでいた為上物も片付いている。そのため調査にはとても入りやすかった。6月30日、雨で飯田市の調査ができなかったが、後で晴れたので、調査団全員で、高森町と松川町の遺跡を踏査し、テントの設置す

る場所、調査する順序を考える。高森町では新田西裏遺跡の光明寺跡にテントを設営し、神田裏遺跡から新田西裏遺跡を調査し、ついでテントを増野新切遺跡に移し、増野川子石遺跡から増野新切遺跡へと調査し、最後に鐘鈴原A遺跡のバーストップの追加買収地を調査することにした。

高森町では90人の作業員を予定して、教育委員会を通じて希望者をつのつたところ、去年の経験者が2百余人もいて、1日にして130人を超えてしまい、うれしい悲鳴をあげるが、40人余の多い人については交代での参加を考えてほしいと、教育委員会から依頼される。

7月19日、飯田市の調査は、まずおわり、高森町での調査を24日とする。21・22日と高森町の現場に道具を運搬し、テントを設営して、24日からの調査をまった。

イ 発掘調査前の遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	状況	全体面積	川地内面積	最低調査予定面積
鐘鈴原A	畑	大島川右岸の扇状地の扇尖部から扇端部に近い台地上に立地し、縄文時代の早期より近世に至る遺物が発見されている。	57,500 m ²	4,000 m ²	800 m ²
神田裏	畑	川面に展開される扇状地に形成された小高い台地上に立地し、黒曜石の破片が出土している。	22,100	7,196	1,400
新田西裏	畑	扇状地と山麓からなる微高地帯で、山の崩壊により土砂が流出している。縄文時代中期の土器・石器の出土が知られている。	49,500	15,804	3,100
増野新切	水田・畑	標高630～700mの山麓上に展開する扇状地で、一部は開墾されて破壊にあっている。縄文時代中期の土器・石器が多量に発見され、住居址も検出されている。	15,000	13,636	2,700
増野川子石	畑	寺沢川の左岸に接する扇状地で、縄文時代中期の土器片・石器片が出土している。地形的にみて住居址があると思われる。	18,200	5,796	1,100

高森町地区その2 発掘調査経過

遺跡	7月 1 10 20	8月 1 10 20	9月 1 10 20	10月 1 10 20	11月 1 10 20	12月 1 10 20	1～3月	主な遺構
神田裏	24 2							B地点土柱1
新田西裏	27 4							遺物壁垣 遺物実測 溝面作成 報告書作成 溝遺構1
増野新切	8 9							縄文住居址28 土柱 189
増野川子石	1 14							縄文住居址4 墓址 1
鐘鈴原A							(3月) 6 14	溝・土柱

2. 調査の実施と経過

1) 調査の開始と経過

7月24日、光明寺前のテントに全員が集合する。丁度、ソ連の考古学者ショフコ・ブリアスさんが、飯田市の調査団本部に見えていたので、午前中はその案内で充分なあいさつや計画の説明ができない。ほとんどの人が去年参加した人であるので、遺跡内の草刈を午前中にお願する。ところが昼近くになって雨が降り、作業はできない。せまいテント内で140人程の人が入っての説明は身に入らない。

7月25日、光明寺の庭に全員が集合して、改めてあいさつをしなおし、高森地内の調査計画と、調査班の編成について相談する。8班とし、1～4班は常時参加できる人、5～7班は1週間づつ休み班、8班は男性班とする。いろいろの不満の声はあったが、休みを調整したりして、11月初めまでの調査をつづけることができた。

山吹地区4遺跡はほとんど掘をおかないで続いているので、調査は移動が少ないのでとてもやりよかった。増野新切遺跡は、以前の調査で住居址がいくつも確認されており、調査前から期待されていたが、神田裏遺跡、新田西妻遺跡については予想がつかず、相当に広いことから、調査も長くかかると考え、30日以上以上の調査日数を考えた。ところが入って見ると、ルームまでが非常に浅いのと、遺構・遺物の検出、出土がないので、グリットはどんどんあいてしまい、7月31日にはテントを増野新切遺跡へうつすというハイペース、一時はどうなることやらとあわてた。川子石遺跡では何が何でも掘らなければと旧河床をほりきけていたが、そのうちに堅穴住居址が4軒、さらに縄文時代草創期の表裏縄文土器とそれに伴出する石器が集中する地点が見つかり、特にこの地点はいいいに調査することにする。新切遺跡は山林の開拓からとりかかり、用地内地区については、全面的な調査を計画し、表土の取り除きを開始する。住居址がづきからつぎへと検出され、しかもそれが何回も切りあっており、その複雑さと、数の多いのに全員がびっくりする。住居址は70軒、土坑は189を検出し、こんなに大規模な調査になるとは思わなかった。そのため、前半のハイペースはここで落ち着くことができ、その面での心配はなくなる。11月19日に増野新切遺跡の調査をおえたが、鐘鐺原A遺跡の追買ができず、調査は一先ずおえた。

鐘鐺原A遺跡は、昭和46年度の調査で、住居址・柱穴群・土坑・溝などを確認している。ここにバラストが設置されることになり、両側に10m程に広がった。この用地買収がすむ前に中央道の本線工事が契約され、ここは吉川建設が担当することになった。ところが、公団からの仕様書には追買のすんでいないことと、そこが遺跡であり、発掘調査する場所であることが指示されていなかった。そのため、追買予定地にブルトーズが入り、地主のいきどおりとなって、話は全然進展しなくなった。この追買が買印されたのは1月に入ってからであり、厳寒のため、調査は3月に入って行なった。

なお、調査結果の整理は2月に入ってから行なった。調査の結果は別表の通りである。

2) 発掘調査協力者

高森町地内の中夫道調査は、去年に引き続いてであり、その経験者が、200人近くもいて、その大半の人が二年度の調査参加を希望していた。今年は、遠路の費や費用の点から最低75人で、常時90人を計画し教育委員会に作業員をつのってもらったところ、130人以上の参加希望者があり、40人をおとすことも出来ないとのことで、全員を交代で参加してもらうことにした。

高森町（五十音順）

青山 進	青山絹江	秋元重一	荒井しづ子	安藤金平	安藤たけ子	安藤敏子
石川としえ	今村由紀子	岩口年子	岩口なが子	岩田健一	岩田たつえ	岩田信子
大石とよ	大沢堂子	大沢千春	大沢敏恵	大沢利男	大沢房江	大鳥つね子
大島 幸	大野いよ	岡田和子	岡田しまえ	尾関金増	加島元実	片側金
片桐妙子	片桐ひさ子	片桐 隆	鎌倉福穂	鎌倉さだ	鎌倉芳五郎	鎌倉政己
上沼さとし	上沼ナツ子	府沢 正	北林愛子	北原喜代	木村啓子	久保田キヨシ
久保田キヨミ	久保田あや	熊谷きみ子	熊谷定男	後沢治子	後沢元子	後沢安男
後沢 米子	小島 慶子	小平 栄	小平やすえ	小林 文	小松佐一	桜田菊子
佐々木さき子	塩沢重子	塩沢泰治	塩沢時子	塩沢寛雄	塩沢美佐子	塩沢 基
塩沢幸栄	島岡一美子	横田まち子	横子正一	横子とよ子	横子豊美	菅野菊次
関川きよ子	田切幸子	田切富子	田切美恵子	田切みさお	竹内栄三	竹内きさえ
竹内若江	筒井ふみ	寺沢英子	寺沢一喜	寺沢きぬえ	寺沢なみ果	中平博志
中平雪子	中平よ志子	中塚定子	中塚秀子	中塚ひさ絵	中原光司	野沢幸子
野沢紀子	野中金一	横都えつ	横都安道	羽生敬子	林 明	林いまえ
原うめ子	原 成子	原 千寿	原 なみ	原 典子	原 正美	原 操
原 三温	原 光子	原 隆子	原 よね	平井ミツ	福住教一	福住善明
福田朝子	福田さち	吉林儀弘	堀田富子	松下きみ	松下たけ子	松下文字
松島洋子	丸山薫子	丸山千穂子	宮下キヨコ	宮下すえ	宮下千津子	宮下はる
宮下八代	宮下芳子	宮崎豊美	宮島文子	宮島由紀子	宮島竜之助	本島幸一
本島咲子	本島「春	本島千穂子	本島てる子	本島 実	本島みやえ	本島みよ
森谷みき子	本塚竹雄	湯沢朝子	湯沢正介	湯沢三千夫	湯沢弥生	吉沢延子
米山澄子	鷺山邦子					

高森町外（大学生・高校クラブ生徒を含む）

小林ますえ	菅沼利之	鈴木ふゆ	飯島洋一	七海野子	竹村和紀	宮内博光
竹村和幸	山口芳彦	吉川知之	林 孝彦	丸山幸子	佐藤サチ	徳久忠雄

竹内三千夫	濱辺重義	田口英次	三浦孝一	徳田袈裟良	鈴木次郎	片山 徹
塩沢元広	市瀬晋也	今井俊郎	御堂島正			

3) 現地指導者・視察者

道路公団 支社長 監事 室長 総務部長 中央道遺跡担当主事 飯田工事々務所長 同総務課長
 県教育委員会 文化財係長 堀文担当指導主事・同主事 飯田教育事務所長 同総務課長
 県議会 高橋恭男県議
 高森町 教育長 青委員会主事 公民館長 公民館主事 文化財専門委員 高森町有放 駒場老人
 クラブ 新田公民館見学会 遍分婦人会
 学校……高森北小学校職員 同校4年生 飯田市追手町小学校6年生
 研究者……沼畑純一 江坂輝弥 工業普通 栗野克己 熊谷親三郎 小林建雄 野水利雄 後藤啓次
 真田幸成 芹沢長介 田村晃一 七原恵史 中村龍雄 中村実 久永春男 樋口昇一 樋口啓
 子 正岡勝夫 愛知工業高校考古学クラブ 下伊那考古学会 中央道遺跡調査団松川・伊那班
 その他……岡山県教育事務所職員 松川町教育委員会 松川町婦人会 飯田市読書会 松川町作業員

3 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡調査は、工事着工前の記録保存を目的とした緊急発掘調査であり、用地内にどのような遺構・遺物が残されているかを調査し、それを報告書としてまとめてみなければならない。

発掘調査は用地内に限定される。遺跡の広がり分布調査によって確認されている。中央道用地内においては全面にグリットを設定する。グリット・2m方眼で中央道センター枕の遺跡内で最も名古屋よりのを基準にし、それをA Aとし、東京方面にA-Y、A-Yとし、それぞれをさらにA・B地区と区別する。センターラインを50ラインにして、東京に向かって左側に50以下、右側に50以上の数字をあてそれぞれによって、巾は1-99までの198m、長さはA AからY Yまで1,250mとれる。遺跡は遺跡名のアルフ・ベットのうち2字と、遺跡のどの部分を中央道がとおるかで、O・A・B・Cの記号を使い、3文字で表わす。SI BDH48は、増野新切遺跡D区H48グリットということになる。遺跡各に担当調査員を決める。調査中は、グリット図・調査日誌・調査記録・住居址調査カードを使用し、記録している。なお、調査方法の詳細については「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子にまとめてあり、それを参考している。

また、調査中は、調査員の努力によって「調査速報」を毎日発行し、作業員の方々に調査の状況、調査結果を理解してもらい、様々なエピソードもあわせて、毎日の楽しみとなっていた。(神村)

II 高森地区の概況

1. 高森地区の位置と環境

長野県の南端に位置するのが、下伊那郡である。高森町は下伊那郡の北部にあつて、松川町をはさんで上伊那郡に接する位置にある。下伊那地方は、東は伊那山脈と赤石山脈（南アルプス）が連なり、西に木曾山脈（中央アルプス）の南部山脈が連れている。この中間の低地を天竜川が南流し、その両岸にはそれぞれ10段以上の河岸段丘が並び、この地方の一大美観の因子をなしている。さらに、両側の赤石・木曾山脈から押し出されて、堆積形成された層状地が、それぞれの山麓に並び段丘の美観に色を添えている。これら層状地の概観は、木曾山脈沿いのものが大きい。

飯田市街地あたりから北の地域では、天竜川の右岸地域を竜西地域と呼んでいる。この竜西地域の地形を概観すると、木曾山脈に続く山地帯、山麓の層状地、その下方に続く数段の段丘、天竜川の泥濘原にと続いている。木曾山脈は、地盤沈下の山地であり、東に面した断層崖は急峻なため、上砂の流出が激しく、山麓に規模の大きな層状地が形成されやすい地形である。これらの層状地には、古いものと新しいものがある。古い層状地は、洪積期に形成されたもので、木曾山地が急激に上昇し、その結果生じた逆断層によって急峻化した山地は、激しく浸食され、山地の前面に押し出されて堆積されたものである。飯田市市原上郷町米原・飯田市座光寺大門原・高森町新田原・月夜半・千早原・正木原・大丸原・小机原・鐘崎原増野原・松川町里見開拓地・池の平層状地がこれである。これら古い層状地が形成されたのも、なお、木曾山脈の上昇は続き、層状地面まで上昇すると、谷川はこの層状地を更に切って流れるようになるのでこれらの層状地は開析され、段丘上の台地地形となって残っている。ここから一段低い所に堆積されてきたものが、新しい層状地である。飯田市上飯出・上郷町上黒田・飯田市座光寺原・高森町牛牧・鐘崎原下方・天伯・大島山・出原・遠分・新田・増野・松川町里見・中原・庚申原・桑園・榎原等は、下伊那地方の代表的な層状地になっている。

高森町は、下伊那郡の北部にあり、竜西地域に位置している。東西やく9km、南北やく7kmの地域をしめている。北は、境の沢川によって松川町と境し、西側山地帯では、本高森山の稜線によって上郷町・飯田市に隣接している。南は、南大島川をはさんで飯田市座光寺に接し、東は天竜川を隔てて、喬木村・豊丘村に隣接している。この町は、昭和32年に旧市田村と山吹村が合併してできた町である。明治の頃の町村制の施行の折、江戸時代の上市田村・下市田村・吉田村・出原村・大島山村・牛牧村の6か村によって「市田村」となり、「山吹村」は、旧山吹村・北駒場村・北新田村・上平村・竜川村の5か村と、松川町大島分の名古村・上新井村・古町村の3か村とによって、「里見村」が成立したが、明治14年に分村して「山吹村」となって、昭和32年の町村合併まで獨立していた。現在の高森町の大字名は、山吹地区では、

山吹1地区だけであるが、市田地域では、北側から出原・大島山・吉田・上市田・牛牧・下市田の古来の6地区に分かれている。市田地区においては、江戸時代の頃は上段の三州街道筋（現県道飯島飯田線）には原町宿があってこの地区の中心であったが、鉄道の開通、明神橋の開通、段丘崖下の県道・国道の改修等によって次第に下段地域に移ってきている。

地形を観察すると、上方から木曾山原地帯・山麓の扇状地帯・段丘地帯・天竜川の氾濫原に分けられる。西側上方は、木曾山脈大念岳に続く本高森山（1889m）・前高森山（1663m）・吉田山（1450m）から下方へ続く南面山地帯と、上郷町野底から続く東面山地帯があり、その間に、大島川の渓谷が蛇行しながら深く刻みこんでいる。この山地帯を、竜東地方から眺めると、これら山地帯の前面、吉田山の山腹から牛牧山一帯には、ケルンパットが連互しているのがよくわかる。この三角形の山腹斜面は、断層を伴って山地が上昇したことを物語るもので、木曾山脈の山麓線に沿って南北に走る断層帯のあらわれである。これら山地帯から流れ出る水河川は、北から境の沢川・大沢川・寺沢川・田沢川・胡森目川・大島川・南大島川等数多いが、古くに山麓部に形成された扇状地の下方に、いくつもの新しい扇状地を形成している。主なものをあげると、大沢川・寺沢川によって増野・新田の扇状地が、田沢川によって正木原・塩分出原の扇状地が形成され、中央を流れる大島川は特に流域も広く、流量も多いので、大島山から吉田・上市田から牛牧にかけての扇状地を形成している。この扇状地は、高森町地内では最も広大な面積を占めている。土地利用状況を見ると、水便のよい牛牧の南部・大島山と吉田の上部には水田が多く、その地の所では桑園と果樹園が多い。高森町内の果樹の大半は、これらの扇状地面といえよう。これらの扇頂部を県道飯島飯田線が、南北に続き、その上方をほぼ平行するように中央自動車道が建設されようとしている。県道飯島飯田線あたりを境にして、段丘地帯に移行していく。扇状地面と段丘面をはっきり区別することは困難であるが、緩傾斜面から順次平坦面へと続いている。高森町地域は、下伊那地方でも段丘地形を模式的に残す所のひとつであって、松島信幸氏によると、8段の段丘面が確認されている。高位段丘に属するものとして、牛牧の新井・下市田の大丸山・吉田の城山等は、断層によって孤立丘が残された代表的なものであり、このあたりから扇状地面に続く一帯は、標高550m～600mに位置する第2・3段丘である。このあたりでは、前述の小河川は、左右を深く浸食しているため、用水路があるか、中間の低地帯を除いては、水利便が悪く、畑地が続くが、桑園・果樹園を中心とした重要な農耕地帯となっている。しかし、吉田と北林地域を除くと、人家の少ない所である。この段丘面の地域をあげると、北から山吹増野下段・新田下段、郷頭・中島・出原下段・吉田中央部・角田原・松澤守平である。これらの段丘の下方には、山吹駒場・垣外の第4段丘、さらにその下方には、山吹上平・原の城・下町・洞・市田地区吉田南原や・下市田小原・唐沢原等の、中間に形成された第5・6段丘があり、吉田清東・下市田の北原・荒神上等は第7・8段丘に属する小段丘である。これらの小段丘は、段丘崖の中間に存在する独立丘であるため、眺望も良く、湧水に恵まれ易い所であって、高森町役場・岡町小・中学校や精密機械工場用地に利用され、近年においては、同地の造成もさかんで、新興住宅地帯として発達しつつある所である。これらの中間の小段丘を除くと、上段の第2段丘から、下段の沖積段丘へ80m以上の比高を持つ段丘崖によって急に低くなる。この段丘崖は、竜丘段丘においては最も顕著なもので、傾斜も急なためにいまだに針葉樹林や広葉樹林となって残り、所々に土砂崩れの防止を兼ねる竹林が造成されている。その下段の下市田の段丘は、第9段丘に属している。細かく見れば、いくつもの小段丘があるが、段丘崖の高さも4～5mくらいのもの

で、ひとつの段丘面と見てよさそうである。これらの段丘は、出砂原の第10段丘とともに、天竜川に最も近い最低段丘であって、いずれも沖積期に形成されたものであり、標高 420m あたりで、天竜川の氾濫原に接している。段丘崖下には豊富な湧水もあり、平坦でしかも広い場所に恵まれたこの一帯は、古くから集落の発達している所でもある。これら低位段丘は、山吹地区ではさだかでないが、小沼や下平地帯は第9段丘、竜の川地帯は第10段丘に属している。市田地区においては、大島川から南大島川にかけて約 2.5 km の間に広がっている下市田地帯は、天竜川の氾濫原とともに、この地区の代表的な水田地帯である。段丘面には桑園も多い。交通便の良さもあって、年々民家の建築も増加の一方で、国道の改修が進むにつれて、各種の営業建造物の新築も進み、年々変貌のけいを見せている。

2. 高森町の遺跡

(山吹地区を中心にして)

1) 今までの調査

高森地区は、古くから遺跡の多い所として知られていた所である。大正の頃の先学者によって注目された山麓扇状地の遺跡群、中位段丘から低位段丘にかけての、古墳群や、弥生時代中期から後期の遺跡のかずかず、低位段丘面においては、現在でも多量の石器や土器片が表面採集され、弥生・古墳・平安時代の一大集落の存在が推定される所でもある。地区全域にわたって、多くの遺跡が存在するため、この地域内における学術調査例も、20例を超えるほどである。主なものをあげるとつぎのとおりである。

(調 査 遺 跡)	(内 容)	(調 査 年 月)	(文 献)
1. 地域内遺跡調査 (鳥居竜蔵氏等)	分布調査	大正10・5	下伊那の先史及原始時代
2. 北林第2号墳石室調査 (下市田)	発掘調査	◇ 10・12	下伊那史第2巻
(中村秀雄氏らによる)			
3. 唐沢原住居址発見 (高森南小校地)	弥生住居址10数軒確認	昭和6・3	高森南小資料
4. 北城遺跡発掘調査 (下市田)	中世の聖穴と鍛冶場	◇ 26・3	下伊那教育会考古学資料
5. 地域内遺跡調査 (大場磐雄氏ら)	地区内遺跡・遺物調査	◇ 26・7	下伊那史第3巻ほか
6. 北原遺跡発掘調査 (下市田)	磨製石器等多数発見	◇ 26・8	長野県考古学会誌第4号
7. 小原遺跡発掘調査 (高森中学校地)	縄文中期住居址4軒		
8. 渡瀬遺跡発掘調査 (山吹増野)	縄文中期住居址2軒		
9. ヨシガタ遺跡調査 (吉 田)	古墳時代住居址3軒	◇ 28・4	下伊那史第3巻・「伊那」
10. 中谷遺跡発掘調査等 (下市田)	縄文中期・後期・古墳・平安時代住居址多	◇ 30~44	下伊那史第3巻 「伊那」329号・490号
11. 山吹地区遺物調査	(遺物蒐集記録)	◇ 30~	高森町史上巻
12. 新切遺跡発掘調査 (山吹増野)	縄文中期住居址3軒以上	◇ 38・5	「信濃」ほか
13. 洞遺跡発掘調査 (山 吹)	弥生後期・古墳時代住居址	◇ 39・1	
14. 中央道用地付近の分布調査	地区内確認遺跡数33	◇ 42・8	分布調査報告書

15. 月夜平遺跡発掘調査(吉田)	弥生後期住居址6ほか	昭和43・7～	月夜平第1次調査報告書
16. 月夜平遺跡発掘調査(吉田)	弥生後期住居址4ほか	44・8～	月夜平第2次調査報告書
17. 北原遺跡発掘調査(下市田)	弥生中期住居址2	45・5	北原遺跡調査報告書
18. 中央道用地内発掘調査(市田)	縄文・弥生・平安住ほか	46・8～	発掘調査報告書
19. 北原遺跡発掘調査(下市田)	弥生中・平安住居址7	47・1～	北原遺跡調査報告書
20. 中央道用地内発掘調査(山次)	(本調査)	47・7～	
21. 角田原遺跡発掘調査(下占田)	縄文・弥生住5ほか	47・10～	報告書本年発刊予定

このように、発掘調査例は多いが、地区内には、まだ未発見の遺跡も多いであろう。現在までに確認された遺跡は、山吹地区内38、市田地区68と、河地区とも多い。その分布を見ると、山麓から最下位段丘まで、平坦地または緩傾斜面であれば、遺跡でない所はほとんどない。山吹地区と市田地区を比べてみると余体的には、市田地区のほうが密であり、古墳は市田には多く、山吹地区には1基もない。これは、山吹地区は、市田地区にくらべて、扇状地と段丘面の広さのちがいが、とくに、天竜川氾濫原に近い下位段丘面が狭いことが大きな理由であろう。

山吹地区の遺跡分布をみると、とくに、集中している地域は見当たらないが、中位段丘面から、山麓扇状地に多く存在している。この地域の中央部を東流する田沢川の南側地域は、扇状地や段丘面が広く、しかも、この田沢川・小湖姥沢川・碓氷川や、その支流が多く遺跡分布も濃く、包蔵量の豊かな遺跡も集まっている。中央道は、山麓扇状部を横切るために、包蔵量の豊かな新切遺跡で、大集落の確認があったが、これに類する遺跡は、この周辺にありそうである。山麓では、吉田山や、前高森山から流れ出る田沢川・大沢川の上流に面する緩傾斜面や、古い扇状地が台地化した所には、遺跡の存在が認められる。これらの地域と、その周辺は、山林帯も多いため、その性格のはっきりしないものも多い。天竜川氾濫原は広いが中位段丘の段丘崖下に続く下位段丘は幅が狭いため、遺跡は少ない。しかし、そのうちの畑地でも、遺物の出土の報告があるので、今後の調査によっては、遺跡の拡大も予想されよう。とまれ、この山吹地区は市田地区にくらべると、調査はや、遅れているので、今後の調査結果が期待される所である。

2) 中央道周辺の遺跡

ア. 山麓台地上と、溪谷沿いの遺跡 (1図、1～7)

中央自動車道は、山麓に近い所を通過しているので、この用地内の上部では、中央部に残る古い扇状地が侵食されて台地状に残った、越田原から大机にかけて、小机原(3)、吉原遺跡(1)があり、その南側田沢川に面する傾斜面には、田沢遺跡(2)がある。主として、縄文中期の遺物包含地として知られているが、吉原遺跡では中世陶器片の発見があり、小机原遺跡からは、弥生後期のほか、渡辺期の林里式の土器片の出土が報告されている。台地中央部に耕地があり、その周辺も平坦地が続くが、山林のため、林里式土器の出土地点は明確でない。田沢川の右岸には、広い扇状地が続き、南側の千早原遺跡と共に、高森町内の代表的な遺跡である正木原Ⅱ遺跡(4)がある。現在では、山吹地帯中唯一の先土器時代の遺物出土地であり、縄文早期押型土器から縄文各期、弥生から古墳・平安時代の遺物包蔵が多い所である。北

部、松川町に接する大沢川右岸地域には、妙羅平・法観平に続く増野原の扇状地が発達している。この地域は、戦後開拓の進んだ所で、開墾中、縄文中期の遺物・遺構の発見が多かったと伝えられている。この扇状地は、松川町里見・増野原に続く一連の大遺跡と考えられる。この増野原には、波瀬(6)、芝宮遺跡(7)等開拓当時発掘された住居址もあり、この扇状地の東端にあたる所が、今回確認された新切遺跡の集落に続く集落群の一部と推定されよう。越田原の南に、本学神社の台地が突出しているが、その谷あいの凹地に発見されたのが、豊久保遺跡(5)であり、土師器片が出土している。

イ. 扇状地面の遺跡 (1図、13~19)

中央自動車道は、原道飯出・飯島線と平行して扇状地を横切っているが、中央道の下方は、山麓扇状地が、中位段丘に重なり合うあたりで、遺跡は、直線状に並び、包蔵量の豊かな所が多い。この地域は、断層線が南北につらなり、扇状地が断層によって衝上げられて段丘化した所であって、湧水の豊かな地域で、遺跡立地の条件は整った所である。その条件が如実に見られるのは、辻裏(13)・北村(14)や、新田東裏(16)・新切Ⅱ遺跡(17)等である。とくに、辻裏遺跡は、正木原台地下に位置し、田沢川右岸に面した段丘上部に立地している。遺物の包蔵も豊で、縄文中・後・晩期、弥生中・後期から平安期のものが多い。とくに、縄文晩期の注口土器は逸品である。弥生期では、東海水神平系から、北原・中島式土器片の出土も多く、南側の北原東部遺跡や、東側の北村遺跡(14)に続く集落の存在が予想されよう。増野扇状地が、段丘新田原面に続くあたりは、新田南(15)、新田東裏(16)、新切Ⅱ(17)、増野二軒原遺跡(19)がならび、そのほかで、新田東裏・新切Ⅱ遺跡は、縄文中期の遺物包蔵が豊で、耕作中、土器や炉石の発見が多いと伝えられる。住居址の確認はないが、弥生後期の土器片の出土もあり、中央道用地内の新切Ⅰ遺跡から、段丘新田原遺跡(20)に続く、集落群の一画と考えられる。

3) 中位段丘上の遺跡 (1図、21~34)

下伊那地区の段丘傾斜による、第3・4段丘面に位置する遺跡は多い。段丘面を見ると、田沢川を境にして、南は、第3・4段丘は面然としなが、北側においては、新田原面と、駒場・上平面とははっきり区別されている。田沢川のほかに、胡麻目川・小部橋沢川・和泉河川・市の沢川・寺沢川・大沢川等・小河川に恵まれているため、それぞれの段丘台地上には遺跡が存在している。特に、段丘端や、小河川に面する台地端に立地する遺跡が多い。

ア. 田沢川右岸の段丘上の遺跡 (1図21~24・26)

上方辻裏遺跡から東面緩傾斜をもって続くこの段丘面には、山部位置(21)、上中島(22)、垣外(23)中島(24)と、南東、胡麻目川左岸に伸びる舌状台地上の洞遺跡(26)が位置している。縄文中期のものも多いが、弥生後期の遺物出土も多い。なかでも、洞遺跡は、昭和38年からの発掘調査によって、数軒の

弥生後期の住居址が確認され、古墳時代中期の住居址が検出されている。

イ、田沢川左岸と寺沢川流域の遺跡（1区、25・29～34）

このあたりは、古くは一連の段丘であったものが、寺沢川によって二分されたものであろう。この谷はや、浅く、この川の周辺には遺物の出土が多い。その右岸に駒場遺跡（30）は広く、遺物出土が多い。縄文早期の土器片のほか、縄文中期のものが多い。左岸沿いを見ると、平林（25）、天伯（31）、上平遺跡（32）が並び、縄文中期のほか、弥生後期の遺物出土が多く、この頃、とくに弥生の土器片の出土が多いと注目される地域である。郷頭（33）、原の城遺跡（34）については、余り調査が進んでいない。

4）下位段丘の遺跡（1区、35～38）

前述のように、天竜川の氾濫原の広さに比して、第9・10段丘の幅は狭く、遺跡の分布も少ない。この中で、田沢川の押し出しで東へ突出する下平面には、下早（35）、八市場遺跡（36）があるが、下早遺跡は、突出部に立地し、古墳・平安時代の遺物発見が多く、注目しはじめられた所である。北側は、西の上平面と、北の松川町の古町面が、とりまくように続き、寺沢川下流台地に小沼遺跡（37）、東に突出した古町段丘坐下に竜の口遺跡（38）があり、古墳時代・平安時代の遺物が発見されている。

5）市田地区の遺跡（1区、1～68）

山吹地区に比べると、遺跡数も多く、また調査の進んだ地域でもある。地形的に見ても、古い懸状地から新しい懸状地もあり、高位段丘面から最下位段丘面が模式的に並ぶ所でもある。遺跡は、これらそれぞれの面に分布し、先土器時代の遺物から、平安時代のものにかけて、包蔵量の多い遺跡も多く、下伊那地区内でも、遺跡分布の濃厚地帯として知られる地域である。山地内溪谷沿いにも3遺跡（1・2・3）があり、古期・中期懸状地面の遺跡（4～16）では、山麓の大遺跡として鐘鋤原（9）、日夜早（13・14）下早原遺跡（14）等が知られている。新しい懸状地面から高位段丘面の遺跡（26～51）は、その数も多く近年調査が進むにつれて、その規模の大きさが拡大されているものも多い。中位段丘面の遺跡（52～54）、下位段丘面の遺跡（56～59）もまた多い。また、このあたりは、弥生中期の標準遺跡、北原遺跡（58）を中心に、上段にも、下段にも弥生時代の集落もあり、古墳群も続き、土器器・須恵器から灰釉陶器片の出土量も豊富な一帯で、下伊那地方の一大文化圏の一部といっても過言ではない。さらに、この遺跡は最下位段丘にまで続き、とくに、大島川が天竜川に合流するあたりは、土砂の押し出しも大きく、天竜川に殆んど接するあたりまで、遺物の出土が見られている。（今村善典）

第1表 高森町内遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代					弥生時代			古墳時代		平安時代		備考	
				早期	前期	中期	後期	終期	前期	中期	後期	土器	須恵器	土師	灰皿		中世
1	堂所	大島山					○					○			○	○	
2	役人平	牛牧					○								○	○	
3	役人平入口	"					○										
4	新田原	"					○										
5	牛牧上の平	"					○				○						
6	イナバ	"					○										(住居址)
7	赤坂	"					○										
8	宮堂	"					○										
9	鎌崎原B	"	○	○	○	○	○	○			○	○	○		○	○	(住居址) 子母勾玉
10	弥直垣外	大島山					○										
11	上の平	"						○							○	○	
12	月夜平A	吉田			○	○	○	○			○	○	○		○	○	住居址 10
13	月夜平B	"			○	○	○	○			○	○	○		○	○	
14	千早原	"			○	○	○	○			○	○	○				
15	足跡	"					○										
16	宮の上	出原					○										
17	弓矢	牛牧					○								○	○	
18	加藤堂	"					○	○			○	○	○				
19	神堂垣外	上市田					○	○			○	○	○				
20	鎌崎原A	牛牧・上市田			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	住居址 1
21	権柄寺前	大島山		○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	住居址 7
22	大島山東部	"			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	住居址 6
23	赤羽根	吉田					○				○	○	○				住居址 3
24	出原西部	出原		○	○	○	○	○			○	○	○				住居址 1
25	出早神社附近	"		○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	住居址 23
26	中平	牛牧									○	○	○				
27	天竺堂	牛牧・上市田		○	○	○	○	○			○	○	○	○			
28	権柄寺附近	大島山									○	○	○				
29	宮沢	牛牧					○				○						
30	東渡	上市田					○				○						
31	伊勢神社附近	"			○	○					○	○	○		○	○	古墳あり
32	鎌原	"					○				○	○	○				古墳あり
33	ワシガタ	吉田									○	○	○				住居址 3
34	広高	"									○	○	○				(住居址)

番号	遺跡名	所在地	縄文時代					弥生時代			古墳時代		平安時代		備考	
			先土器	早期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	土器器	瓦葺器	土器	瓦葺		
35	出原南原	出原				○				○						
36	出原東部	"				○		○		○	○	○				
37	新井	牛牧				○										
38	松徳寺平	"				○										
39	御射山基	下市田				○	○							○	○	〔住居址〕 古墳あり
40	角田原	"				○	○				○					住居址 3
41	富坂原	下市田				○					○					
42	大丸山	"				○										
43	原	吉田				○					○	○				
44	光尊寺北	"									○					
45	大門	"				○					○					
46	赤原	"				○	○				○	○	○			〔住居址〕
47	正真名	"				○	○				○					
48	古城	"				○										
49	木城	"				○					○					
50	出原下段	出原				○					○					
51	清東原	吉田				○					○		○			
52	豊沢原	下市田				○	○			○	○	○	○	○		住居址10以上 古墳あり
53	小原	"				○	○				○		○			住居址 4
54	日影	"								○			○	○		
55	清東原下段	吉田									○	○				
56	神社沢下	"田				○										
57	尻神原	"									○	○	○			
58	北原	"				○	○	○		○	○	○	○	○		住居址 10 古墳あり
59	清東原	吉田				○	○									住居址10以上 古墳あり
60	新井原	下市田				○	○			○	○	○	○	○	○	
61	中谷	"				○	○			○	○	○	○	○	○	
62	原田	"									○	○	○			古墳あり
63	堂道外	"									○	○	○			古墳あり
64	富田	"				○					○	○	○			古墳あり
65	若宮	"				○					○	○	○	○		住居址10以上 古墳あり
66	金部	"				○		○		○	○	○	○	○		
67	北城	"				○					○	○	○	○	○	古墳あり
68	トヤコ	吉田									○					

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代				弥生時代			古墳時代		平安時代		中世	備考
				前期	中期	後期	終期	前期	中期	後期	土器	瓦器	上層	瓦葺		
1	青原田	沢				○										
2	田沢	"				○	○									
3	小机塚	"				○				○	○					(住居址)
4	正木原Ⅱ	道分	○	○	○	○	○				○	○				
5	豊久保	田沢									○					住居址 2
6	滝源	増野				○	○				○					
7	芝宮	"				○										住居址 7
⑧	正木原Ⅰ	道分		○	○						○					
⑨	神川藪	新田				○										
⑩	新田西藪	"				○										
⑪	新切Ⅰ	増野	○		○						○					住居址10以上
⑫	増野川子石	"				○										
13	辻藪	道分				○	○	○		○	○	○				(住居址)
14	北林	北林				○	○									
15	新田東	新田				○					○					
16	新田東藪	"				○					○					
17	新切Ⅱ	増野				○										
18	藪原	"				○										
19	二軒屋	"				○										
20	新田原	新田		○	○	○				○	○	○				
21	仁部位	北林				○										
22	上中島	"				○					○					
23	堀外	堀外				○					○	○				
24	中島	中島									○					
25	平林	上平	○		○						○	○				
26	湖										○	○	○			住居址5以上
27	丸山	丸山				○					○					
28	泰山神社	"				○					○					
29	小安山	駒場				○										
30	駒場	"	○		○											
31	天伯	上平				○		○		○	○					
32	上平	"				○		○								(住居址)
33	藤原	藤原									○					
34	原の城	上平				○										
35	下平	下平									○	○	○			
36	八日市場	"				○					○					
37	小沼	"									○					
38	電の口	電の口										○				

Ⅲ 調 査 遺 跡

1 鐘 鋳 原 A 遺 跡

1) 位 置

遺跡は下伊那郡高森町牛牧 462-855 番地にある(3 図 1)。大島川の形成する扇状地で、川南岸にそってあり、中央部から扇端にかけて遺跡は広がっており、古くから知られた当地方を代表する遺跡である。

中央道はこの扇状地扇端近くを南西から北東に横切っており、その用地内遺跡については、昭和46年度下伊那郡高森町地内その 1 として発掘調査し、報告してある。今回は、この地にバス・ストップの設置が決定され、そのために用地が左右に広がった。その追加買収地の調査である。

2) 調 査

この遺跡については、前記したように先年度に本調査をしたところである。縄文時代土器群、弥生時代後期住居址、柱穴群・溝を検出し、遺物も有骨尖頭器から中世陶器までと各時代におたるものがでていた。

追加買収地の調査については、11月を予定したが、交渉がはかどらなかったことと、公園側の不手際から、本線工事を入札した吉川建設に、ここが遺跡であることと、追加買収地がまだ買収がすすんでいないことが徹底しておらず、未買収用地にブルドーザを入れたため地元の感情を害したので、さらにおくられた。1月に入って調印もすんだが、厳寒期をきけて、3月中旬に調査をした。

調査した結果、遺物の出土は少なく、遺構としては、用地外にのびていた溝状遺構の、さらにのびているのを確認したのみである。

遺物の中に、先年度知られなかったものに、縄文時代早期押型文土器が3片得られた。押型文土器(41 図 1~3)はいずれも格子目文の小破片で、菱形の整った形をしており、焼成もよく、厚い。この特長から見て、立野式土器に入る。早期後半のセンチ土器(4)もでた。

なお、用地北西外にある、中央部からは有骨尖頭器を集中的に採集できるところがあり、期待したが得られなかった。

(鳴海)

2 神田裏遺跡

1) 位置

遺跡は下伊那郡高森町山吹3101…3105番地にある(3図2、写1・2)。木曾山脈から流れる大沢川が形成した扇状台地は、田沢川にはさまれて見事な発達を見せている。この扇状台地層端部が、段丘地帯に移行する部分に、台地から流れだす川が小規模な扇状地形をつくっていて、丁度その部分から山林と農耕地の境界が見られる。その部分に遺跡が点在している。ここには旧三州街道(現県道飯島・飯田線)がとおり、それに沿って新田部落が続いている、この裏側の山麓に神田裏・新田西裏・増野新切遺跡と並んでおり、そこを中央道が横切っている。

神田西裏遺跡は新田部落西はずれの、南東向きにゆるく傾斜する小さな扇状地で、果樹と山林になっていた。そのため、黒土の堆積は浅く、深耕によって荒れてもいた。

中央道はこの扇状地を南北に横切っている。グリットはセンター 220+60杭をA Aとし、C Aまで、42から58にかけて設定した。

2) 遺構と遺物

縄文時代の住居址の検出を予期したが、A地区では用地買収により移転した墓地の墓壁を、B地区で、土甕・黒石を持った押型文土器・石器をだす遺構を検出したのみであった。ここをB地点とする。

ア B地点(4図・41図、写二)

遺構 用地内中央部、遺跡のある扇状地でも中央部になる。ピットはロームを廻りこんだ直径1.35m、深さ0.5mの円形のすり鉢状のものである。壁面と底部は若干のかたさをもっている。覆土中いくつかの石が入っていたが、いわゆる黒石炉の石ではなく、焼けてはいなく、焼土・木炭はない。中より土器片(12~41図12と同じ)がでた。黒石はピットより東1mのところであり、こぶし大から人頭大の礫が2m×1.5mの楕円形に集中しており、その下部に浅いほり込みがあった。内部からは遺物の出土はない。黒石炉とはいえない。この東側にかけては比較的大きな、扁平な石が散在し、それに挟んでいくつかのほりみが見られた。22の石礫以外に出土遺物はなかった。土器・石器はこれらの遺構の南東部一帯に出土し、ローム上面にあって、部分的に硬い面があり、生活面を思わせた。4図1の遺物番号は、41図の遺物番号と一致する。

遺物 B地点とその周辺より出土した同時期のものを見ると(41図)、土器・石器がある。土器は、押

型文土器（5～11・13）、セシイ土器（12～14・15）がある。押型文土器の山形文（5）は口縁部破片で、B地点出土ではない。風化していて文様があれているが、横走する山形文が見られ、胎上、厚さから見て、B地点のものとは時期が異なる。楕円文（6～11・13）は、胎上にわずかにセシイを含むもの（11・13）もあり、粒は6～9の如く比較的大きいが形は整って明瞭なもの、粒が方形状に大きく不明瞭な粗大楕円文（10・11・13）とがあり、前者が多い。11は口縁近くで、裏面に斜走する太い沈線があり、高山式土器に見られる特徴である。これらは同時期で、当地方押型文土器終末期にあたる。セシイ土器（12・14・15）は、風化のはげしいものもあるが、12に見られるように浅い条痕文が裏面陶面につけられる。早期後半の土器であり、押型文土器と同時性が考えられる。石器もやはりB地点とその周辺の同時期のものをとりあげた。石鏃（16～18・22・25～28・33～36）、扁平な石匕（20）、不定形なスクレイパー（21・24・30）尖頭状石器（37）、使用痕のある剃片（19・23）、凝灰岩質の尖頭器（29）、特殊磨石（31）、アンピルストーン（32）がある。

イ その他の遺物

土器・陶器・石器が少量でている。土器は縄文時代中期加曾利E式土器である。甕器は墓地より骨壺に使用されていた小形の蓋付壺（42図1）である。石器は打石斧（106図1～4）、横刃形石器（5・6）石鏃（7）、磨石斧（8）、スクレイパーがでている。

3) まとめ

住居址の検出はなかったものの、縄文時代早期押型文土器と石器、その頃のピット、集石を検出することができた。これらの押型文土器は2時期の可能性が考えられるが、楕円文はその特徴から、和歌山県の高山寺式土器と同じであり、最近の中央道調査でも高森町出原西部遺跡、宮崎A遺跡で調査されており、この時期解明の資料となった。

遺跡における遺物分布から見て、縄文時代中期の住居址は用地北西外にある。

(木下)

3 新田西裏遺跡

1) 位置

遺跡は下伊那郡高森町山吹7692～8337番地にある(3図3、写-)。扇状台地下の傾斜地で、神田遺跡と増野新切遺跡にはさまれ、新田部落裏側に細長くある畑地・果樹園一帯が遺跡である。

中央道は遺跡基部を南北に横切っている。グリッドはセンター 222+0 杭をA Aとし、J Dまで、38～60までに設定した。

2) 遺構と遺物

遺構は、旧光明寺の北側に溝を検出したのみで、あとは遺物を少量得たのみであった。

ア 溝(4図、写三)

溝は傾斜方向に直交し、北から南に流れており、巾3m、深さ0.4～0.6mの逆台形にはりこまれ、溝底には礫が敷き詰められたようである。中には砂利が堆積していた。

イ その他の遺物

縄文時代土器(42図)は中期片戸尻Ⅱ式(2～4)、加曾利E式(5～8)、壺之内式(9～11)、水神平式(12～14)と、石器(106図)は打石斧(9～19・23)、横刃彫石器(20～21)、敲打器(24)、敲石(25)がでている。

3) まとめ

溝以外の遺構はなく、この溝はあり方から人為による掘りこみで、出水路と思われる。中世以降のものであろう。縄文時代の遺物は少量であるが、中期から晩期までのものがあり、この中心地は用東側の部落のあるところか新田原にかけてにあるものと思う。(今村)

4 増野新切遺跡

1) 位置

遺跡は下伊那郡高森町山吹7767～8838番地にある（2区2、写一・B）。大沢川の形成した扇状地階端部で、寺沢川によって、中央道土取場となった五十両山の麓に小さな台地をつくり、その台縁が傾斜地となって新田原の段丘面へとつづいている。遺跡の北側の数米ある崖下を流れる寺沢川がつくった扇状地で南東に傾斜している。標高 630～665 m にかけてにあって、住居址群はその全域に広がっている。北側は寺沢川によって切られた崖となり、その崖下にもD10号住居址があり、川をはさんで北が増野川子石遺跡である。増野川子石遺跡の上流に液瀬遺跡がある。南側は亀甲住の堤のある凹地となって新出西裏遺跡と対峙している。

中央道は、この傾斜道を南北に横切っている。北側近くで、林道趾端部が北西にのびている。グリットはセンター 228+40をAAとし、ERまで、36～61に設定した。

2) 遺構と遺物

昭和38年、D区における水田造成時に住居址が6軒確認され、内1軒が発掘調査された（佐藤鶴信「長野県下伊那郡高森町増野新切遺跡出土土偶」信濃16の4、昭和38年）。その時、林道切り通しからも6軒の住居址を確認し、住居址群の存在は予断された。また、土偶の出土の多いこと、土器から縄文時代中期後半、加曾利E式土器の頃であることもわかってきた。調査進行（約100人の作業員を2班編成）上、林道を中心に2地区にわけ、南側をB区、北側をD区と、林道はD区に含めて、同時に調査を進めた。B区は金井が、D区は道那が遺跡担当者となった。

調査の結果、凹地のある崖縁に住居址の広がりも期待したが、全くなく、台地中央部から北側の寺沢川に沿って、傾斜の高い方に、巾160m、標高642～663mまでに分布して住居址があり、特に、中央道用地東半分にも集中し、切り合いも複雑に見られた。このことから、用地東側に集落群がのびていることが予想される。集落全域の調査でないのと、住居址個々の時期を確認しての検討でないが、住居址群は寺沢川に沿ってのびており、傾斜地下部（いく分傾斜がゆるくなる）で南側にカーブする孤状の集落であるように思われる（2区2、5区・6区）。

検出された遺構は住居址78軒（内2軒水田造成時に破壊）、土壌191である。内訳はB区から住居址30軒、土壌82、D区から住居址48軒、土壌109となる。5区は住居址、土壌の分布区である。6区は同縮尺にて床面巾と、床面レベルを明示した。これを見ると、住居址は傾斜下部に集中し、住居址間の距離と高さは離れていないが、高くなるにつれて、その差が広がっている。住居址群中央部、東よりには林道もあっ

て調査不能であったが、B・D区とも、この部分に住居址は分布が少なく、土壌が集中しているのが注目される。

ア 住居址

B地区 林道より南側をB地区とし、発見された順にB1・B2・B3……と住居址番号をつけた。

ア) B1号住居址 (7図・42図・107図、写五)

遺構 B区住居址群では最南端にあり、B2号住居址の南に並ぶ。東西はば5.50mの不整形の竪穴住居址で、地表面から浅いため耕作による破壊がはげしい。壁は北西壁を確認したのみである。床面は北西部に良好であるが、南東部はあれていた。柱穴も西壁沿いの3本はよいが、南東側は2つ不規則に見られる。炉は南西よりに礫を円形においた浅い炉があり、それより北へ70cmはなれて床面に焼土がある。

遺物 土器・石器があり、量は少ない。土器(42図16~25)は深鉢の破片で、文様から見て縄文時代中期中頃の芥川式土器である。石器(107図)は打石斧(1~6)、磨石斧(12・13)、横刃形石器(7~9)、粗型石ヒ(10)、石鏃(11)、敲打器(14)、石鏃(15)がある。

イ) B2号住居址 (7図・42図・43図・107図、写五・六)

遺構 B区住居址内では南端にあり、B1号住居址とB28号住居址にはさまれる。東西はば4.50mの円形の竪穴住居址で、B1号住居址と同様に、耕作によってあれ、北西半分が残っているだけである。床面もその部分も良好である。柱穴は西壁よりに3こ、東に2こある。炉はやや西によって、石を円形においた浅い炉である。炉西側上面より吊手土器がつぶれていた(約半分以上)。

遺物 土器・石器がでている。量は多くない。土器(43図・42図26~32)は吊手土器をのぞいては、破片である。文様からみて、井戸尻式土器である。吊手土器は吊手頸部(顔面ではなからうか)と吊手のおさえ部が欠損している。この土器は約3分の2が2号住居址炉のところにあり、約3分の1が、9m北東にあるB28号住居址床面に、上に礫をのせて出土した。このようなあり方から、欠損部はその中間の調査でできなかった私道下部に存在を予想される住居址にあるのではなからうか。ともあれ、この出土のあり方は住居廃絶の同時性と、特殊なつながりと土器そのものの特殊性を意味する。土器は、底径14.7×16.5cm不整形の底部で、坯部内径20cm、前部に巾7.3cmの帯状テラスがつき、それが直径となってやや裏側へ傾斜して門弧をつくる。その頂部に突出部があったらしく破壊している。坯部の高さ10cm、吊手頂部まで38cm、吊手下部における巾37.5cmと、この種土器としては最大級の大きさである。吊手部裏側は、坯部裏側中央部から、吊手頸部へつくおさえ、その途中にもう一つ左右からのささえがき、そのささえと吊手部とも横につないでおり、そのいずれにも文様がいていねいにつけられ、表面は磨き整形されて仕上げのよい土器である。吊手部の文様は半円形の渦巻文、その間に三叉状の沈文があり、それらをとりまいて押引爪形沈線がある。石器(107図)は打石斧(16~18)、横刃形石器(19~24)、磨石斧(25・26・30)石鏃(27~29)、敲打器がある。

ウ) B 3号住居址 (8図・44図・108図・179図・196図、写七)

遺構 B区内北端最上部にあり、B 4号住居址の北になる。5.70×5.25mの丸味強い方形の竪穴住居址で、主軸方向N 57°Wをはかる。壁は北西55cmと高く、南東では浅くなる。東側で耕作による流れがある。西半分は壁にそって周溝がある。床面は良好である。柱穴は台形に開いた4主柱穴で、前部が広い。炉は北西壁によってあり、方形の石置い炉であり、炉石は奥石と南側のを残してはざされている。東壁よりにI縁部を欠く土器を、上縁を床面と同じにして正位にうめてあった。なお、炉と埋壺を結ぶ線の東壁上面に平板な石がある。

遺物 土器・石器・土製品がでており、その量は比較的多い。土器(44図)は深鉢で、1が埋壺である。上径20.5cm、底径10cm、高さ24cmの大きさである。縄文時代中期後半の加曾利E式土器である。石器は打石斧(108図1~7)と横刃形石器(8~12)が多く、磨石斧(13)、敲打器(14・15)、石錘(16)、石鏃(17~19)、石錐(20)、スクレイパー(21)、磨石がある。土製品としては土偶(179図3・4)の胸部がでている。

エ) B 4号住居址 (8図・45図・108図・109図・196図、写七・八)

遺構 B区内北端最上部にあり、B 3号住居址の南にある。5.25×4.45mの丸味強い長方形の竪穴住居址で、主軸方向N 45°Wをはかる。壁はほぼ直で、北西壁が高く55cmある。床面はかたく良好である。周溝は南東になく、壁にそってある。柱穴は4主柱穴で、炉西側に支柱が2こ、南東壁よりに埋壺と並んでピットがある。炉は北西よりにあって、奥を直として、他は凹弧をなすように石で囲まれており、全然抜かれていない。埋壺は南東壁近くにあつて、この住居址唯一例であるが、胴下半を欠く土器を、I縁を下にし、床面と同一レベルにしてうめていた。その北東縁に櫛をのせている(196図2)。

遺物 土器・石器がでており、土器(45図)は埋壺(1)をのぞいては破片である。埋壺は口径28.5cm、下径23cm、高さ31cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器は打石斧(108図22~26)、横刃形石器(27~33)、凹石(109図1)、敲石(2)、敲打器(3・4)、石鏃(5~7)、粗型石ヒがある。

オ) B 5号住居址 (9図・46図・109図・154図・179図・189図・191図、写八)

遺構 B区北端上部にあつて、B 4・7号住居址にはさまれる。5.25×4.45mの丸味強い長方形の竪穴住居址で、主軸方向N 57°Wをはかる。壁は北西壁が高く65cmある。壁にそって周溝がめぐっている。床面はかたく良好である。柱穴は4柱穴である。炉は北西よりにあって方形石置い炉であるが、東側の炉石をのこして、他ははずされ、その一つが南の主柱穴そばにおかれていた。埋壺はないが、南東壁近くに浅いピットがある。この場所に完形の深鉢が横になってあつた(46図1)。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(46図)は入口部床面におかれていた深鉢(1)以外は破片である(2~11)。扁平土器片もある。加曾利E式土器である。石器(109図)は打石斧(8~13)、横刃形石器(14~18)、敲打器(19~22)、石錘(23・24)、石鏃(25~29)、石錐(30)、スクレイパー(31)、石棒はD 22号住居址出土の接合されるもの(157図9)、石皿(154図1)がでている。土製品としては、土偶脚部(179図2)、小形手こね土器(189図1)、円板(191図3)がでている。

カ) B 6号住居址 (9図・42図・110図・154図・195区、写九)

遺構 B区北端上部にあって、B 7号住居址の北に並び、B 30号住居址をほとんど同位置でほりこんでいる。4.35×4.20mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N 64°Wをはかる。壁は他の住居址にくらべると悪い。北西壁にそって周溝がある。東南のそれは30号住居址のものと思われる。床面は北西部が良好であるが、南東部は茶褐色土のため軟弱である。柱穴は4主柱穴で、南側のものは30号住居址のものもある。炉東にも柱穴がある。炉は北西より、石囲炉であったと思うが、石はぬかれてない。床に点在するのは炉石のものと思われる。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(42図)はいずれも破片(33~40)で、器台もでている。加曾利E式土器である。石器(110図)は打石斧(1~8)、横刃形石器(9~14)、磨石斧(15)、粗型石ヒ(16)、敲打器(17~19)、石鏃(20・21)、石錐、石皿(154図2~4)、D 22号住居址の石棒につく石棒(157図9)がある。土製品は木板(191図4)がある。

キ) B 7号住居址 (10図・46図・110図・191区・196図、写九・十)

遺構 B区北端上部にあって、B 6号住居址の南に並び、5.00×5.35mの隅丸不整形の竪穴住居址で、主軸方向N 55°Wである。周溝は西半分は壁にそってある。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は北西よりあって、方形石囲炉で、炉石ははずされ、東側の床面上におかれている。埋嚢は南東壁に接してあり、底部に打抜孔のある深鉢を、口縁と床と同じレベルにして正位にうめ、南側上縁に嚢をおく、内部に底部を横にしていた(196図3)。

遺物 土器・石器があり、土器(46図)は埋嚢(12)をのぞいて破片である。埋嚢は口径25.5cm、底径10cm、高さ38.6cmの大きさで、内部に13の底部が入っていた。吊手土器の吊手部もでている。加曾利E式土器である。石器(110図)は打石斧(22~24)、横刃形石器(25~31)、凹石(32)、敲打器(33~38)、磨石斧(39)、石鏃(40)、石錐(41)がでている。

ク) B 8号住居址 (10図・47図・48図・111図・189区・190図・191区・195図、写十・六十五)

遺構 B区北端上部にあって、B 5号住居址の南、B 9号住居に一部がつてある。5.00×5.70mの丸味の強い台形的な竪穴住居址で、主軸方向N 60°Wをはかる。壁は北西に高く、東南はB 9号住居址をうめていて、壁はない。周溝は北半分の壁にそってある。床面はかたくて良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は北西よりあって、方形石囲炉でその炉石は抜かれ、炉内と床面に敷いている。炉北側40cmはなれて、円形の竪穴石組遺構(10図3)がある。扁平な石をつかって、底部に2枚敷き、まわりは平面を見せて2段につまれている。上径60cm、下径25cm、高さ43cmの大きさで、石上縁は床面より数層高くなっている。石と石の間には土層片(48図1~7)がはさまりこまれている。埋土は黒色土で柱穴の埋土とは異なり焼土・木炭はなかった。土器、柱穴との関係から見て、同時期につくられたものと思う。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(47図)はいずれも破片で、深鉢の他に台付土器・吊手土器もある。石組遺構内の土器(48図1~7)も床面と同一個体のものがあって同時期を示す。加曾利E式土器である。石器(111図)は多く、打石斧(1~13)、横刃形石器(14~20)、粗型石ヒ(21・22)、尖頭石器(23)、敲打器(24・25)、磨石(26)、石鏃(27~32)、石錐(33~36)がある。土製品としては

小形土器（189図2・3）があり、1つは有孔つば付土器の模型である。用途不明の土製品（190図4・5）や、円板（191図6）もある。石製品とするか、海浜石と呼ぶ小さくて、扁円形、球形の表面の磨かれた礫があり、この住居址では10個（195図）も出土しており注目される。

ケ）B 9号住居址（11図・49図・50図・112図・180図・188図・191図・195図・196図、写十一・十二・十三・六十二）

遺構 B地区北側上部の一つで、B 8号住居址に一部重複して東にある。直径5.80mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N55°Wをはかる。壁はほぼ直にほりこんでいる。壁にそって周溝がめぐる。床面はかたく良好である。柱穴は6主柱穴である。炉は北西よりあって方形石囲炉で石は全部残っている。堀塼は南東壁より、周溝に接してあり、口縁を一部欠損して、底部に穿孔のあるものを、わずかに口縁を床面よりあげて正位にうめてあった。なお、この住居址は土器捨て場とされたのか、完形になる土器や破片が多い。

遺物 出土遺物は土器・石器ともに多い。土器（49・50図）は完形またそれに近いものも多く、20個体以上はある。深鉢が大半で、浅鉢もある。埋壺（49図1）は口径37.5cm、底径11cm、高さ53.7cmの大きな土器である。加曾利E式土器である。188図1は把手で、丹彩と、タール状のものをぬってある。石器（112図）は打石斧（1～6）、横刃形石器（7～11）、磨石斧（12・13）、石錘（14）、凹石（15）、敲打器（16・17）、粗型石ヒ（18・22）、石磯（19）、スクレイパー（20・21）、磨石、海浜石がある。土製品としては土偶下半身（180図1）、円板（191図7・8）がある。

コ）B 10号住居址（11図・48図・113図・179図・196図、写十四）

遺構 B区下部北端にあって、B 9号住居址の東になる。4.55×4.60mの北隅が角ばる不整円形で、南東は耕作によってあれている。周溝は北～西壁にそってある。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴であるが、不規則な配置であり、一部柱のつけかえをやっている。炉は北によってあり、方形石囲炉で、炉はずされ、炉底におちこんだり、床面におかれている。堀塼は南壁よりあって、口縁と胴下部をかく土器を、上縁と床面と同一レベルにおいて正位にうめている。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器（48図）は器形のわかるもの2（8・9）を除いては破片である。埋壺（8）は上径34cm、下径15.5cm、高さ27cmの大きさである。吊手土器の吊手部もでている。加曾利E式土器である。石器（113図）は打石斧（1～5）、横刃形石器（6～10）、磨石斧（11）凹石（12）、磨石（13・14）、敲打器、粗型石ヒ（15）、石錘（16）、石磯（17）、石錘（18）がでている。土製品として土偶胸部（179図5）、小形土器、円板がでている。

ク）B 11号住居址（12図・51図・113図・114図・154図・191図・197図、写十五）

遺構 B 10号住居址の南にあって、4.85×4.65mの丸味の強い方形の竪穴住居址で、主軸方向N40°Wをはかる。壁は良好である。周溝は南東側をのぞいて壁にそってある。床面はかたくて良好である。柱穴は4柱穴で、ありかたから見て改築されている。炉と壁との間に浅いピットがある。炉は北西によって、方形石囲炉で、炉石は全て残っている。堀塼は南東壁よりあって、東西方向に2個並び、No 1が古く、No 2が新しい。No 1は胴下部で、正位にうめられ、内部に底より8cmあがって横刃形石器（114図1）が入

っていた。改築の際上半を欠いたものであり、内部に貼り床がある。No2は口縁をかき、底部がぬかれた土器で、床面と同レベルで正位にうめられている。内部にはエンド・スクレイパーが入っていた。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(51図)は器形のおかものがある。1は埋壘No1で、上径30cm、底径8.8cm、高さ22cmの大きさ、2は埋壘No2で、上径38.5cm、底径10.2cm、高さ43cmの大きさである。深鉢・浅鉢・台付土器とあり、加曾利E式土器である。石器は打石斧(113図19~28)、横刃形石器(114図1~6)、磨石斧(7~9)、凹石(10)、石錘(11・12)、敲打器(13~17)、石鏃(18~21)、砥石・石皿(154図11)がある。土製品は円板(191図9~11)がある。

シ) B12号住居址(12図・42図・52図・114図・180図・190図・191図、写十六)

遺構 用地内下部にあって、東半分は用地外にのびている。南北5.45mの不整形の竪穴住居址で、主軸方向N69°Wをはかる。壁の状態はく、周溝が壁にそってある。床面はかたく良好である。柱穴は2主柱穴と2支柱穴がある。炉は北西よりにあって、方形石皿炉で炉石ははずされている。炉東側の床面より12cm上面に礫の集積があり、その上面に焼土が見られた。直接住居址とは関係ない。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(42図15・52図1~19)はいずれも破片である。加曾利E式土器である。石器(114図)は打石斧(22~26)、横刃形石器(27~33)、凹石(34)、敲打器(35・36)、円形石器(37・38)、石錘(39)、石鏃(40~47)、スクレイパー(48)、粗型石ヒ(49)がある。土製品では、土偶(180図2~5)、小形土器(189図4・5)、円板(191図12・13)がある。

ス) B13号住居址(13図・53図・115図・154図・157図・181図・190図・191図・196図、写十六・十七・六十二)

遺構 B区下部東端にあって、B14号住居址を切り込んでつくられている。4.10m×3.50mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N35°Wである。壁はほぼ直で良好であり、壁にそって周溝がめぐっている。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴で、いくつかの支柱穴もあり、埋壘外側の壁にある柱穴は入口部か、それを意識して、壁、周溝も内側にまがっている。炉は北西よりにあって、方形石皿炉で、北側が石を残して、はずされたり、炉内におちこんでいた。埋壘は南東壁より周溝に接して、口縁を欠く土器の上縁を床面より4cm高くして正位にうめっていた。また、この埋壘、炉を結ぶ線の北西壁上部に、頭部を欠く石棒が直立していた。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(53図)は埋壘(1)をのぞいて破片である。埋壘は上径29cm、底径8.8cm、高さ36.5cmの大きさで、底部は上げ底となっている。台付土器・吊手土器・有孔つば付土器の破片もある。加曾利E式土器である。石器(115図)は打石斧(1~7)、横刃形石器(8~10)、磨石斧(11)、凹石(12)、敲打器(13~17)、石錘(18・19)、粗型石ヒ(20)、石皿(154図6)、石棒(157図1)、海浜石がある。土製品では土偶(181図1)、円板(191図12・13)、そして粘土焼塊(190図2)があり、土偶は脚部がおれたあと磨って平らにしている。

セ) B14号住居址(13図・52図・115図・188図、写十六・十七)

遺構 下部東端にあって、B13号住居址に東部をきられている。直径4.70mの円形の竪穴住居址で、壁

のほりこみは浅く、あまりよくない。柱穴は壁より約30cm入って円形にいくつも並んでおり、一部それを結んで周溝がある。炉はやや北より壁を円形においた石囲い炉で、西側だけ2重にしている。炉内中央には土器上半を埋めていた。

遺物 土器・石器がある。土器(52図20~26)はいずれも破片で、井戸尻Ⅱ式土器である。石器(115図)は打石斧(21~26)、横刃形石器(27~29)、敲打器(30・31)、磨石斧(32)、石鏃(33・34)、石錐(35)がある。土製品として、球形の中央に孔をもつ玉(188図3)がある。

ン) B15号住居址(12図・53図・116図)

遺構 B区最下部にあって、住居址の大半は用地外にのびている。

遺物 土器・石器が少量でている。土器(53図10~13)は加曾利E式土器である。石器(116図)は打石斧(1)、横刃形石器(2)、敲打器(3)がある。

タ) B16号住居址(13図・54図・116図・191図、写十八)

遺構 B区下部にあって、最も密集し、切りあっている住居址である。その切りあいの関係はB18号住居址が一番古く、その上にB17号住居址がのり、B18号住居址をB19号23・16号住居址がきっている。B19号住居址はB16・20号住居址にきられる。B16号住居址はB20号住居址の上にある。B22号住居址はB20号住居址をきり、B21号住居址にきられる。先後関係を並べるとB18→B19→B20→B22→B16→B21となる。いずれも加曾利E期である。B16号住居址は4.60×4.60mの隅丸方形の竪穴住居址で、20号住居址の上に貼り床をしている。主軸方向N46°Wをはかる。壁は直にほりこまれる。南東側は壁がなく、その部分をのぞいて壁にそって周溝がある。床面はかたくてよい。柱穴は6半柱穴であり、南東壁よりに埋壁と同一性格と思われるピットがある。炉は北西によって方形石囲炉であるが、炉石はぬかれている。

遺物 土器・石器とも出土は多く、石器剥片も多かった。土器(54図)はいずれも破片である。深鉢、台付土器・吊手土器・有孔つば付土器土器がある。加曾利E式土器である。石器(116図)は打石斧(4~9・11)、横刃形石器(10・12~16)、磨石斧(17)、凹石(18・19)、磨石(20)、敲打器(21~25)、石鏃(26~33)、スクレイパー(34・35)、磨石がある。土製品では円板(191図16~19)がある。

チ) B17号住居址(14図・53図・117図、写十九)

遺構 B区下部中央にあって、B11号住居址の南、B18号住居址に一部のる。4.30×4.80mの長円形の竪穴住居址で、主軸方向N50°Wをはかる。壁は北西壁が高くてよいが、南東のは浅く悪い。周溝は東側をのぞいてめぐっている。床直は西半分は良好であるが、B18号住居址をうめた東側は軟弱である。柱穴は6半柱穴と思われるか、南側の1本を確認できなかった。炉は北西よりにあって、方形石囲炉の炉石はぬかれてない。

遺物 土器・石器がある。土器(53図14~18)はいずれも破片で、加曾利E式土器である。石器(117図)は打石斧(1~6)、横刃形石器(7~12)、磨石斧(13~15)、粗型石匕(16)、敲打器(17・18)、石鏃(19)がある。また土偶と思われる小破片もある。

ツ) B 18号住居址 (14図・117図、写十八)

遺構 B 17号住居址の東にあって、B 19・16号住居址に大半をきられている。南北4.40mの隅丸方形の竈穴住居址で、主軸方向N 61°Wをはかる。壁の状態、床面の状態はよくない。柱穴は北西よりのを2本確認する。炉は不明である。

遺物 土器・石器がでてわずかにでている。土器は加曾利E式土器である。石器 (117図) は打石斧 (20~22)、横刃形石器 (23・24)、スクレイパー (25) がでている。

テ) B 19号住居址 (13図・53図・118図、写十八)

遺構 B 18号住居址をきり、B 16・20号住居址に大半をきられる。北西側のわずかな部分を残しおり、南北5.50mの方形の竈穴住居址で、主軸方向N 35°Wをはかる。一部周溝が見られ、柱穴は北隅に一つある。炉はB 16号住居址にきられ、ほりこみと、炉底の焼土が確認された。方形石囲炉で、奥の炉石がB 16号住居址の壁に残っていた。

遺物 土器・石器が少量ある。土器 (53図19~23) は破片で、加曾利E式土器である。石器 (118図) は磨石斧 (1) と敲打器 (2・3) のみである。

ト) B 20号住居址 (15図・55図・118図・157図・197図、写十八)

遺構 B 16号住居址が西半分のにり、東側をB 22号住居址にきられる。4.50 (?) × 5.00mの円形の竈穴住居址で、主軸方向43°Wをはかる。壁は北側に一部のこる。周溝は東側をのぞいてある。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は北西により、方形石囲炉の炉石は全てぬかれていた。埋燬は南東に2個並んであり、いずれもB 22号住居址にけずられ、貼り床されていた。南壁内に入るかと思われるところに石棒が直立していた。

遺物 土器・石器が少量でている。土器 (55図1~6) は、1が埋燬No 1で、胴部以上をけずられ、底部のみで、底は打抜かれている。2は埋燬No 2で、口縁部をけずられている。上径39cm、底径11cm、高さ33cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器 (118図) は打石斧、横刃形石器 (4・5)、凹石 (6~8)、敲打器 (9)、石棒 (157図2) がある。

ナ) B 21号住居址 (15図・55図・118図・191図)

遺構 B 区最下部にあって、東半分は用地外にのびている。東西4.80mの円形の竈穴住居址で、周溝・柱穴・炉を確認した。主軸方向N 20°Wで、炉は北によっている。方形の石囲炉で、東側の炉石ははずきれている。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器 (55図7~15) はいずれも破片で、加曾利E式土器である。石器 (118図) は打石斧 (10~14・16~18)、粗製石匕 (15)、横刃形石器 (19~25)、敲打器 (26)、磨石斧 (27)、スクレイパー、磨石があり、打石斧は大きい (10) のから小さい (18) まであり、変化に富んでいる。土製品は円板 (191図20・21) がある。

ニ) B22号住居址 (15区・56区・119区・154区・118区・189区・191区・197区、写十九・二十・六十一)

遺構 B区下部中央にあって、B20号住居址をきっている。3.90×3.10mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向N26Wをはかる。規模としては最も小さい。壁はほとんど確認できず、周溝が南側をのぞいて見られる。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は北によって、方形石囲炉の炉石は全てぬかれている。埋壘は南にあって、完形土器を床面と同じレベルに正位にうめている。内部には底部と、胴下部を欠く土器を入れていた(197区5)。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(56区)は埋壘(2)をのぞいては破片である。1・3は埋壘内に入っていたものである。埋壘(2)は口径30.0cm、底径11.5cm、高さ40.5cmの大ききで、1は口径21.5cm、下径17cm、高さ14.5cm、2は底径12cm、高さ12.5cmの大ききである。加曾利E式土器である。石器(119区)は打石斧(1~16)、横刃形石器(8~11)、磨石斧(12~14)、粗型石ヒ(7)、敲打器(15・16)、凹石(17)、石ヒ(18)、石鏃(19)、石皿(154区7)がある。土製品として土偶の手(181区1)、小形土器(189区6)、円板(191区22)があり、土偶はB13号住居址のついた。

ヌ) B23号住居址 (16区・57区・119区・120区・154区・157区・180区・191区・197区、写二十)

遺構 B区下部中央にあって、B16号住居址の南、B24号住居址の東側をきっている。5.00×5.35mの不整楕円形の竪穴住居址で、主軸方向N49Wをはかる。壁は良好である。周溝は東側を欠いて壁にそってあり、一部2重の所もある。床面はかたく良好である。柱穴は6主柱穴で、あり方からみて改良されている。炉と壁の間にもピットがある。炉は北西よりにあって、方形石囲炉の炉石は、奥の石を炉内にたおし他の炉石は床面においている。この炉は2回使用され、炉底におちこんだ石上面にも焼土が見られた。埋壘は南東壁よりにあって、口縁と底部を欠く土器が、上縁を床面と同一レベルに正位にうめてあり、下部に土器片をおいていた(197区6)。上縁の西側にわずかかって扁平な石をおいている。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(57区)は埋壘(1)以外は破片で、2・3はその姿に数かかれていたものである。深鉢・台付土器・有孔つば付土器があり、有孔つば付土器はB16号住居址のものに接合した。埋壘は上径33cm、底径15cm、高さ34.5cmの大ききである。加曾利E式土器である。石器は打石斧(119区20~27)、横刃形石器(28~31、120区1・2)、磨石斧(3~5・9)、敲打器(6~8・10~12)、石鏃(13)、石鏃(14~17)、石皿(154区8・9)、石棒(157区3)がある。土製品としては土偶(180区6)、小形土器、円板(191区23)がある。

ネ) B24号住居址 (16区・58区・120区・180区、写二十一・二十二)

遺構 B区下部中央にあって、東と西をB23・25号住居址によってきられ、住居内中央部のみが残っている。大ききは計測できないが円形の竪穴住居址で、周溝はない。床面は北側はかたく良好であるが、南東側は悪い。炉は石を円形においたものである。覆土内に土器の出土は多く、廃絶時においていかれたものと思われる。柱穴は4主柱穴を確認している。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(58区)は器形のおかものが多く、深鉢・浅鉢・台付土器があり、井戸尻貝式土器の好セットを示している。石器(120区)は打石斧(18~22)、横刃形石器(23~28)、石鏃(29~32)、石鏃(33)、スクレイパー(34)、凹石、敲打器がでている。土製品とし

ては土偶片（180図7）がある。

ノ）B 25号住居址（16区・59図・121図・181図・191図・198図、写二十三・二十四）

遺構 B 地区下部南よりあって、B 24号住居址の西側を切っている。4.35×4.35mの不等円形の竪穴住居址で、主軸方向N 34°Wをはかる。壁は北西に高い。周溝は壁にそって断続している。床面はたかく良好である。柱穴は4主柱穴で改築されている。炉は北西よりあって、方形石囲炉で炉石は全て残っている。炉西隅外に小さな副炉がつき、西側の炉石の間に打石斧がつまこまれている。炉南東の床面に焼土が見られる。埋燼は南東壁よりに2個並んでする。埋燼No 1は内側にあり、口縁を欠き、床面と同じレベルで正位にうめている。No 2は外にあり、口縁を欠き、底部に穿孔があるのを、上縁を床面と同じレベルで正位にうめ、東側上縁に石をのせている。

遺物 土器・石器・土製品があり、土器（59図）は深鉢、台付土器がある。埋燼No 1（2）は上径17cm、底径7.5cm、高さ24cm。埋燼No 2（1）は上径33cm、底径7.7cm、高さ36cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器（121図）は打石斧（1～5）、横刃形石器（6・17）、凹石（7）、磨石斧（8・12）、敲打器（9）、石鏃（10・11）、石鏃（13・14）、石鏃（15）、スクレイパー（16）がある。土製品は土偶片（181図2）、円板（191図24）がある。

ハ）B 26号住居址（17区・60図・121図・182図・190区・191図・198図、写二十五・二十六）

遺構 B 区下部南よりあって、B 28号住居址の北東をきり、B 27号住居址に東接している。5.15×4.90mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N 70°Wをはかる。壁は東南側でかく、周溝は一貫している。床面はたかく良好である。柱穴は6主柱穴である。入口部と思われる東壁に、わずかな凹みがあって、平らな石がおかれていた。埋燼的な遺構と思われる。炉は西よりあって、方形石囲炉で炉石は全部ある。伏燼は南よりの主柱穴近くにあつて、完形土器の底部を穿孔して、底部を床面と同じレベルにやや西に傾むいてうめていた（198図3）炉上面に燼を集めて、土器もその部分に集中してあつた。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器（60図）は伏燼（1）が完形で、器形わかるものもいくつかで、量は多い。伏燼は口径14cm、底径7cm、高さ25cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器（121図）は打石斧（18～23）、横刃形石器（24～27）、磨石斧（28・29）、敲打器（30・33）、石鏃（34）、石鏃、磨石がある。土製品は土偶片（182図1）、粘土塊（190図1）、円板（191図25・26）がある。

ヒ）B 27号住居址（17区・62図・122図・198図、写二十七・二十八）

遺構 B 区下部南よりあって、B 28号住居址にわずかにのっている。4.75×4.75mの丸味強い方形竪穴住居址である。南壁を欠き、その部分に周溝はなく、他は壁にそつてある。床面はたかくて良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は北西により、方形石囲炉で、北西と南西の炉石をのこし、他ははずされて床面におかれていた。埋燼は南東壁よりあって、口縁と調下部を欠き、床面と同じレベルで正位にうめられていた。また、炉東よりに伏燼が、底部に穿孔されて、底部を床面と同じレベルにしてうめられていた。

遺物 土器・石器があり、土器(62図1~12)は埋甕・伏甕の他に台付土器の坏部(3)があり、他は破片である。埋甕(1)は上径26.5cm、下径21cm、高さ25cm、伏甕(2)は上径12.4cm、底径7.5cm、高さ13cmの大きさである。台付土器は上部を欠き、その部分ですってあり、口縁部も欠き、その部分もすって焼として再使用している。薄帯と縄文できれいに飾られた土器である。上径11cm、下径6cm、高さ12cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器(122図)は打石斧(1~6)、横刃形石器(7~12)、磨石斧(13)、石錘(14・15)、磨石(16)、敲打器(17・18)、石鏃(19・20)がある。

フ) B 28号住居址(177図・61図・122図・188図・190図、写二十五・六十四)

遺構 B区下部南よりあって、B 26号住居址に北東側をきられる。直径4.65mの円形の竪穴住居址で西側に壁が残る。周溝もその部分にある。床面は部分的にかたい。炉は石を方形においた浅い炉である。柱穴は不規則に10個ある。炉南側床面より吊手土器の一部がでている。

遺物 土器・石器・土製品・石製品がでている。土器(61図)は吊手土器がB 2号住居址に接合した。深鉢形の大破片がでており、井戸尻皿式土器である。石器(122図)は打石斧(21~27)、横刃形石器(28~30)、磨石(31)、粗型石ヒ、石錘、敲打器がある。土製品としては押子とするより、土偶頭部と思われるもの(188図5)、石製品では男性シンボルと思われる、実大で、扁平で、両面と側縁を磨いたもの(190図6)がでている。

ハ) B 29号住居址(128図・62図・123図)

遺構 B区下部にあって、住居址のほとんどは用地外にのびている。

遺物 土器・石器が少量ある。土器(62図13~20)は破片で加曾利E式土器である。石器(123図)は打石斧(1~7)、横刃形石器(8~10)、磨石斧(11)、円形石器(12)、敲打器(13・14)、石鏃(15)がある。

ホ) B 30号住居址(9図・62図・123図、写九)

遺構 B区北部上端にある。B 6号住居址に大半をきられる。残された周溝の大きさは5.05×4.85mの隅丸方形の竪穴住居址である。床面は6号住居址に約15cmほりさげられている。炉はB 6号住居址の炉北東側に炉芯を残している。

遺物 土器・石器が少量でている。土器(62図21~24)は破片で加曾利E式土器である。石器(123図)は打石斧(16・17)、横刃形石器(18)、敲打器(19)がある。土製品として土偶片がある。

林道より北側をD地区とし、昭和38年の調査で確認された住居址を、その報文の記載に基づきD 1号住居址からD 6号住居址とする。見取図により、D 1~D 4号住居址までは確認できたが、D 5・D 6号住居址は水田造成時に切り崩されて確認できなかった。それ以外については確認された順にD 7号からつけて、林道上部の拡幅部については、D地区に含めて住居番号をつけた。D区の場合、同一住居内をわずかに移動したりして補直ししているのを区別しなかつた。これについては今後検討したい。

あ) D 1号住居址 (18図・63区・124図・157図・182図・183図・185図・198区、写三十・六十)

遺構 D区中央林道に接してある。D26号住居址と接している。その前後関係は不明。昭和38年の調査時に、水田造成時にあわだしく調査されたものである。雑誌「信濃」16の9に土偶を中心に報告されている、ここでは今回確認された遺構の状態についてのみ記す。住居址は水田造成で大半がけずられ、北壁の一部と、南西の周溝と床面をわずかに確かめた。7個の柱穴と、2つの炉底部を認めた、このことにより、この住居址は炉を2回うごかしており、古い方の炉は炉底が浅く、新しい方の炉は炉底が大きく残っている。このことは、他の住居址でも、改築する場合床面を一段ぼりさげておることから判断した。埋嚢は2個あって、No1は古い方と思われ、古い方に対して南東正面にある。No2は新しい方に対して南西正面にある。このように90度ふれている例は、この遺跡でD2号住居址で確認されている。この遺跡では埋嚢が南東方向にあるのがほとんどで、南西方向にあるのは、D2号住居址とこれと2例だけである。埋嚢No1は割下部を欠く土器を正位に、埋嚢No2は口縁部を欠き、底部を打ちぬかれたものに、他の土器底部をかぶせて正位に埋めてあったという。いずれも、以前の調査により知られている。

遺物 新・旧の区別はつかないが、土器・石器・土製品がでている。報文によると、床面の上面に黒土をかためた面があったというので、この住居址は3度使用された可能性もある。土器(63図1~6)は埋嚢をのぞいてはいずれも破片である。埋嚢No1(1)は南東壁より正位にうめられていたもので、高森北小学校に保管されている。口径37.3cm、下径26.5cm、高さ38cmの大きなものである。埋嚢No2(2・3)は、上径26.5cm、底径9.5cm、高さ31.5cmの土器に上径14.5cm、底径10.5cm、高さ6cmの底部を下にあてていた。これらの土器は加曾利E式土器である。石器(124図)は磨石斧(1~3)、横刃形石器(4)、スクレイパー(?) (5)、石鎌(6~9)、石棒頭部(157図4)がある。土製品としてはほぼ完形の土偶(182図1)とその破片(3)がある。それらはD3号住居址、D14号住居址のものと同接している。

い) D2号住居址 (18図・63区・124図・154図・192図、写三十)

遺構 D1号住居址の東にあって、D25・27号住居址によってまらされている。水田造成時に床面までけずられているので、壁はない。周溝・柱穴・炉を確認した。周溝・柱穴は2重になっており、炉も2個あることから、かまでかえた改築を示している、その点D1号住居址と同じで、古い方の炉は貼り込してうめられていた。この炉は北西よりにあって、方形石匠炉であるが炉石はぬかれている。新しい方の炉は北東によっていて、方形石匠炉で、炉石はぬかれている。これは90度入口をかえている。北東側はD25号住居址にまらされていて埋嚢はない。南西側は一部D27号住居址にまらされている。そのぎりぎりに埋嚢がある。これは新しい炉に対する埋嚢で、口縁をわずかにかき、底部を打ち抜いて正位にうめられていた。

遺物 土器・石器があり、ほとんどがけずられていたため、室内に入っていたもののみである。古い炉に入っていた土器(63図7~18)は器形のわかる浅鉢をのぞいては深鉢である。加曾利E式土器である。石器は打石斧、横刃形石器、敲打器、石皿(154図10)がでている。新しい方の炉からの土器(63図20~23)は加曾利E式土器であるが、新しい様相を示している。埋嚢(19)は、それに較べると古い様相を示す。上径29cm、底径11cm、高さ41.5cmの大きさである。石器(124図)は打石斧(10~12)、横刃形石器(13~16)、敲打器(17)、石鎌があり、土製品として臼板(192図4)がでている。

う) D 3号住居址 (19図・64図・124図・183図・192図、写三十一・六十)

遺構 D区中央中段にあって、水田造成時に北東側をほりとられている。D 1号住居址の北にある。東西4.85mで、隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N50Wをはかる。壁は北西に高く80cmある。南東に低くなっている。周溝は壁にそってめぐっている。床面はかたくて良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は北西よりにあって方形石囲炉である。炉石ははずされて床面にあるのと、炉芯になおされているものがある。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(64図1~13)はいずれも破片で加曾利E式土器である。石器(124図)は打石斧(18~23)、横刃形石器(24~29)、敲打器(30~33)、凹石(34)、石棒がでている。

え) D 4号住居址 (19図・64図・125図・199図、写三十二・三十三)

遺構 D区上段部南縁にあって、水田造成時に南東側をほりとられている。この住居址もほりあげてから確認されたのであるが、炉を移動して改築している。古い方の住居址は新しいのにくらべると大きいとその大きさは不明であるが(東西5.40m)、隅丸方形気味の竪穴住居址で主軸方向N30Wをはかる。壁にそって周溝がめぐる。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴で、北西側の2本が残る。炉は北西よりにあって、方形石囲い炉で炉石の大半はぬかれていた、炉上面に貼り床があった。新しい方の住居址は南へずれており、南壁はほり広げているようである。北東壁は不明であったが、古い床面に新しい住居の周溝がほりこまれていた。規模は一まわり小さくなっていて、直径3.80mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N50Wをはかる。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は西よりにあって方形石囲炉で炉石は全部残っている。東壁よりに煙突がある、口縁をかく土器をわずかに東にかたむいて正位にうめ、その上に石皿片を、風の方を下にかぶせていた。

遺物 古い方の住居址からは、その確認が床面に入ってからであったため、遺物は少ない。土器(64図14)と石器は打石斧と横刃形石器が各1あったのみである。加曾利E式土器である。新しい方のものは土器と石器であり、土器(64図15~22)は埋壘(15)をのぞいて破片である。埋壘は上径16cm、底径7.2cm、高さ18cmの大きさで、埋壘としては最小のものである。加曾利E式土器である。石器(125図)は打石斧(1~3)、横刃形石器(4・5)、磨石斧(6)、石鏃(7)、凹石(8)、石皿(153図11・12)があり、12が埋壘の蓋石であった。

お) D 7号住居址 (22図・64図・125図、写三十三)

遺構 D区下部東はずれにあって、D13号住居址の一部貼り床してのっている。直径4.40mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N50Wをはかる。壁のほりこみは浅い。周溝はない。床面は炉のまわりがかたいは他は良好でない。柱穴は2個確認するが、1個は炉の奥壁にそってある。炉は北西よりにあって方形石囲炉で炉石は残っている。

遺物 土器・石器がでている。土器(64図23~30)はいずれも破片である。加曾利E式土器である。石器(125図)は打石斧(9~12)、横刃形石器(13~15)、石鏃(16)、粗型石匕(17)、敲打器(18~20)、磨石(21)、凹石(22)がでている。

か) D 8号住居址 (20図・65図・66図・126図・183図・185図・190図・192図・195図・199

図、写三十五・三十六・六十六)

遺構 D区下部東側にあって、D 7号住居址の西に並ぶ。D 9号住居址をきってあり、D 17号住居址が上に貼り床でついていた。4.40×5.40mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N 39°Wをはかる。南東中央の埋塞のある部分がわずかに外へ突出しており、埋塞と竪穴掘り込み時との同時性を思わせる。周溝は壁にそって一周している。床面はかたく良好である。柱穴は4柱穴穴である。入口部と思われるところに支柱穴が2個並んで対になっている。炉は北西よりあって、方形石囲炉で、炉石ははずされて床面におかれている。埋塞は南東壁よりあって、胴下半を欠く土器を正位にうめていた。なおこの住居址では床面より5cm上に黒土をかためた面が見られた。それに伴う遺構として、炉奥の壁との間に礎を凹形においた石囲いがあり、その中に直径45cm、深さ47cmの穴がある。同様なものはD 30号住居址にも見られる。これと、住居内覆土に見られた多くの土器(すてられた)との関係は充分につかむことができなかった。これがこの住居廃絶後の施設であることは確かである。

遺物 土器・石器・土製品・石製品があり、その量は多く、D 24号住居址とともにすて場を思わせる。石囲い周辺の出土遺物は、土器・石器がある。土器は覆土のものと同じで、65図3が、この場所からでている。小形変形土器で、半分になっているのを再利用したらしく、内面に丹彩(絵皿としたか)が見られそれが七器折損断面部にも見られた。石器(126図)は打石斧(1)、磨石斧(2)、横刃形石器を利用した敲打器(3)がある。住居址のものとしておさえた遺物には、上部面のもあったかと思われるが、その区別はできていない。土器・石器・土製品・石製品がでており、その出土量は非常に多かった。すて場を思わせる。土器(65・66図)は器形のわかるものや、大きな破片がある。深鉢・浅鉢・台付土器・吊手土器がでている。65K1は埋塞で、口径37.5cm、口径22cm、高さ25cmの大きさである。これらの土器の上では時間差を認められない。加曾利F式土器である。石器(126図)は打石斧(4~13)、横刃形石器(23)、磨石斧(24・25)、石錘(26・27)、粗型石ヒ(28)、敲打器(29~32)、磨石(33)、凹石(34)、石鏃(35・36)、海浜石(8個)がある。打石斧は155、横刃形石器45、敲打器22と量の多いのが注目される。21は横刃形石器でも半月形になっている。土製品は土偶(183図2、185図2・4)、円板(192図6~12)がある。石製品ではカツオブシ形ポ(軟玉製)(190図7)がでている。

き) D 9号住居址 (20図・67図・127図、写二十五)

遺構 D区下部東にあって、D 8号住居址に大半をきられ、D 17号住居址が一部のついている。4.20mを直径とする円形(?)の竪穴住居址である。南東側の半分以上をきられる。壁に沿って周溝がある。床面はかたい。柱穴は4柱穴穴で、2本はD 8号住居址に残る。炉は北西によってあり、方形石囲炉と思われるが炉石は全てぬかれている。

遺物 土器・石器があり、その量は少ない。土器(67図1~8)はいずれも破片で加曾利F式土器である。石器(127図)は打石斧(1~4)、横刃形石器(5・6)、磨石斧(7)がある。

く) D10号住居址 (20図・67図・127図・156図・185図・192図・199図、写三十六)

遺構 D区北東端にあって、この住居址だけ孤立してある(5・6図)。新切遺跡の北東縁は寺沢川に深くけずられて5cm以上の崖で寺沢川におちていて、北側の増野川子石遺跡につづいている。この川の南側にわずかな平地がある。この部分は日当りも悪く、日陰の地帯であるので、遺構の存在を考えなかったが、調査したところ(山林であり、その調査は困難をきわめた)、遺物の出土も多く、炉を確認して、住居址の存在を知った。新切遺跡と結びつくのか、川子石遺跡と結びつくかというように区別して考えるよりも、川をはさんだ集落内の一軒として考えるべきだろうか。いずれにせよ特異なあり方である。大きさは明確でないが、南西壁から見ると円形の竪穴住居址である。壁のほりこみは浅く、周溝はない。床面黄砂土である。あまりかたなく良好でない。柱穴は西半分に6こを検出している。炉はほぼ中央にあって、方形石囲炉で、石は残っている。炉南西に20cmはなれて、土器底部を床面にうめていた。いわゆる埋壘とはおもむきを異にし、同様なものはD15号住居址にみられた。床面に、ベニガラや粘土塊も見られた。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(67図9~27)は崖下ということもあって、上からのおちこみもあるようで、住居址やその東側の傾斜地には多かった。いずれも加曾利E式土器であるが、新古岡方が見られる。9は内面丹彩の壺である、10は底部で床面にうめられていたものである。上径14cm、底径8.5cm、高さ6cmの大きさである。浅鉢・有孔つば付土器もある。石器(127図)は打石斧(8~14)、横刃形石器(15~18)、磨石斧(19・20)、敲打器(21~23)、粗製石匕(24)、石匕(25)、石鏃(26・27)石皿(156図5)がある。土製品では土偶脚部(189図3)、円板(192図13)がある。

け) D11号住居址 (21図・68図・128図・154図・192図、写三十七)

遺構 D区中央北縁にあって、D29号住居址を切っており、D35号住居址をきっている。6.80×6.10mの台形の竪穴住居址で軸方向N25°Wである。西側半分は壁にそって周溝がある。床面は貼り床状になっていてかたい。柱穴は4主柱穴である。南壁よりにほりこみが見られる。炉は北西によってあり、方形石囲炉で、東側が石が伊内におちこんでいた。D29号住居址の炉には貼り床してある。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(68図)はいずれも破片で、9は胴上半部である。加曾利E式土器であるが、古いのもあって、D29・35号住居址のいずれかのが混在していると思われる。台付土器・吊手土器もある。石器(128図)は比較的多い。打石斧(1~5)、横刃形石器(6~10)、磨石斧(11~14)、敲打器(15~18)、粗製石匕(19)、石匕(20)、スクレイパー(21・22)、石鏃(23~26)、砥石(27~28)がある。土製品は円板(192図14・16)がでている。

こ) D12号住居址 (22図・69図・129図・155図・184図・185図・190図・192図・199図、写三十八)

遺構 D区上段北縁にあって、D11号住居址の西にある。5.10×5.20mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N40°Wをはかる。周溝は北と西の一部に壁にそってある。床面は中央部がかたたくて良好であった。柱穴は4主柱穴で、埋壘西側にも2本支柱穴がある。炉は北西よりにあって方形石囲炉である。炉石は炉内にくずれおちていた。埋壘は南東壁よりにあって、口縁を欠く底部穿孔のある土器が、上縁を床面より2cm高く正位にうめられていた。内部の底面より16cm上に、硬砂岩剥片(129図1)とスクレイパー(2)が入っていた。なお、この住居址覆土の南壁よりに、扁平な石をコの字形に囲むようにして直立させていた

(写38)。これは明らかに人為によるが、後の炉とも考えたけれど焼土は見られなかった。住居址廃絶後の施設であろう。

遺物 土器・石器・土製品があり、量が多い。土器(69図)は埋燵(1)以外は破片で、2は副上半部である。この土器だけでなく、他の住居址からもでているが、岐阜県・愛知県とのつながりの強い土器である。台付土器もでている。埋燵は上径29.5cm、底径9.5cm、高さ39cmの大ききである。加曾利E式土器である。石器(129図)は打石斧(3~7)、横刃形石器(8~13)、磨石斧(14)、石錘(15~16)、凹石(17)、杓型石ヒ(18~19)、スクレイパー(20)、石鏃(21~24)、石皿(155図1)特別なものとして細目文様のきれいなメノウ原石がでている。土製品としては土偶が3個体分(184図1・2、185図5)、円板(192図17)がある。

き) D13号住居址(22図・70図・130図・189図・200図、写三十三・三十図)

遺構 D区下部東端にあって、D7・15号住居址が上につけている。6.40×5.60mの楕円形の竪穴住居址で主軸方向N52°Wをはかる。南半分については壁は不明である。周溝は南東側をのぞいて、見られ、南西側には3重に見られる。床面はかたく良好である。柱穴は6主柱穴で、3河床直しによる移動がうかがわれ、そのたびに外へ広がっている。炉は北西より方形石囲炉であるが、南の炉石はそのまま、他ははずされ、炉内と床面にある。埋燵は南東壁よりあって、3主軸線上にならび、外へいくほど新しい。No1は竪下部で正位にうめられていたが、壁直してけがられている。焼土と粘床がある。No2は竪下半を欠く土器で正位にうめられ、口縁はこわされ内部におちこんでいた。東側上縁にかかって平らな石がおかれていた。No3は一番外側にあって、底部を打ち抜かれている。正位にうめられ、床面より10cm低くっており、東上縁のうって石がある。内部には台付土器基部が底より数cmういて正位に入っていた。

遺物 土器・石器・土製品があり、量が多い。土器(70図)は埋燵以外は破片である。埋燵No1(1)は、上径39cm、底径11cm、高さ23.5cmある。No2(2)は上径42.5cm、下径30cm、高さ25.5cmある。No3(3)は口径33cm、底径11cm、高さ47cmの大ききである。中に入っていた台付土器(4)は口縁を欠き、台部もなく、その折損部を磨いて平にしている。上径17cm、底径7cm、高さ11.4cmの大ききである。加曾利E式土器である。石器(130図)は打石斧(1~6)、横刃形石器(7~12)、磨石斧(13)、敲打器(14~17)、杓型石ヒ(18)、スクレイパー(19~21)、石鏃(22)、石鏃(22)がある。土製品としては小形土器(19図7・8)がでている。

し) D14号住居址(23図・71図・72図・131図・132図・155図・157図・183図・185図・190図・192図・196図、写三十九~四十一・六十一・六十六)

遺構 D区下部東はずれにあって、D51・16号住居址が貼り床をして上につけている。7.50×6.00mの楕円形の竪穴住居址で、主軸方向N80°Wをはかる。本遺跡最大級の住居址で、壁のほりこみも深い。北面にD15号住居址が、西面にD16号住居址がついていた。周溝は壁にそってあり2重見られる。床面はかたく良好である。柱穴は6主柱穴で、穴の径も大きい。その内側に径の小さい柱穴6本あって、それには貼り床してある。炉は西よりあって、長方形石囲炉で、炉石はのこっている。この炉は内側で160×90cm深さ55cmという大ききで、全果的に見ても最大である。北西隅外側に副炉をもっている。南西隅には乳埴

状磨石斧刃部を45°で内側に向って刃部を上にしてさしこんであった。東壁よりの主柱穴内側に接して花崗製の完形石棒を直立させていたが、下がおれて西に頭を向けてたおれていた。また床面内南よりも、円柱状の石を一部敲打調整して石棒にしたのか、火災のため割れてたおれていた。埋壔は2個あって、No1は南壁よりあって、馬下部を欠く土器を正位にうめ、その上半をこわして一部内部に入れてその上に貼り床してあった。No2は東壁より溝溝に接してあって、大きな完形土器を正位にうめ、西側上縁にかかるように平らな石をのせていた。この土器東側外にも、土器大破片があり、おさえとして入れたのか、もう1つ埋壔があったのかと思わせる。内部にも土器片が入り、底に近い所から黒曜石刺片がでていいる。この住居址は改築されており、主軸方向を約50°ふっている。これに近い例はD37号住居址である。この住居址は火災にあったため、木炭の量は多かった。そのためか、完形土器がいくつもあり、壔は伊南に、浅鉢は伊西に、伊東には他の器形のわかる土器があった。この木炭を学習院大学木越邦彦教授に測定してもらったところ、C-14はB C 2210± 105 (GaK- 4213) という数値がでていいる。

遺物 土器・石器・土製品・石製品がでていいる。土器は埋壔以外にも器形のわかるものが多い。深鉢、浅鉢・台付土器・吊手土器・器台などがあり、器種の変化にとんでいいる。埋壔No1 (71図1) は口縁と胴下半を欠くもので、上半は改築のときにこわされていいる。口径28cm、口径25.5cm、高さ17.5cmある。No2は口径33cm、底径10cm、高さ42cmの大きさである。いずれも加曾利E式土器である。72区9・10はD15・16号住居址からのまざりと思われる。72区3の浅鉢は内面に円影が見られる。石器も多く、打石斧 (131図1~8) は130こという数である。横刃形石器 (9~18)、磨石斧 (19~23)、石錘 (24)、粗型石ヒ (132図1・2)、敲打器 (3~9)、凹石 (10~12)、磨石 (13)、スクレイパー (14・15)、石鏃 (16~21)、石皿 (155図2)、石棒 (157図5・6) がある。磨石斧19は完形大形の乳棒状のものであり柱穴内部に少しおちこんでた。磨石斧20は乳棒状石斧の敲打整形のものである。土製品は土偶 (183図3、185図6)、円板 (192図18~20) がある。石製品では軟玉製の蛇玉 (190図8) がでていいる。

ナ) D15号住居址 (23図・73区・133図・192図・200図、写三十三・三十四)

遺構 D区下部東はしにあって、D13・14号住居址にのっている。東側は不明であるがほぼ5.20×5.50mの円形の壁穴住居址で、北側はD13号住居址に、南側はD14号住居址にのっている。壁は北西壁の一部にはりこみが見られ、西南側は欄を弧状に並べて壁としていいる。床面は西半分はかたよく、東側はよくない。柱穴は10こあるが、6主柱穴と思われる。炉は北西よりあって、方形石囲炉で炉石はぬかされていいる。北壁よりの陸り床部に土器底部をうめていた (写三十四)。

遺物 土器・石器・土製品がでていいる。土器 (73図1~15) はいずれも破片で、深鉢・台付土器・吊手土器・つば付土器がある。加曾利E式土器である。石器 (133図) は打石斧 (1~6)、横刃形石器 (7~12)、磨石斧 (13・14)、敲打器 (15~18)、凹石 (19)、砥石 (20)、粗型石ヒ (21)、スクレイパー (22~25)、石鏃 (26~28) がある。土製品は円板 (192図21~23) がある。

セ) D16号住居址 (24図・73区・134図・183図・189図・192図、写四十二)

遺構 D区下部中央にあって、D14号住居址の西に貼り床をしてのっており、D31号住居址をきる。6.6.30×6.10mの円形の壁穴住居址で、主軸方向N43°Wをはかる。壁は南西側がほとんどなくこの部分は床

床面の状態も悪い。床面はかたいが、D16号住居址に貼り床した部分は少しおちこんでいる。柱穴はいくつもあり、特に南側に集中している。主柱は6本柱穴である。入り部と思われる南東壁よりに深いピットがある。炉は北西によってあり方形石囲炉の石は炉内にくずされ、一部は床面にもある。炉南西の床面に焼土部が見られた。周溝は北壁に見られ、南壁に短かくある。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(73図16~22)はいずれも破片で台付土器もある。加曾利E式土器である。石器(134図)は打石斧(1~6)、横刃形石器(7~11)、磨石斧(12~14)、敲打器(15~17)、磨石(18)、粗型石ヒ(19~21)、スクレイパー(22)、石鏃(23~36)がある。土製品は土偶(184図4、186図1)、小形土器(189図9)、円板(192図24~27)がある。

そ) D17号住居址(24図・74図・135区・192区、写四十二)

遺構 D区中央部において、D31・24号住居址をきり、D8・9号住居址にのり、D18号住居址が上についている。5.95×5.98mの円張りの方形竪穴住居址で、主軸方向N46°Wをはかる。壁は水田造成時にけずられている。周溝は一周している。床面はかたく良好である。柱穴は6本柱穴である。D31号住居址の柱穴が内部にある。炉は北西により、方形石囲炉で南西石が床面にはずされている。南東壁がわずかに外に突出する部分があり、浅い凹みが見られる。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(74図1~12)はいずれも破片であり、加曾利E式土器である。浅鉢・台付土器もある。石器(135区)は打石斧(1~5)、横刃形石器(6~9)、磨石斧(10~11)、石鏃(12)、敲打器(13~16)、粗型石ヒ(17)、スクレイパー(18・19)、石鏃(20・21)、凹石(24)がある。土製品は円板(192図28)である。

た) D18号住居址(24図・135区、写四十二)

遺構 D17号住居址の北壁より覆土中において、方形の石囲炉が検出された。炉底はD17号住居址の床面をほりこんでいる。炉のまわりには床面はなく、単なる炉だけのもののように思われる。

遺物 ほとんどなく、石鏃(135図25)がある。

ち) D19号住居址(21図・74図・135区、写四十三)

遺構 D区下部用地境において、東半分は用地外のびている。東西5.35mの円形の竪穴住居址である。炉は方形石囲炉で北東の石をのこして、他ははずされている。

遺物 土器・石器があり、土器(74図13~20)はいずれも破片で、台付土器もある。加曾利E式土器である。石器(135区)は打石斧(26~29)、横刃形石器(30・31)、石鏃(32)、敲打器(33・34)、スクレイパー(35・36)、石鏃(37~39)があり、海浜石もでている。

つ) D20号住居址(25図・74図・136区・186区・192区・193区、写四十三)

遺構 D区下部南はしにおいて、D21号住居址をきっている。南壁ははっきりしない、床面の状態もよくない。土壁にさらされている。炉はほぼ中央において、不整円形の石囲いで、東側のがぬかれている。炉東側の床面に焼土がある。柱穴は6本柱穴と思われる。

遺物 土器・石器・土製品がでている。土器(74図21~29)はいずれも破片で、加曾利B式土器である。石器(136図)は打石斧(1~5)、横刃形石器(6~9)、三日月形石器(10)、磨石斧(11~12)、敲打器(13~15)、石鏃(16~19)がある。土製品は土偶(186図2)、円板(192図29~31、193図1)がある。

て) D21号住居址(25図・75図・136図・186図・193図、写四十三)

遺構 D区下部南よりあって、D20号住居址にきられている。5.20×4.00mの楕円形の竪穴住居址で主軸方向N54Wをはかる。東壁ははっきりしない。周溝は壁にそってめぐる。床面は土壁にきられたりで状態はよくない。柱穴もはっきりしないが4土柱穴と思われる。炉は北西よりあり、方形石囲炉である。炉を含めて南側に土壌があって、炉石ははずされる。

遺物 土器、石器、土製品がでている。土器(75図1~19)はいずれも破片で、加曾利E式土器である。古いのと新しいのが混在している。石器(136図)は打石斧(20~26)、横刃形石器(27~28)、石錘(29)、粗形石ヒ(30~31)、石ヒ(32~33)、スクレイパー(34)、石鏃(35~36)、石鏃(37~39)がある。土製品は土偶(186図4)、円板(193図3)がある。

と) D22号住居址(26図・75図・137図・157図・186図・193図、写四十四)

遺構 D区下部南は1にあって、D28号住居址に東側を一部きられる。4.70×4.00mの脚張りの方形竪穴住居址で、主軸方向N52Wをはかる。北半分の壁にそって周溝がある。床面はかたく良好である。柱穴は4土柱穴で、南側のは土壌でほられてない。炉は北西より方形石囲炉で、北側の炉石をのこして他ははずされる。炉上置に集石(写44)があって、その中に砂岩製の石棒片が混在していた。

遺物 土器、石器、土製品があり、土器(75図20~31)はいずれも破片で、深鉢、台付土器、つば付土器がある。加曾利E式土器である。石器(137図)は打石斧(1~6)、横刃形石器(7~9)、敲打器(10~14)、粗形石ヒ(15)、スクレイパー(16)、石鏃(17~18)、砥石(18)、石棒(157図9)がある。この石棒は下部径14cm、長さ64cmあって、頭部がかけている。砂岩でいいいに磨かれてできているが10~20cm大にこわされている。その破片はこの住居址に9、D28号住居址に3、D F53に2、D3号住居址に1、D33号住居址に1、B5号住居址に1、B6号住居址に1と散在しており、中には卵石として再使用されていた。これらの住居址はD22号住居址より新しいと思われる。土製品は土偶(186図4)と円板(193図3)がある。

な) D23号住居址(26図・76図・138図・188図・193図、写五十一)

遺構 D区南はしにあって、D27号住居址の南東に接し、1部D22号住居址にと切りあう。壁・床面、柱穴とも状態がよくなく、炉のまわりの床面がかたいのみで、周溝への広がり北壁の一部が確認できたのみであった。炉は北西より方形石囲炉で、南炉石は儀より高くでている。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(76図1~8)はいずれも破片で深鉢、台付土器がある。加曾利E式土器である。石器(137)は打石斧(20~25)、横刃形石器(26~31)、磨石斧(32)、敲打器(33)、凹石(34)、磨石(35)、粗形石ヒ(36)、石鏃(37~38)がある。土製品は小形土器、滑車形

耳部（188図6）、円板（193図4・5）がある。

（丁）D 24号住居址（27図・76図・77図・78図・138図・186図・189図・200図、写四十五・四十六・六十一・六十三・六十五）

遺構 D区中央北よりあって、D17号住居址にきられ、D34号住居址がのっている。5.10×5.35mの方形の竪穴住居址である。壁にそって周溝が2重にめぐっており、柱穴の状態も2重になっていて改築されている。床面はかたくてよい。柱穴は6主柱穴である。炉は北西より方形石囲炉で、炉石のほとんどはぬかれている。埋壙は南東壁よりあって、D17号住居址の壁で南半分がきられている。口縁部を欠く土器を正位にうめており、内部より横刃形石器がでていいる。埋壙北側のピットを埋壙的な性格がありそうである。

遺物 土器・石器・土製品があり、その出土量は多く、とくに完形またはそれに近い土器がいくつもあり、すて場として性格を考えさせる。土器（76・77・78図）は器形変化に富む鉢がほとんどで、付付土器もある。埋壙（77図1）は口縁を欠き、上径22.5cm、底径12.5cm、高さ29.5cmの大きさである。いずれも加曾利E式土器である。石器（138図）は1は埋壙内出土の横刃形石器・打石斧（2～6）、横刃形石器（1・7～19）、磨石斧（20）、石錐（21～24）、敲打器（25～28）、磨石（29）、局部磨石斧（30）、短形石ヒ（31）、石ヒ（32）、石鏃（33～38）、礫石・石錐がある。土製品には土偶（186図5・7）、小形土器（189図10・11）がある。

（ぬ）D 25号住居址（27図・79図・139図・157図・189図・193図）

遺構 D区中央にあって、D2号住居址をきり、D27号住居址を接している。6.95×6.45mの胴張りの方形の竪穴住居址で、主軸方向N47Wの大きな住居址である。この住居址はD14号住居址と同様に火災にあり、木炭と厚い焼土が見られた。その木炭の中に栗とくるみの炭化したのがいくつも見られた。また北東壁にびったりとついで木炭があり、壁のおさえとして割板が使用されていたのだろうか。また覆土の南東壁にそって、壁上面と同レベルに石の配列が見られた。意識的に集石されたものである。この面に胴部を見せて立体把手のついた甕が逆さになってうまっていた。また南壁に近くに土壌がほられていた。壁のほりこみは深く、壁にそって周溝がめぐる。この手の住居址に共通して見られるか、南東壁中央部がわずかに外へ突出している。その部分周溝の中も広がっている。床面はかたくよい。柱穴は主柱穴である。炉は北西によってあり、炉石は一部をのこしてははずされ、床面にいくつかある。西主柱穴の近くに炉石を床面にうめていた。

遺物 土器・石器・土製品があり、その出土量は多かった。土器（79図）は多いのに対して完形品はない。深鉢・浅鉢・台付土器・吊手土器があって、台付土器台部が11個体分もあって注意される。複雑にかざられた立体把手をもつ甕は火災で焼けてもろくなっている（1）。当地方ではめずらしい土器である。いずれも加曾利E式土器である。石器（139図）は打石斧（1～6）、横刃形石器（7～16）、磨石斧（17・18）、石鏃（19）、敲打器（20・21）、短型石ヒ（22～24）、石ヒ（25）、スクレイパー（26）、石鏃（27～33）、石鏃（157図8）がある。土製品としては小形土器（189図12）、円板（193図6・7）がでていいる。

わ) D 25号住居址 (28図・80図・140図・187図・193図・200図、写四・一九)

遺構 D区中央部南はしにあって、林道で南側をきられ、東側をD 27号住居址にきられる。水田造成時に壁のほとんどもをけずられている。そのためD 1号住居址との関係は不明であるが、D 1号住の方が上にのるように思われる。北西壁にそって周溝が見られる。床面は北西半分はかたたくてよいが、南東半分は軟弱でよくない。柱穴は6主柱穴であり、炉の奥、壁との間にもピットがある。炉は北西によってあり方形石圍炉で炉石ははずされている。埋壁は内縁部をかき、正位にうめられていた、内部底に凹石が入っていた。炉東外床面に球形の石があった。

遺物 土器・石器・土製品がでていいる。土器(80図)は埋壁以外は破片で、器台(2)、台付土器もある。埋壁(1)は上径27.5cm、底径10.2cm、高さ50cmの胴長のもので、縄文と燃糸文を半分づつにつけていいる。いずれも加曾利E式土器である。石器(140図)は打石斧(1~8)、横刃形石器(9~12)、敲打器(13~16)、凹石(17)、磨石(18)、粗製石匕(19)、石鎌(20)、石鏃(21)がある。土製品は土偶(187図1)、瓦板(193図8~11)がでていいる。

の) D 27号住居址 (28図・81図・141図・155図・157図・188図、写五十・六十六)

遺構 D区中央部南よりにあって、D 2・26号住居址をきり、D 25号住居址と接している。5.80×6.00mの典型的な隅丸方形の竪穴住居址で、壁のほりこみも直で深い。周溝は部分的にみられる。床面はかたくて良好である。柱穴は4主柱穴であり、壁にそって支柱穴が並ぶ。また床面に円形になって直径の小さい柱穴があり、それには貼り床が見られた。そのいくつかは穴が内側に傾むくようにほられていた。炉はほぼ中央に石で不整円形に開んでいる。その炉石の一つに石棒が使われていた。この炉は古い炉をうめており、古い炉はこの炉より北西によっていて、方形石圍炉であり。炉石ははずされ、一部中に入っていた。この古い炉にとまなう穴が円形にとりまく内側のものではないかと思う。南東壁よりにピットがあり埋壁と同一性格のものだろうか。

遺物 土器・石器・土製品があり、土器(81図1~14)はいずれも破片である。深鉢・台付土器・器台・吊手土器・つば付土器がある。2~5は古い炉の中に入っていたものである。時間差はないように見える加曾利E式土器である。石器(141図)は古い炉から磨石斧片が1つでていいる。他は床面と覆土である。打石斧(1~8)、横刃形石器(9~19)、磨石斧(20)、石鎌(21)、敲打器(22~24)、局部磨石斧(23)、磨石(25)、スクレイパー(27~30)、粗製石匕(26)、石鏃(31~36)、石皿(155図3)、石棒(157図7)がある。土製品としては小形土器(189図13)と、球形の全面に刺突点文のある玉(188図4)がでていいる。

は) D 28号住居址 (26図・81図・142図)

遺構 D区下部南はずれにある。D 22号住居址の東をきっている。3.10×2.00mの不整長方形の竪穴住居址で、これを住居址とするかにまよった。多く発見された土壁とは大きさ、深さも異っており、床面もかたく良好であるので、住居址とした。柱穴・炉・周溝はない。東隅に円形の張り出とも考えられるピットがある。

遺物 土器・石器がでていいる。土器(81図15~21)はいずれも破片である。加曾利E式土器である。石

器（142図）は打石斧（1・2）、横刃形石器（3～5）、磨石斧（6・7）、敲打器（8・9）、粗型石ヒ（10）があり石棒は22号住居址のそれに接合した。

ひ) D 29号住居址 (21図・82図・142図・154図・201図、写三十七)

遺構 D区中央部東はしにあって、D 11号住居址によって北西半分をけずりとられている。東西4.80mの方形と思われる竪穴住居址で、主軸方向N 50°Wをはかる。南西壁にそって周溝がある。床面は伊東側がかたく良好である。柱穴はいくつかあるが、6主柱穴と思われる。炉は11号住居址にきられ貼り床されており、東南側の炉石が残っていた。炉石の一つは炉南側のほりこみの中に入っていた。埋燬は南東壁よりあって、1線と底部を欠く土器を正位にうめていた。そのほりこみ下部に礫を置いて土器のおさえにしていた。伏襲は伊東に、壁との中間の床面に、口縁を欠き、底部を穿孔した土器を、底部を上にして埋めていた。

遺物 土器・石器がでているが、その量は少ない。土器（82図1～8）は埋燬（1）と伏襲（2）を除いて他は破片である。埋燬は上径38cm、下径19cm、高さ38cmの大きさ、伏襲は上径12cm、底径17.8cm、高さ17cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器（142図）は打石斧（11～15）、横刃形石器（16・17）、石鎌（18）、敲打器（19）、磨石（20）、石皿（154図4～6）がでている。

ふ) D 30号住居址 (29区・83図・84図・143図・155図・187図・201図、写五十一)

遺構 D区上段南はずれにあって、南西側を林道にきりとられている。南北6.45mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N 60°Wをはかる。覆土中（床面より5cm上部）につきかためられた面が認められた。その面で、炉址と壁の中間に礫を楕円形においた石囲いが認められ、中央に楕円形の深さ27cmのピットがあった。同様なものはD 8号住居址にも認められ、D 1号住居址にもあったようである。住居址廃絶後の人跡による施設である。炉・柱穴はこの面では認められなかった。壁のほりこみは深く、周溝が断続的にあり一部2重になるところもある。柱穴は6主柱穴であり、径の小さい方が新しく、径の大きい方は上面に貼り床をしていた。このことから改築があったことがわかる。炉は北西によってあり、方形石囲炉で北西と北東のをのこし、他ははずされていた。東側柱穴そばの床面に穴をほって、三角形の扁平な石の基部をうめて直立させていた。埋燬は南東壁よりの周溝に接してあり、口縁と胴下半を欠く土器を正位にうめ、上部に平らな石で蓋をしてある。内部には土器片・磨石・横刃形石器近くに黒曜石割片が入り、底はかたくなである。

遺物 上面と床面とにわけてとりあげた。上面貼り床部からは、土器・石器がでている。土器（83図）はいずれも破片である。加曾利E式土器である。下面と大きな変化はないが、いくつか新しい要素のものもある。石器（143図）は打石斧（1～5）、横刃形石器（6～9）、磨石斧（10）、敲打器（11・12）粗型石ヒ（13）、凹石（14）、石鎌（15）、石皿（155図7）がある。床面からは土器・石器がある。土器（84図）は埋燬（1）の他にも器形のわかるもの（2～4）もあり、他は破片である。埋燬は上径31.5cm、下径22.0cm、高さ26cmの大きさである。いずれも加曾利E式土器である。石器（143図）は、埋燬内より磨石（16）、横刃形石器（17）がでており、他は打石斧（18～20）、横刃形石器（21～24）、敲打器（25～27）、磨石斧・石鎌がでている。

へ) D 31号住居址 (24図・82図・144図、写四十二)

遺構 D区中央部にあつて、D 17号住居址に大半をきられ、西側のわずかな部分をのこしている。円形の竪穴住居址である。柱穴はいくつか確認されたが、炉は確認できなかった。

遺物 土器・石器が少量ある。土器(82図9～3)はいずれも破片で加曾利E式土器である。石器は打石斧(149図1)、横刃形石器(2)、石錘(3・4)、敲打器・海浜石がでてゐる。

ほ) D 32号住居址 (29図・85図・144図・186図・189図・201図、写五十二)

遺構 D区上段部にあつて、D 30号住居址と並んでゐる。5.00×5.90mの南北に長い円形の竪穴住居址で、壁は水田造成時にけずられている。周溝は北東に壁にそつてある。床面は南東壁よりか軟弱であるが他はかたくてよい。そのため南側は外にほりすぎているきらいもある。柱穴は6主柱穴で、4本は2重になっており、改築されている。炉は北西よりにあつて、方形石圍炉で、その炉石はほとんどぬかれてゐる。煙突は2つあつて、内側の方が古く、No1とする。No1・2は主軸方向に並んでゐる。No1は口縁と胴下半を欠く土器を正位にうめており、底はつきかためてある。内部にはロームを入れて、上面は貼り床してある。No2は口縁を欠き、底部に穿孔をしている。床面より上縁を4cm高くして正位にうめていた。内部底近くにはロームが入りこんでいた。内部から黒曜石片がでてゐる。

遺物 土器・石器・土製品がでてゐる。土器(85図)は深鉢・浅鉢・付付土器・吊手土器がでてゐる。埋壺No1(1)は上径27cm、下径28.5cm、高さ27cmの大きさ、埋壺No2(2)は上径27cm、底径11cm、高さ35.5cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器(144図)は打石斧(5～9)、横刃形石器(10～16)、磨石斧(17～19)、石錘(20)、敲打器(21・22)、磨石(23・24)、粗形石匕(25)、石錘(26)、石鏃(27～29)、砥石(30)がでてゐる。土製品としては土偶(186図6)、小形土器(189図14)がある。

ま) D 33号住居址 (30図・82図・145図・193図、写五十三)

遺構 D区上部の北よりにあつて、D 12号住居址の南にならぶ、D 35号住居址と切りあつてゐる。5.30×5.40mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N42Wをはかる。壁のほりこみはよい。壁にそつて周溝がめぐり、東側でまできている。床面はかたくて良好、柱穴は4主柱穴である。炉は北西よりにあつて、方形石圍炉で南東側の炉石がぬかれて南主柱穴そばがおかれてゐる。東側主柱穴に接して土城92があつて、上部に貼り床してあつた。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(82図14～20)はいずれも破片である。深鉢・付付土器・器台・吊手土器がでてゐる。いずれも加曾利E式土器である。石器(145図)は打石斧(1～8)、横刃形石器(9～15)、敲打器(16～19)、磨石(20)、粗形石匕(21)、スクレイパー(22)、石鏃(23)、非常によく使用された砥石(24)がでてゐる。土製品は円板(193図12)がでてゐる。

み) D 34号住居址 (30図・86図・146図、写五十三)

遺構 D区中央部にあつて、1部D 24号住居址にのる。水田造成時に南東半分をほりとられてゐる。東

西4.40mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N45°Wをはかる。壁にそって周溝がめぐり、床面はかたくて良好である。柱穴は4主柱穴で3こ確認されている。炉は北西によってあり、方形石囲炉で東側の炉ははずされている。

遺物 土器・石器がでている。土器(86図1~10)はいずれも破片で、加曾利E式土器である。石器(46図)は打石斧(1・2・8)、横刃形石器(3~7)、石錘(9~13)、敲打器(14・15)、凹石(16・17)、磨石(18)がでている。

ウ) D35号住居址(30図・86図・146図・155図、写五十四)

遺構 D区上段北よりあって、D11・33号住居址と切りあっており、その関係は充分確認できなかった。上にのりのか、きられているのかは不明である。壁にそって周溝がある。床面は炉のまわりの一部がたく見られた。柱穴は一つ確認できた。炉は石を円形においた浅いものである。

遺物 土器・石器が少量でている。土器(86図11~17)はいずれも破片で加曾利E式土器である。石器(146図)は打石斧(19~22)、敲打器(23・24)、磨石(25)、石錘(26)、石皿(155図8)がある。

エ) D36号住居址(31図・87図・147図・201図、写五十五)

遺構 D区上部北よりある。5.00×4.90mの胴張りの方形の竪穴住居址で主軸方向N35°Wをはかる。南側は水出造成時にけずられている。床面はかたく良好である。周溝は壁にそってめぐり、東側でできている。柱穴は4主柱穴で、埋壘をはさんで2本の支柱穴がある。炉は北西よりあって、方形石囲炉の炉石ははずされている。埋壘は南東壁よりあり、周溝に接してあり、11線と底部を打ちぬかれた土器を、正位にうめている。

遺物 土器・石器があり、その量は多くない。土器(87図)は埋壘(1)以外は破片である。埋壘は上径32cm、底径10.5cm、高さ35cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器(147図)は打石斧(1・2)、横刃形石器(3~8)、敲打器(9)、凹石(10)、磨石(11)がでている。

オ) D37号住居址(31図・88図・147図・155図・202図、写五十六)

遺構 D区上部中央にあって、D4号住居址の北になる。5.85×5.45mの円形の竪穴住居址で主軸方向N28°Wをはかる。壁のほりこみはほぼ直でよい。壁にそって周溝がめぐり、埋壘のあるところはきれている。床面は中央部がかたく良好であった。柱穴は6主柱穴で、埋壘東側に2本の支柱穴がある。炉は北西によってあり、方形石囲炉で炉石はぬかれている。なお柱穴外側に扁平な石があり、そのうち2個は石皿であった。埋壘は2こあって、南東壁よりで、No1は南にあって、貼り床の下34cmのところに割下部が正位にあり、その中に口縁部がこわされてあったが、一部分であって接合できなかった。これはわざとこわして埋めたものである。No2は東よりあって、胴下半を欠く土器を正位にうめていた。

遺物 土器・石器がある。土器(88図)は埋壘(1・2)と床面からでた完形の杯(3)以外は破片である。埋壘No1は上径21.5cm、底径9cm、高さ8.5cmで、埋められた当初は40cm以上あったと思われる。No2は口径28cm、下径27cm、高さ19cmの大きさである。杯は両耳をもつ、口径14cm、底径7cm、高さ8.6cmの大きさの整った形のものである。いずれも加曾利E式土器である。石器(147図)は埋壘No2内部よ

り横刃形石器(12)がでている、他は打石斧(13-18)、横刃形石器(19-23)、磨石斧(24・25)、敲打器(26・27)、石鏃(28・29)、石皿(155図9・10)がでている。

や) D 38号住居址(32図・89図・148図、写五十六・五十七)

遺構 林道拡幅部で発見されたもので、林道とD 41号住居址によってきられ、炉とその周辺を確認したのみである。円形の竪穴住居址で、炉は石を円形においたものである。その炉の中に土器がたおれこんでいた。同様な例はB 24号住居址にも見られた。

遺物 土器・石器があり、土器(89図1-16)は炉内にあった完形壺(1)以外いずれも破片である。1は当地方では出土例の少ない優品である。井戸尻Ⅲ式土器である。石器(148図)は打石斧(1-5)横刃形石器(6-9)、磨石斧(10)、石鏃(11・12)、敲打器(13)、磨石(14)がでている。

ゆ) D 39号住居址(32図・89図・148図)

遺構 林道部で発見されたもので、林道と土取りによって大半がほりとられている。西壁の一部と方形石囲炉を確認した。

遺物 土器・石器がある。土器(89図17-22)はいずれも小破片で加曾利E式土器である。石器(148図)は打石斧(15-17)、横刃形石器(18)、磨石斧(19)、敲打器(20・21)、磨石(22)がある。

よ) D 40号住居址(32図・90図・149図)

遺構 林道部において、林道によってほとんどきりとられて、北側の一部を残すにすぎない。

遺物 土器・石器がでており、土器(90図14-17)はいずれも破片で、井戸尻Ⅲ式土器である。石器(149図)は打石斧(1-3)、横刃形石器(4-7)、敲打器(8-10)がでている。

ら) D 41号住居址(32図)

遺構 林道部において、D 38号住居址の北側をきって、ほとんどが用地外の山林にのびている。

遺物 ほとんど出ていない。加曾利E式土器の住居址である。

り) D 42号住居址(32図・90図・149図、写五十六)

遺構 林道部最上部において、D 34号住居址をきっている。林道によって南側をきりとられている。東西4.30mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N 5°Wをはかる。北西壁にそって周溝がある。床面はかたくてよい。柱穴は4主柱穴である。炉は北よりにおいて、方形石囲炉で南側炉石がぬかれている。

遺物 土器・石器がでている。土器(90図1-12)は、器形のおかたの1をのぞいて破片である。1-3は加曾利E式土器で、4-12は井戸尻Ⅲ式土器である。D 43号住居址の土器がおちこんだものであろう。石器(149図)は打石斧(11-16)、横刃形石器(17-20)、磨石斧(21-23)、粗型石ヒ(24)、スクレイパー(25)、敲打器(26・27)がでている。

る) D43号住居址 (32図)

遺構 林道部最上部にあって、D42号住居址に西側をきられ、東側は用地外にのびている。床面を確認したのみである。遺物はほとんどないが、D42号住居址におちこんでいる土器から見て、井戸尻Ⅲ式土器のころのものと思う。

れ) D44号住居址 (32図・90図・150図・202図、写五十六・五十七)

遺構 林道部にあって、大半が用地外にのびていて、用地内にある南側一部を確認したのみである。主柱穴に接して、伏壺としては最大級の土器がうめられていた。

遺物 土器・石器がでていいる。土器(89図23~26・90図13)は伏壺(90図13)をのぞいては破片である。伏壺は口径38.5cm、底径11cm、高さ52cmの大きなもので、底部中央に径3cmの穿孔がある。伏壺としては最大の大きさをもつ。いずれも加曾利E式土器である。石器(150図)は打石斧(1・2)、横刃形石器(3)、磨石(4)、敲打器がでていいる。

ろ) D45号住居址 (33図・91図・150図・193図)

遺構 林道部にあって、北東側を林道でほりとられ、南側は用地外にのびていて、住居址の一部しか調査できなかった、床面の状態は悪い。

遺物 土器・石器がある。土器(91図1~8)はいずれも破片で、井戸尻Ⅲ式土器である。石器(150図)は打石斧(5~9)、横刃形石器(10・11)、石鏟(12~16)がでていいる。

わ) D46号住居址 (33図・91図・150図・187図、写五十六)

遺構 林道部にあって、北半分を林道によってきられている。南側の部分を確認した。壁にそって周溝がめぐる、床面は西側はよいが、東側はよくない。柱穴と炉と思われるほりこみがある。

遺物 土器・石器がある。土器(91図9~16)はいずれも破片で加曾利E式土器である。石器(150図)は打石斧(17)、横刃形石器(18~20)、磨石斧(21)があり、土製品として土偶(187図3)もでていいる。

を) D47号住居址 (33図・91図・151図・189図・202図、写五十六)

遺構 林道部にあって、北側大半を林道できりとられて、南側の一部が残っている、方形の整穴住居址で、周溝、南側の2主柱穴、そして埋壺がある。埋壺は東壁よりあって、完形の土器を正位にうめていいる。

遺物 土器・石器・土製品がある。土器(91図17~28)は埋壺(17)が完形である。埋壺は口径35.6cm、底径9cm、高さ44.5cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器(151図)は打石斧(1~4)、横刃形石器(5~9)、磨石斧(10)、敲打器(11・12)、磨石がでていいる。土製品としては小形土器(189~15)がでていいる。

ん) D48号住居址 (33図・92図・151図・202図、写五十八)

遺構 D区最上段にあって、山林と水田であった中央道との間にある原野で、赤土取り場となっている。

その部分に住居址床面を確認するが、ほとんど残っていない。それがD 6号住居址だろうか。地主さんの好意により、土取り前にその部分を調査させてもらい住居址を検出する。4.70×5.10mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N 34°Wをはかる。壁のほりこみはよい。壁にそって溝溝がめぐり、南側で切れている。床面はかたたくて良好。柱穴は4 主柱穴である。炉は北西よりあって、方形石圍炉で炉石は北東側のを残して他ははずされてない。南壁より伏壁がある。口縁を欠き、胴下部にも打抜き孔をもつ土器で、底部に穿孔をして、底部を上にしてうめてあった。

遺物 土器・石器がでている。土器(92図1~7)は伏壁をのぞいては破片である。伏壁(1)は上径11.5cm、底径6.5cm、高さ16.5cmの大きさである。加曾利E式土器である。石器(151区)は打石斧(13~16)、横刃形石器(17~21)、磨石斧(22)、敲打器(23・24)、石ヒ(25)、砥石(26)、スクレイパーがでている。

イ 土壌

土壌はB区で82、D区で109の計191こ検出している。すべて縄文時代中期のものである。との分布は34図に見るように、用地内下部中央に集中し、B区とD区とが一群になっているものである。D区ではD 19~23号住居址が土壌と重複しているが、住居址とはある程度意識して土壌をつくっていたように思われる。ほとんどが円形で、深いのがB区のは浅い。土壌内からは土器片や石器の出土は多かったが、明らかにうめこんだものは少ない。B F 53・54・77は土器・石器を意識してうめている。D区ではD 2・55・89 90に土器をうめていた。土壌断面は35~36区、出土遺物は92・93・152・153・156・191・193区にのせてある。個々については土壌一覧表にまとめている。

ウ その他の遺物

遺構外からも、多くの土器・石器・土製品がでている。

土器(93図)は大半が縄文時代中期の加曾利E式土器で、それについて井戸尻Ⅲ式土器があった。これについては、住居址からのもの同じであるので省略する。縄文時代早期土器としては、山形文をつけた押型文土器(1)が1片ある。小破片である。縦に施文されている。厚さは薄い。D区で出て、多くの発見を期待したがだめであった。押型文土器としては新しい含センイ粗大楕円文(2)が1片ある。部厚く、粒の大きな楕円文がついている。これと胎土、焼成全く同じのセンイ土器尖底部(3)がともに出ている。砲弾状の尖底で、粗い捺承文がつけられている。いずれも林道最上部からでている。4~6は同一個体で後期初頭のものであり、称名寺式土器の頃と思われる。7・8は同一個体で、加曾利E式土器終末期か、後期初頭のものである。9~13は縄文時代後期型之内式土器の精製土器と粗製土器である。14は弥生時代後期中式土器の裏の小破片である。灰胎陶器碗の破片も1片でている。

石器、これもその出土量は多い。158区は縄文時代草創期と思われる小形石器を集めた。有舌尖頭器

(1) は、先端部を欠くもので、細身の舌部の長いものである。エンド・スクレイパー (2~9・39) は小形のもので円形を呈している。スクレイパー (10~29・35~38) は割片を利用し、サイド・スクレイパーであり、35はノッチのようである。曾根型コア (30~32)、尖頭状石器 (33・34) がある。隣接する増野川子石遺跡との関連が考えられる。そのほかは縄文時代のものであるが、159図1・2は石鏃、同10は打石庵丁、160図1は石楯、同22は打石庵丁で弥生時代のものである。他は打石斧 (159図3~8)、横刃形石器 (9)、磨石斧 (10~15・17・18)、凹石 (16)、石鏃 (19~22)、特殊磨石 (160図2~8)、瓶型石ヒ (9~21)、石鏃 (23~45)、石鏃 (46~48)、石胆 (156図6・7) がでていいる。特殊磨石はいわゆる特殊磨石 (断面三角形) が1つで、他は扁平楕円形の硬砂岩の側縁を利用している。これらは縄文時代早期の中での時間差か、地域差なのかと思わせる。増野川子石遺跡では一つも出ない。

土製品・石製品では、土偶 (179図1・181図3・4、187図4・5)、滑車形耳飾 (188図7・8) 滑石製管矢 (190図10)、円板 (191図1・2、30~34、192図1~3、193図18~28) がでていいる。

特殊なものとして、D区D16号住居社南外側でアボのようにおかれてあった黒曜石の大きなものが4個あった (161・162図)。良質の黒曜石塊 (10cm大) を不規則に各方向から4個以上に打ち割ったもので、打面を比較的大きな割離により作出し、1を割き取り、その打撃方向と直角方向からの打撃によって5を分割している。さらに1と加撃方向をかえて2・3を分割している。先土器時代のような一定規則の割離技法ではなく、その点、縄文時代の割離技法を示す好資料であるといえる。

3) まとめ

本遺跡は旧石器終末期の有舌尖頭器の頃から生活の痕跡が認められるが、調査された遺構はすべて縄文時代中期のものである。住居社78軒 (内2軒は空系)、土壌191の遺構からは多くの遺物を出土している。

これらの遺構・遺物をふまえての、当地方に於ける縄文時代中期文化の解明は今後に残された大きな課題である。

個々の住居社のあり方を理解する前提として、土器型式の把握—加賀利E期の細分—がまずなされなくてはならない。住居社の切り合いから見れば4~5期の時間差を示している。個々の住居社においても、プラン、大きさ、炉の残存状態、埋没と伏襲の問題、廃絶後の施設、遺物のあり方等等から、全体の中における個、そして個から全体へと見ていくことが必要であり、そうして、集落としてのあり方を追求せねばならない。

時間不足と、力不足を痛感した。

(遠那・金井)

5 曾野川子石遺跡

1) 位置

遺跡は下伊那郡高森町山吹7745～7752番地にある(3図4、写六十七)。大きく見ると、高森町と松川町との境を流れる大沢川の扇状地にあるが、大沢川の南に流れる寺沢川がその扇状地をけずっている。そのため、寺沢川の南は10m近い崖となって、新切遺跡と続く。北側は一段と低くなって、ロームの堆積も見られなく、礫層で旧河床でもある。寺沢川と大沢川の間約200mで、寺沢川に沿ってわずかに高くなった部分が見られる。増野川子遺跡では、そこに黒土の地積があり、遺物の散布が多い。この台地状の基部に渡瀬遺跡がある。標高640mから655mの間で、巾50m程の小さな広がりである。

中央道はこの台地先端を南北に横切っている。グリットはセンター231+00杭をAAとし、ERまで、36から63にまで設定した。

2) 遺構と遺物

調査の結果、縄文時代草創期の資料を集散的に出土するA地点と、縄文時代中期加曾利E式土器の住居址4軒、江戸時代の墓塚1を検出した(40区)。1・2号住居址は台地北縁に、3・4号住居址は台地南縁先端部近くにあつて、寺沢川をおいて増野新切遺跡D10号住居址と相対しており、その間25mはない。A地点は台地先端部の南面するゆるい傾斜地にある。

ア A地点

ア) 出土土器(38区、写六十七・六十八)

A地点は、遺跡の中では南端部にあり、用地内にては、南端部の東はずれとなる。県道飯田・飯島線の西側25m、寺沢川からは北へ20m、比高2mである。この部分の地層は耕土層の下に黒褐色土層、礫を多くまじえた黄褐色砂土層があつて礫層になっている。遺物は黒褐色土層中に最も多く、黄褐色砂土上表面、(いく分黒味の強い)にまで入りこんでいる。これらの遺物はグリットでAA55からAII55の南北16m、AA55からAA63の18mの範囲に見られ、40m北西にある2号住居址からも断片的にある。全面調査した範囲内においても、全てのグリットから出土はしていない(38区)。38区は大半の遺物についてその出土地点をおおむね土器・石器を種別にて表示してある。特に集中する部分はAF61を中心とする部分である。押型文土器は20片というわずかな量であるが、それはAC59、AD59の2グリットにほとんどがでており、層位的にも黒褐色土で、黄褐色砂土には入っていない。その点両者の時間差を示すものと思われる。もう

一つ興味を引くのは、これらの土器片・石器はローリングをうけていないので、決して遠くから流れてきたものではなく、この場所ですてられたものである。それを実証するものとして、これらの遺物が出土している部分には、礫の露頭がほとんどなく、意識的に礫を抜いたように思われる。この部分に床面のようなかたい部分とか、火を用いた焼土はなかったが、これだけの遺物、特に石器の多いことから生活遺構であったことを思わせる。

4) 土器 (94-101図、写六十九~七十二)

A地点より出土した土器はいずれも破片である。大きい破片は10×20cm大で、小さいのは1cm大のものである。これらの大小破片は700片で、文様で見ると、表裏縄文が594片、表のみの縄文が84片、押型文20片、爪形文1片、押捺縄文(?)1片となっていて、85%が表裏縄文の土器であり、斜縄文として見ると97%になり、一応斜縄文をもつ土器の単純遺跡といえよう。

第I類土器(94図1、写七十二の198)爪形文土器、1片出土している。0.6mmの厚さで、黄褐色で焼成の悪く、もろい感じの土器である。長さ5mmの細くて弱々しい感じの爪形文がやや斜めに間をあいて縦に並列している。いわゆる爪形文とは大きさ、施文状態が異なっている。

第II類土器(100図14、写72の199)押捺縄文(?)と思われる文様をもつ土器で1片のみである。

第III類土器の口縁に横に押捺縄文をつけたのがある。これは、やはり口縁部の破片であるが、器面につけている。口縁は外側に断面三角形形状に突出している。押捺縄文についてはすでに知られている実物を見ないで、あるいは刺突文であるかも知れない。これについてはもう少し検討したい。

第III類土器 斜縄文をつける土器の一群で、本遺跡の主体をなすものである。縄文を表面につけるものと、表・裏両面につけるものとに細分できる。充分な観察分類ではない。

Ⅲ類a(94図2~37)土器表面に斜縄文をつけるもので、縄文の粒、縄文の原体(RLとLR)、土器の厚さに変化が見られる。土器の大きさは不明であるが、口縁は2~4が外反が強い。5は口縁端に近く急に外反している。6は口縁端がわずかに突出している。2・3は口唇に施文し、2は縄文を、3は山形文の押型文をつけている。縄文は器面全面に施文している。施文方法は不明であるが、口縁近くでは横方向に、胴部では縦方向に回転施文している。

Ⅲ類b(95~101図)土器の表面と裏面に縄文をつけたもので、表裏縄文土器といわれるものである。器形(口縁のわかるものも含めて)のわかるものもあって、95図1は完形になるかと接合したがならなかった。口径21.8cm、胴径20.3cmと、底部は欠くが、胴上面で考えると10cmの高さと、浅いずんぐりした鉢形土器であり、底部は尖底である。尖底部から開いてきた胴部が直になり、口縁でぐっと外におれ、厚さも口縁に鋭くなるように薄くなっている。縄文の粒は大きく、焼成もよいためか、粒の状態もよい。表は全面に施文され、裏面のはわずかに間をおいている。その部分に整形時に、輪縁の接合部をおさえてつけたときの指頭圧痕が残っており、これはこの土器以外にもよく見られる。2は口径16.5cm、胴径14.2cmで、直にあがってきき胴部が、口縁近くでおれるように外反している。3は口径19.3cm、胴径18.3cmで口縁は急に薄くなって外反している。いずれも余り大きい土器とはいえない。96図と97図1~8は口縁部がある。口縁近くでおれるように外反するものが多い。96図1、15は口縁すぐ下に横に一条の押捺縄文をめぐらしている。2・3は部分的に口縁に粘土をはりつけて肥厚くさせている。97図のそれは口唇に縄文を

つけるものである。縄文の原体はLR (96-98図)とRI (99図)があり、前者が多い。縄文の粒は比較的大粒であるが、97図7-11はとても小さい。99図1・4はI線に沿って押捺縄文を柔めぐらしている。回転方向の違いなのか、原体をかえてなのか、細かな観察をしていないが、表面に縦の羽状になるように施文しているものがある。裏面は横方向に回転施文している。(100図)。この手の土器は他の土器にくらべると薄手で、焼成もよい。土器尖底部は8片でている。1は比較的大きく、底部近くで、平らになってきて、乳房状に突出する尖底となっている。縄文は表裏両面とも底部にまでつけられている。他はいずれも小破片で、砲弾状の尖底部で、乳房状のものはない。

第四類土器 (100図15-26) 押型文土器の一群である。20片でいて、斜縄文土器のように下部にまで及んでいない。全て山形文である。15は口縁部で、他は胴部破片で、口縁附近は口縁に沿って、一帯をめぐらし、間をおいてまた横にめぐらしている。胴部では縦に施文している。わずかな破片であるので、全てがそうであるとはいえないが、やはり間をおいている。帯状施文であるといえる。この点、立野式土器より、横沢式土器に近い。厚さは5-8mmと厚い。

ウ) 石器 (163-176図、写七十三-七十七)

A地点からは土器とともに石器、剥片の出土が多かった。尖頭器、有舌尖頭器、石鏃、ナイフ、エンド・スクレイパー、スクレイパー、管根形コア、礫器、磨石斧、砥石、横刃形石器、アンビルストーン、ハンマーストーン、不定形石器、使用痕を残す剥片とに区別できる。大半が斜縄文土器に伴出するものであるが、押型文土器に伴出するものもあると思う。発掘時においてはその区別はできなかった。

尖頭器 (163図1・3) 2点ある。1は頁岩(?)製の尖頭器で、先端部は欠けている。剥片の周辺を調整している。5.8×2.7cmの大ききで、長さはもっと長くなる。基部は平坦である。両面とも側縁に調整しており、右側縁の調整は大きくスクレイパー状の側縁をなす。3は黒曜石製のbifaceの尖頭器である。4.9×1.8cmの小形の木葉状をしている。

有舌尖頭器 (163図2) チャート製の亮形品である。入念な押圧剥離によって仕上げられて側縁はジグザク状の鋸歯状を呈する。舌部は小さく丸味をもつ。長さとしによる比率は4:1である。芹沢長介の有舌尖頭器の分類によるとⅢ型に入る。

石鏃 (163図4-25・164図1-22) 41点出土している。形態・製法により5タイプに縦分できる。長脚鏃 (164図20)を除き、他は全て黒曜石製である。A剥片鏃 (163図4-13)、10こある。側縁のみを調整し、三角形となる。板状で平らである。B (163図14-25) 正三角形に調整され、底辺をわずかに湾曲をもたせ中央にリタッチを加えてチョコットへこませている。立野式土器に見られる石鏃のタイプである。C (164図1-9) 正三角形を基本とし、底辺にわずかな湾曲をもたせている。チョコットしたくばみがない点Bと異なる。D (164図10-15) 二等辺三角形で、底部に鈍角に開く浅いえぐりをもち、えぐり頂部にBと同様なリタッチが見られる。Eその他 20は長脚鏃、21は鏃形鏃、22は五角形鏃である。いずれも大形であり、22はこの時期のものではない。

ナイフ (164図23・24) 剥片のエッジを刃として、両側に刃つぶしをしている。小形のものである。

エンド・スクレイパー (164図25-29・165図・166図) 33点あって多い。厚手の剥片にflutingを

施し、部厚なスクレイパー・エッジを作出している。大きさ、形状、刃部形状、刃角などに数種類のものがある。A（161図25～29、162図1・2・13・14）、円形に近く、全周またはほぼ全周に fluting を行ないラウンド・スクレイパーともいえる。B（165図4・7～10、166図1～10）、不定形な剥片の一部に fluting を行なって、スクレイパー・エッジを作出している。石質はすべて黒曜石製である。

スクレイパー（167図・168図・170図17～20・22） スクレイパーは縦割ぎのと横割ぎの剥片を利用しているものと2通りある。形態的に、刃部のつけ方などから、いくつかに分類できる。

使用痕のある剥片（169図・170図1～16・21）、剥片の一部にリタッチが見られる剥片である。

曾根型コア（171図・172図2～4） 16点でている。黒曜石製で、柱状のもの（171図1～3、172図2～4）、板状のもの（171図4～9、172図1）、円形板状のもの（171図10～12）に区別できる。

礫器（172図5） 3.5×7.3×2.0 cmの大きさで、左側縁部に粗い刻線を加えて部厚な刃部を作出している。背には磨痕が見られる。緑泥岩系の石で、松川町里見V遺跡の旧石器の石と似ている。

磨製石斧（172図6） 靴ペラ形の小形扁平な磨石斧である。刃部は大きなS字状に湾曲している。押型土器に見られる石器である。

礫石（173図） 5点でている。板状の砂岩で、いずれも破損品である。全て平らでなく、部分的にへっているものもある（2・5）。

不定形石器（174図） 1～3は硬砂岩製の小形の横刃形石器である。4・5は板状のもので、打石斧ともいえる。4は平らな面に磨痕をもつ。

アンビル・ストーン ハンマー・ストーン（175・176図） これらの石器は石器製作に使用されたもの、骨などを割ったりするに使用されたものと思われる。はっきりハンマー・ストーンであるのは176図4で、洋梨形の部厚い石の先端と側縁を使用している。他はアンビルとハンマーと両方に使用しており、これらの石は直径10cm前後、厚さ3cm位の扁平円形の硬砂岩の川原石を利用している。側縁に敲打したための打痕が、平らな面に受台としてのダメージが残っている。中にはそのために分割したのもある。

イ 住居址

ア) 1号住居址 (39圖・102圖・107圖・194圖、写七十八)

遺構 寺沢川にそってある小さな台地の北縁先端近くにある。黄砂礫土をほりこんでいる。直径6.50mの円形の竪穴住居址で軸方向N43°Wをはかる。北東側の壁ははっきりしない。周溝はない。床面は炉のまわりがかたいが、他は軟弱であり、基盤の礫が露出し平らかでない。柱穴は6主柱穴で、南東壁よりに埋壘と同じ性格のピットがある。炉は北西により、方形石囲炉であるが、ちょうどそこに江戸時代の墓塚がはりこまれてこわされている。

遺物 七器・石器・土製品がでている。土器（102図1～21）は比較的多く、器形のおかるもの（1～3）もでている。深鉢と台付土器がある。加曾利E式土器である。石器（179図）は打石斧（1～7）、横刃形石器（8～12）、磨石斧（13）、凹石（14）、敲打器（15・16）、石鏃（17）、粗型石ヒがある。土製品は平板（194図1）がでている。

イ) 2号住居址 (40図・103図・177図・178図・190図、写七十九)

遺構 台地北縁にあって、1号住居址の北西にある。直径6.50mの円形の整穴住居址で、主軸方向N48°Wをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、壁にそって周溝がめぐっている。床面はかたく良好である。壁・床面に礫が露出している。柱穴は4主柱穴である。炉は北西によってあり、方形石囲炉の炉石は全てはずされている。

遺物 土器・石器・土製品があり、土器(103図)は1～3のように器形わかるものものがあるが、破片が多い。吊手土器もある。加曾利E式土器である。石器は打石斧(177図18～20)、横刃形石器(21～27)、磨石斧(28・29)、凹石(178図1・2)、敲打器(3・4)、スクレイパー(5)、磨石がでていいる。土製品としては小形土器(190図11)がある。

ウ) 3号住居址 (46図・104図・105図・108図、写七十九・八十)

遺構 台地南縁にあって、寺沢川に近い。5.30×5.20mの円形の整穴住居址で、壁は傾斜してほられ、周溝はない。南壁側には大きな礫が露出しており、北壁は基盤礫層がほりこまれている。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴で、南東壁よりに埋嚢と同性格のピットがある。炉は北西によってあり、方形石囲炉で炉石はすべて残っている。この住居址内には廃絶後に礫を意図的に集めたか、なげこんでいた(写八十)。そのためまさかここに住居址があるとは考えられなかった。

遺物 土器・石器がある。土器(104・105図)は比較的多く、器形わかるもの(1～5)があり、破片も多い。いずれも加曾利E式土器であるが、古いのと新しいのがあり、後者はあとの混在と思われる。石器(178図)は打石斧(6～8)、粗型石ヒ(9)、横刃形石器(10～14)、砥石(15)、磨石斧、敲打器がある。

エ) 4号住居址 (40図・102図・178図、写八十)

遺構 台地南縁先端部にあって、3号住居址の南にある。黒褐色土層中に方形石囲炉があって住居址であることを確認した。床面・柱穴を確認できなかった。A地点にのっていたので、ほりきげているとき、礫の間に直立する胴下半の土器を検出した。炉東南にあるので、この住居址の埋嚢ともおもわれるがはっきりしない。

遺物 土器・石器が少量ある。土器(102図22～25)は加曾利F式土器であり、埋嚢と思われる胴下部(22)は上径21cm、底径9.5cm、高さ17cmの大ききである。なおこの附近から少量であるが後期加曾利B式土器もでていた。石器(178図)は横刃形石器(16・17)、石鏃(18・19)がある。

ウ 墓塚

江戸時代の墓塚が1号住居址の炉のとこをほりこんであった(40図)。南北に長い65×100cmの長方形の墓塚で、副葬品として煙管と寛永通宝があり、木質のついた釘もでていいるの長方形の棺桶もあったと思う。

エ その他の遺物

土器・石器・土製品がある。土器（105図）は深鉢・台付土器・器台・有孔つばつき土器（27）がでており、土器型式では、井戸尻Ⅲ式（8～12）、加曾利E式土器（13～22）、堀之内式土器（23～26）があり、弥生時代後期土器、新しい須恵器もある。石器（178図）は各種ある。打石斧、槌型石ヒ、石ヒ（22）、凹石、石鏃、石鏃（23～30）、横刃形石器、敲打器、砥石、スクレイパー（31～34）、特殊磨石（20）がある。土製品は円板が18個（193図29～34・194図2～14）と多い。石製品として、人形のように打削し、側縁を磨いたもの（178図21）がある。

3) まとめ

調査の結果、A地点からは予期しなかった縄文時代草創期の資料を多量に得た。そして、縄文時代中期の住居址を4軒検出した。1・2号住居址は加曾利E式土器の中でも終末期のものである。守沢川をはきんで南接する増野新切遺跡との同時期の住居址との関連で理解する必要がある。中でもD10号住居址とは密接な関係がありそうである。3号住居址は1・2号住居址より一時期古い。同時期の住居址は用地内になかった。同様なことは、井戸尻Ⅲ式土器、後期前半の土器に伴う住居址も用地外の山よりの場所にあると思われる。4号住居址は、1・2号住居址と同時期と思うが、竪穴住居址としてとらえられるか、単なる炉だけのものか。いずれにせよ、礎をほりぬいての竪穴住居造成は大変だったと思う。

A地点の土器・石器群は、斜縄文土器（特に表裏縄文土器を中心）文化の典型的な資料を与えた。石器の多様性と石器製作にも使われたハンマー・ストーンとアンビル・ストーンと、多くの剥片の存在は、ここで生活し、石器製作をしていたことを示し、これらの石器・土器が石をぬかれた部分に集中出土することを合わせて考えれば、決して流れてきたものでなく、この場での生活を考えなければいけない。これだけの資料は県下でも他になく、全日本的に見ても、回転縄文文化の中で理解されるもので、広い視野に立って、把握される。「川子石式土器」という型式設定も可能であるが、そのためには、この遺跡の資料を十分に観察検討する必要がある。

（酒 井）

あ と が き

高森町地内その2の発掘調査は、日射しの強い7月24日から開始され、梨・りんごをおやつに食べた秋そして雪の舞う11月に入って終った。46年度の市田地区につづいての調査であったため、教育委員会も、調査作業員の大半の方々が顔なじみであり、なれていたもので、調査の進行に非常に心強かった。光明寺前にわずかばかりいて、後の3月間は亀甲住の堤の前ですごした。非常にめぐまれた作業本部であったためか、調査の成果は中央道発掘調査初まって以来のものであり、学問的に大きな貢献を残した。その内容についてはこの報告書を見てもらえればわかることです。これも、関係機関、関係者のご協力、ご支援のおかげと、調査団全員の努力の結果であり、団長として厚く感謝したい。

山吹地区4遺跡については、増野新切遺跡の成果は当初から予期していたが、これ程とは思わなかった。神田高遺跡では縄文時代早期の押型文土器とその遺構を検出したが、その資料は少なかった。46年度に調査した赤羽根遺跡と同時期である。新田西高遺跡は縄文時代の遺構を検出することができなかった。中央道が遺跡の端を通過していたためと思う。

増野新切遺跡では、土偶の出土が多い中期の遺跡として理解していたが、調査した結果、やはりその通りであった。井戸尻Ⅲ式土器の土器セット群、中でも吊手土器は優品である。この時期の住居址と加曾利E式土器の住居址との違い。そこに文化の飛躍が感じられる。この勝坂期と加曾利E期の内容差について研究する資料を本遺跡は提示している。66軒に及ぶ住居址とそこから出土した多量の遺物は、加曾利E期の細分を検討するに充分である。若い調査員の積極的な取り組みを期待したい。

増野川下石遺跡での表裏縄文土器とその石器群は、最近全国的に追求されている縄文文化の起源に関わる貴重な資料となった。県下でのこの時期の調査研究は充分でなく、この資料を期に研究の進むのを期待したい。

飯田地方での中央道調査は、一先ず本年の調査で終了することとなった。2年半にわたる調査で得られた成果は計ることができない。この貴重な資料は、調査報告書としてまとめられたが、文化財の保存・活用という面では、同一つしていない。下伊那教育会館土蔵に収蔵されている資料は、このままでは死蔵であり、地域社会へ、学問への活用は全くできない。その点で保存と活用については、調査関係者として、また地域住民としての声をおおいにあげるとともに、活動を進めていきたい。(大 沢)

第4表 高森町地内その2 住居址一覽表 (No 1)

遺跡名		地 区																		
遺 構		1住居址	2住居址	3住居址	4住居址	5住居址	6住居址	7住居址	8住居址	9住居址	10住居址	11住居址	12住居址	13住居址	14住居址	15住居址	16住居址	17住居址	18住居址	19住居址
時 期		縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期
遺	プラン	5.5×7 4円	4.5×7 円	5.7×5.25 隅方丸形	5.25×4.45 隅方丸形	5.2×4.35 隅方丸形	4.35×4.2 整形	5.0×5.35 隅方丸形	5.0×5.7 隅方丸形	5.8×5.8 円	4.55×4.6 隅方丸形	4.85×4.65 隅方丸形	5.45×? 不円	4.1×3.5 隅方丸形	4.7×4.7 円	?	4.6×4.6 隅方丸形	4.3×4.8 隅方丸形	4.4×? 隅方丸形	5.5×? 隅方丸形
	柱 穴	7	5	4	7	4	1	7	4	8	7	9	4	4	15以上	?	6	6		2
	炉	1口 円形石函炉	円形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉	長方形石函炉
構	主 軸			N55W	N45W	N57W	N61W	N55W	N60W	N55W	N16W	N40W	N69W	N35W		?	N46W	N50W	N61W	N35W
	備 考			開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり	開溝・埋埋あり
	土 柱					1	1		5	1										
遺 跡	土 柱	1	2	3	2					1	9	2	6	1	1	1	1	4		
	土 板																			
	土 板																			
	石 礎	11	7	38	24	32	26	16	54	57	28	139	36	51	19	1	97	44	11	
	石 礎	2	2	5			2	1	2	4	2	10	3	4	1		3	5	2	1
	石 礎			1			1			2			1				2			
	石 礎	1	4	2	1	2	1	2	1	1	1	3	1	2	1					
	石 礎	1		5	3	5	2	1	9	2	1	6	5	3			8	1		
	石 礎	1		2			1	2	2	1		1	1				1			
	石 礎						3					1	1							
物 跡	土 板				2		1		1	1	2	1	1	1			2			
	土 板	1	1	3	10	7	5	7	2	4	2	18	8	9	6	1	30	8		2
	土 板	3	9	26	19	19	9	9	19	12	20	33	10	20	10	3	56	14	3	
	土 板																			
その他																				

住居址一覽表 (No 5)

遺跡名		増野川子石				
遺構	47住居址 48住居址	1住居址	2住居址	3住居址	4住居址	
時期	縄中 文期	縄中 文期	縄中 文期	縄中 文期	縄中 文期	
プラン	?	4.7 × 5.1 円形	6.5 × 6.5 円形	4.7 × 4.6 円形	5.3 × 5.2 円形	不 明
柱穴	4	4	6	4	4	
が		方形石周が	石(石周が) 石(石周が)	長方形石周が 円形石周が	方形石周が	
主軸		N34W	N43E	N46W	N57W	
備考	周縁に上り一部遺構あり	遺溝・伏壁あり		炭溝あり		
土	1	1	3	2	6	1
土質	黄砂土	赤土	赤土	赤土	赤土	赤土
土製品			内瓶			
石	打石岸 21 磨石岸 3	24	23	8	12	2
石		1		1		
石			1			2
石		1	1		1	
石				1	2	
石			1	2		
石	4	4	2	3	2	
石	4	10	4	18	10	2
その他	磨石1 磨石1	ト石1		磨石1	ト石2	
鉄製品						
備考	200E	200E	200E	200E	200E	200E

第5表 土 城 一 覧 表 増野新切遺跡B区

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部、内部など)	加 工 遺 物			
	平面	断面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	銅 器	その他
1	楕円形		180		40	ほぼ縦傾斜、茶褐色		リノ号		加・E
2	楕円形		80		30	ほぼ垂直ローム				*
3	不整形円		70		20	縦傾斜、茶褐色				*
4	円形		100		50	垂直ローム				*
5	円形		70		100	(B・3住を切る) 垂直ローム 盛				*
6	不整形円		90		40	垂直ローム 盛				*
7	不整形円		90		130	軟弱・垂直 盛				*
8	不整形円		100		20	ほぼ垂直ローム良好 盛				*
9	不整形円		150		30	縦傾斜、茶褐色 盛		内部に 自然石		*
10	楕円形		70		30	縦傾斜、茶褐色 盛ローム				*
11	卵型		70		50	縦傾斜ローム 盛ローム				*
12	不整形円		60		30	縦傾斜ローム良好				*
13	不整形		60		50	縦傾斜ローム盛ローム良好				*
14	不整形円		70		70	垂直ローム良好 盛ローム				*
15	不整形		100		40	やや傾斜、ローム 盛軟弱				*
16	卵型		140		45	7対住を切る、やや垂直、盛ローム軟弱				*
17	不整形円		100		60	ほぼ垂直ローム軟弱 盛				*
18	楕円形	フラスコ	120		90	垂直ローム、後の土壌に比し良好				*
19	不整形円		2070		40	ほぼ垂直、ローム軟弱 盛				*
20	不整形円		100		40	縦傾斜ローム軟弱 盛ローム				*
21	卵型		80		30	縦傾斜ローム軟弱 盛ローム				*
22	不整形型		120		130	6・30号住北東壁に切り込む壁・床とも良好				*
23	不整形型		90		30	茶褐色土、盛ローム軟弱				*
24	楕円形		110		30	縦傾斜、茶褐色土、軟弱、盛浅い				*
25	卵型		130		40	縦傾斜、部耕作によって擾乱				*
26	不整形円		3080		50	縦傾斜、ローム軟弱				*
27	不整形		90		40	縦傾斜、ローム軟弱		打割 リノ号		*
28	不整形円		170		20	縦傾斜、茶褐色土、盛ローム		上部に 自然石		*
29	不整形円	フラスコ	70		60	D30と切り合い茶褐色軟弱、ローム		土製円板1		*
30	不整形円		100		30	D31・29と切り合う、ローム		打割 リノ号		*
31	不整形円		100		30	D30・32と切り合う、ローム				*

土 壌 一 覧 表 増 野 新 切 遺 跡 B 区

番 号	プラン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	組 工 造 物			
	平面	断面	東西cm	南北cm	深さcm		土	器	石	管
32	不整形		80		30	D・31と切り合う				
33	・		90		80	緩傾斜、ローム、比較的深い、床・ローム良好				
34	卵型		80		20	緩傾斜				
35	不整形		120		80	底部に石あり(床面より若干深く)、ほぼ垂直ローム、上部には黒褐色土内部の壁はロームまじりの褐色土				
36	・		100		30	底部に石あり、緩傾斜底ローム				
37	・		80		20	底部に石あり、緩傾斜				
38	円形		70		20	底部に石あり、緩傾斜				
39	・		60		45	壁茶褐色やや垂直、床面、平ら			打撃 3 横力 2	
40	楕円		90		65	ほぼ垂直床面(ほぼ水平)ともにローム良好				
41	不整形		130		40	床面平ら、ともにローム良好、緩傾斜				
42	楕円		100		160	垂直ローム床面ローム平ら				
43	卵型		120		40	垂直ローム・床面平らローム				
44	不整形		130		20	壁茶褐色、緩傾斜、東側緩傾斜、底ローム				
45	・	割張り	100		50	壁ローム・床面ローム良好、ほぼ垂直				
46	不整形		100		50	緩傾斜、茶褐色床面・平、ローム				
47	・		70		30	底部に石あり(扁平)緩傾斜、茶褐色土床面茶褐色土				
48	・		110		30	底部に石あり(扁平)緩傾斜、茶褐色土、床面茶褐色土	付付破 1			
49	円形		100		30	垂直ローム・床面平、ローム				
50	不整形		80		50	垂直ローム・床面平ら、ローム				
51	円形		70		80	東側川地外、壁・茶褐色・高軟弱				
52	不整形	割張り	80		50	壁・床ともローム良好、垂直				
53	不整形	割張り	80		70	垂直壁・床ともローム良好、F54と切り合う	打撃 1 横力 1	管 1 石 1		
54	不整形		90		30	壁・床ともローム、緩傾斜、F53と切り合う	1コ体分			
55	・		90		70	内部に石あり床より若干深く 壁・床ローム良好、壁は垂直				
56	・	やや割張り	60		50	底部に石あり7ヶ、右側床面垂直、緩傾斜			石 皿 1	
57	不整形		130		70	F58と切り合う、緩傾斜、壁・床ローム、良好				
58	不整形		50		70	F57と切り合う、緩傾斜、壁・床ローム、良好				
59	円形		80		50	ほぼ垂直、壁・床ローム、良好				
60	不整形		80		50	緩傾斜、壁・床ローム			打撃 1 石 皿 1 横力 1 縦力 1	
61	卵型		70		70	ほぼ垂直、ローム、床、良好				
62	不整形		90		40	ほぼ垂直、茶褐色土床ローム、上部に二コ の自然石を置く				

上 城 一 覧 表 増 野 新 切 違 跡 日 区

番 号	プ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部、内部など)	加 工 造 物				
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深きcm		土	器	石	器	その他
63	柳 形		140		40	縦横斜、壁・灰面とも良好					
64	不整方形		90		70	内部に石あり(4ヶ)扉面より浮く(ローム比較的良好)	壁、ほぼ直				
65	不整円形	フラスコ	100		80	壁面軟弱、底ローム良好			石 皿 1		
66	*		80		80	茶褐色、ほぼ垂直、床ローム					
67	不整円形		140		70	茶褐色、横傾斜、床ローム					
68	不整円形		80		40	縦横斜、茶褐色、床軟弱					
69	*		100		20	底面に粘土、縦横斜、土壁の回りに二層の自然石					
70	不整円形		90		40	(ローム) 床茶褐色土、東側横傾斜	壁縦傾斜	打 拵 2			
71	*		70		30	壁、茶褐色、横傾斜					
72	*		80		20	壁茶褐色、床ローム、横傾斜					
73	不整形		80		40	壁、ローム横傾斜、床凸凹ローム					
74	*		80		40	内部に石あり、横傾斜					
75	不整三角形		120		50	内部に石あり、東面ローム 茶褐色(軟弱) 西側、壁垂直 東側、縦横斜					
76	楕 円		90		80	14号作跡地西壁を切る、縦横斜					
77	不整形		60		30	内部に石あり(灰面、軟弱、壁茶褐色、軟弱、炭化物を含む)	石壁が 割れに入る		石 皿 1		
78	不整方形		70		20	横傾斜、軟弱、床ローム					
79	円 形		100		60	縦横斜、茶褐色土、軟弱、床ローム(良好)					
80	不整円形		70		60	ほぼ垂直					
81	楕 円		80		50	24号生、が東側に切り込む、ほぼ垂直					
82	卵 形		150		45	縦横斜					

土 境 一 覧 表 増 野 新 切 遺 跡 D 区

番 号	ブ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物				
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深きcm		土	器	石	器	その他
1	円 形	フラスコ	120		75				クワ打石斧1	加 E	
2	楕 円		120		100		深 鉢 突	打石斧 石ソク	1 1	加 E	
3	不整形				40					加 E	
4			70		30	上部に石あり				加 E	
5	不整形		170		50	内部に大きな石あり			横刃打石斧1	加 E	
6	不整形		150		70	20号住居址を切跡				加 E	
7	円 形	フラスコ	110		100					加 E	
8	円 形		70		45			クワ 打石斧	1 1	加 E	
9	不整形		110		30			横 刃	11	加 E	
10	不整形		120		80			打石斧	1	井戸底	
11	小円形		140		100			横刃石ソク1 打石斧		加 E	
12	小楕円形	フラスコ	100		100					加 E	
13	楕円形		80		20	西壁に石あり			打石斧	1	加 E
14	円 形		100		30						
15	円 形	フラスコ	130		100					加 E	
16	長方形		70		70					?	
17	円 形		180		60				打石斧欠	1	加 E
18	円 形		120		50		メシロ	クワ 横 刃	1 1	加 E	
19	楕円形	フラスコ	120		100			横 刃 打石斧	1 1	加 E	
20	小円形		50		35					加 E	
21			70		40						
22	不整形	フラスコ	130		120				打石斧 石ソク	1 1	加 E
23	*		90		40					?	
24	*		70		30					?	
25	円 形	フラスコ	180		140		カメ・器内	打石斧 打石斧	2 2	加 E	
26	楕円形		140		30				横刃打石斧1 打石斧	加 E	
27	不整形		120		50					加 E	
28	円 形		120		50				円形打石斧1	加 E	
29	円 形		190		1	上部に石 (4 個) あり			横 刃 打石斧	2 2	加 E
30	不整形		160		40	上部に石 (2 個) あり				加 E	
31	円 形		110		60	上部に石 (4 個) あり				加 E	

土 境 一 覧 表 増 野 新 切 道 跡 D 区

番 号	フ ラ ン 平 面	大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物					
		断面	東西cm	南北cm		深きcm	土	器	石	器	その他
22	円形		80		50					加 E	
23	不整形		120		40			横 刃 1 打石斧 1		加 E	
34	・	フラスコ	80		80		メンコ			加 E	
35	グ 円		100		100	内部に石あり			横刃1海浜石1 打石斧 2	加 E	
36	グ 円		100		50	東壁に石が立てられて2個あり					
37	不整形		120		40					加 E	
38	円形	フラスコ	170		80				磨石斧	加 E	
39	円形		100		40						
40	不整形		120		40				打石斧 1	加 E	
41	方 形		130		40	内部に石あり			横 刃 1	加 E	
42	円形		110		20	西へき上に石あり			打石斧 1	加 E	
43	円形		150		50					加 E	
44	円形	フラスコ	170		110	上部に石あり			スタンパー 横刃1磨石斧1	加 E	
45	円形		100		50	上部に石あり				加 D	
46	不整形		130		60					加 D	
47	グ円形		120		60					加 D	
48	不整形		100		30				石スイ 打石斧 1	加 E	
49	円形		150		40	上部に2個石あり	つり手鏡 1		打石斧 1 横 刃 2	加 E	
50	円形	フラスコ	130		90						
51	円形		120		80				横 刃 2	加 E	
52	グ円形	フラスコ	140		100	中段あり			石ソク 1	加 E	
53	円形		130		60				石 棒	加 E	
54	グ円形		100		110				磨石斧欠 1	加 E	
55	円形		70		80	内部に土器あり			器 内 1 深ばち破	グ 器 1 石ソク 1	加 E
56	円形		130		140	断面に石あり			打石斧 1	加 E	
57	グ円形		70		60					加 D	
58	円形		80		40					加 E	
59	グ円形		80		40				打石斧 1	加 E	
60	円形		70		120						
61	円形		80		30						
62	円形		70		60						

土 壌 一 覧 表 ・ 増 野 新 切 道 跡 D 区

番 号	ブ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深きcm		土 器	石 器	その他
63	円 形		70		65				
64	円 形		130		50			打石斧 2	加 E
65	多角形		150		80		メソコ 1	スクレイパー 1	加 E
66	円 形		80		70				
67	円 形		80		120				
68	円 形		100		50			打石斧 1 スクレイパー 1	加 E
69	不整形		180		50				加 E
70	円 形	フラスコ	150		160			横 刃 1	加 E
71	多 角 形		160		120			打石斧 1	加 E
72	不整形		150		80			打石斧 1 石ソク	加 E
73	円 形		120		50			打石斧 1	加 E
74	円 形		100		60			横 刃 1	加 E
75	円 形		110		60				
76	円 形		110		80	かつては深いものである			
77	円 形		150		50				
78	多角形		150		100				
79	円 形		100		30				
80	円 形		150		100	底面に石片あり		石 皿 1	
81	円 形		110		35	かつては深いものである			
82	円 形		100		50				
83	円 形		160		100				
84	長方形		110		60				
85	円 形		140		50				
86	円 形		60		85			打石斧 1	?
87	円 形		70		60				加 E
88	円 形		160		30				
89	円 形	フラスコ	60		60	土器あり	深ばら光	石ソク 1	加 E
90	不整形		200		50				
91	不整形		200		50				
92	円 形		90		50			横 刃 1 打石斧	加 E
93			80		35				

土 壊 一 覧 表 増 野 新 切 遺 跡 D 区

番 号	プラン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物			
	平 面	断 面	東 西 cm	南 北 cm	深 さ cm		土 器	石 器	其 他	
94			200		25					
95			100		40					
96	円 形		90		20	底面に石あり			?	
97	円 形		60		30	底面に3個石あり			?	
98	円 形		120		50					
99	円 形		60		50					
100	円 形		70		40					
1001			100		20					
102	円 形	フラスコ	80		45					
103	円 形		100		30					
104			110		20					
105			70		20					
106			100		25					
107			80		50					
108			150		90					
109			110		15					

第6表

土製製円板一覽表

区	番号	遺跡名	遺構	縦 mm	横 mm	厚さ mm	重さ g	部位	時期
第19区	1	S I B	A 区	32.5	34.5	6.0	14.0	胴	加・E
◇	2	S I B	A 区	32	34.5	6.5	12.5	?	中世
◇	3	S I B	B、5住	26	29	7.2	10.5	胴	加・E
◇	4	S I B	B、6住	28	27.5	5.5	9.5	胴	加・E
◇	5	S I B	B、7住	29.5	30.5	6.5	10.5	胴	加・E
◇	6	S I B	B、8住	25.0	25.0	8.5	11.5	胴	加・E
◇	7	S I B	B、9住	7.5	1.9	6.0	4.5	胴	加・E
◇	8	S I B	B、9住	22.5	24.0	8.5	9.0	胴	加・E
◇	9	S I B	B、11住	29.5	26.5	6.5	11.5	胴	加・E
◇	10	S I B	B、11住	23.0	23.5	7.5	6.5		加・E
◇	11	S I B	B、11住	21.0	21.5	7.5	6.0	胴	加・E
◇	12	S I B	B、12住	28.5	28.0	5.5	9.0	胴	加・E
◇	13	S I B	B、12住	30.0	31.5	7.5	11.5		加・E
◇	14	S I B	B、13住	26.5	27.5	6.5	9.5	胴下部	加・E
◇	15	S I B	B、13住	33.5	31.5	6.5	13.5	底	加・E
◇	16	S I B	B、16住	25.5	27.0	9.5	12.0	底部	加・E
◇	17	S I B	B、16住	27.5	28.0	3.5	7.0	胴下部	加・E
◇	18	S I B	B、16住	24.5	25.0	4.5	6.5	胴	加・E
◇	19	S I B	B、16住	23.5	23.5	6.5	6.5	胴	加・E
◇	20	S I B	B、21住	24.5	20.5	8.0	6.5	胴	加・E
◇	21	S I B	B、21住	42.5	48.0	6.0	28.5	口縁部	加・E
◇	22	S I B	B、22住	30.0	27.5	4.5	7.5	胴下部	加・E
◇	23	S I B	B、23住	18.5	18.5	5.5	4.5		加・E
◇	24	S I B	B、25住	26.0	27.5	4.5	6.5	胴	加・E
◇	25	S I B	B、26住	26.5	26.5	8.0	10.5	胴	加・E
◇	26	S I B	B、26住	21.5	23.5	6.0	5.5	胴	加・E
◇	27	S I B	B、29	25.0	24.5	6.5	7.0		加・E
◇	28	S I B	B、35	17.5	19.0	5.5	4.0	?	?
◇	29	S I B	B、53	23.0	23.0	6.5	8.0	胴	加・E

土製円板一覽表

図	番号	造跡名	遺構	縦 mm	横 mm	厚さ mm	重さ g	部位	時期
第 191 図	30	S I B	B 区	32.5	29.5	6.5	10.5	胴	加・E
	◇ 31	S I B	B 区	16.5	19.5	5.0	4.0	?	加・E
	◇ 32	S I B	B 区	38.0	37.5	6.5	17.0	胴	加・E
	◇ 33	S I B	B 区	18.0	18.0	5.5	4.5		加・E
	◇ 34	S I B	B 区	21.5	22.5	6.0	5.5	胴	加・E
第 192 図	1	S I B	B 区	20.2	20.5	3.5	4.0	胴上部	加・E
	◇ 2	S I B	B 区	24.5	23.0	3.5	4.5	胴	加・E
	◇ 3	S I B	B 区	30.5	31.5	6.5	11.5	胴	加・E
	◇ 4	S I B	D、2住	33.0	31.0	10.0	16.5	胴	加・E
	◇ 5	S I B	D、3住	24.5	25.5	6.0	7.5	胴	加・E
	◇ 6	S I B	D、8住	27.5	26.5	10.0	13.0	胴	加・E
	◇ 7	S I B	D、8住	42.0	42.5	7.5	22.5	胴	加・E
	◇ 8	S I B	D、8住	45.5	56.0	3.5	24.5	胴	加・E
	◇ 9	S I B	D、8住	25.5	31.0	7.5	9.5	胴	加・E
	◇ 10	S I B	D、8住	20.5	22.0	3.5	4.0	胴	加・E
	◇ 11	S I B	D、8住	38.5	38.5	7.0	17.0	底部か	加・E
	◇ 12	S I B	D、8住	25.0	28.0	5.0	7.5	胴	加・E
	◇ 13	S I B	D、10住	28.5	29.0	7.0	12.0	胴	加・E
	◇ 14	S I B	D、11住	26.5	26.0	7.0	8.5	胴	加・E
	◇ 15	S I B	D、11住	34.5	36.0	8.0	18.0	胴上部	加・E
	◇ 16	S I B	D、11住	40.0	38.0	10.5	25.5	胴上部	加・E
	◇ 17	S I B	D、13住	21.0	21.5	7.0	5.5	胴	加・E
	◇ 18	S I B	D、14住	38.5	40.5	6.5	18.5	胴	加・E
	◇ 19	S I B	D、14住	34.0	37.0	5.5	15.5	胴	加・E
	◇ 20	S I B	D、14住	29.5	32.5	6.5	12.5	胴	加・E
	◇ 21	S I B	D、15住	20.0	21.5	5.5	5.0	胴	加・E
	◇ 22	S I B	D、15住	25.5	27.5	7.0	8.5	胴	加・E
	◇ 23	S I B	D、15住	35.0	36.5	5.0	13.0	胴	加・E
	◇ 24	S I B	D、16住	24.5	26.5	5.5	7.5	胴	加・E

土製円板一覽表

図	番号	遺跡名	遺構	縦 mm	横 mm	厚さ mm	重さ g	部位	時期
第192図	25	S I B	D、16住	32.0	35.0	6.5	14.5	頸下部	加・E
	◇ 26	S I B	D、16住	45.0	35.0	6.5	15.5	胴	加・E
	◇ 27	S I B	D、16住	17.5	17	3.5	2.5	胴	加・E
	◇ 28	S I B	D、17住	23.0	26.5	5.5	7.0	胴	加・E
	◇ 29	S I B	D、20住	23.0	26.0	7.0	7.5	胴	加・E
	◇ 30	S I B	D、20住	30.1	32.5	9.5	16.0	口縁部	加・E
第193図	◇ 31	S I B	D、20住	25.5	28.5	6.5	9.5	胴	加・E
	1	S I B	D、20住	25.0	28.5	3.5	5.5	胴	加・E
	◇ 2	S I B	D、21住	27.0	29.0	6.5	9.0	胴	加・E
	◇ 3	S I B	D、22住	42.0	31.5	8.5	22.0	頸部	加・E
	◇ 4	S I B	D、23住	32.0	31.5	6.5	12.0	胴	加・E
	◇ 5	S I B	D、23住	27.5	30.0	6.5	10.5	胴	加・E
	◇ 6	S I B	D、25住	25.5	24.5	5.5	8.0	胴	加・E
	◇ 7	S I B	D、25住	31.0	33.0	7.0	15.0	胴	加・E
	◇ 8	S I B	D、26住	21.0	25.0	5.0	5.0	胴	加・E
	◇ 9	S I B	D、26住	24.0	25.0	7.5	6.5	胴	加・E
	◇ 10	S I B	D、26住	26.0	28.5	7.0	10.5	胴	加・E
	◇ 11	S I B	D、26住	29.5	30.5	8.0	11.0	頸下部	加・E
	◇ 12	S I B	D、33住	32.0	30.5	7.0	14.0	胴	加・E
	◇ 13	S I B	D、45住	32.5	34.0	7.0	12.5	胴	加・E
	◇ 14	S I B	F - 18	24.0	27.5	5.5	8.5	胴	加・E
	◇ 15	S I B	F - 65	28.5	29.0	6.0	11.5	胴	加・E
	◇ 16	S I B	F - 34	21.0	21.0	6.5	5.5	胴上部	加・E
	◇ 17	S I B	F - 35	17.5	19.0	5.0	4.0	胴	加・E(付)
	◇ 18	S I B	D 区	22.0	22.0	4.0	4.5	胴	加・E
	◇ 19	S I B	D 区	24.0	24.0	5.0	5.5	胴	加・E
	◇ 20	S I B	D 区	18.0	18.0	9.0	5.5	胴	加・E
	◇ 21	S I B	D 区	21.0	21.0	4.5	4.0	胴	加・E
◇ 22	S I B	D 区	29.0	29.0	6.0	14.0	胴上部	加・E	

土製円板一覽表

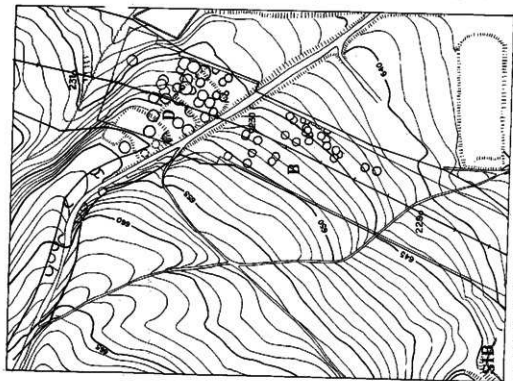
図	番号	遺跡名	遺構	縦 mm	横 mm	厚さmm	重さg	部位	時期	
第193図	23	S I B	D 区	24.0	27.5	5.5	8.5	胴	加・E	
	◇	24	S I B	D 区	26.5	27.5	6.5	8.5	胴	加・E
	◇	25	S I B	D 区	35.5	32.0	8.0	14.0	胴	加・E
	◇	26	S I B	D 区	29.5	35.0	6.5	13.5	胴	加・E
	◇	27	S I B	D 区	27.5	24.5	9.0	11.5	胴	加・E
	◇	28	S I B	D 区	28.0	36.5	4.0	12.5	胴	?
	◇	29	K W B	その他	46.0	48.5	7.5	29.5	胴上部	加・E
	◇	30	K W B	◇	33.0	33.5	6.5	14.5	胴下部	加・E
	◇	31	K W B	◇	28.5	34.0	6.0	12.5	胴	加・E
	◇	32	K W B	◇	31.5	31.5	5.5	11.5	胴	加・E
	◇	33	K W B	◇	33.5	36.0	7.5	15.5	胴	加・E
	◇	34	K W B	◇	41.5	39.0	8.5	20.5	胴	加・E
	第194図	1	K W B	1 住	46.0	48.5	7.5	29.5	胴	加・E
		◇	2	K W B	その他	32.5	29.5	8.5	14.0	胴
◇		3	K W B	◇	33.5	30.0	5.5	10.0	胴	加・E
◇		4	K W B	◇	25.5	29.0	4.5	7.0	胴	加・E
◇		5	K W B	◇	28.5	32.5	5.5	11.5	胴	加・E
◇		6	K W B	◇	38.5	42.5	9.5	22	胴	加・E
◇		7	K W B	◇	32.5	26.5	7.0	12.5	胴	加・E
◇		8	K W B	◇	26	24	8.5	7.5	胴	加・E
◇		9	K W B	◇	27.5	30	7.5	13	胴	加・E
◇		10	K W B	◇	40	44.5	7.0	25.5	胴	加・E
◇		11	K W B	A B・59	32.5	35.0	7.5	17.5	胴	加・E
◇		12	K W B	その他	41.2	42	7.0	22.5	胴	加・E
◇		13	K W B	◇	45.5	46.0	7.0	25.5	胴	加・E
◇		14	K W B	◇	43.0	42.0	8.5	28.5	胴	加・E



图 1 例 嵩山地区道路分布图

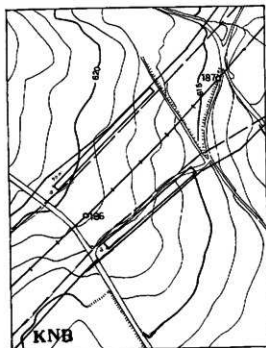


1. 中央道用地内遺跡分布図 (1:20000)

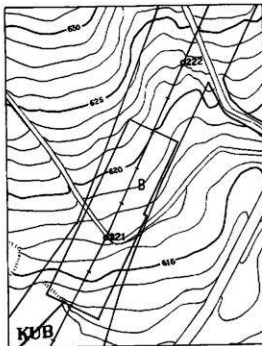


2. 高森町地内中央道用地内遺跡分布図及び地形図
 2. 高森町地内中央道用地内遺跡分布図 (1:2000) (B—B 地点, D—D 地点, O—O 地点, F—F 地点)

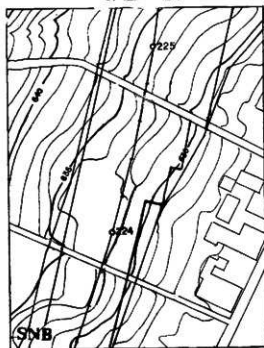
第2図 高森町地内中央道用地内遺跡分布図及び地形図



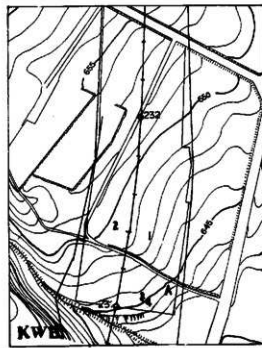
1. 鶴井戸A遺跡



2. 神田裏遺跡 (B——B地点)



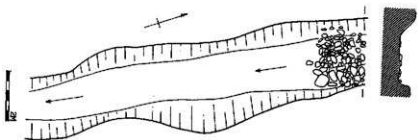
3. 新田西裏遺跡 (1——溝)



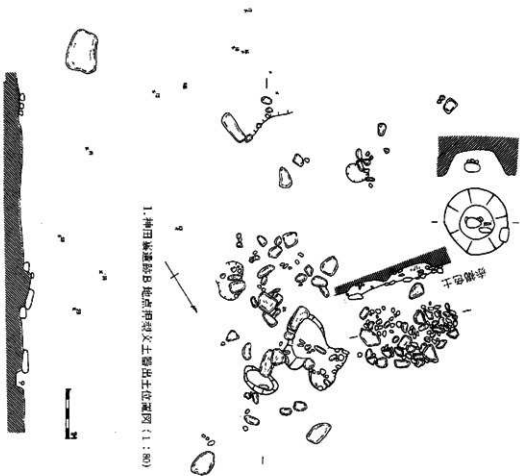
4. 増野川子石遺跡 (1-4住居址, A——A地点)

第3図 高森町地内各遺跡地形図 (1:20)

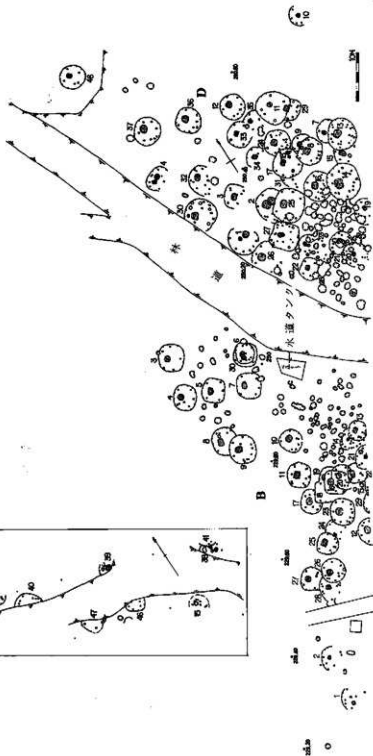
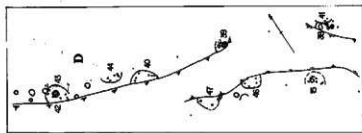
2. 新田西墓道跡溝状遺構 (1:160)



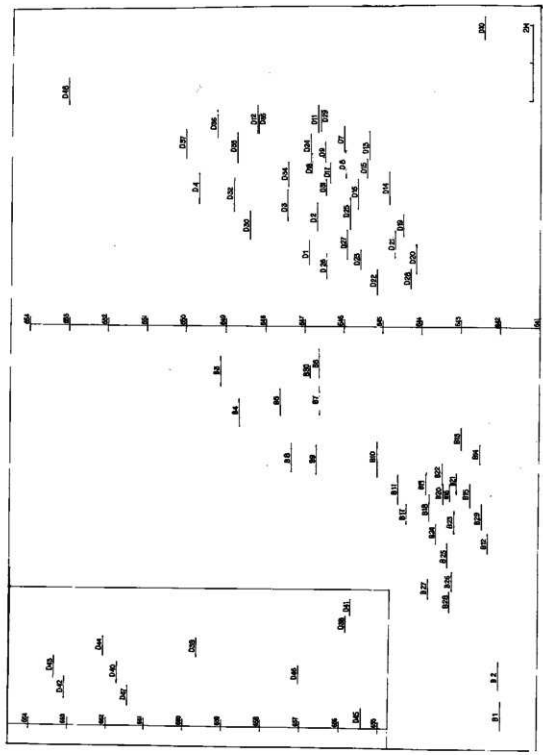
1. 神田墓道跡B地点銅棺出土器出土位置図 (1:80)



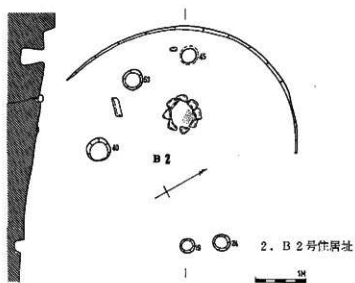
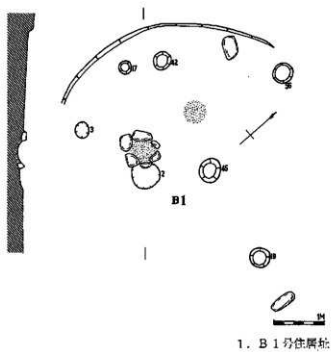
第4図 神田墓道跡B地点及び新田西墓道跡溝状遺構



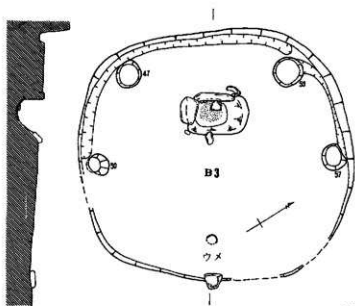
第5図 埋野新切遺跡遺構全体図 (1:800)



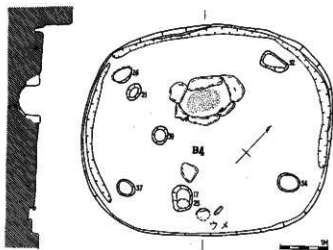
第 6 图 增野新切迹跡住居址床面海拔高度位置图 (1:100)



第7图 增野新切遺跡B 1号・2号住居址 (1:80)

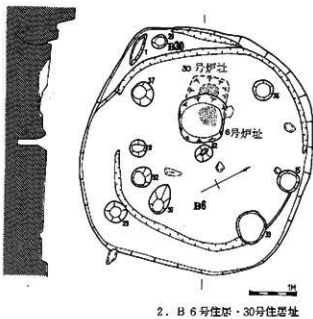
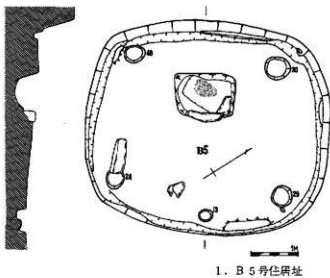


1. B 3号住居址

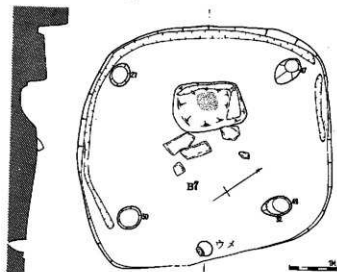


2. B 4号住居址

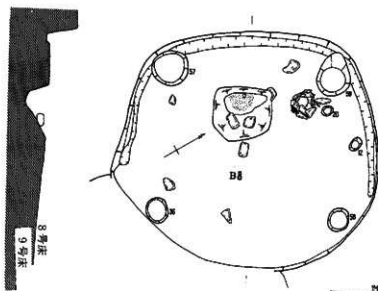
第8図 増野新切遺跡B 3号・4号住居址 (1:80)



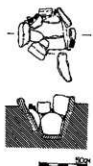
第9图 增野新切遺跡B 5号・6号・B30号住居址 (1 : 80)



1. B 7号住居址



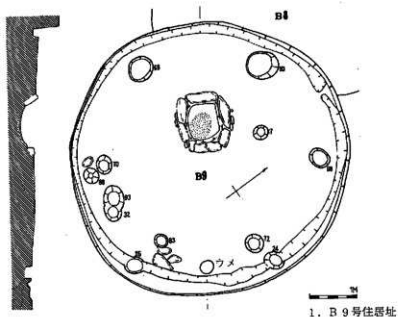
2. B 8号住居址



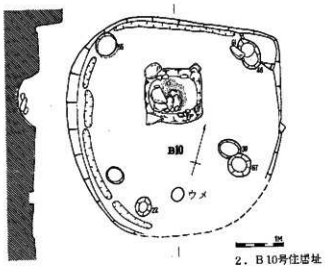
3. B 8号住居址石臼遺構

(黒片は土器片) (1:40)

第10図 増野新切遺跡B 7号・8号住居址 (1:80)

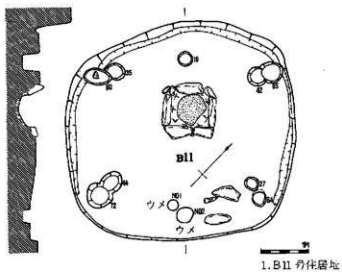


1. B 9号住居址

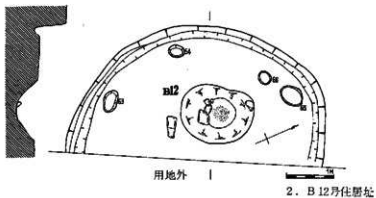


2. B 10号住居址

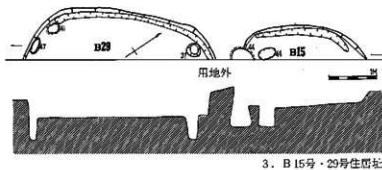
第11図 増野新切遺跡B 9号・10号住居址 (1 : 80)



1. B11号住居址

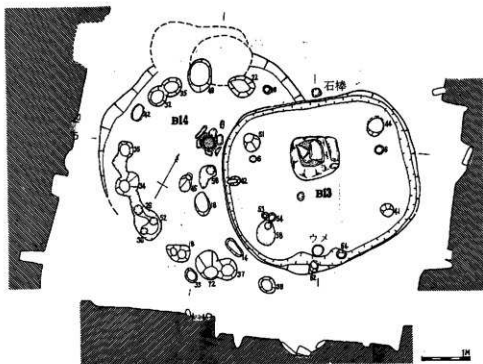


2. B12号住居址

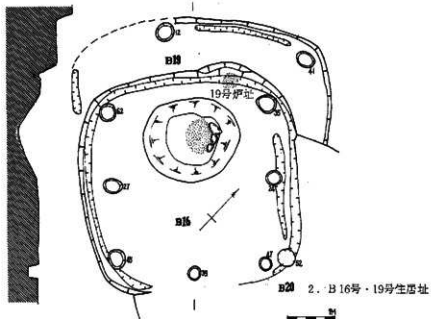


3. B15号・29号住居址

第12区 増野新切遺跡B11号・12号・15号・29号住居址 (1:80)

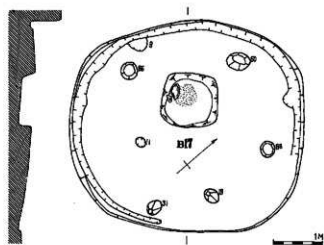


1. B 13号・14号住居址

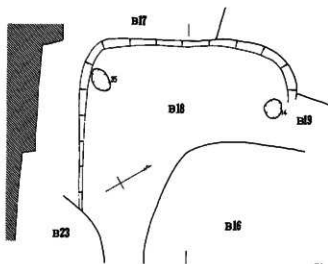


2. B 16号・19号住居址

第13図 増野新切遺跡B 13号・14号・16号・19号住居址 (1:80)

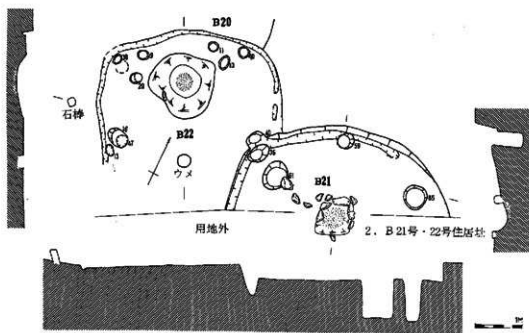
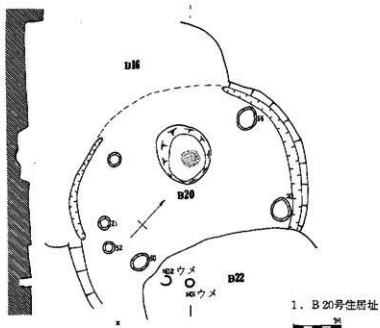


1. B 17号住居址

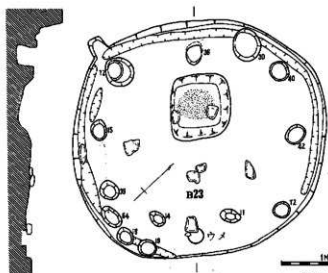


2. B 18号住居址

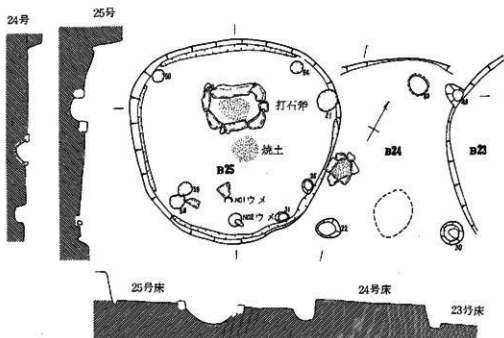
第14图 增野新切遺跡B 17号・17号住居址 (1 : 80)



第15図 増野新切遺跡B 20号・22号住居址 (1:80)

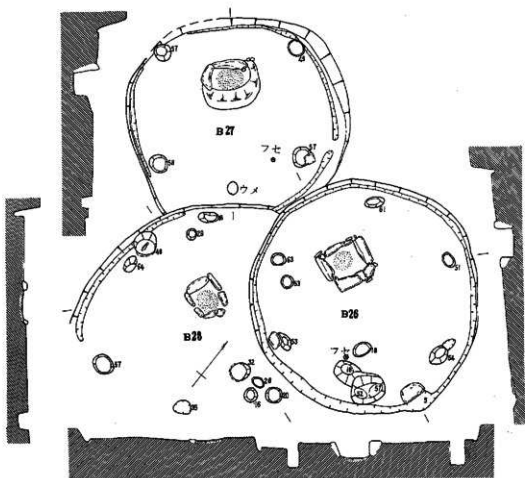


1. B 23号住居址

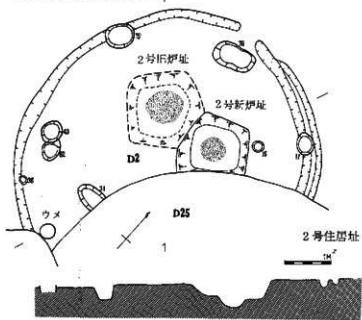
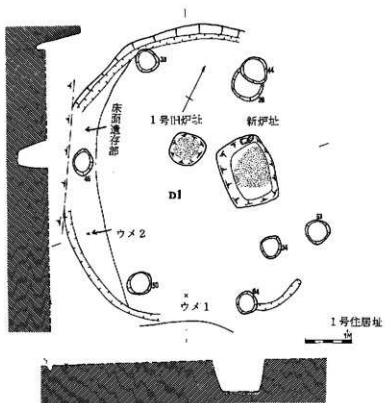


2. B 24号・25号住居址

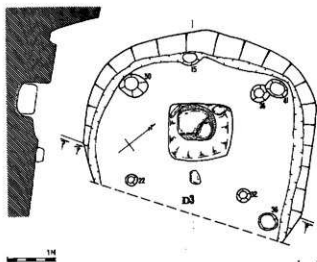
第16図 増野新切遺跡B 23号・23号・25号住居址 (1 : 80)



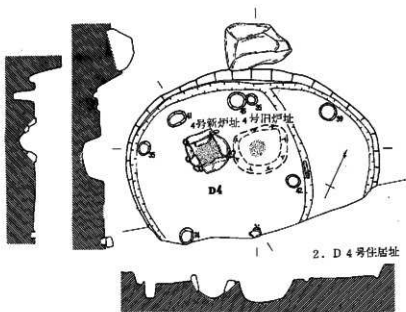
第17図 増野新切遺跡B 26号・27号・28号住居址 (1:80)



第18図 増野新切遺跡D1号・2号住居址 (1:80)

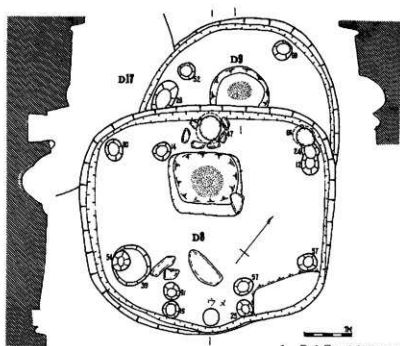


1. D 3号住居址

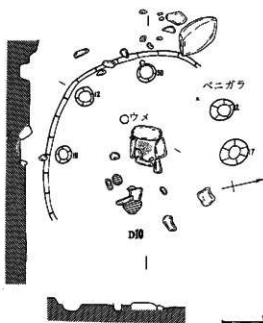


2. D 4号住居址

第19图 增野新切遺跡D 3号・4号住居址 (1:80)

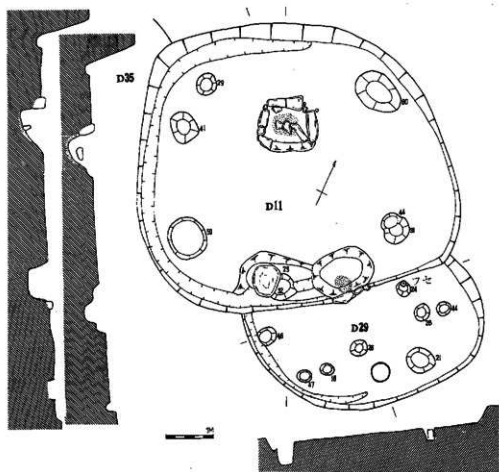


1. D 8号・9号住居址

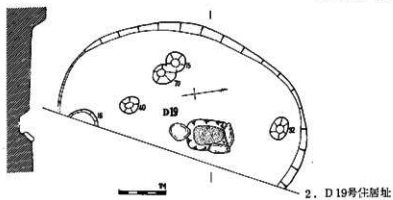


2. D 10号住居址

第20図 増野新切遺跡D 8号・9号・10号住居址 (1:80)

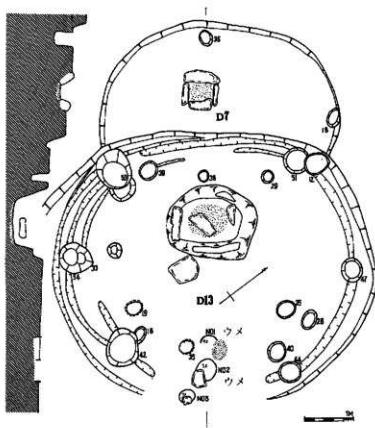


1. D 11号・29号住居址

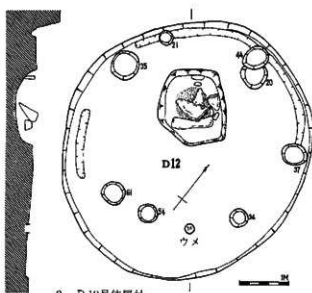


2. D 19号住居址

第21图 増野新切遺跡D 11号・19号・29号住居址 (1 : 80)

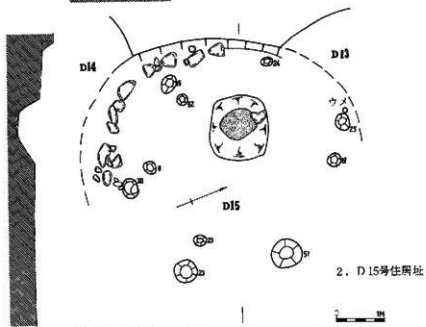
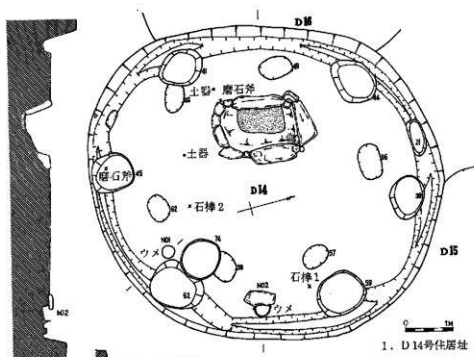


1. D 7号・13号住居址

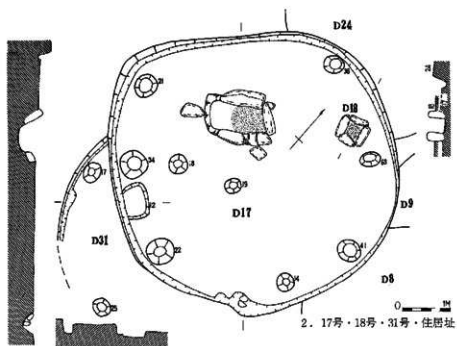
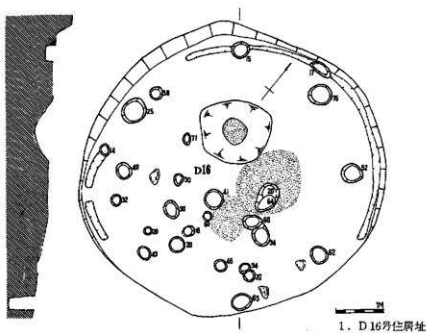


2. D 12号住居址

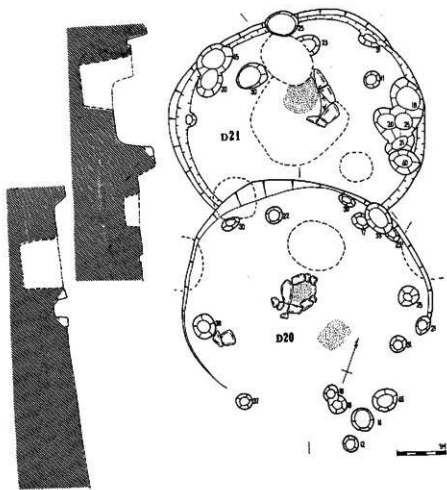
第22図 増野新切遺跡D 7号・12号・13号住居址 (1:80)



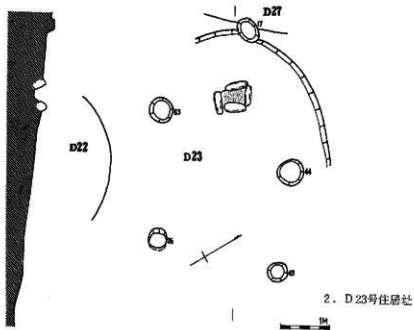
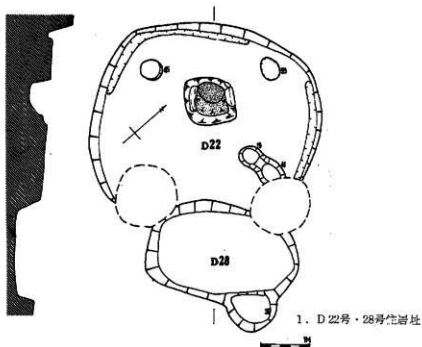
第23图 増野新切遺跡D14号・15号住居址 (1:80)



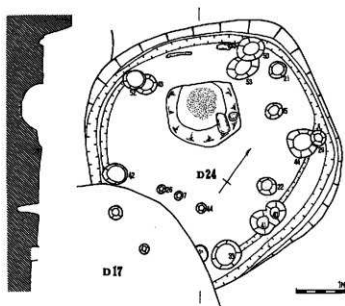
第24図 増野新切遺跡D 16号・17号・31号住居址 (1 : 80)



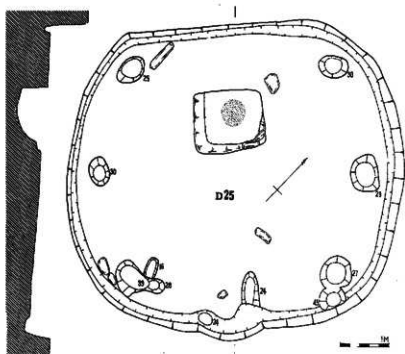
第25图 增野新切遺跡D20号・21号住居址 (1:80)



第26图 増野新切遺跡D 22号・23号・28号住居址 (1:80)

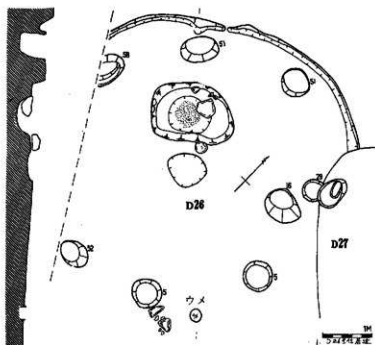


1. D 24号住居址

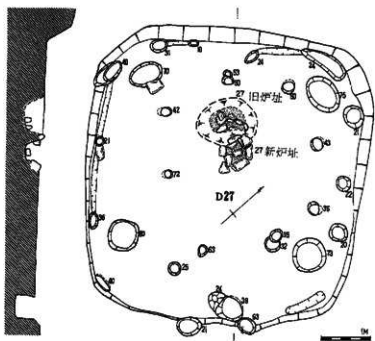


2. D 25号住居址

第27图 增野新切遺跡D 24号・25号住居址 (1:80).

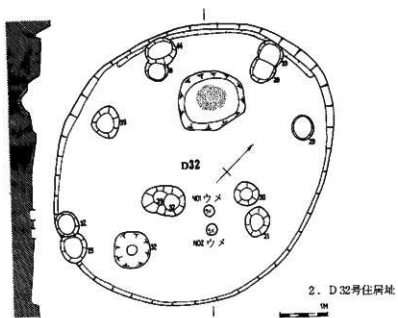
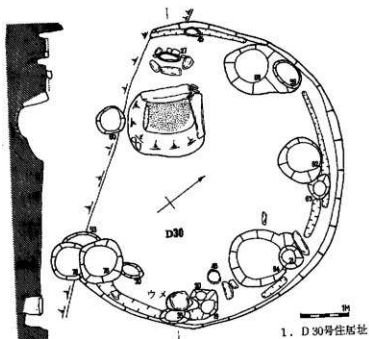


1. D 26号住居址

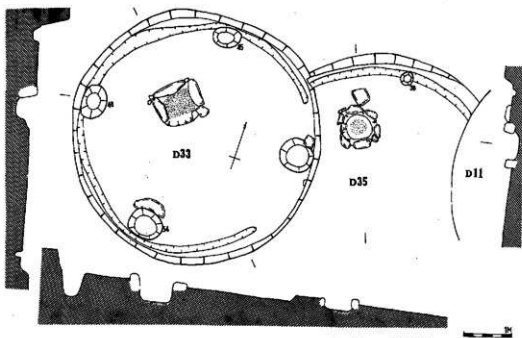


2. D 27号住居址

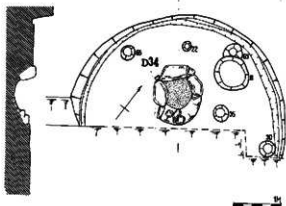
第28図 増野新切遺跡D 26号・27号住居址 (1 : 80)



第29図 増野新切遺跡D 30号・32号住居址 (1 : 80)

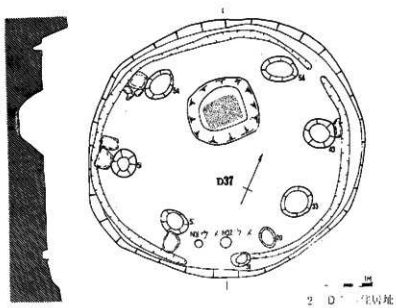
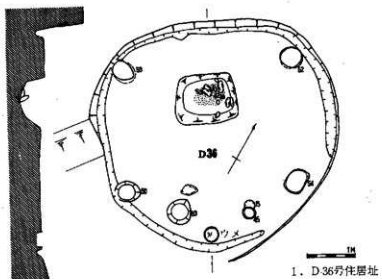


1. D 33号・35号住居址

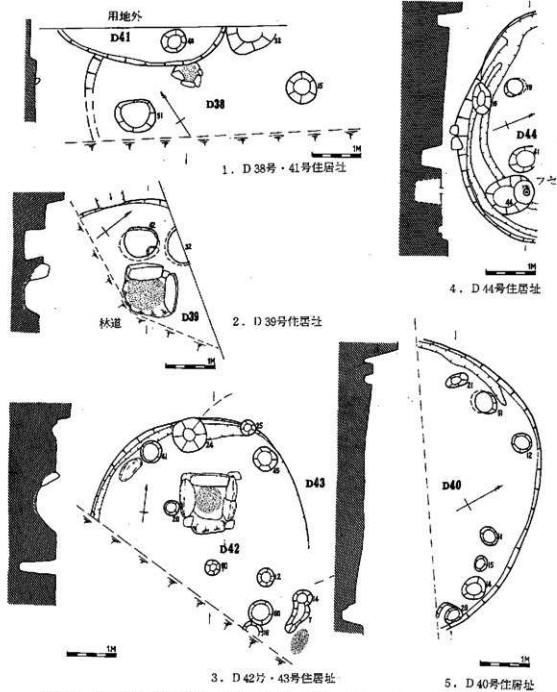


2. D 34号住居址

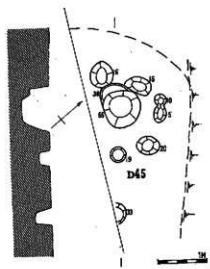
第30図 増野新切遺跡D 33号・34号・35号住居址 (1 : 80)



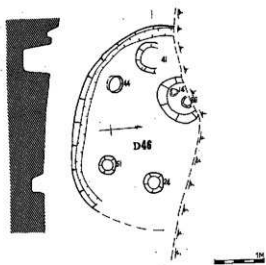
第31図 増野新切遺跡D36号・37号住居址（縮尺：80）



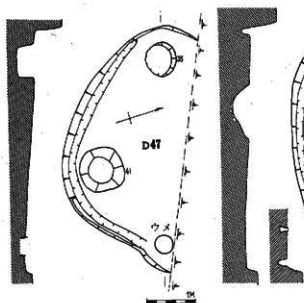
第32图 増野新切遺跡D 38号・39号・40号・41号・42号・43号・44号住居址 (1 : 80)



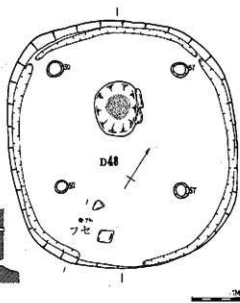
1. D45号住居址



2. D46号住居址

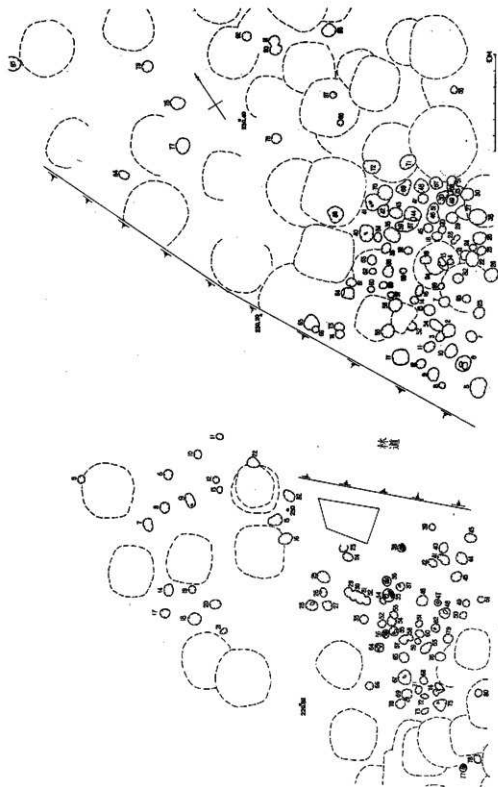


3. D47号住居址

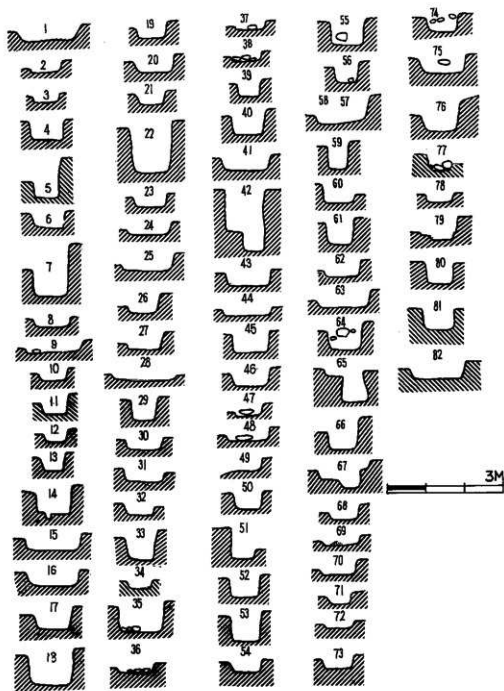


4. D48号住居址

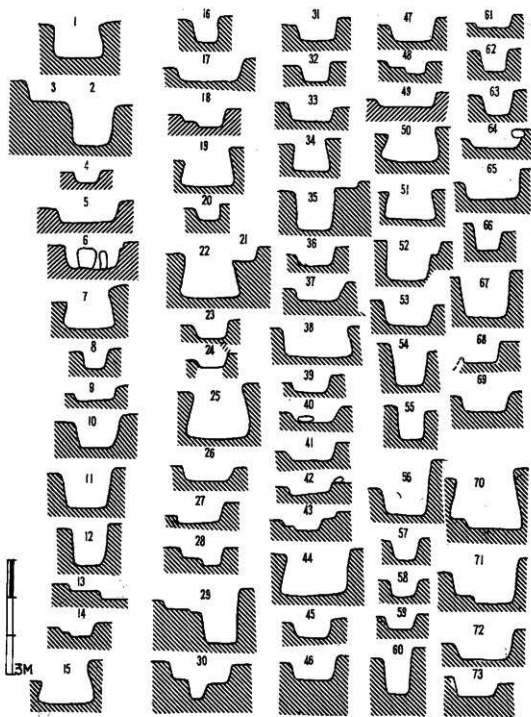
第33図 増野新切遺跡D45号・46号・47号・48号住居址(1:80)



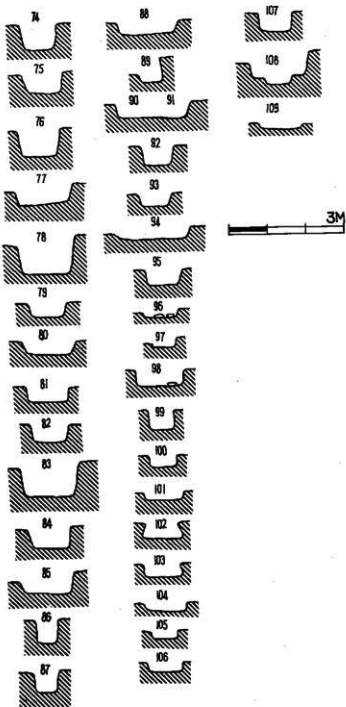
第34圖 增野新切遷跡土壌分布圖 (1:400)



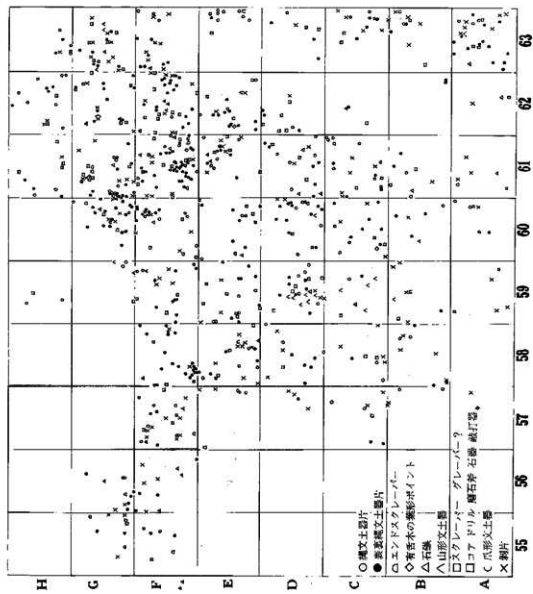
第35图 增野新切遺跡B区土壤断面图 (1:100)



第36图 增野新切造跡D区土坑断面图(1:100)

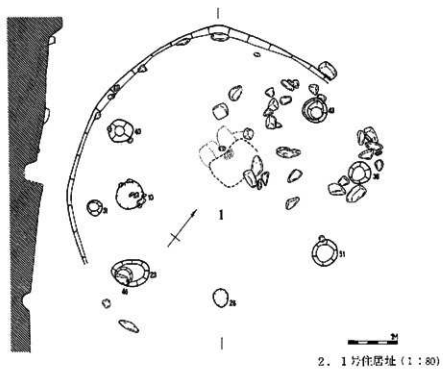
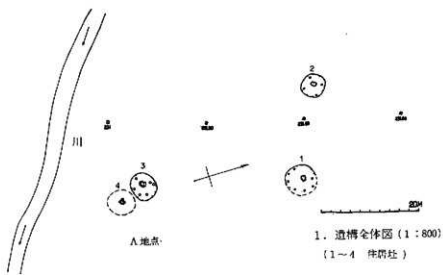


第37图 增野新切遺跡D区土坑断面图(1:100)

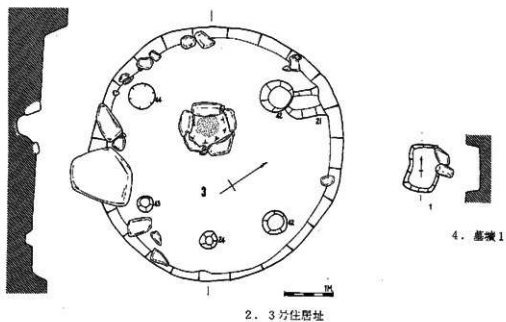
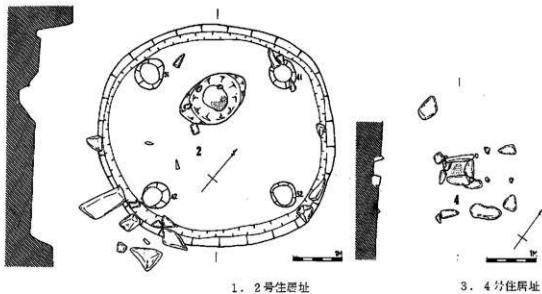


第38図 増野川子石遺跡A 地点土器・石器出土位置図 (1:120)

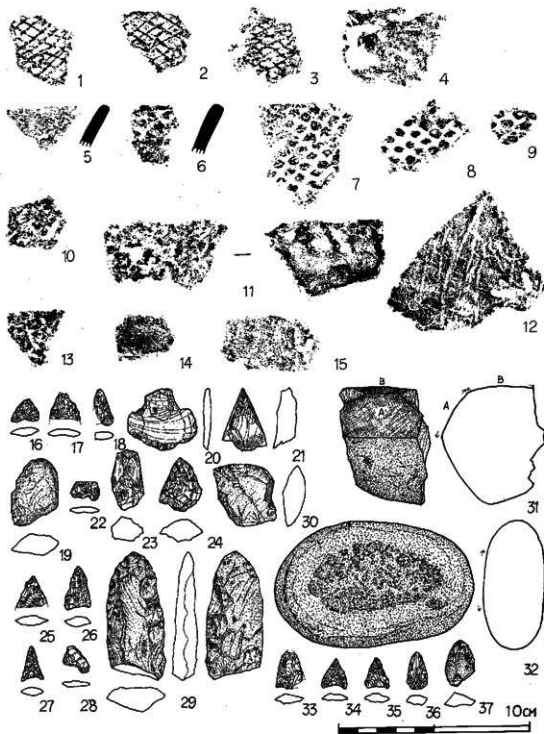




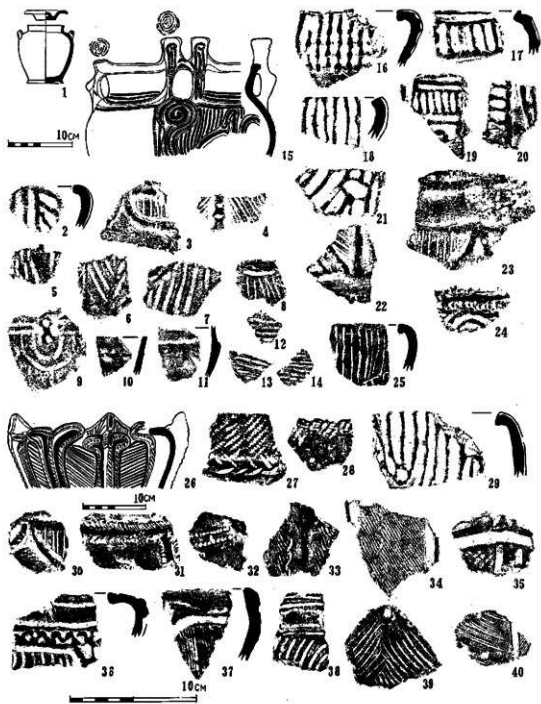
第39図 増野川子石遺跡遺構全体図及び1号住居址



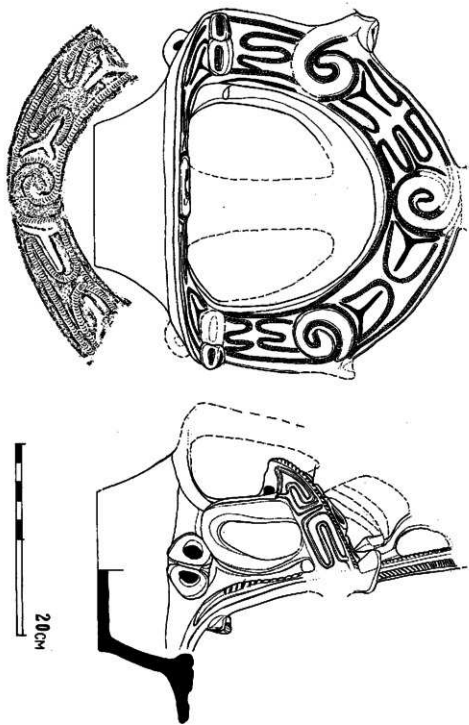
第40図 増野川子石遺跡2号・3号・4号住居跡及び1号土塚図(1:80)



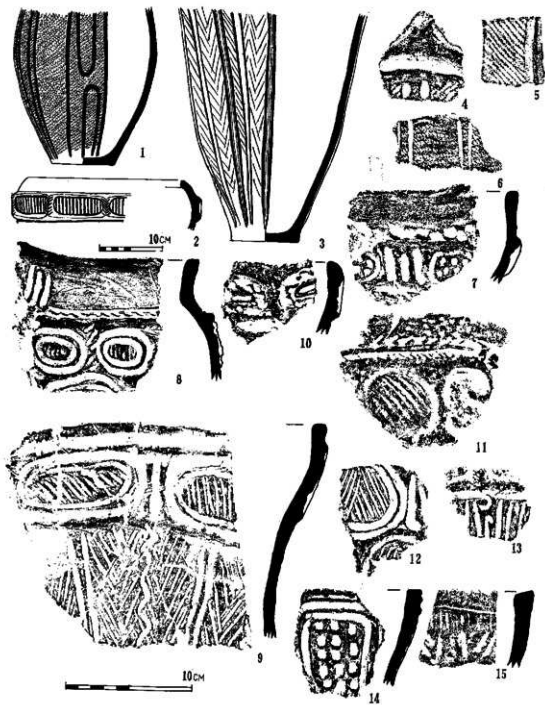
第41图 鎌鋒原A遺跡出土上土器(1~4)及び神田裏遺跡B地点出土土器・石器(5~37)(1:2)



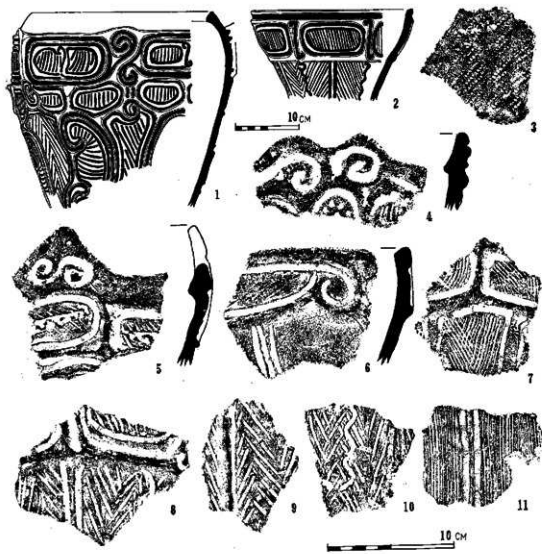
第42図 神出裏遺跡(1), 新田西裏遺跡(2~14)及び増野新切遺跡出土土器(15~40)
 (1: 3, 里1・15・26 1: 6; 16~25 B 1号住居址, 26~32 B 2号住居址, 33~40 B 6号住居址); (15; B 12号住居址)



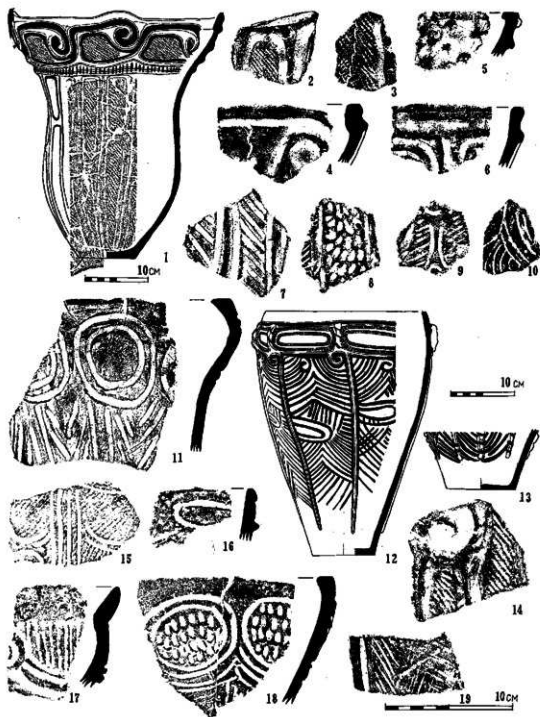
第43图 广野青切遗址B 2号住居址出土的铜头盔 (1:4)



第44图 增野新切遺跡B3号住居址出土土器 (1:3, 但し1~3 1:6)



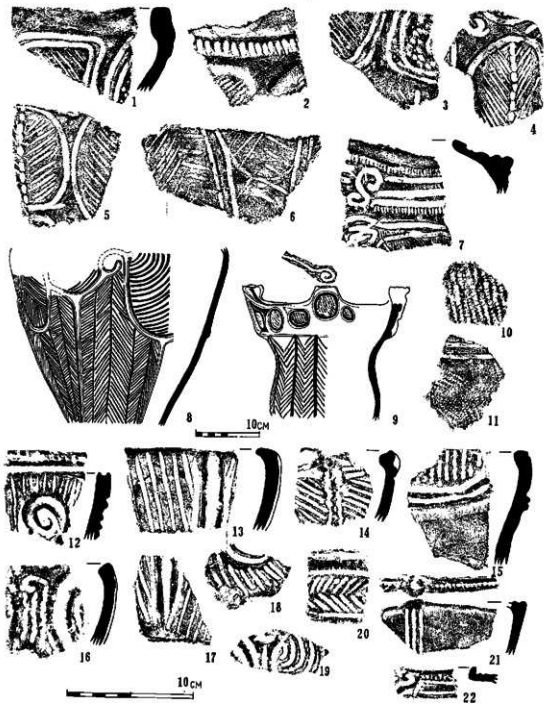
第45图 增野新切遺跡B 4号住居址出土土器 (1:3, 係し1・2 1:6)



第46图 地野新切边跡B 5号・B 7号住居跡出土土器 (1・3, 但し1・12・13 1:6)
 (1-11 B 5号住居址, 12-19 B 7号住居址)

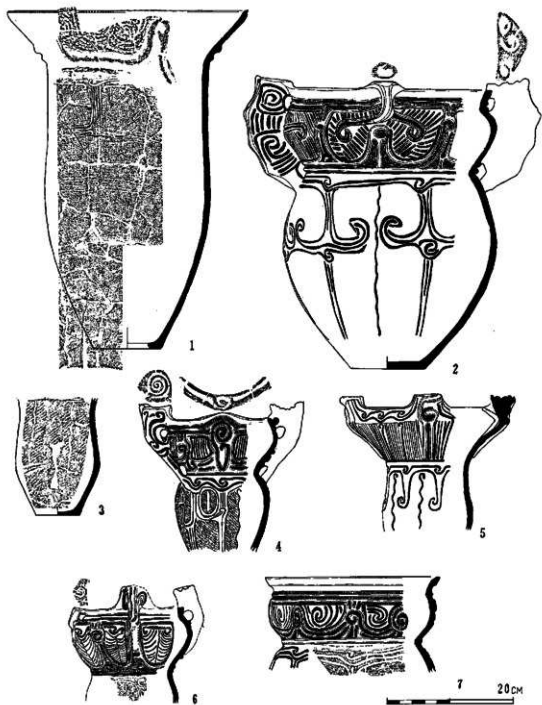


第47图 埴野新切遺跡B 8号住居址出土土器(1:3)

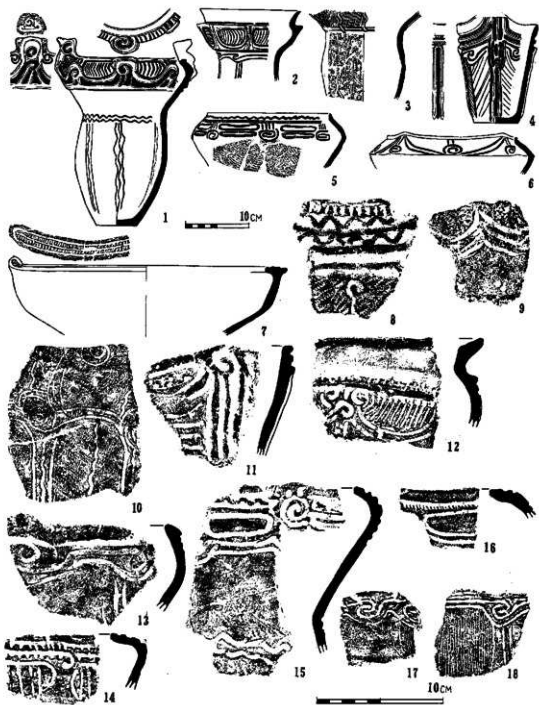


第48图 增野新切遺跡B 8号・B 10号住居址出土土器 (1:3, 但し8・9 1:6)

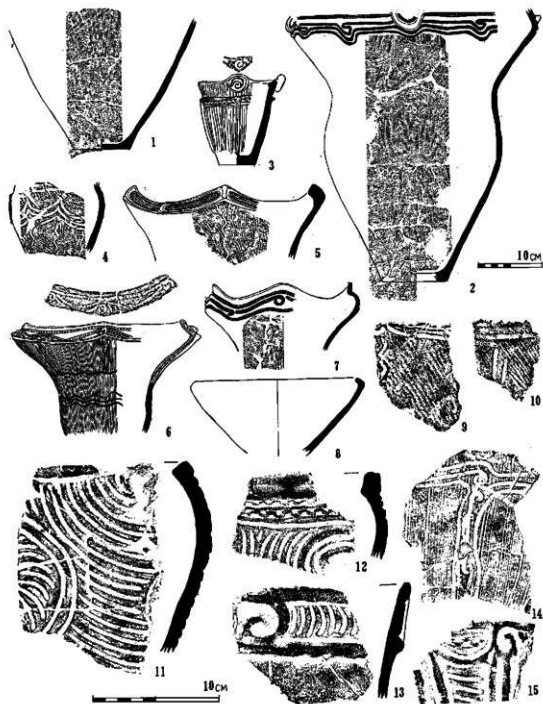
(1~7 B 8号住居址 右列逆順, 8~22 B 10号住居址)



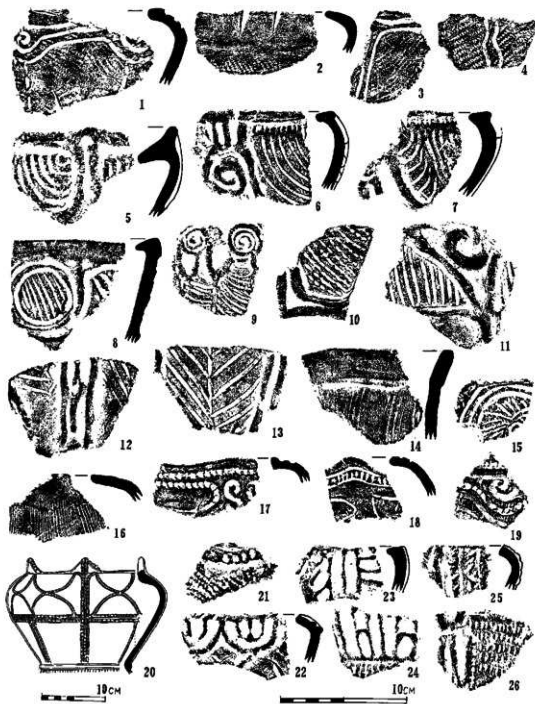
第49图 埴野新切遺跡B 9号住居址出土土器 (1:6)



第50圖 増野新切遺跡B 9号住居址出土土器 (1:3, 但し1~7 1:6)

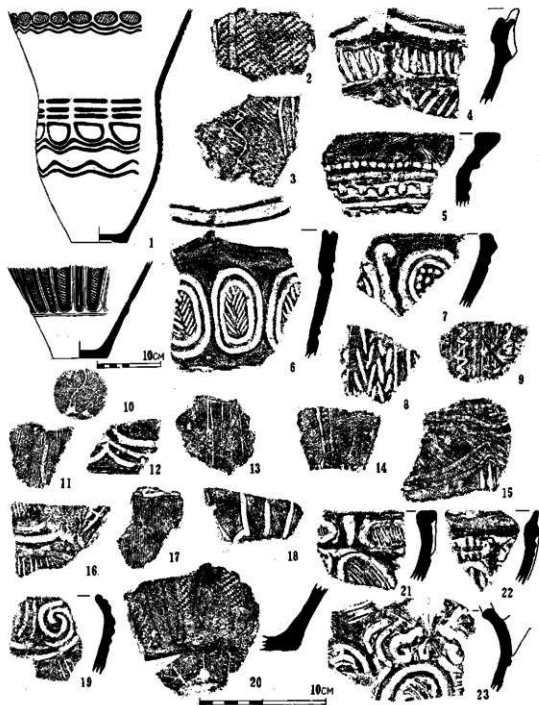


第51图 增野新切遺跡B11号住居址出土土器 (1:3, 但し1~8 1:6)

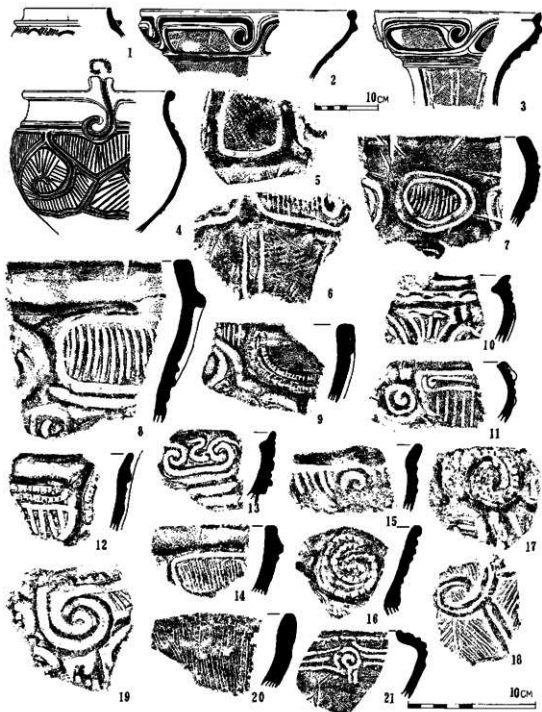


第52图 增野新切遺跡B 12号・B 14号住居址出土土器 (1:3, 但し20 1:6)

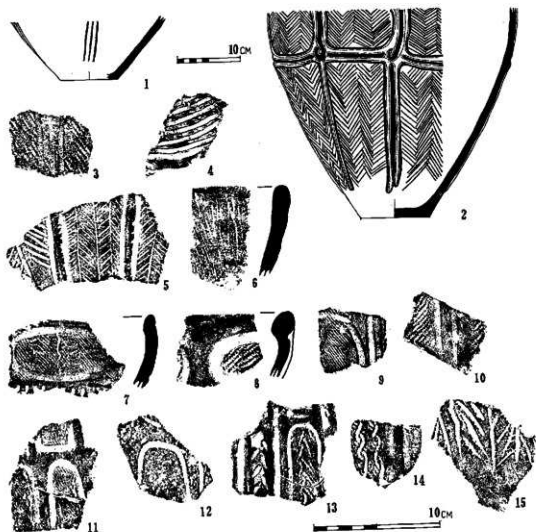
(1~19 B 12号住居址, 20~26 B 14号住居址)



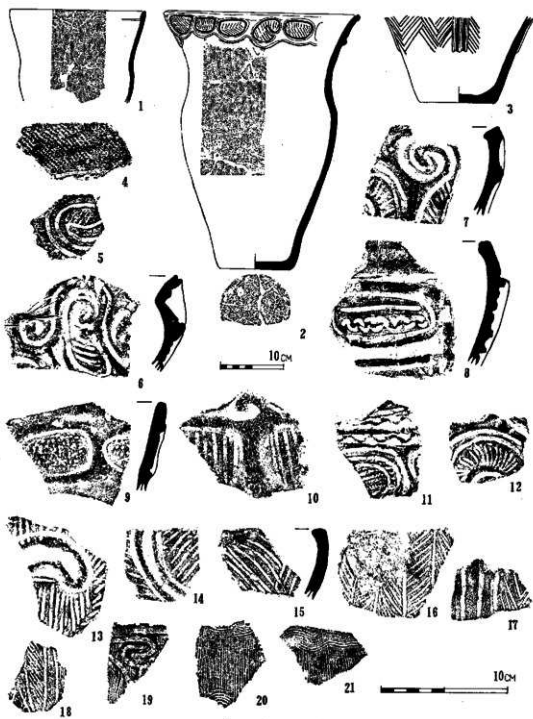
第53図 増野新切遺跡B13号・B15号・B17号・B19号住居址出土土器（1・3，但し1・10 1：6）
 （1-9 B13号住居址，10-13 B15号住居址，14-18 B17号住居址，19-23 B19号住居址）



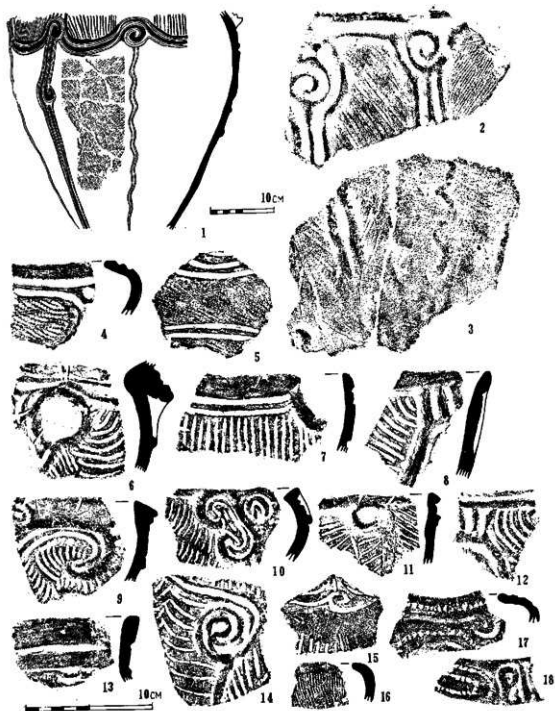
第54图 增野新切遺跡B16号住居址出土土器 (1:3, 但し1~4 1:6)



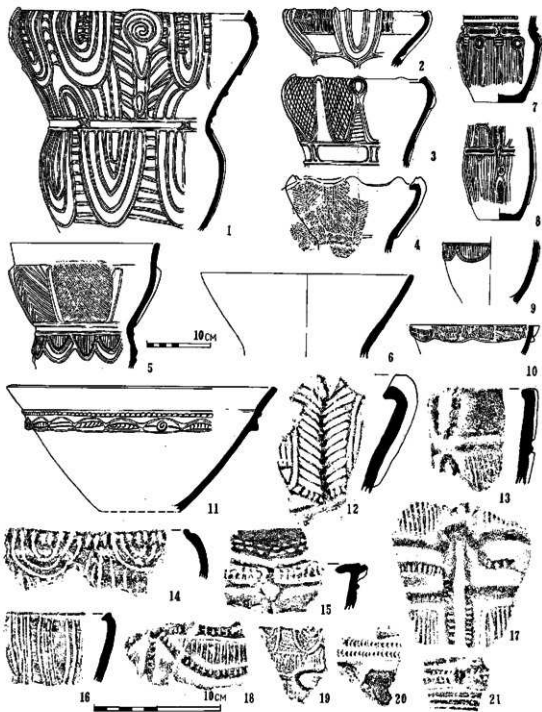
第55区 増野新切遺跡B 20号・B 21号住居址出土土器 (1:3, 但し1・2 1:6)
 (1-6 B 20号住居址, 7-15 B 21号住居址)



第56図 増野新切遺跡B22号住居址出土土器(1:3, 但し1~3 1:6)



第57図 増野新切遺跡R23号生原址出土土器 (1:3, 但し1 1:6)



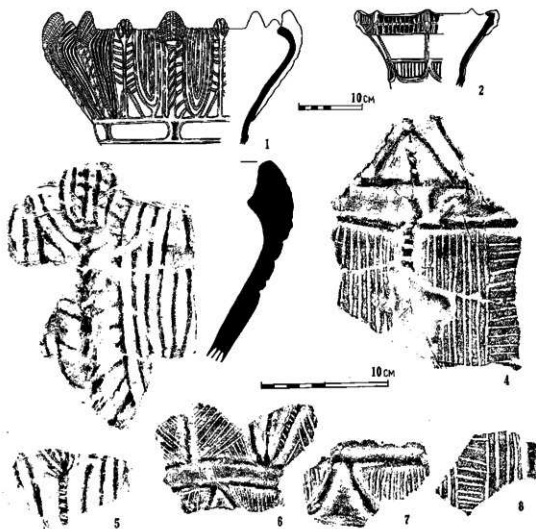
第58区 増野新切遺跡B 24号住居址出土土器 (1:3, 但し1~11 1:6)



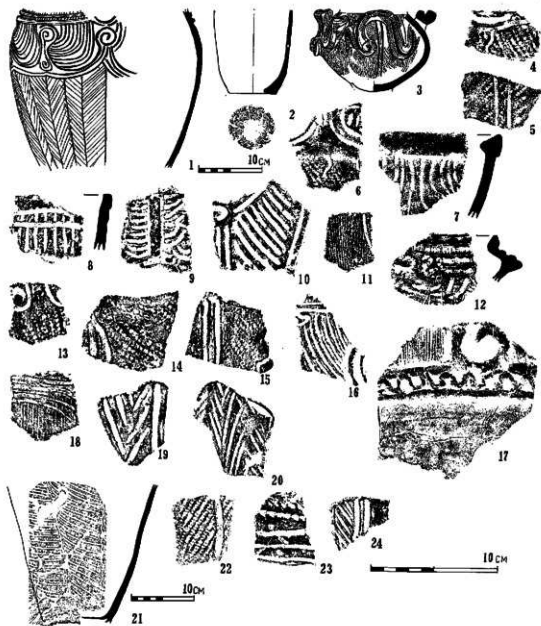
第59图 增野新切遺跡B 25号住居址出土土器 (1:3, 但し1~3 1:6)



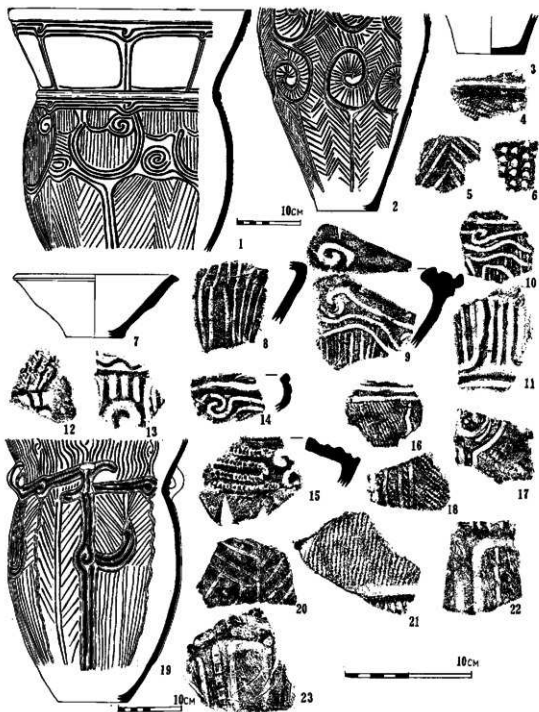
第60圖 増野新切遺跡B26号住居址出土上器 (1:3, 但し1~6 1:6)



第61图 增野新切遺跡B28号住居址出土土器 (1:3, 但し1・2 1:6)



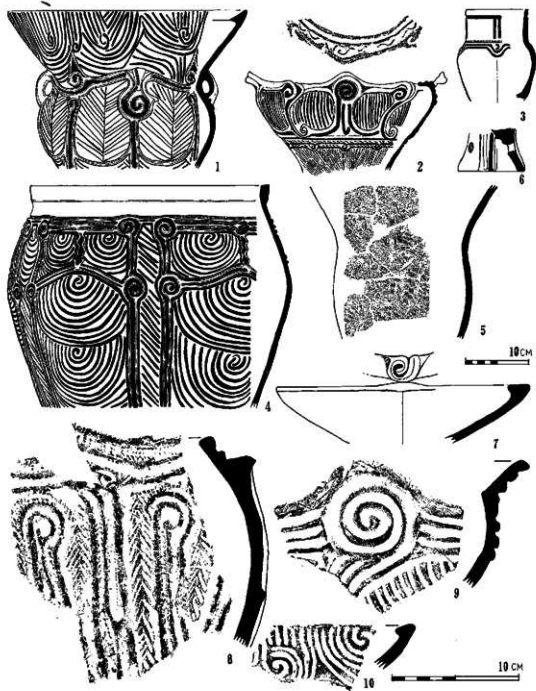
第62区増野新切遺跡B 27号・29号・B 30号住居址出土土器 (1:3, 但し1~3・21 1:6)
 (1~12 B 27号住居址, 13~20 B 29号住居址, 21~24 B 30号住居址)



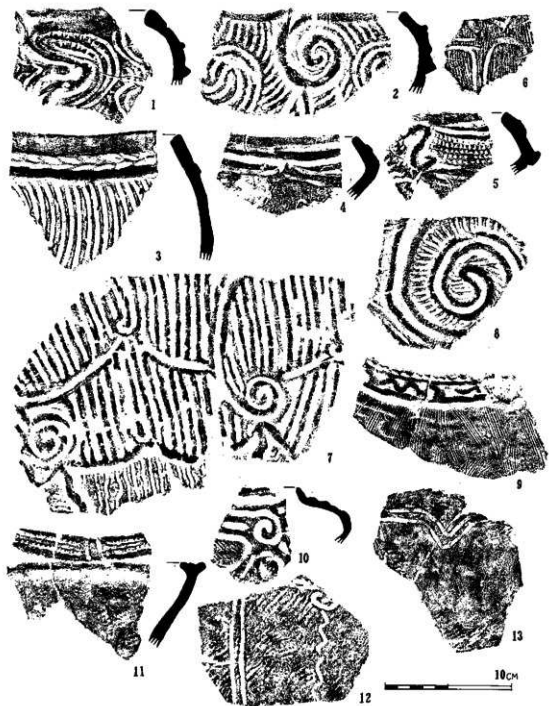
第63图 增野新切遺跡D1号・D2号住居址出土土器(1:3,但し1~3・7・19 1:6)
 (1~6 D1号住居址,7~18 D2号住居址,19~23 D2号新住居址)



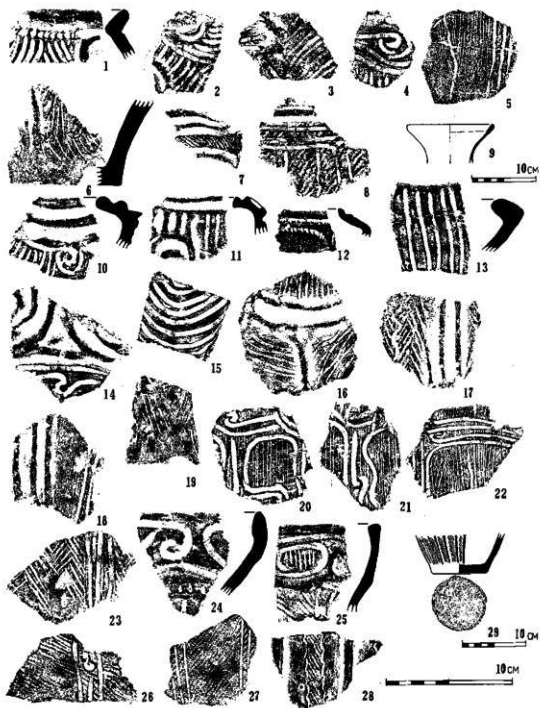
第64图 增野新切遺跡D 3号・D 4号・D 7号住居址出土土器 (1:3, 但し14・15 1:6)
 (1~13 D 3号住居址, 14 D 4号住居址, 15~22 D 4号新住居址, 23~30 D 7号住居址)



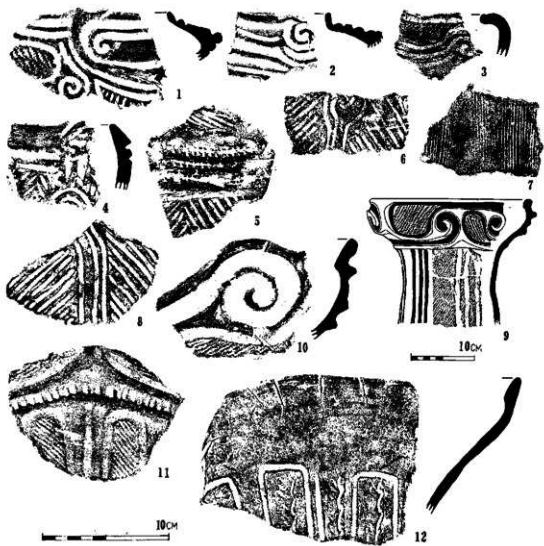
第65图 堀野新切通跡D 8号住居址出土土器 (1:3, 但し1~7 1:6)



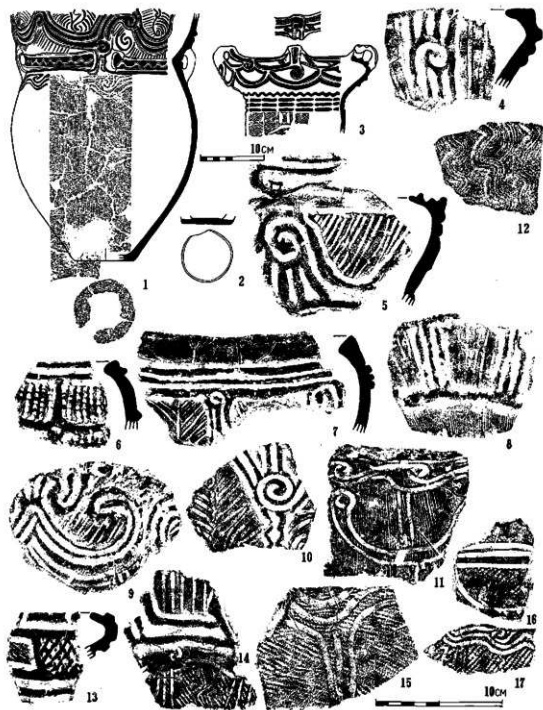
第66图 增野新切遺跡D 8号住居址出土土器 (1:3)



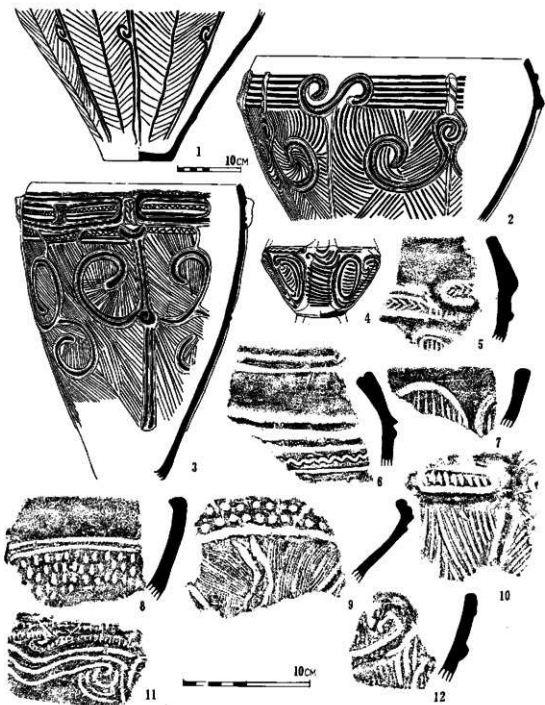
第67図 増野新瓦遺跡D 9号・D 10号住居址出土土器 (1:3, 但し9・29 1:6)
 (1-8 D 9号作柄付, 9-29 D 10号作底蓋)



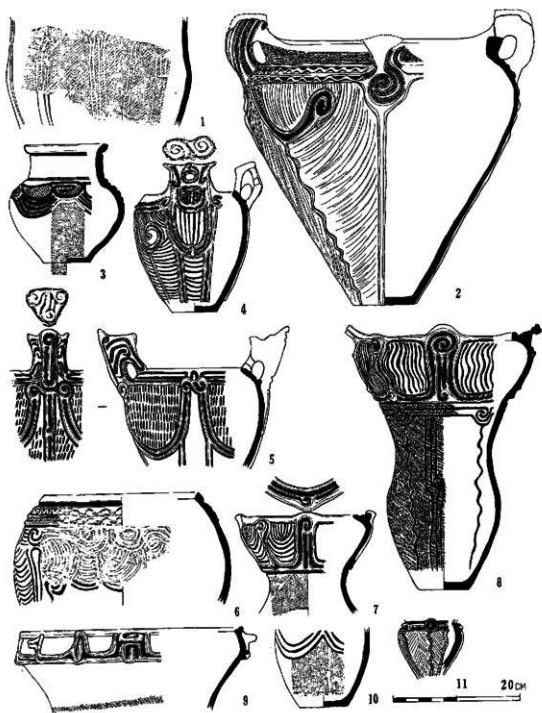
第68页 增野新切遺跡D11号住居址出土土器 (1:3, 但し9 1:6)



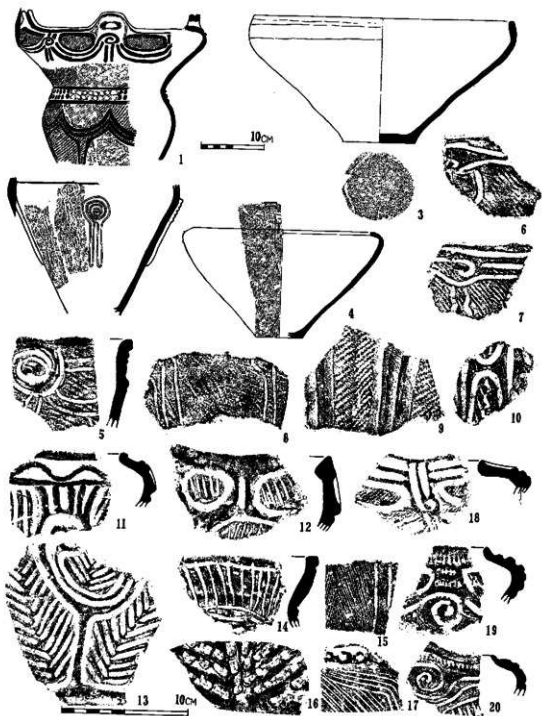
第69図 増野新切遺跡D21号住居址出土土器（1：3，但し1～3 1：6）



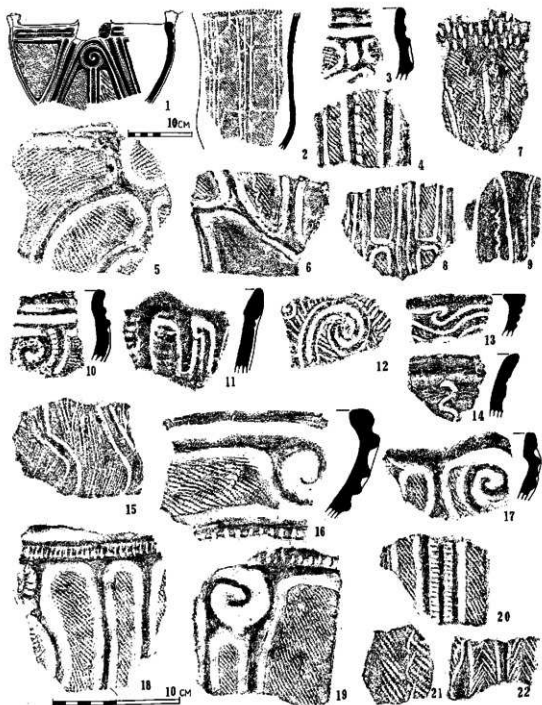
第70圖 増野新刃遺跡D13号住居址出土土器 (1:3, 但し1~4 1:6)



第71图 增野新切迹跡D14号住居址出土土器 (1:6)



第72図 増野新切遺跡D14号住居址出土土器 (1:3, 但し1~4 1:6)



第73图 增野新切迹跡D15号・D16号住居址出土土器 (1:3, 但し1・2 1:6)
 (1~15 D15号住居址, 16~22 D16号住居址)



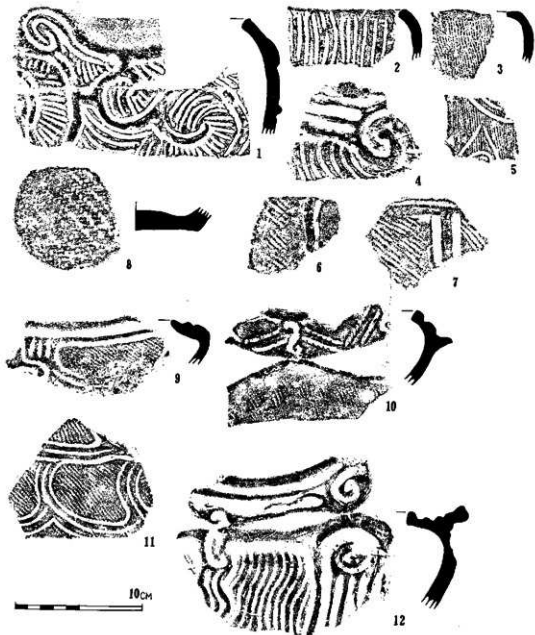
第74図 増野新切遺跡D 17号・D 19号・D 20号住居址出土土器(1:3, 但し1 1:6)

(1~12 D 17号住居址, 13~20 D 19号住居址, 21~29 D 20号住居址)



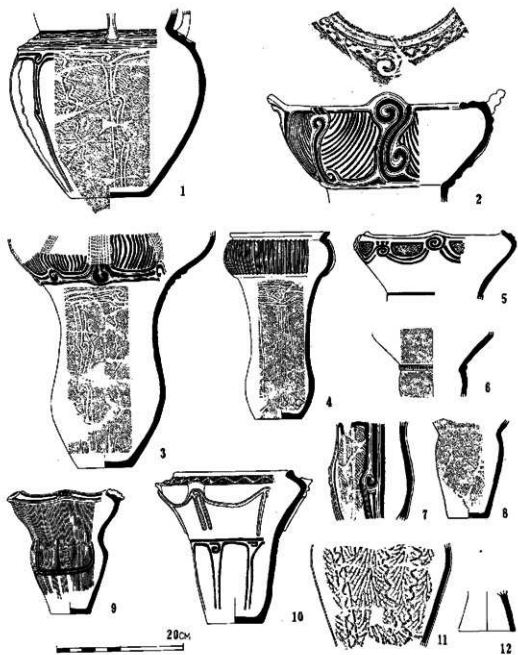
第75图 增野新刃遺跡D 21号・D 22号住居址出土土器 (1:3, 但L 20 1:6)

(1-19 D 21号住居址, 20-31 D 22号住居址)

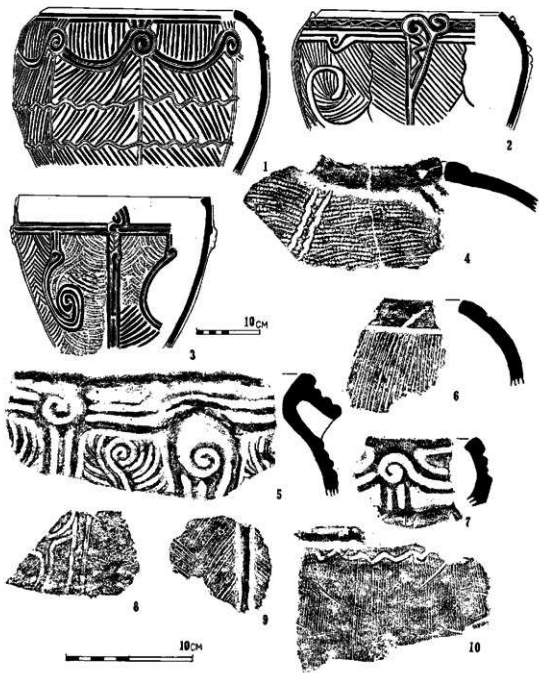


第76图 增野新切遺跡D 23号・D 26号住居址出土土器 (1 : 3)

(1~8 D 23号住居址, 9~12 D 26号住居址)



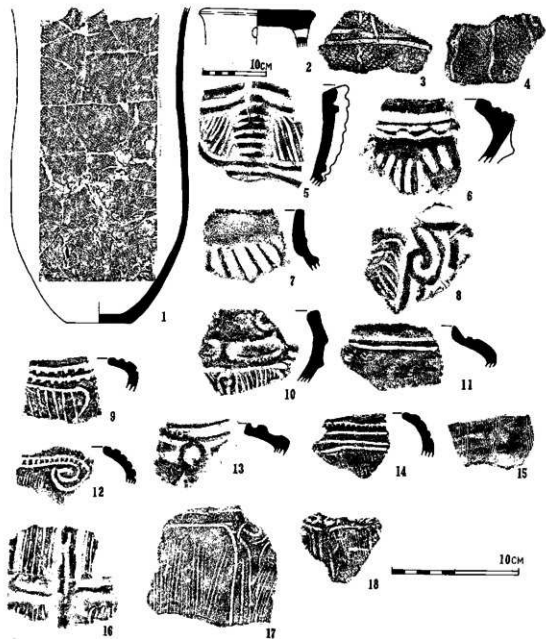
第77图 增野新切道跡D 24号住居址出土土器 (1:6)



第78図 増野新切遺跡D24号住居址出土土器 (1:3, 俱し1~3 1:6)



第79区 増野新切遺跡D25号住居址出土土器 (1:3, 但し1~3 1:6)

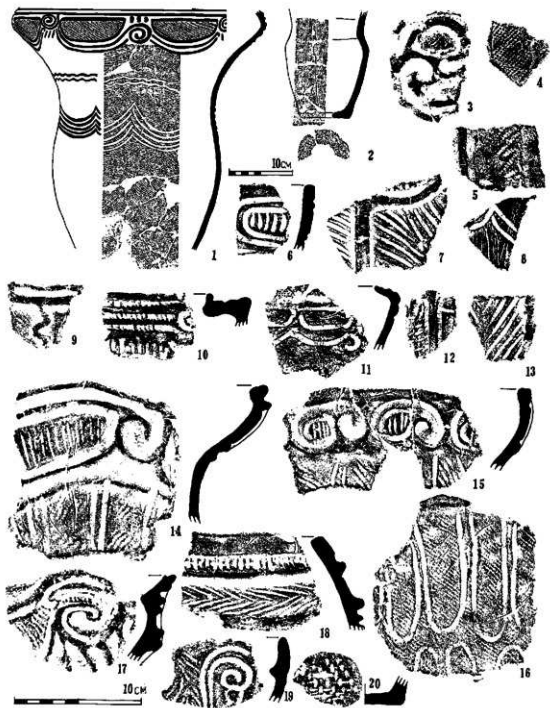


第80図 増野新切遺跡D26号住居址出土土器 (1:3, 但し1・2 1:6)



第81图 增野新切道跡D27号・D28号住居址出土土器 (1:3, 但し1 1:6)

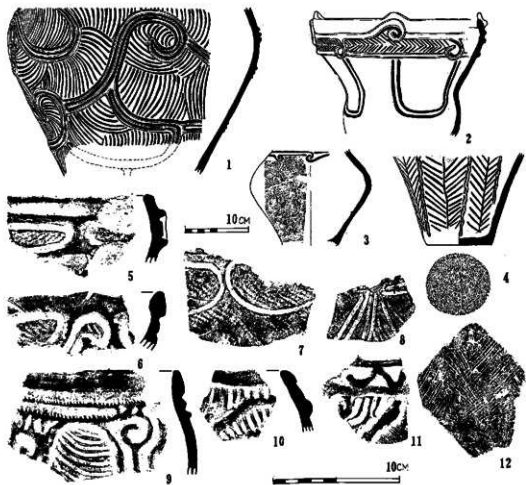
(1・6-14 D27号住居址床面, 2-5 27号住居址土器, 15-21 D28号住居址)



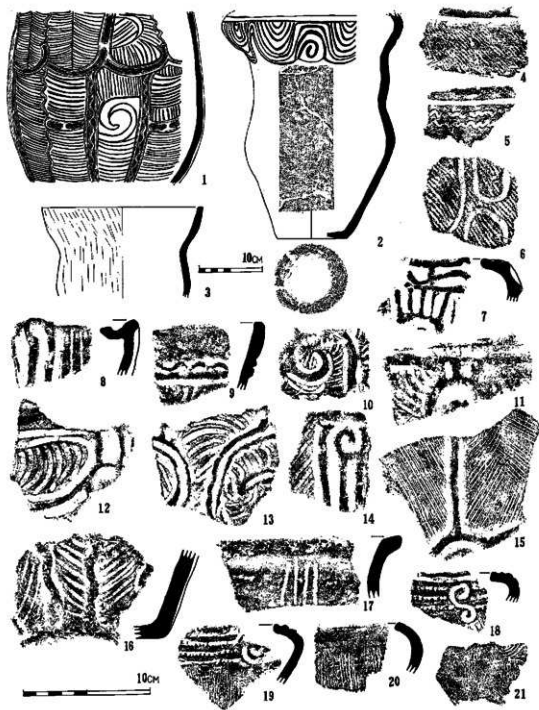
第82図 増野新切遺跡D 29号・D 31号・D 33号住居址出土土器(1:3, 但し1・2 1:6)
 (1-8 D 29号住居址, 9-13 D 31号住居址, 14-20 D 33号住居址)



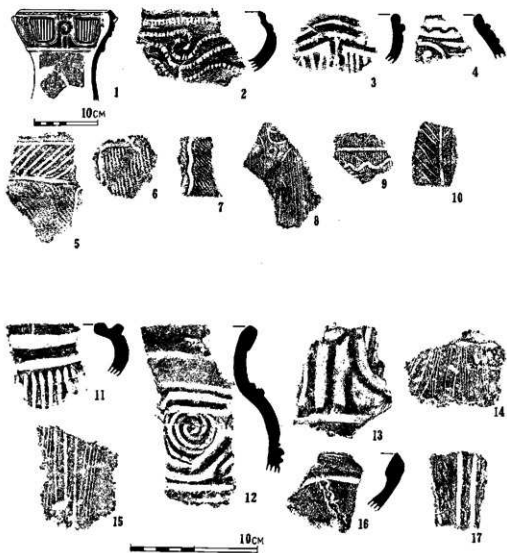
第83图 增野新切遺跡D30号上住居址出土土器(1:3)



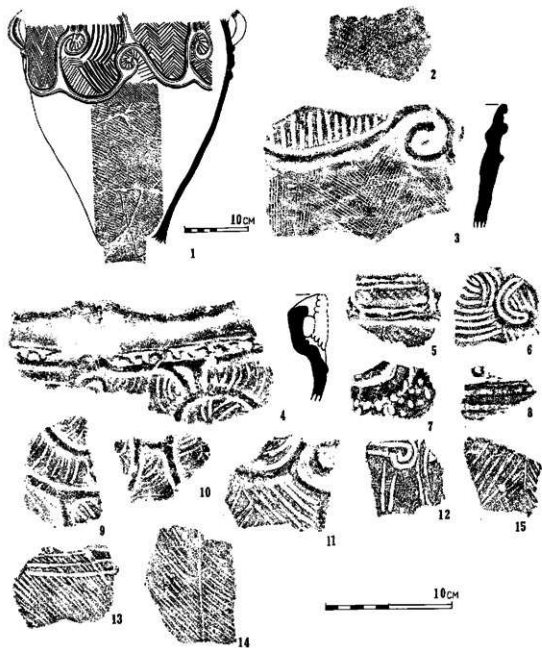
第84図 増野新切遺跡D30号下住居址出土土器 (1:3, 但し1~4 1:6)



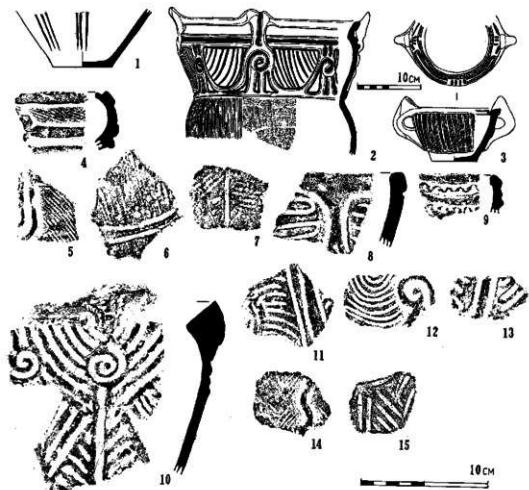
第85图 增野新切遺跡D 32号住居址出土土器 (1:3, 凡し1~3 1:6)



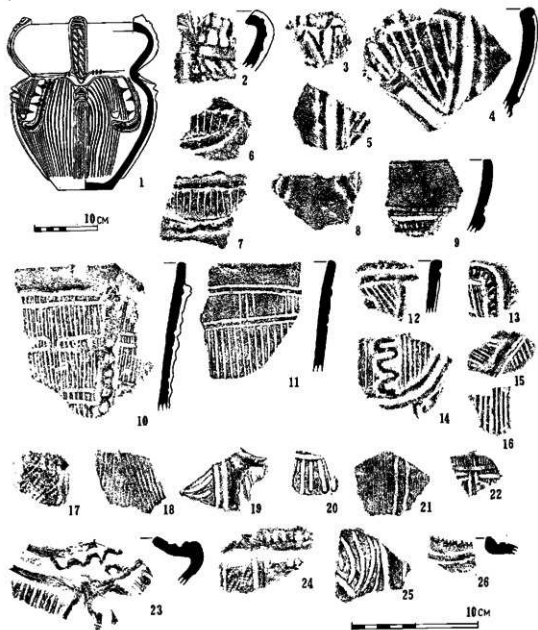
第86图 増野新切遺跡D34号・D35号住居址出土土器(1:3, 但し1 1:6)
 (1~10 D34号住居址, 11~17 D35号住居址)



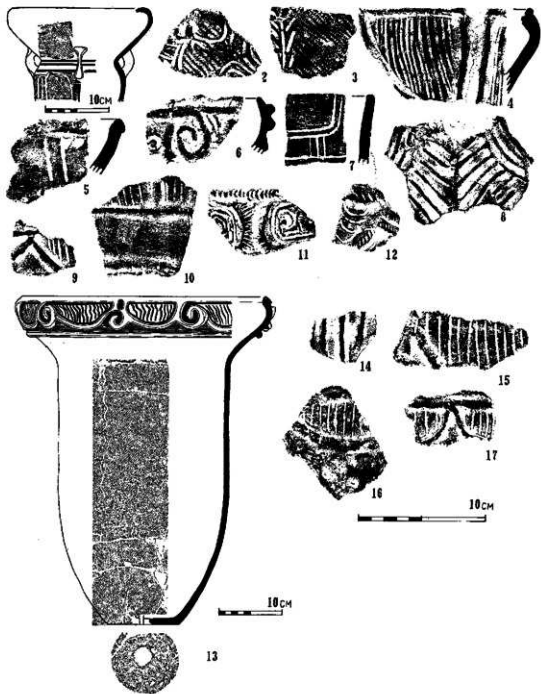
第87图 增野新切遺跡D36号住居址出土土器 (1:3, 但し1 1:6)



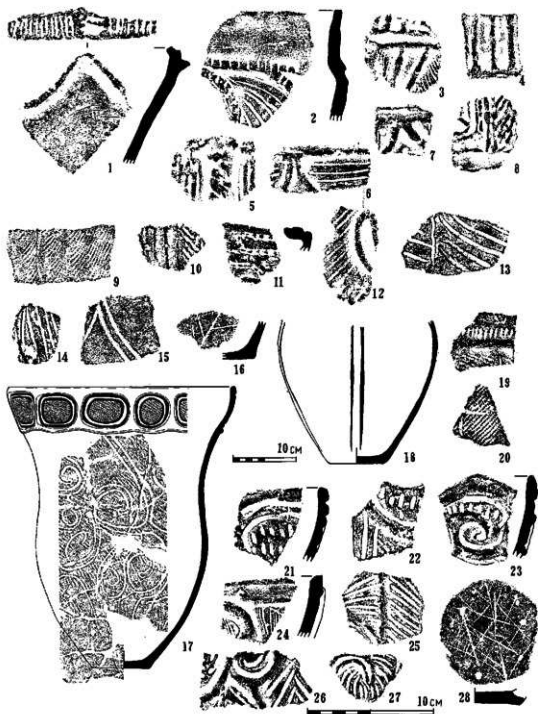
第88图 增野新切遺跡D37号住居址出土土器(1:3, 但し1~3 1:6)



第89図 増野新切遺跡D 38号・D 39号・D 40号住居址出土土器(1:3, 但し1 1:6)
 (1~16 D 38号住居址, 17~22 D 39号住居址, 23~25 D 40号住居址)

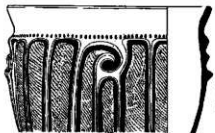
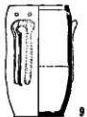
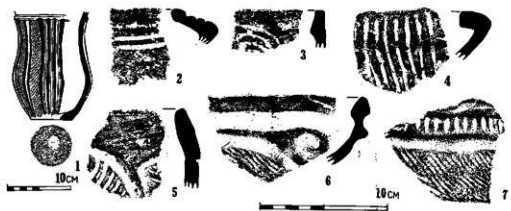


第90図 増野新切遺跡D 42号・D 44号住居址出土土器 (1:3, 但し1・13 1:6)
 (1-12 D 42号住居址, 13 D 44号住居址, 14-17 D 40号住居址)

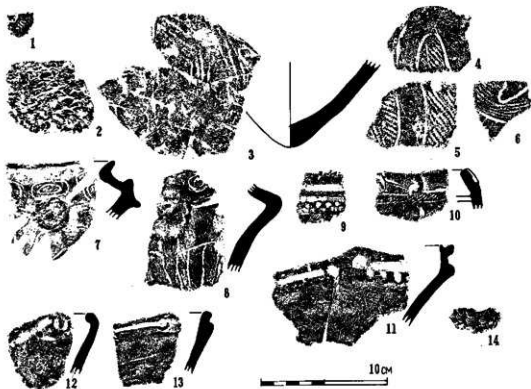


第91図 増野新切遺跡D 45号・D 46号・D 47号住居址出土土器(1:3, 但し17・18 1:6)

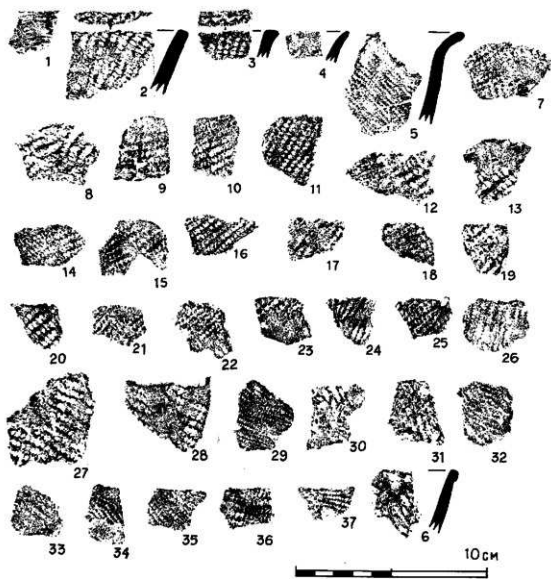
(1~8 D 45号住居址, 9~16 D 46号住居址, 17~28 D 47号住居址)



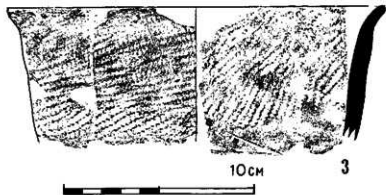
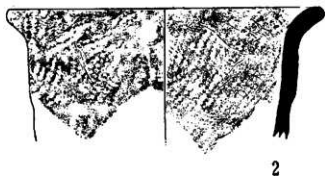
第92図 増野新切遺跡D48号住居址及びD区土壕内出土土器(1:3, 但し1・8~12 1:6)
 (1~7 D48号住居址, 8・9 土壕2, 10 土壕5, 11 土壕8, 12 土壕9)



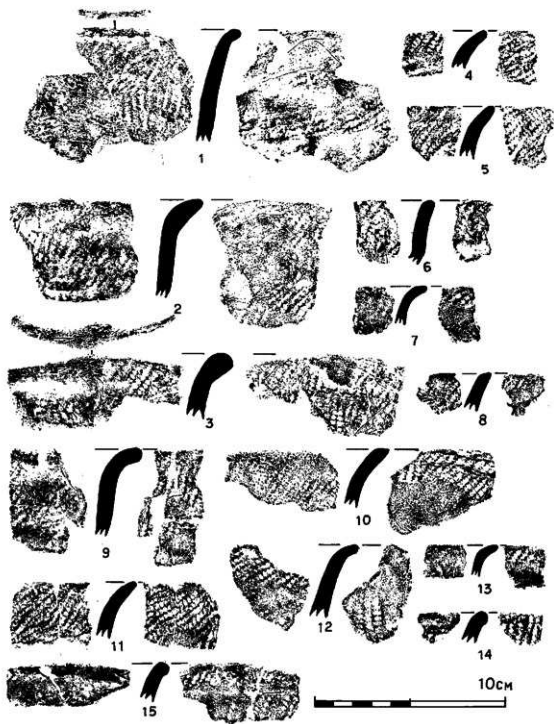
第93図 増野新切遺跡出土土器 (1:3)



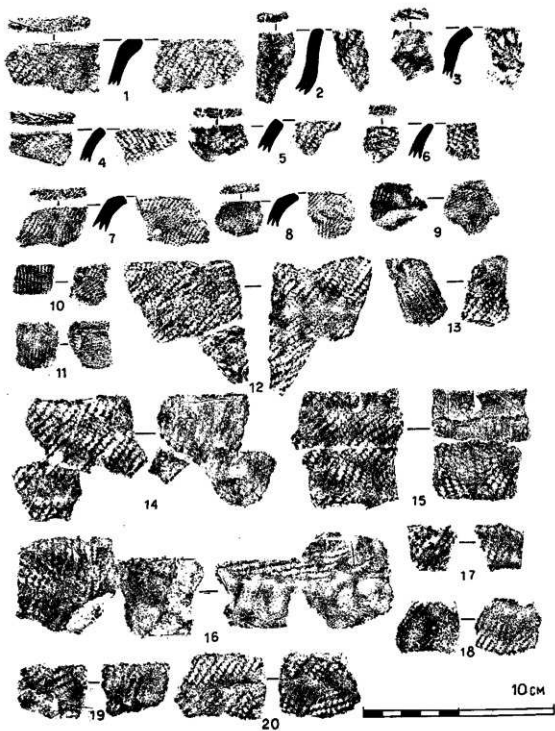
第94図 増野川子石遺跡A地点出土七器(1:2)



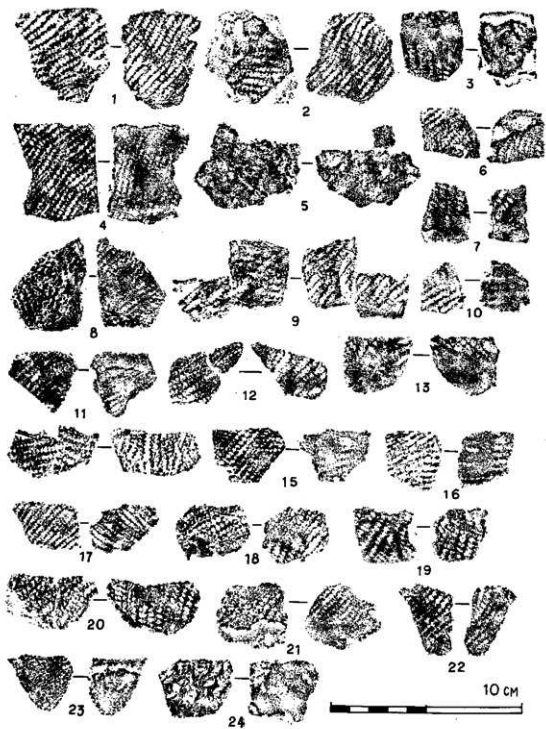
第95図 増野川子石遺跡A 地点出土土器 (1 : 2)



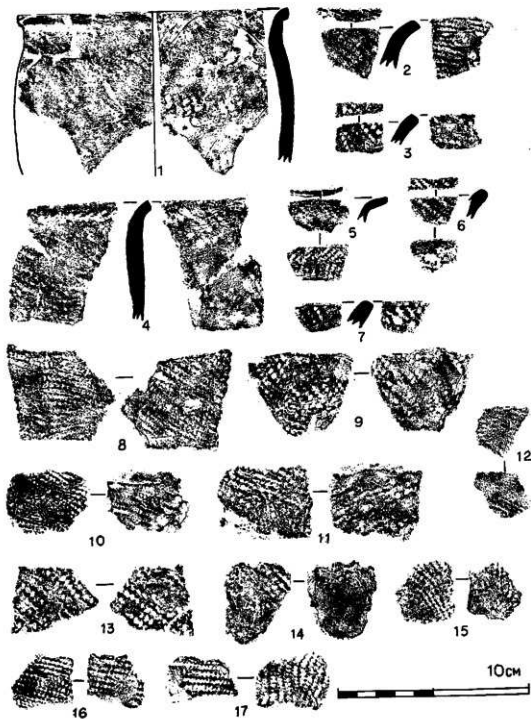
第96图 增野川子石遺跡A地点出土土器 (1:2)



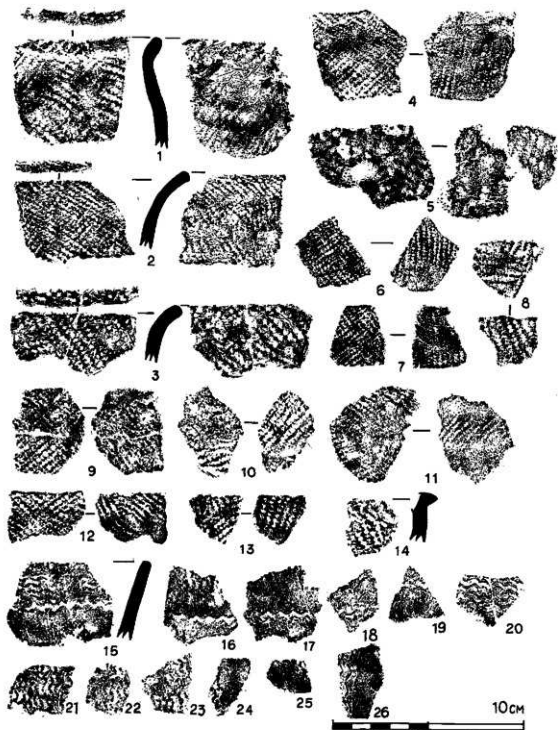
第97圖 増野川子石遺跡A地点出土土器（1：2）



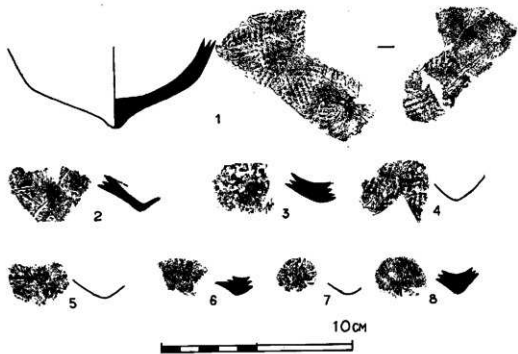
第98圖 渾野川子石道跡A地点出土土器(1:2)



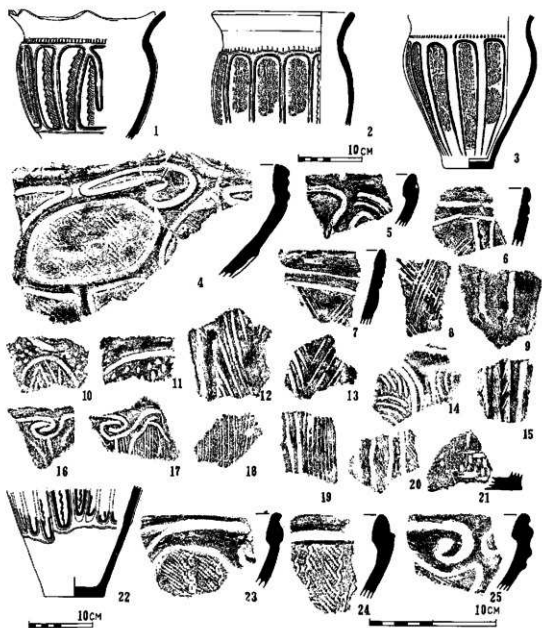
第99图 堺野川子石遺跡A地点出土土器(1:2)



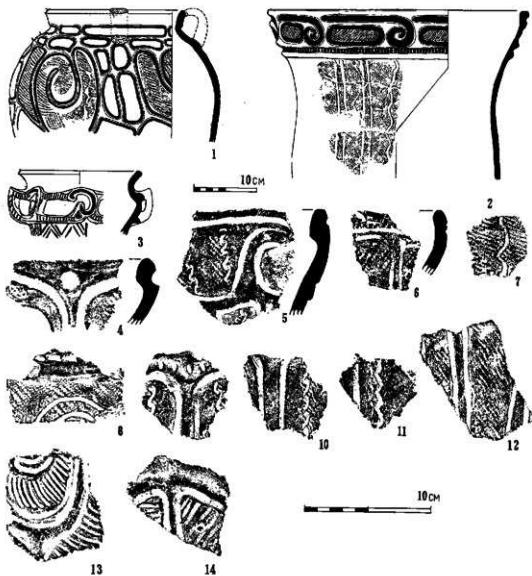
第100圖 增野川子石遺跡A地点出土土器（1：2）



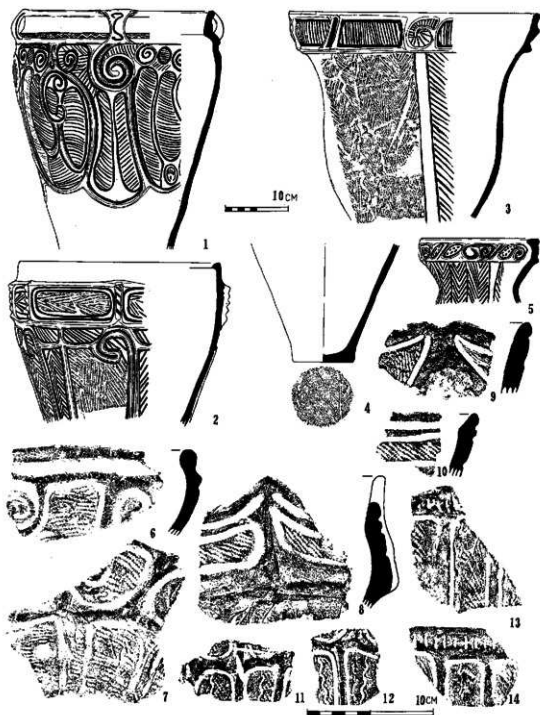
第101图 增野川子石遺跡A地点出土土器(1:2)



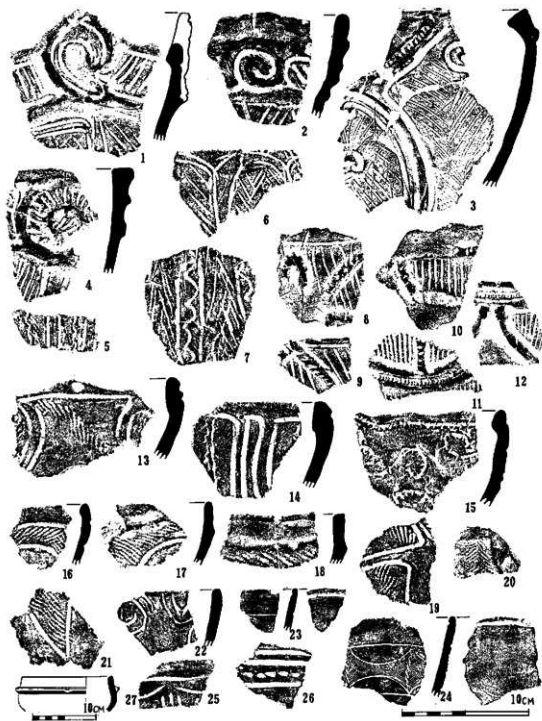
第102圖 増野川子石遺跡1号・4号住居址出土土器(1:3, 但し1~3・22 1:6)
 (1~2: 1号住居址, 22~25 4号住居址)



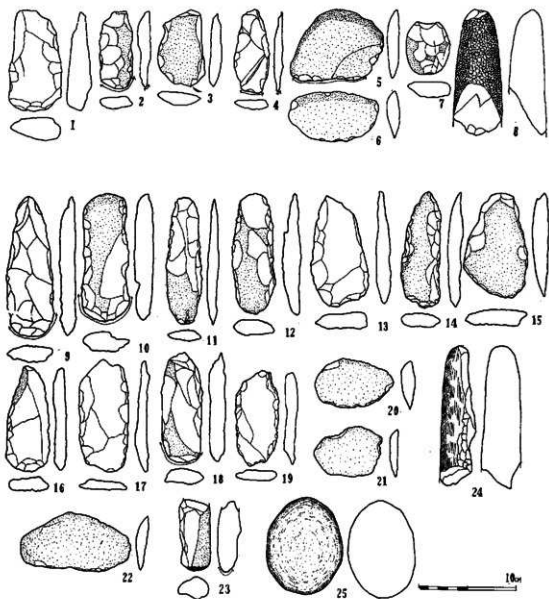
第103図 増野川子石遺跡2号・4号住居址出土土器（1：3，佐し1～3 1：6）



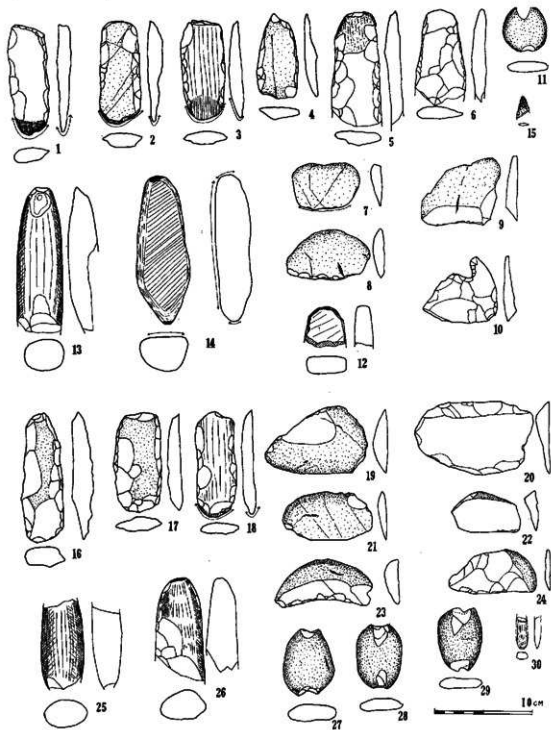
第104区 増野川子石流跡3号・4号住居址出土土器 (1:3, 但し1~5 1:6)



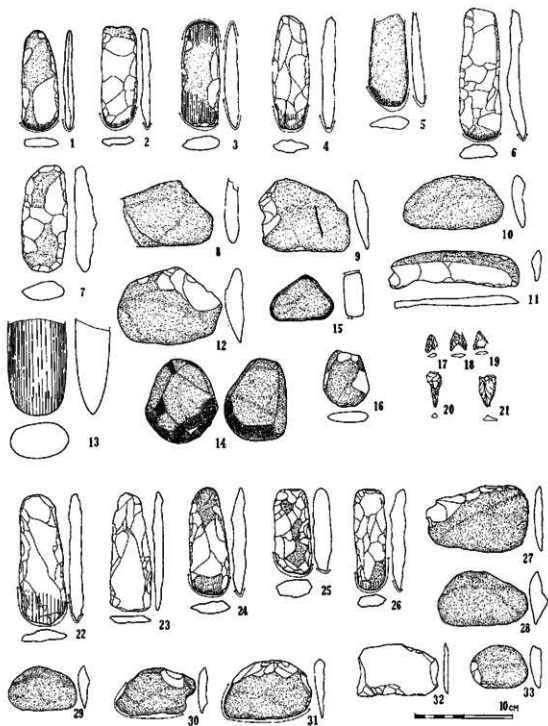
第105図 増野川子石遺跡3号住居址出土土器及びその他の七器 (1:3, 但し27 1:6)
 (1-7 3号住居址, 8-27 その他)



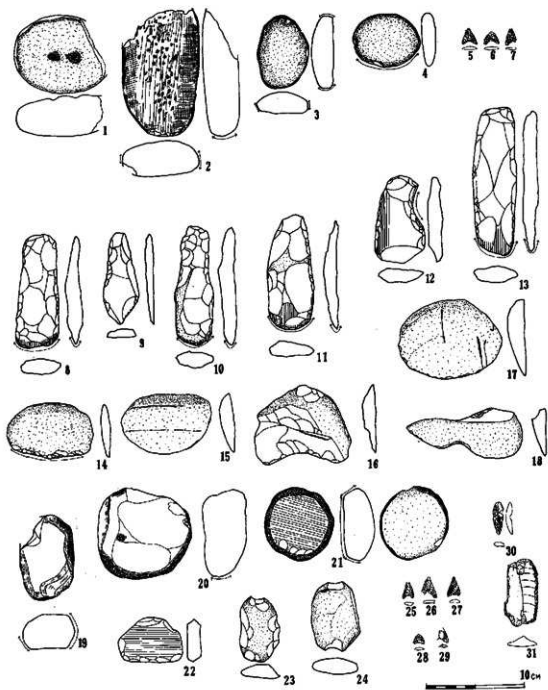
第106図 神田裏遺跡及新田西裏遺跡その他出土石器（1：4）（1～8 神田裏遺跡，9～25 新田西裏遺跡）



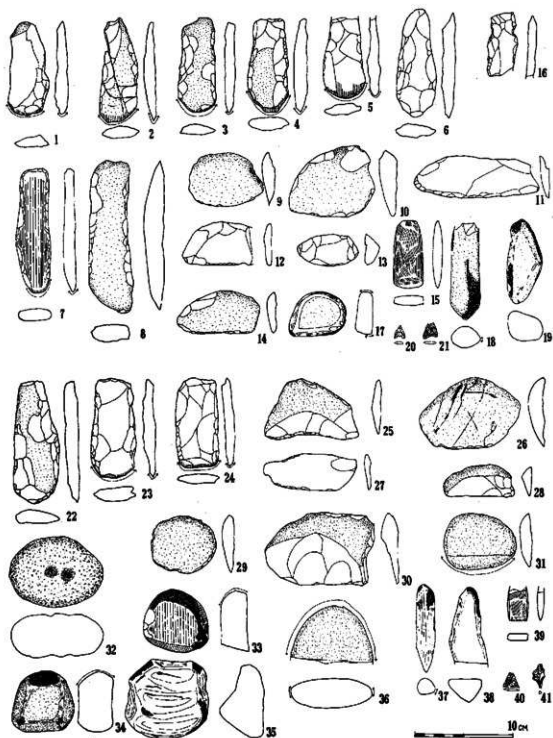
第107图 增野新切遺跡出土石器 (1:4)(1~15 B 1号住居址, 16~30 B 2号住居址)



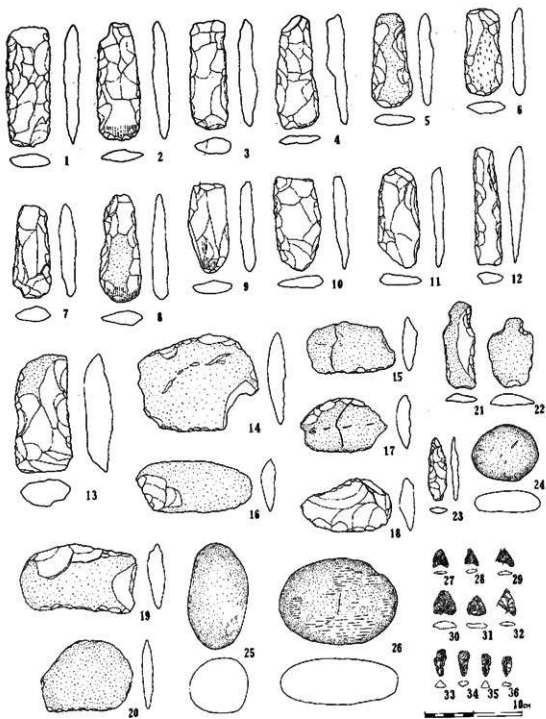
第108圖 増野新切遺跡出土石器 (1:4)(1~21 B 3号住居址, 22~33 B 4号住居址)



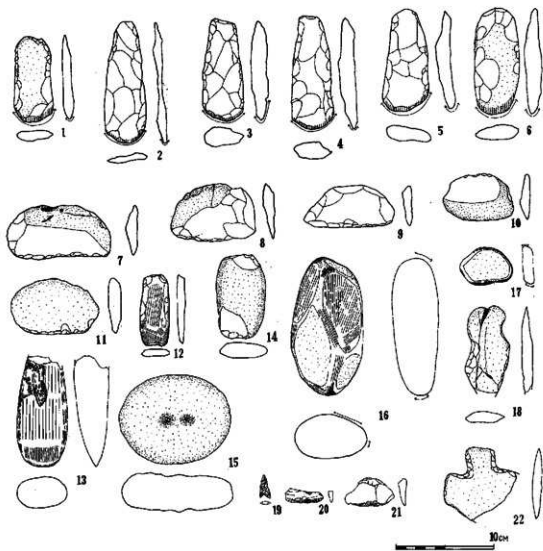
第109图 增野新切遺跡出土石器(1:4)(1~7 B4号住居址, 8~31 B5号住居址)



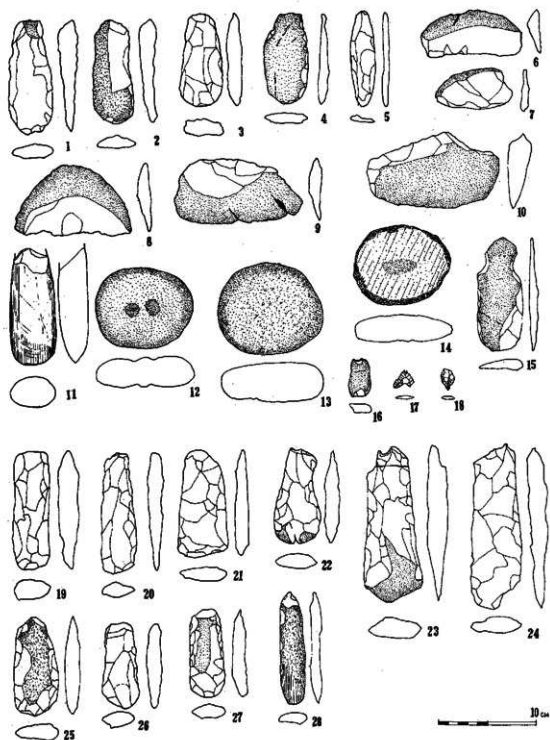
第110图 增野新切遺跡出土石器(1:4)(1-21 B 6分作区址, 22-41 B 7分作区址)



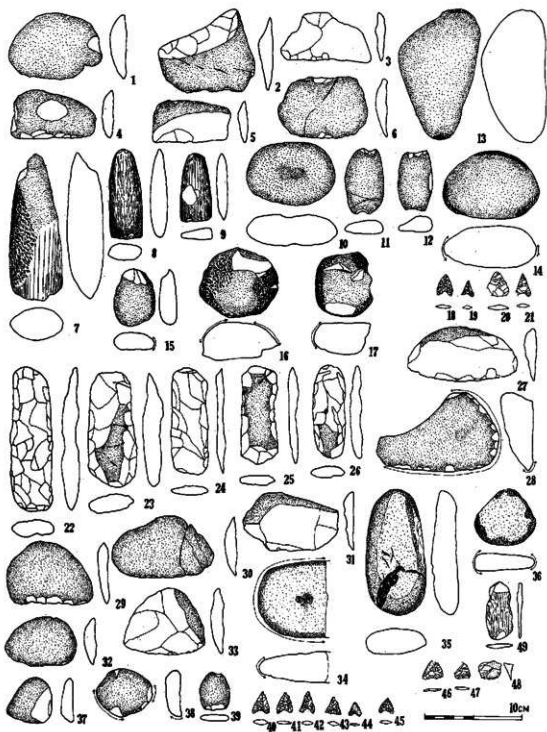
第111图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~36 B 8号住居址)



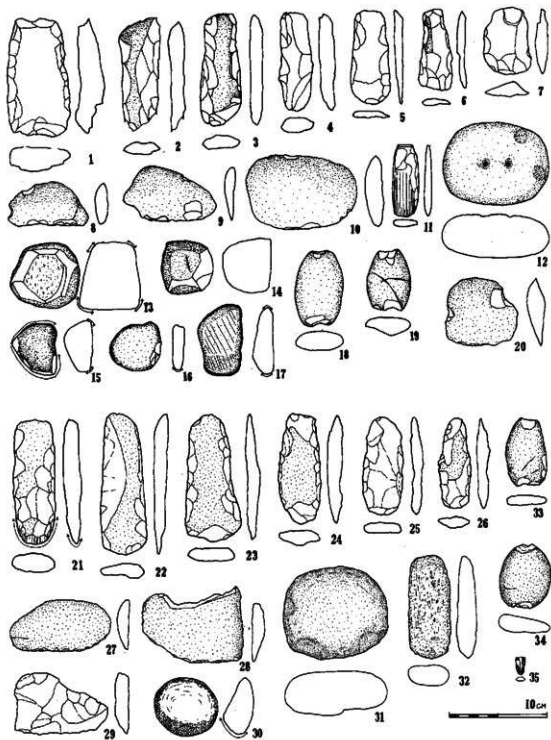
第112图 増野新切遺跡出土石器(1:4)(1~22 B9号住居址)



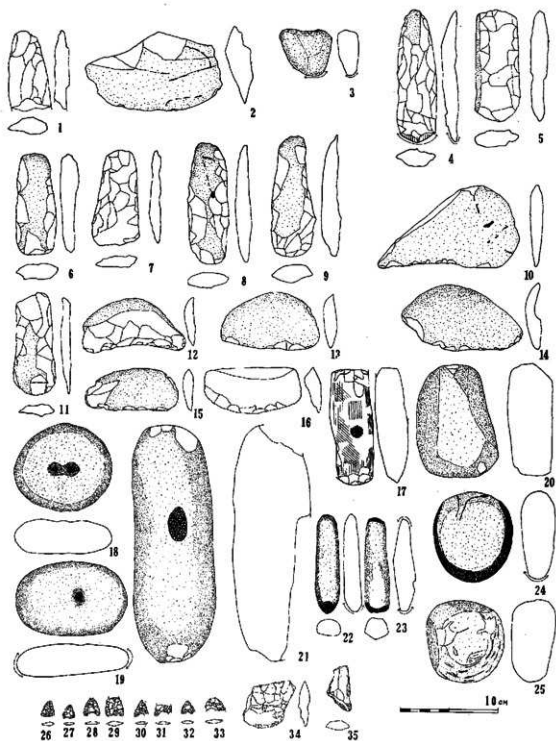
第113図 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~18 B10号住居址, 19~28 B11号住居址)



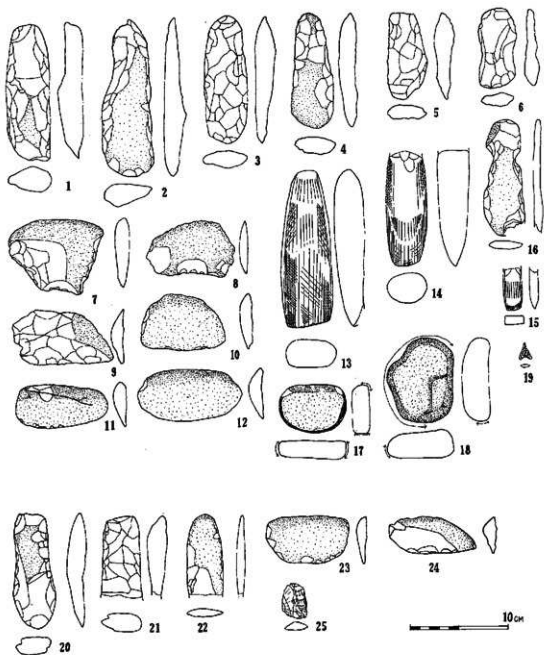
第114图 增野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1 B 11号住居址埋架内, 2~21 B 11号住居址, 22~49 B 12号住居址)



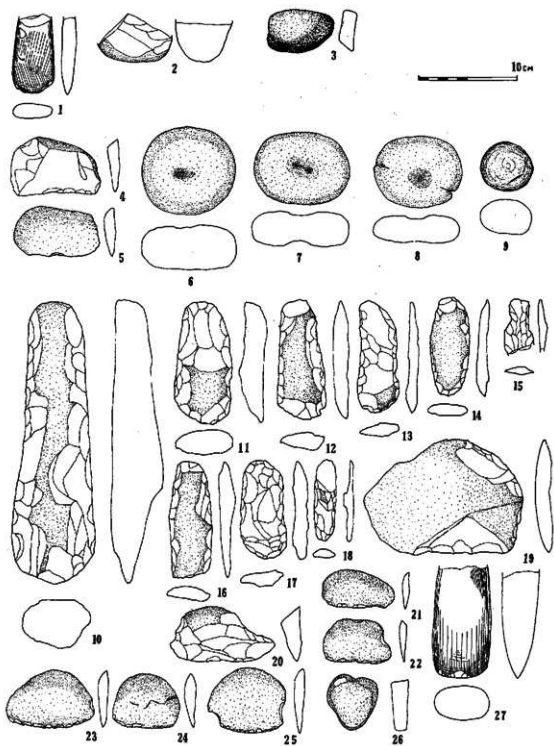
第115图 增野新切遺跡出土石器(1:4)(1-20 B13号住居址, 21-35 B14号住居址)



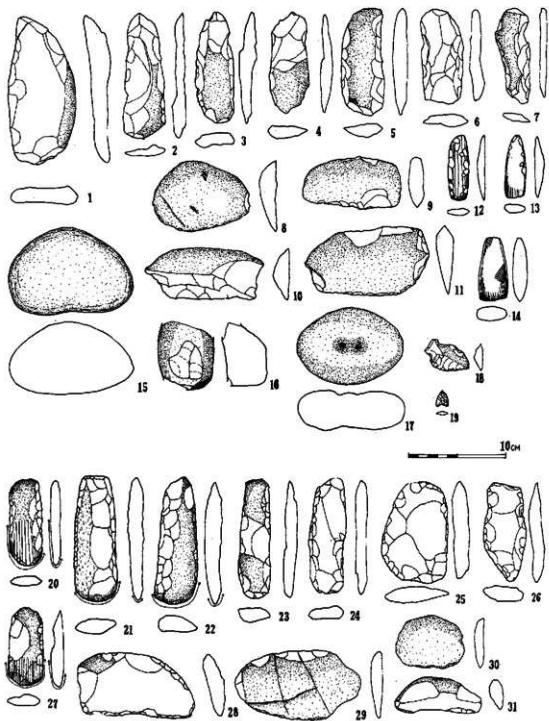
第116图 增野新切造跡出土石器 (1:4) (1-3 B15号住居址, 4-35 B16号住居址)



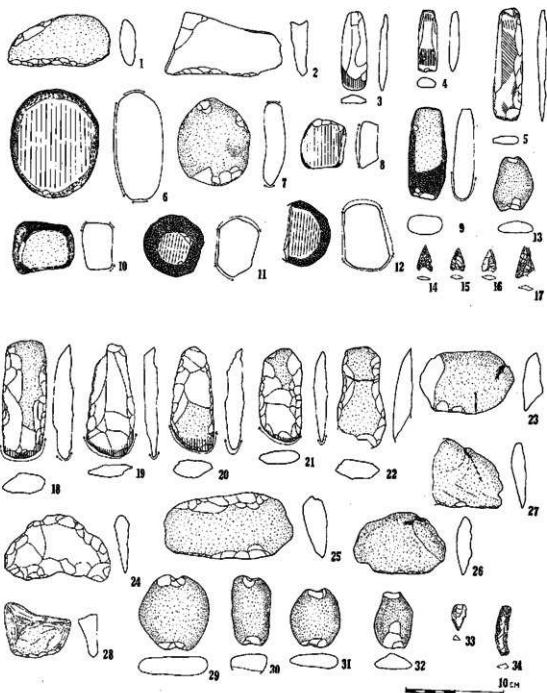
第117图 增野新切遺跡出土石器(1:4)(1~19 B17号住居址, 20~25 B18号住居址)



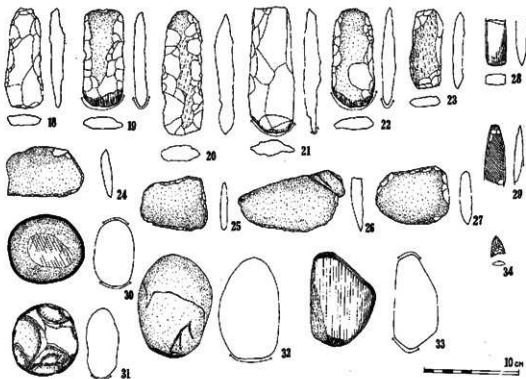
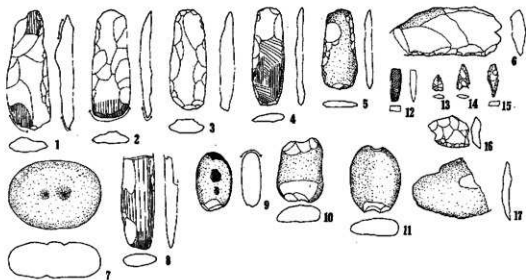
第118图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~3 R19号住居址, 4~9 R20号住居址, 10~27 R21号住居址)



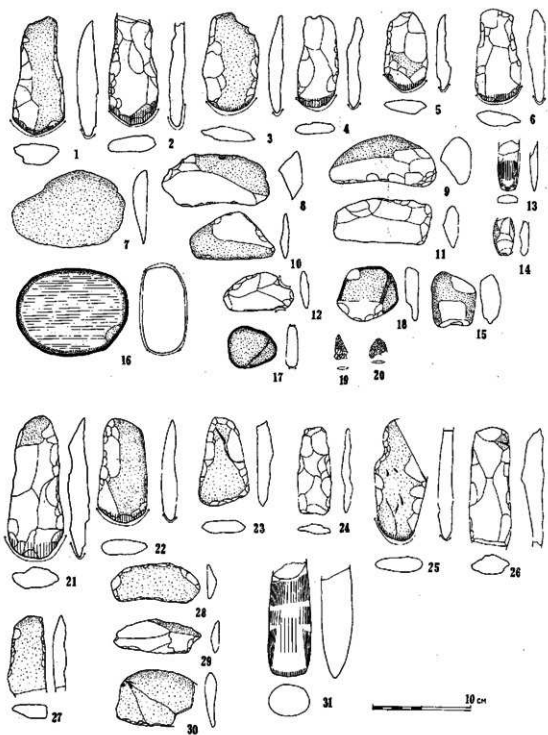
第119图 增野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1~19 B22号住居址, 20~31 B23号住居址)



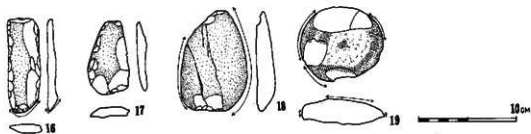
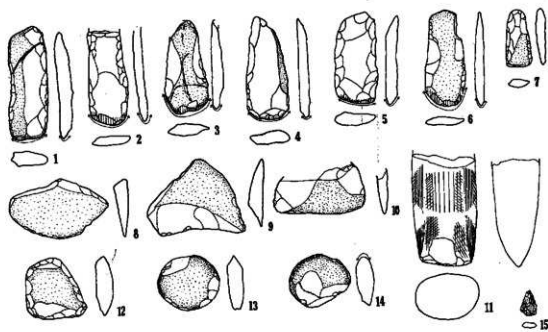
第120图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~17 B23号住居址, 18~34 B24号住居址)



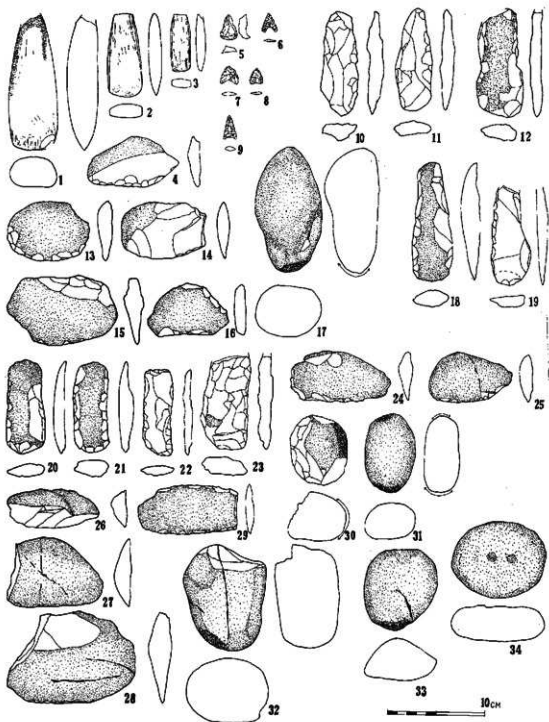
第121图 增野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1~17 B 25号住居址, 18~34 B 26号住居址)



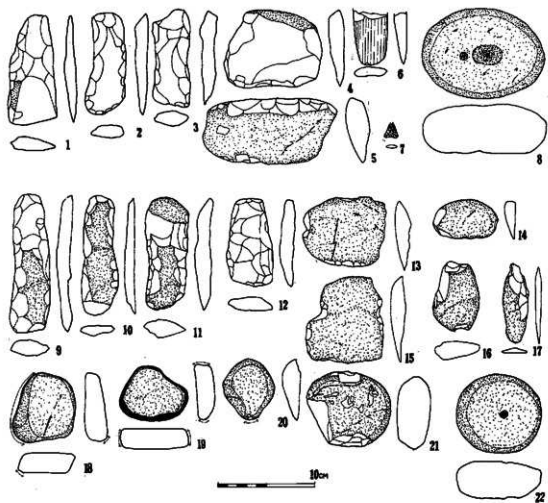
第122图 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~20 B 27号住居址, 21~31 B 28号住居址)



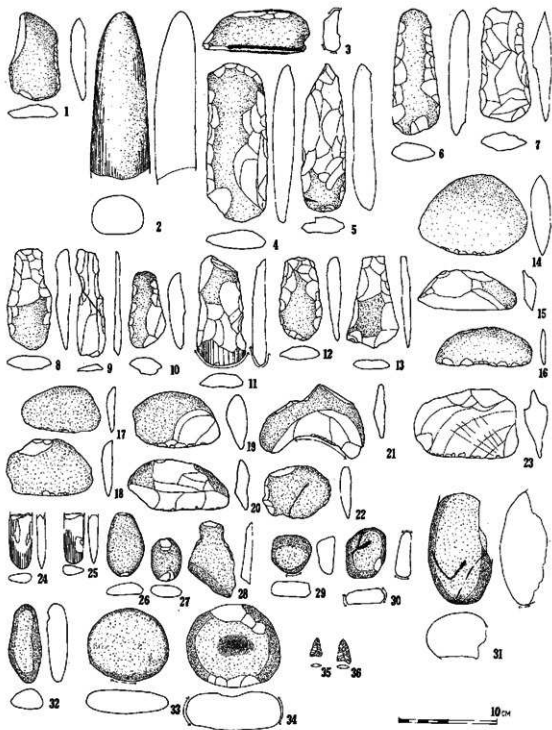
第123图 增野新切遺跡出土石器 (1:4)(1~15 B29号住居址, 16~19 B30号住居址)



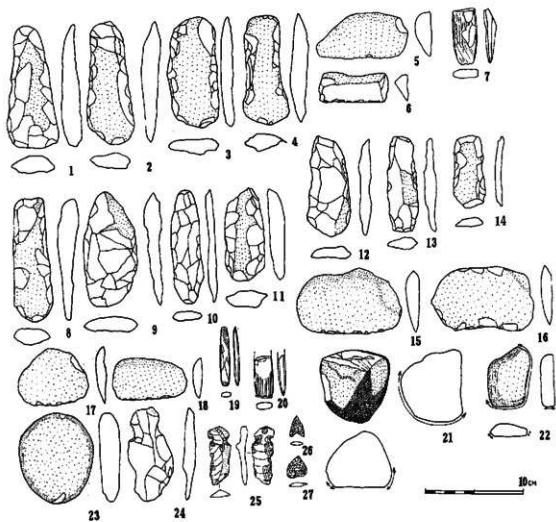
第124図 増野新切遺跡出土石器(1:4)(1~9 D1号住居址, 10~17 D2号住居址(新), 18~34 D3号住居址)



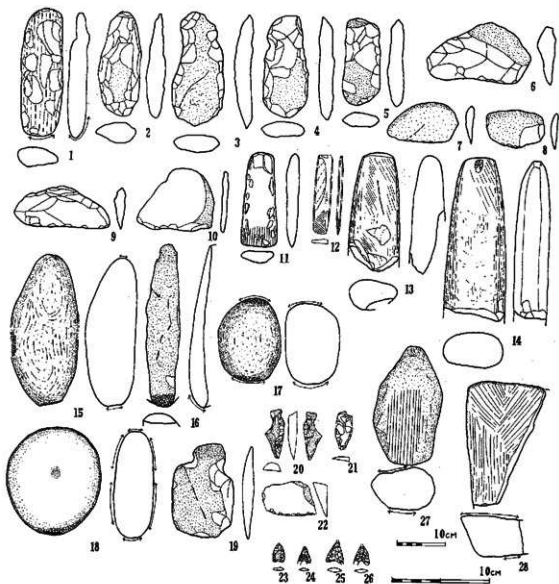
第125图 增野新切遺跡出土石器 (1:4)(1~8 D4居住層址, 9~22 D7丹生層址)



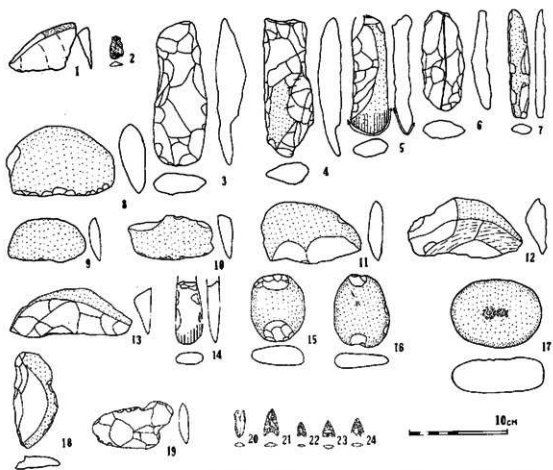
第126图 增野新切遺跡出土石器 (1 : 4)(1~3 D 8号住居址上部石組, 4~36 D 8号住居址)



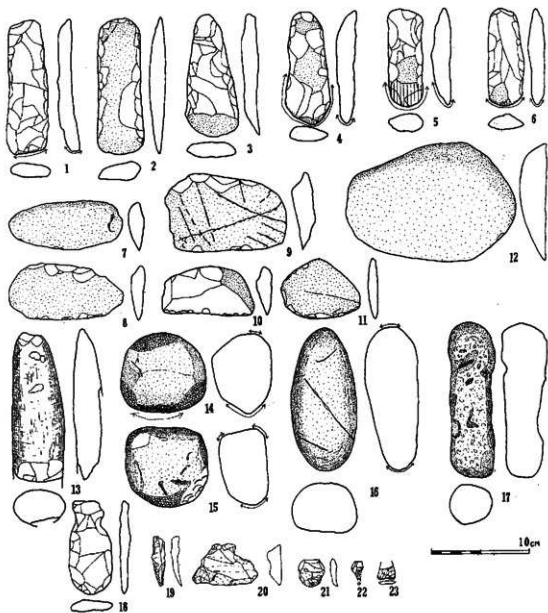
第127图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~7 D 9号住居址, 8~27 D 10号住居址)



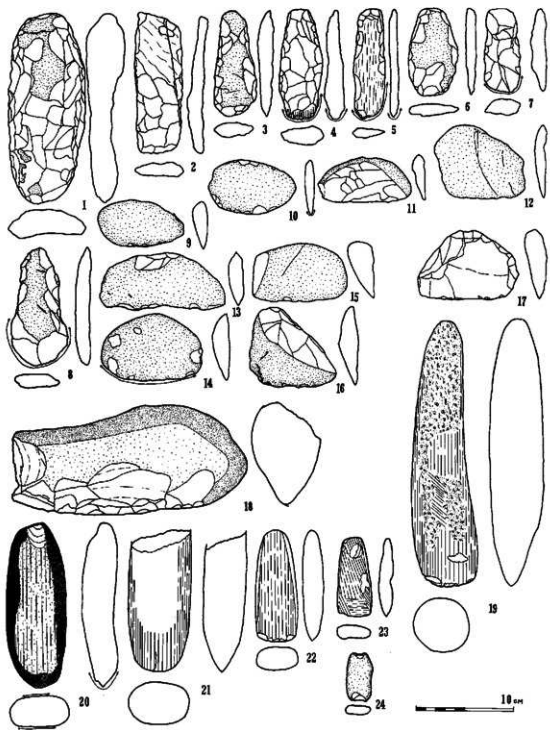
第128図 増野新切遺跡出土石器 (1:4, 但し27 1:8) (1~28 D11住居址)



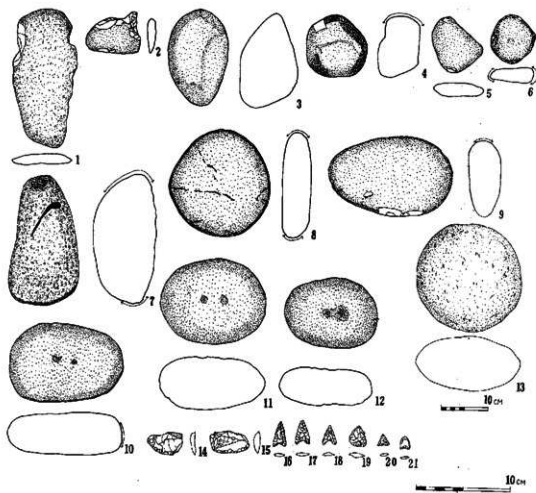
第129圖 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1-2 D12号住居址埋藏内, 3-24 D12号住居址)



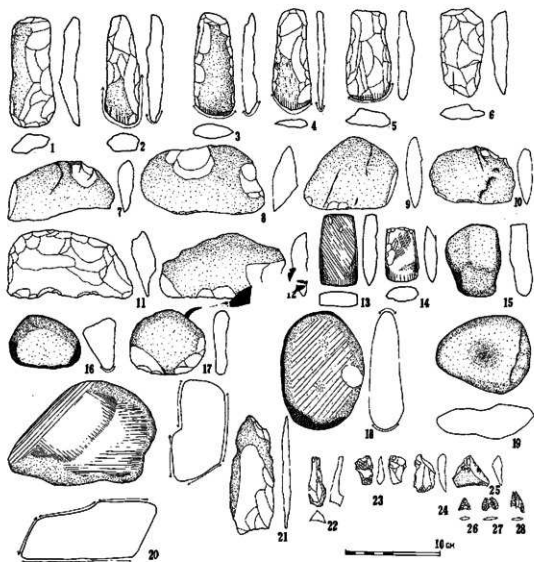
第130图 增野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1~23 D13号住居址)



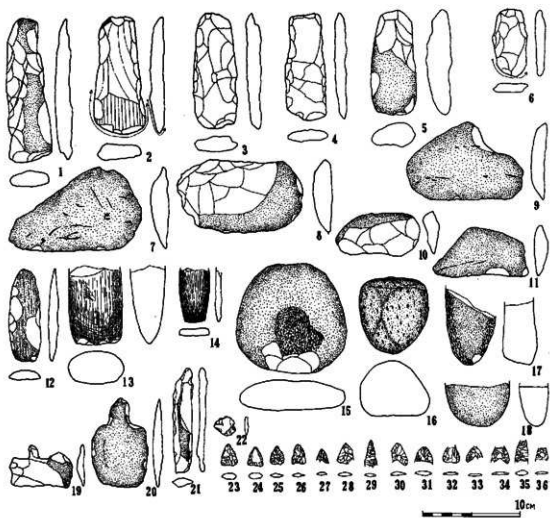
第131图 增野新切遺跡出土石器 (1:4)(1~24 D14号住居址)



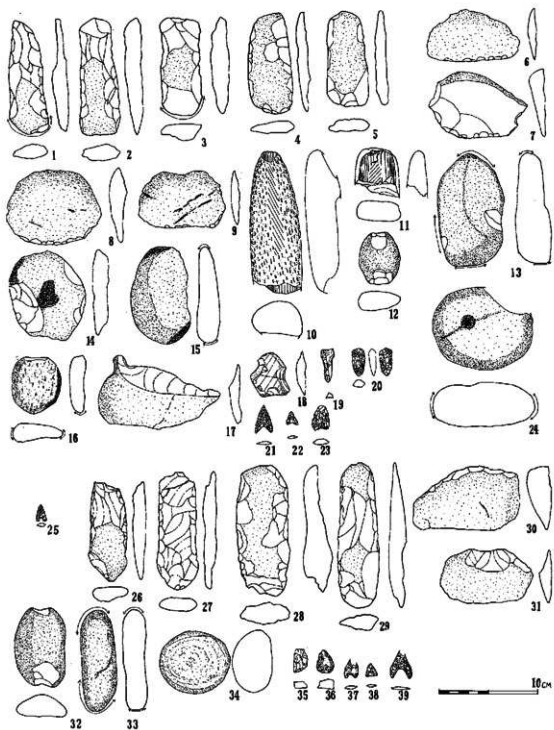
第132図 増野新切遺跡出土石器 (1:4, 但し13 1:8) (1~21 014岡佐野址)



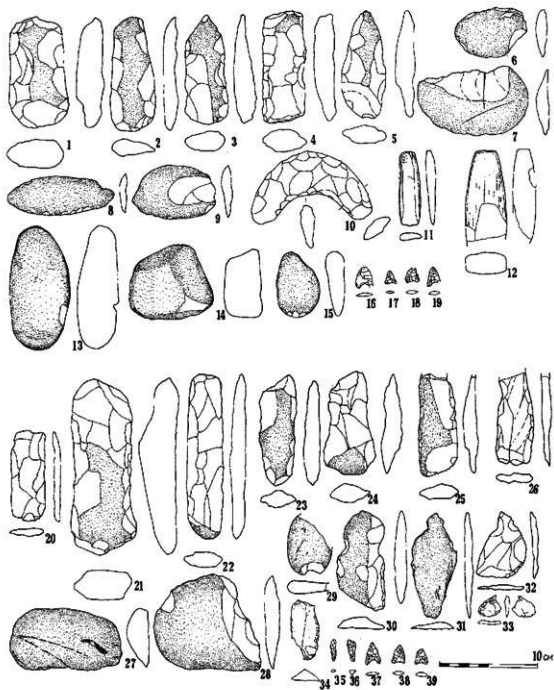
第133图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1-28 D15号住戸址)



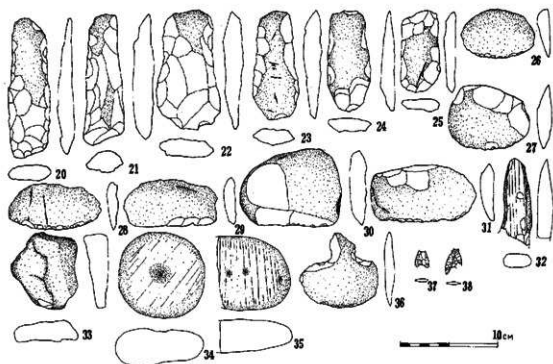
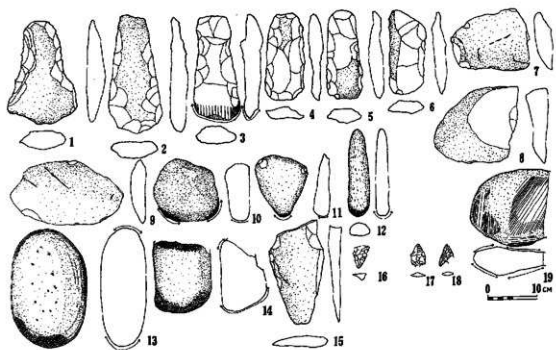
第134图 增野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1-36 D16号作原寸)



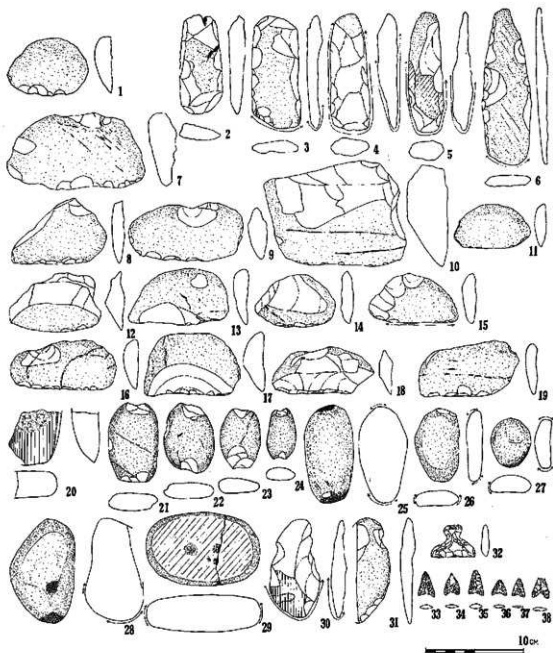
135图 增野新切遺跡出土石器(1:4)(1-24 D17号住居址, 25 D18号住居址, 29-39 D19号住居址)



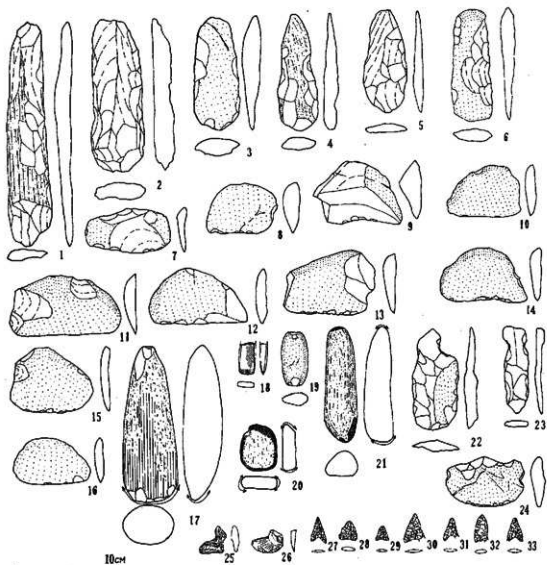
第136図 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1-19 D20丹住遗址, 20-39 D21丹住遗址)



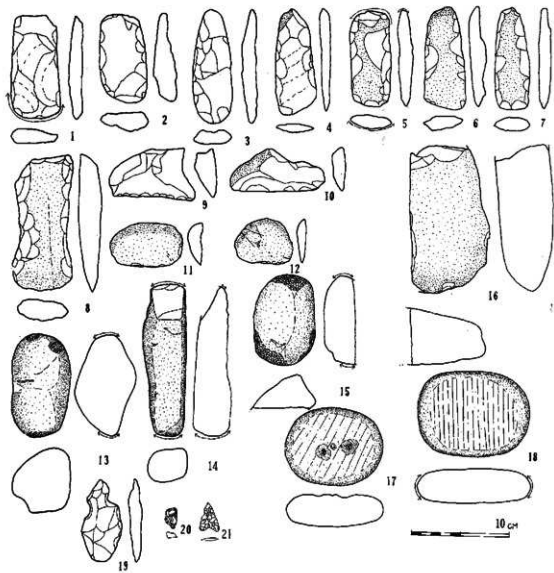
第137图 增野新切遺跡出土石器(1:4, 但し19 1:8)(1-19 D22号生層址, 20-38 D23号住層址)



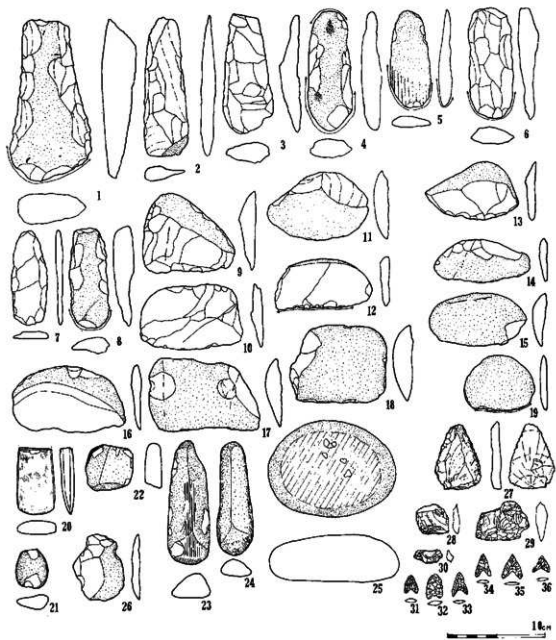
第138図 増野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1 D 24号住居址埋燬内, 2~38 D 24号住居址)



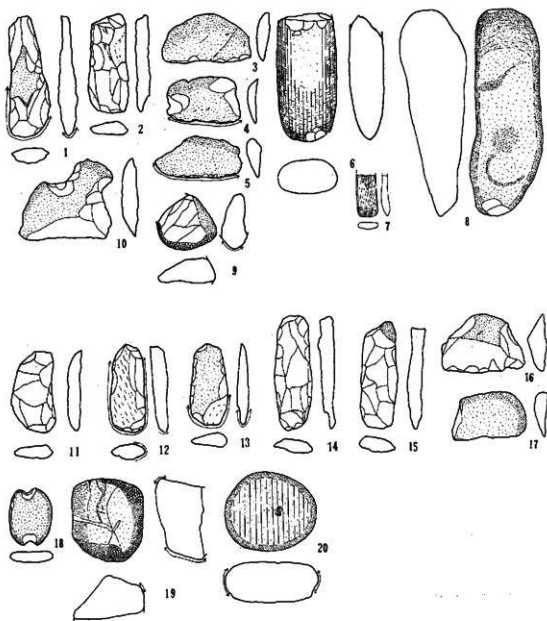
第139圖 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~33 D25号住居址)



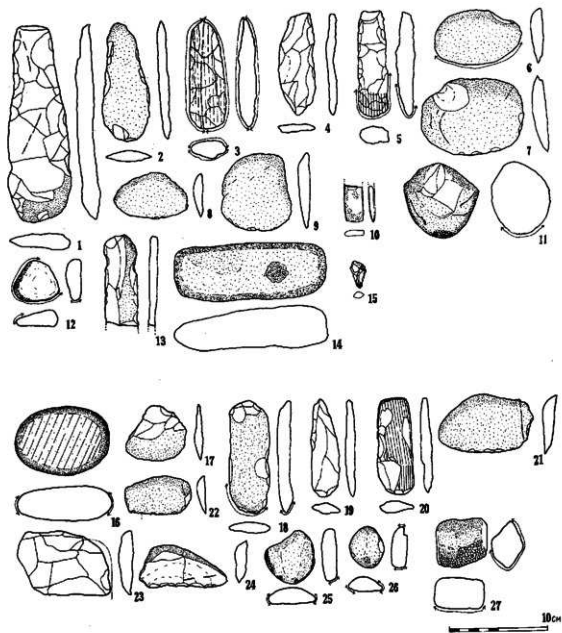
第140圖 増野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1~21 D 26号住居址)



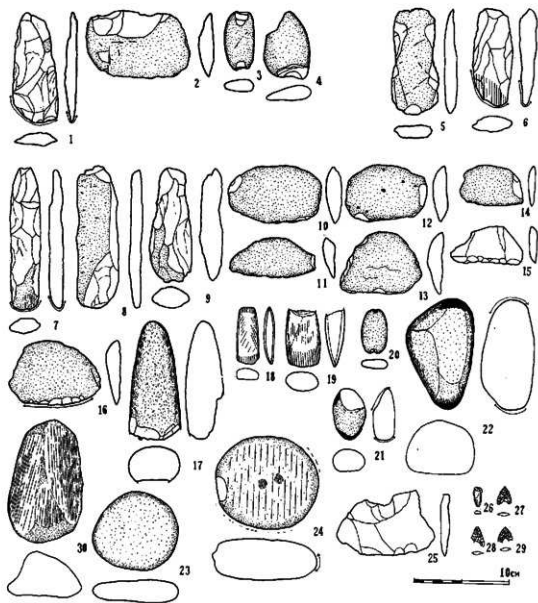
第141图 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~36 D27号住居址)



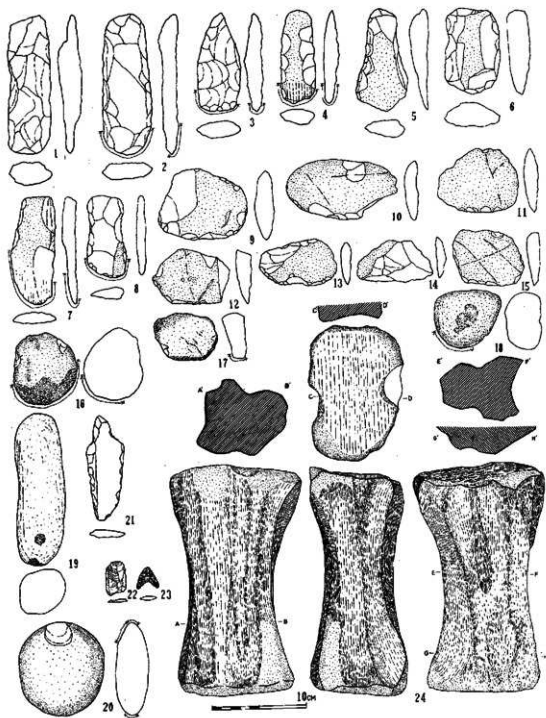
第142图 增野新切造跡出土石器 (1 : 4) (1~10 D28号住居址, 11~20 D29号生居址)



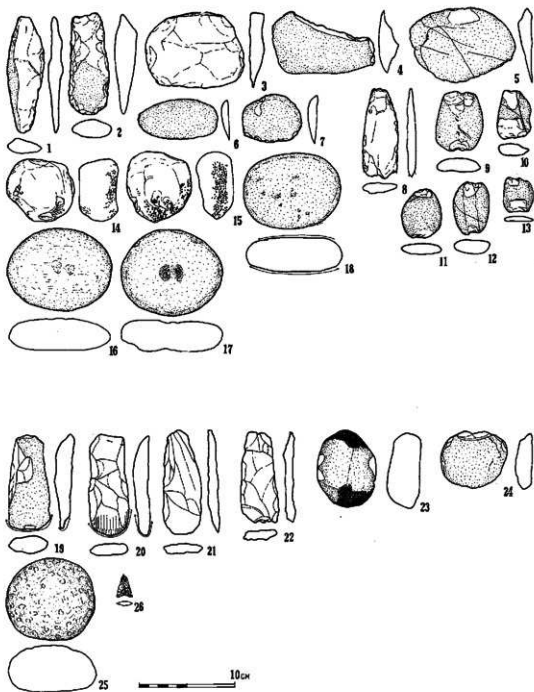
第143图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~15 D30号住居址上面, 16~17 D30号住居址下面埋室内, 18~27 D30号住居址下面)



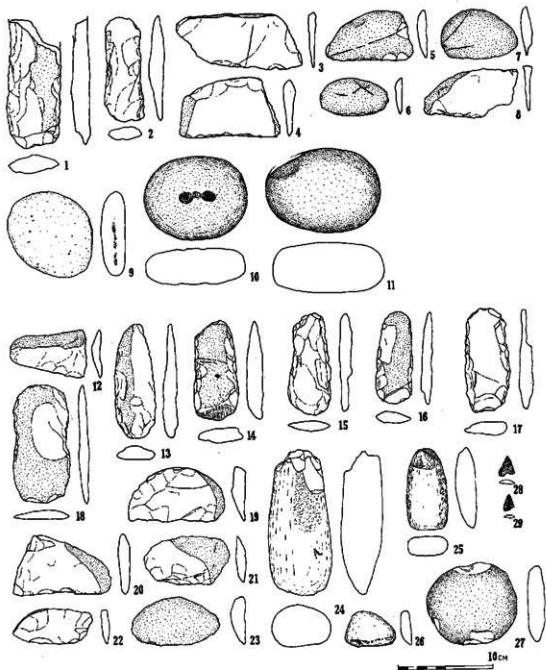
第144区 増野新切遺跡出土石器 (1 : 4) (1~4 D 31号住居址, 5~30 D 32号住居址)



第145图 增野新切遺跡出土石器(1:4) (1~24 D33号住居址)

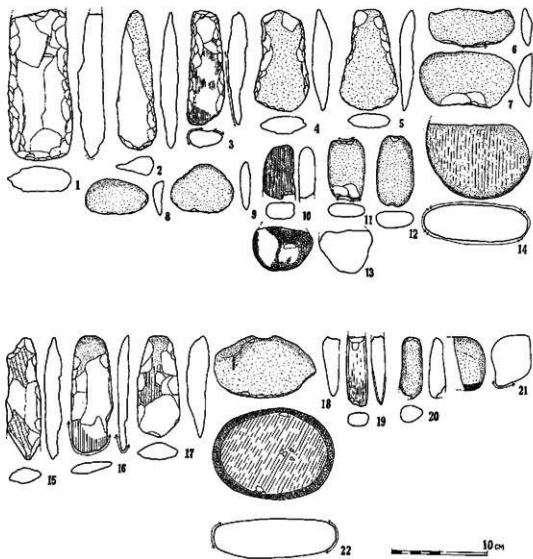


第146图 增野新切遺跡出土石器(1:4) (1~18 D34号住居址, 19~26 D35号住居址)

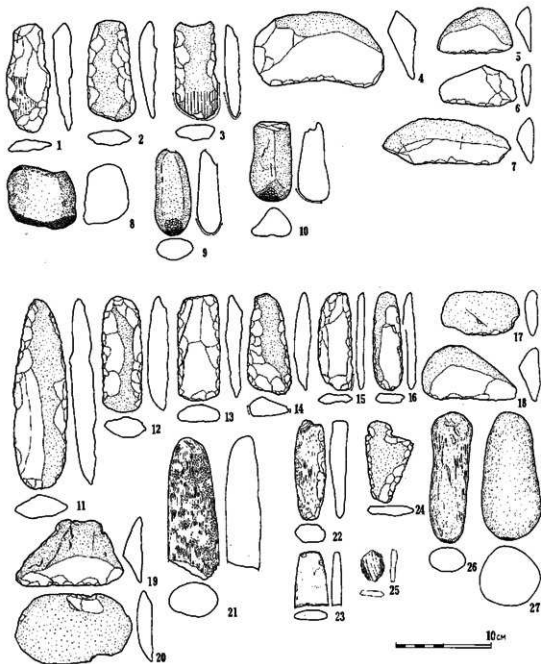


第147图 埴野新切遺跡出土石器(1:4)(1~11 D36号住居址, 12 D37号住居址埋管内, 13~29

D37号住居址)



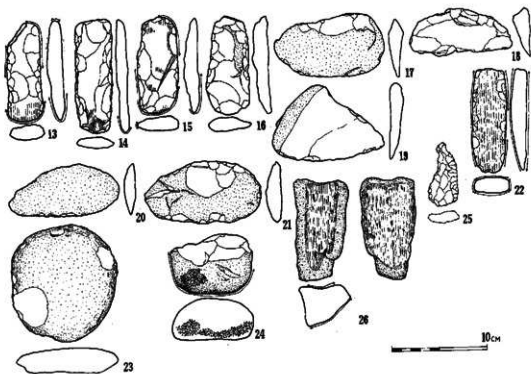
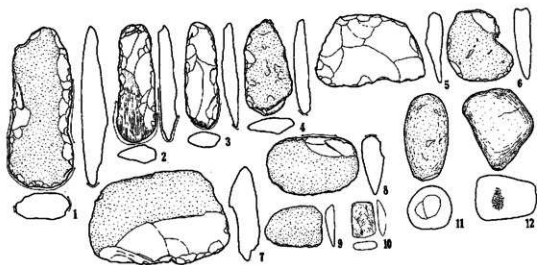
第148图 增野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~14 D38号住居址, 15~22 D39号住居址)



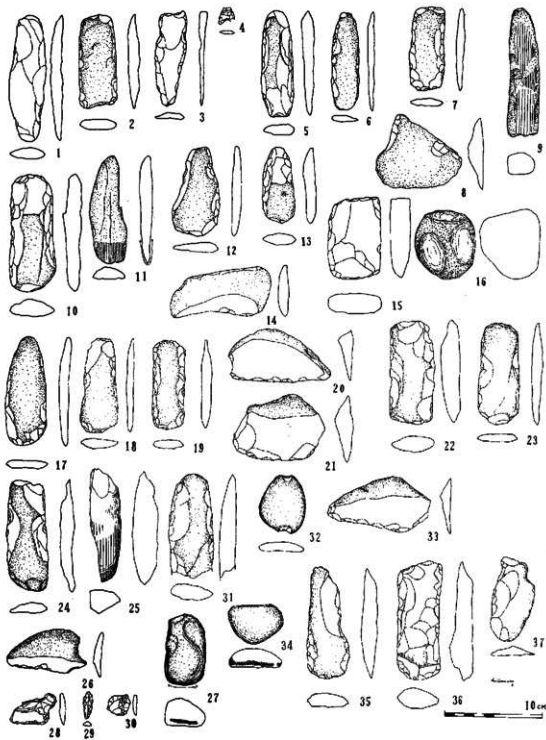
第149図 増野新切遺跡出土石器 (1:4) (1~10 D40号住居址, 11~27 D42号住居址)



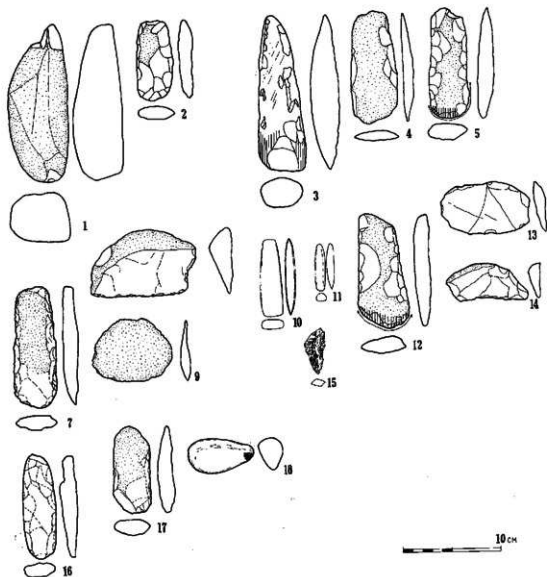
第150图 增野新切遺跡出土石器(1:4)(1-4 D44号住居址, 5-16 D45号住居址, 17-21 D46号住居址)



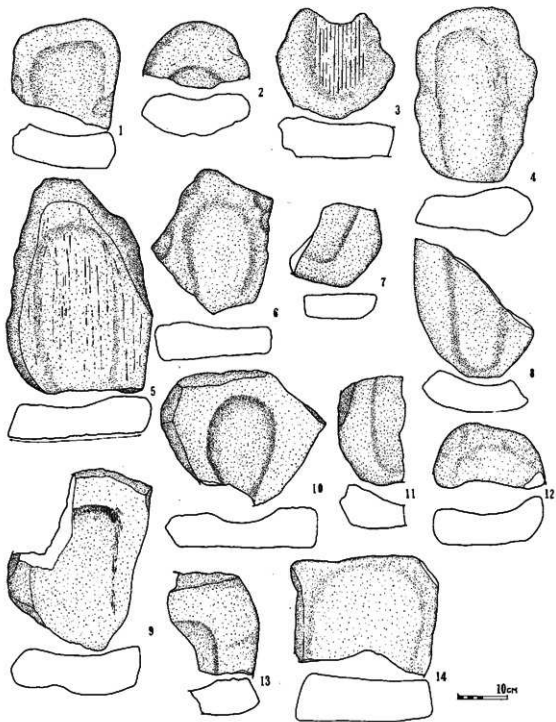
第151图 增野新切遺跡出土石器(1:4) (1~12 D47号住居址, 13~26 D48号住居址)



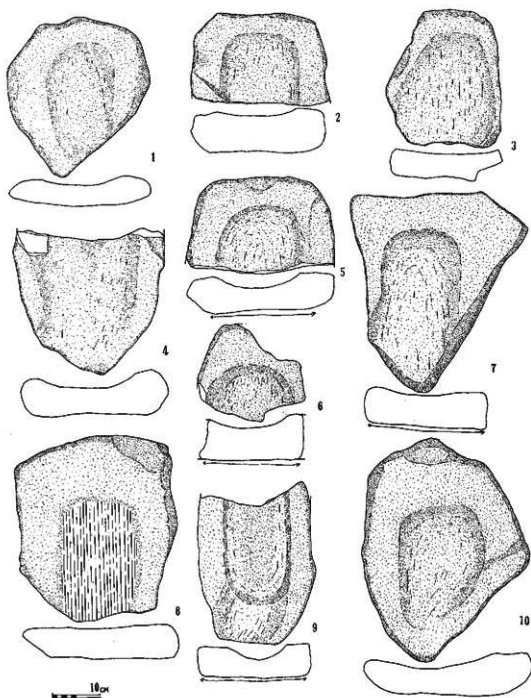
第152图 增野新切遺跡B区土坑出土石器(1:4)(1~4 土坑1, 5~9 土坑27, 10~16 土坑29, 17~21 土坑39, 22~30 土坑53, 31~34 土坑60·61, 35~37 土坑70)



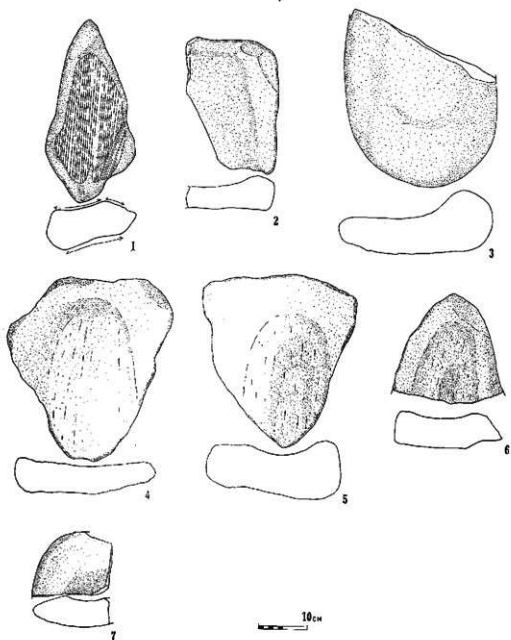
第153图 增野新切遺跡D区土坑出土石器(1:4)(1·2 土坑2, 3~6 土坑27, 7~9 土坑35, 10 土坑38, 11 土坑44, 12~14 土坑49, 15 土坑55, 16 土坑92, 17·18 土坑102)



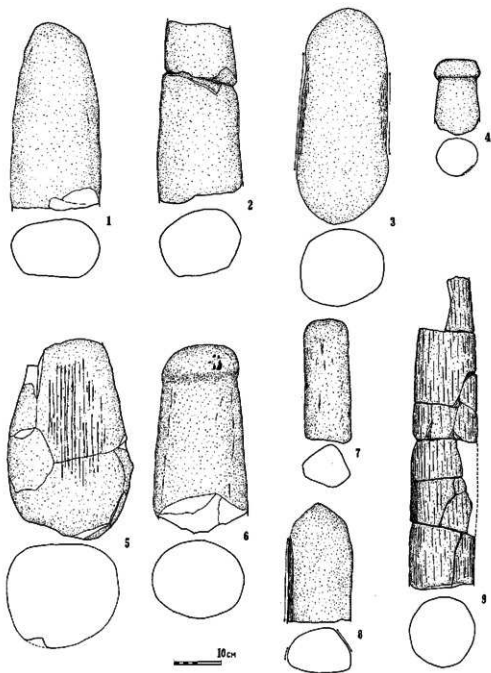
第154图 増野新切遺跡住居址出土石皿(1:8)(1 B 5号住居址, 2~4 B 6号住居址, 5 B 11号住居址, 6 B 13号住居址, 7 B 22号住居址, 7 B 22号住居址, 8·9 B 23号住居址, 10 D 2号住居址, 11 D 4号住居址, 12 D 4号住居址)



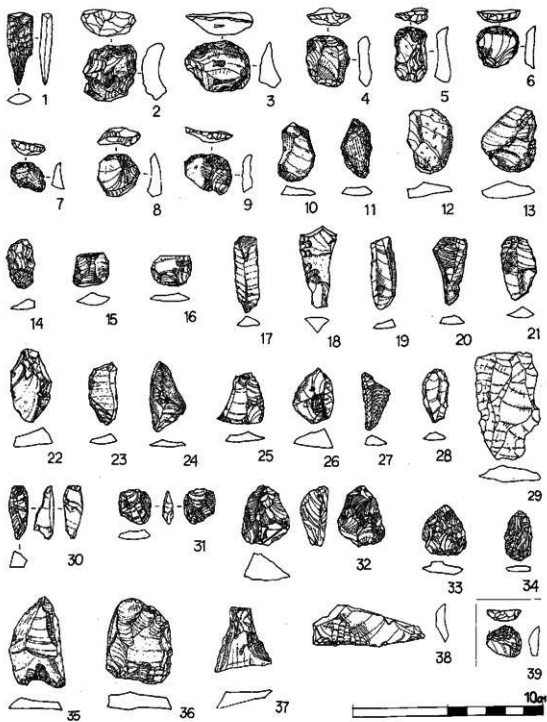
第155図 増野新切遺跡土壌及びその他出土石皿(1:8)(1 D12号住居址, 2 D14号住居址,
3 D27号住居址, 4~6 D29号住居址, 7 D30号住居址, 8 D35号住居址, 9・10 D37号住居址)



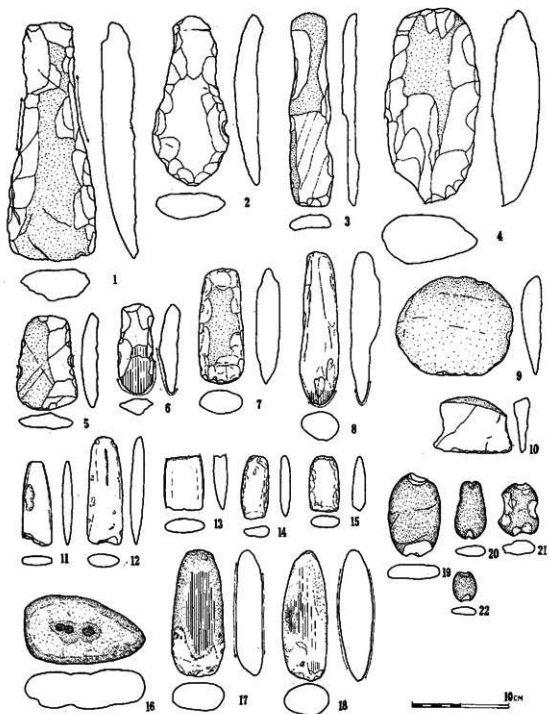
第156図 増野新切遺跡土埴及びその他出土土皿(1:8)(1 土埴B56, 2 土埴B66, 3 土埴B77, 4 土埴D80, 5 D10号住居址, 6 透櫛外, 7 D区-E区最下段水田)



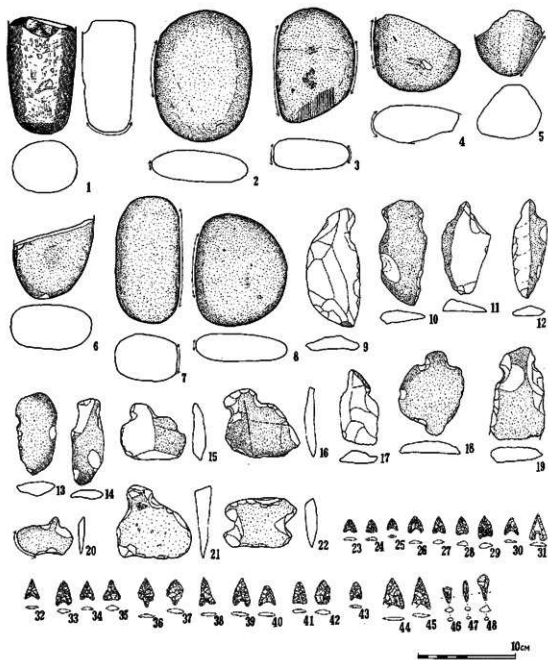
第157图 增野新切遺跡出土石棒 (1 : 8) (1 B13号住居址, 2 B20号住居址, 3 B23号住居址,
4 D1号住居址, 5-6 D14号住居址, 7 D27号住居址, 8 D25号住居址, 9 D22号住居址
(B5·D3·D23·D28住居址·土境D58))



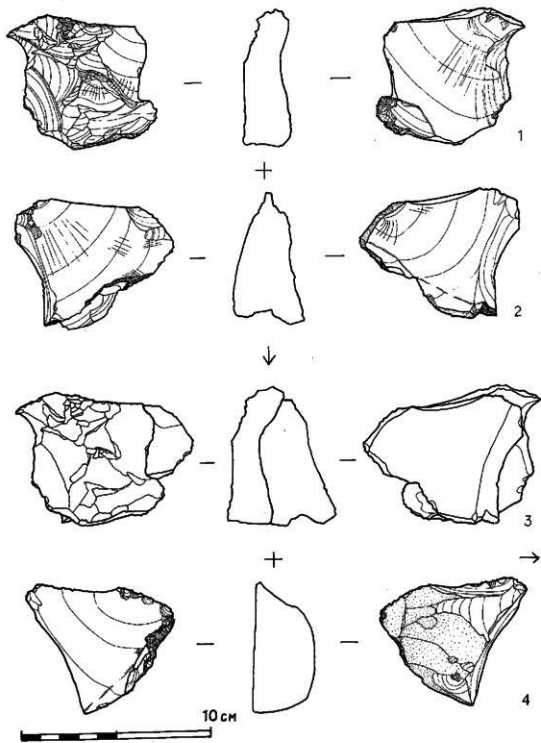
第158図 増野新切遺跡その他出土石器(1:2) (39 B11号住居柱礎奥内出土)



第159図 増野新切遺跡その他出土石器 (1 : 4)

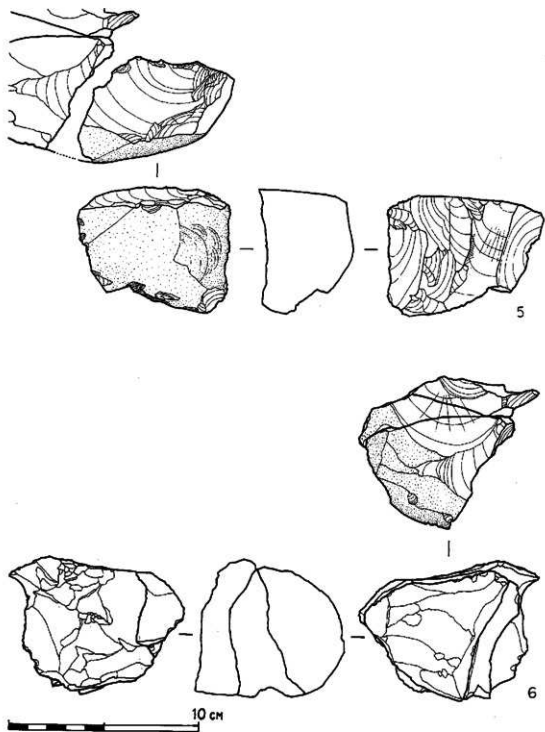


第160図 増野新切遺跡その他出土石器 (1 : 4)

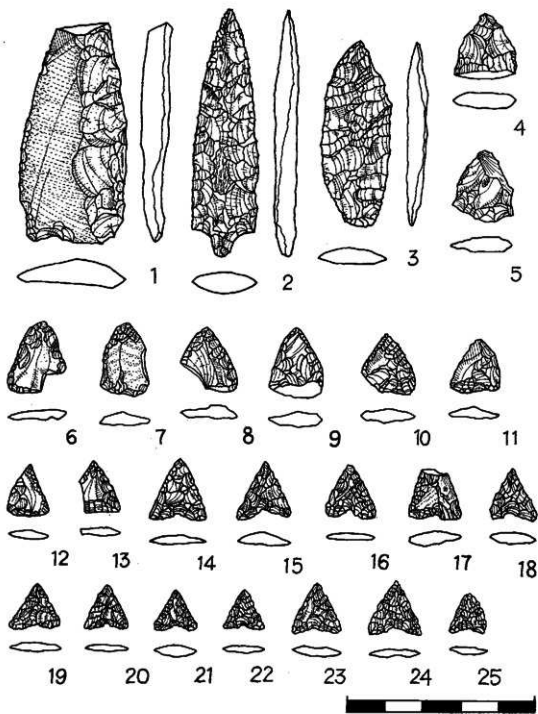


第161图 增野新切造跡出土石器

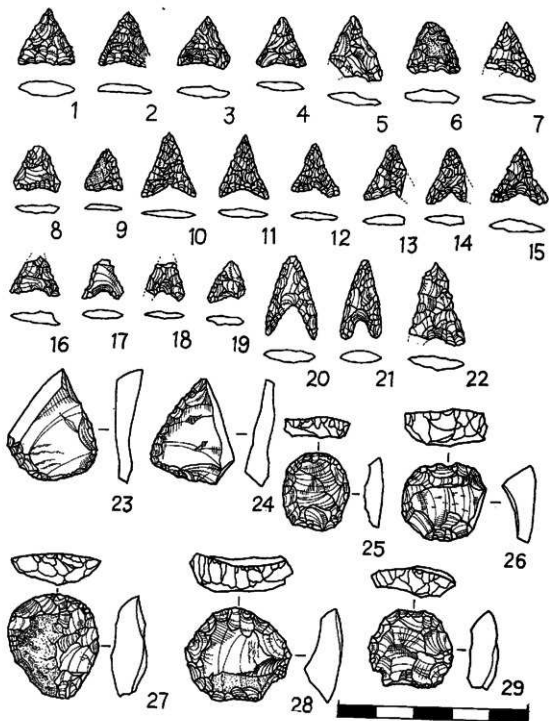
(D地点出土黑曜石)



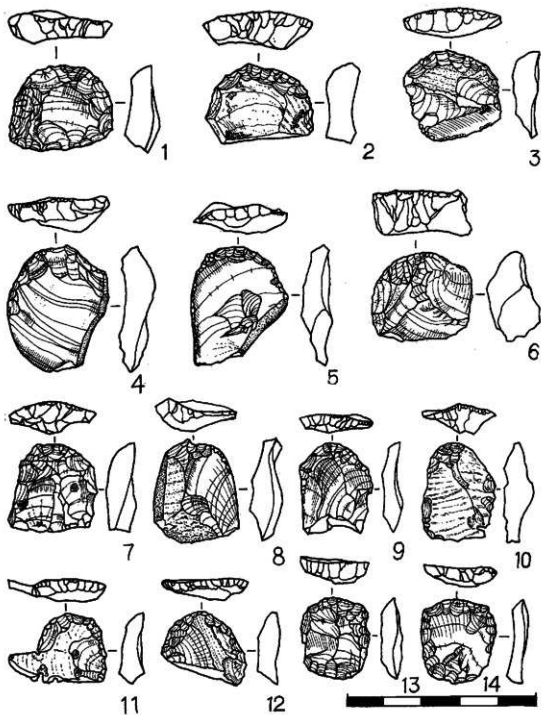
第162图 增野新切遺跡出土石器 (①兼山出土黒曜石)



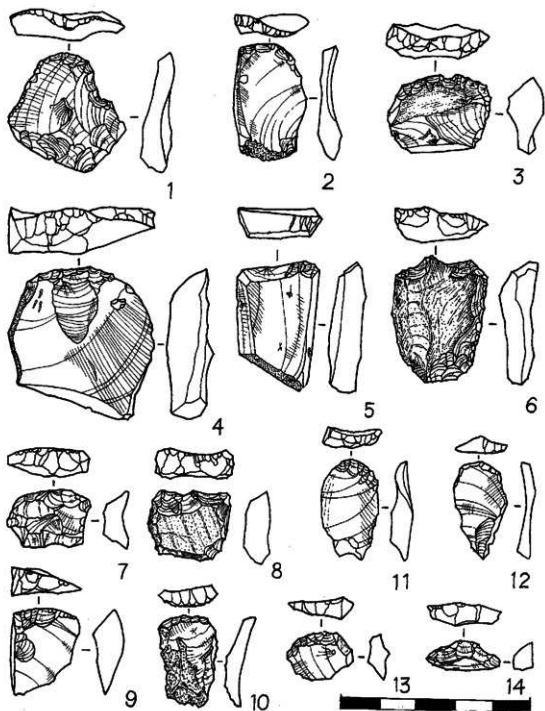
第163圖 増野川子石遺跡出土石器 (1:1)



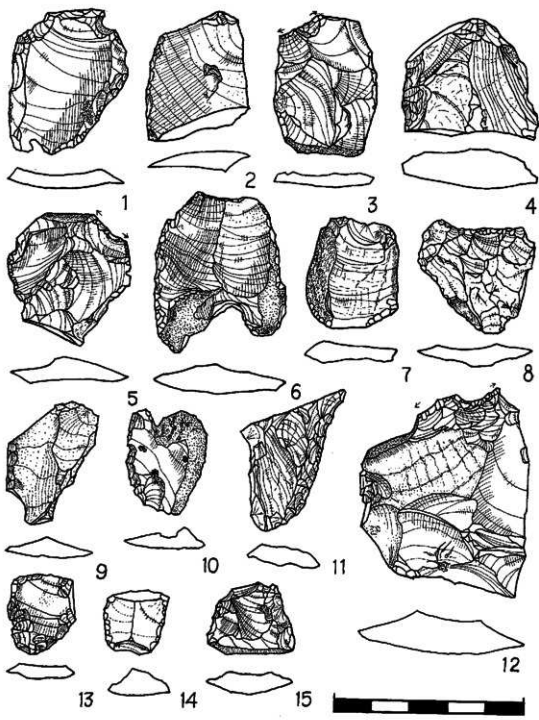
第164圖 増野川子石遺跡出土石器 (1:1)



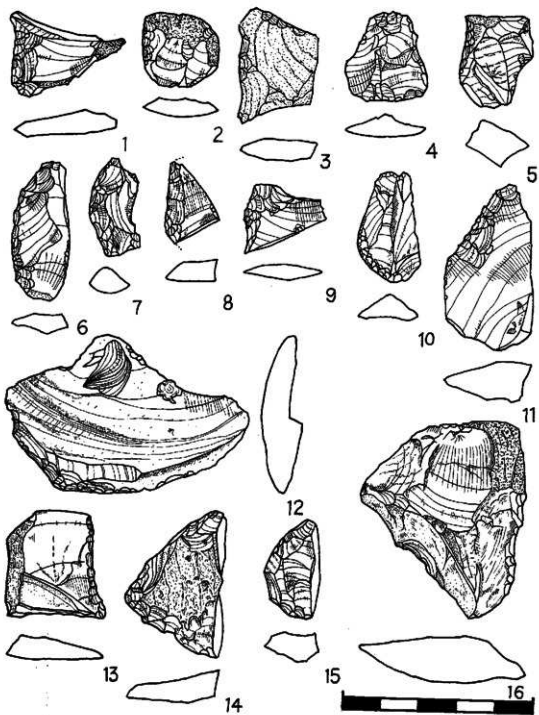
第165図 増野川子石遺跡出土石器(1:1)



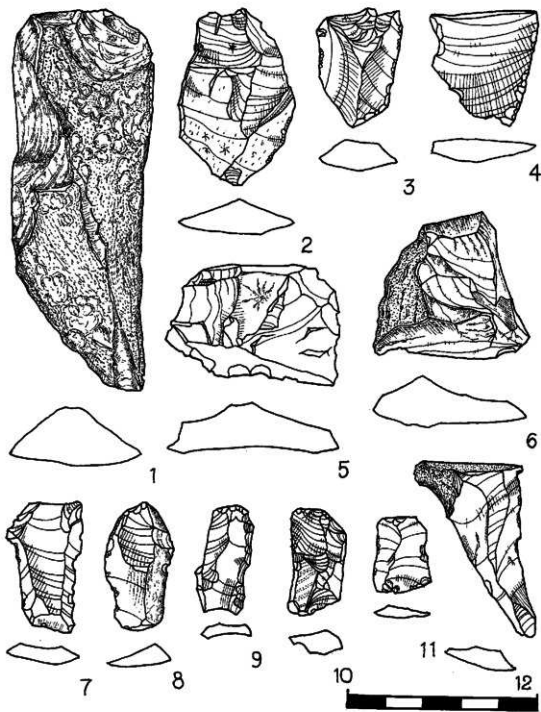
第166図 増野川子石遺跡出土石器 (1:1)



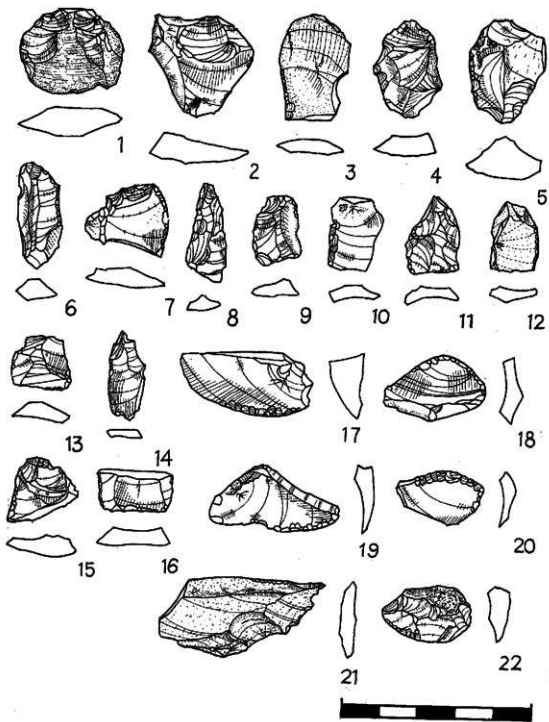
第167圖 増野川子石遺跡出土石器（1：1）



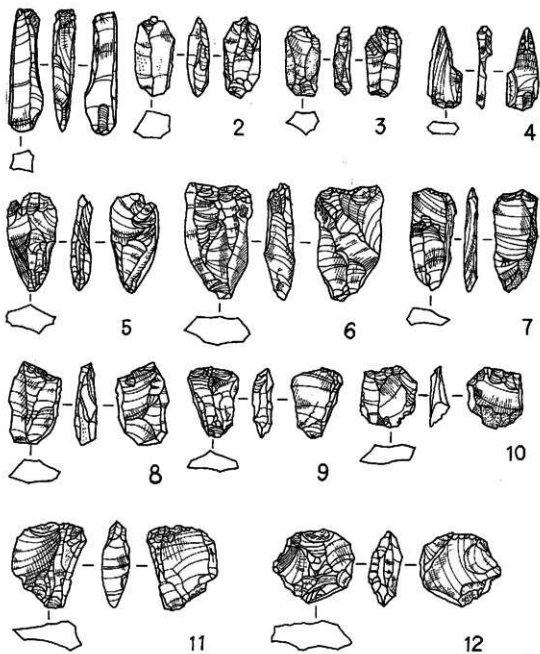
第168圖 増野川子石遺跡出土石器(1:1)



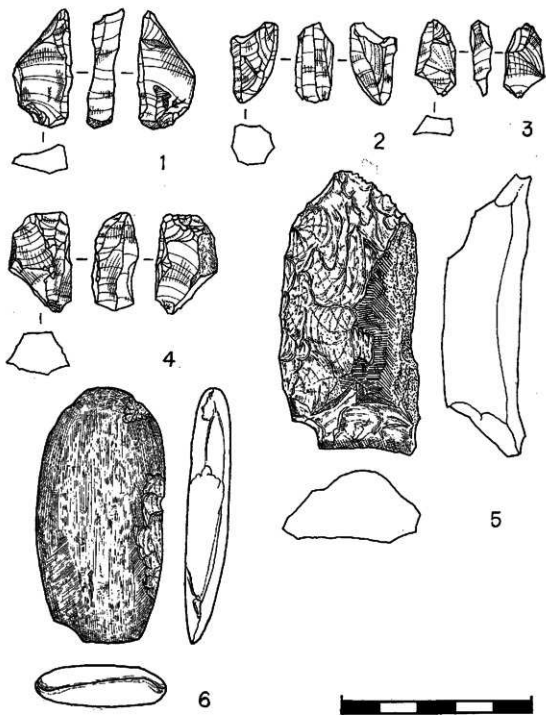
第169圖 増野川子石遺跡出土石器(1:1)



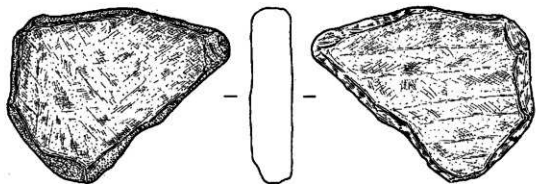
第170圖 増野川子石遺跡出土石器（1：1）



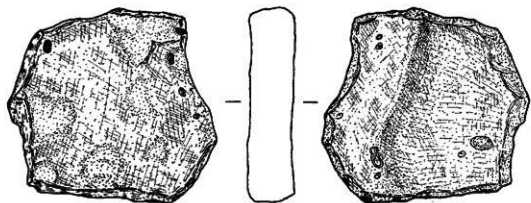
第171区 増野川子石遺跡出土石器 (1:1)



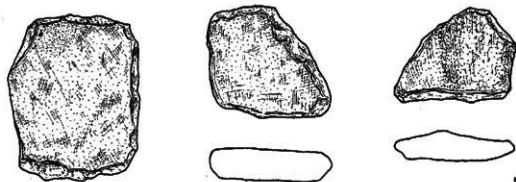
第172図 増野川子石遺跡出土石器 (1:1)



1



2



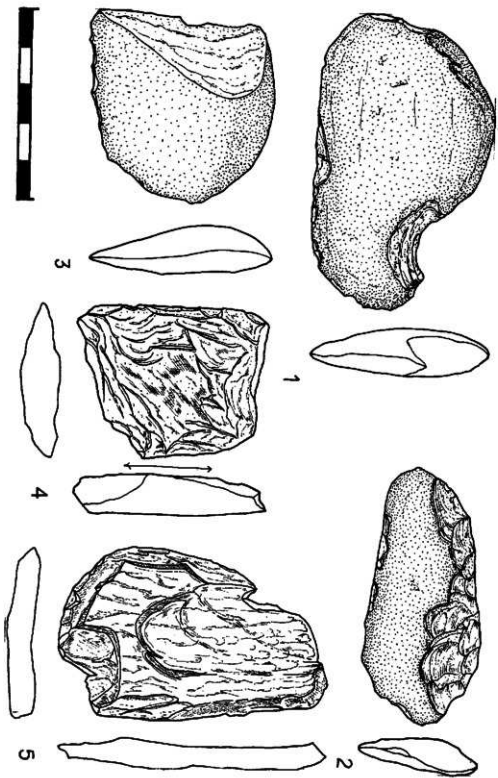
3

4

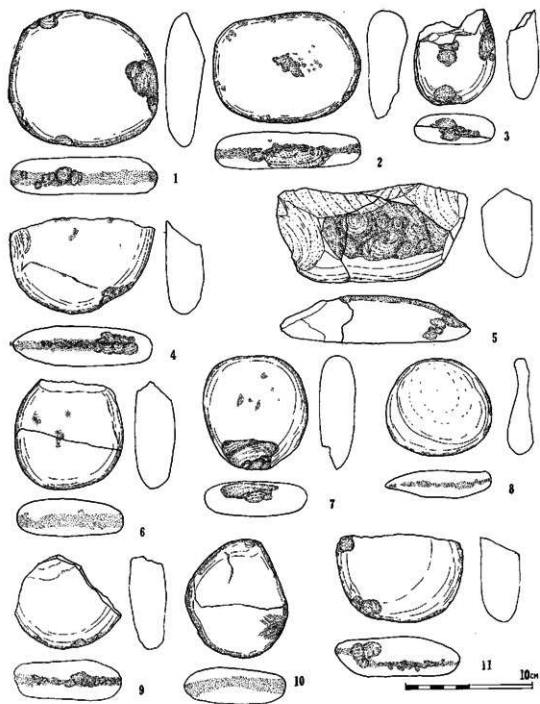
5



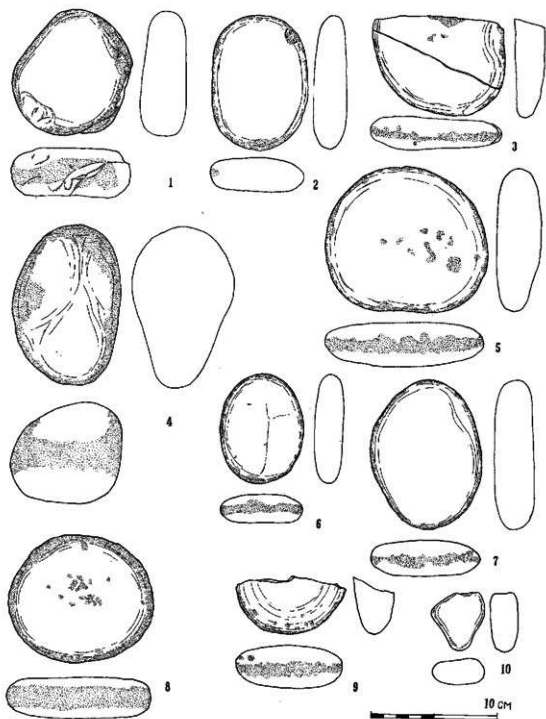
第173圖 増野川子石遺跡出土石器 (1:1)



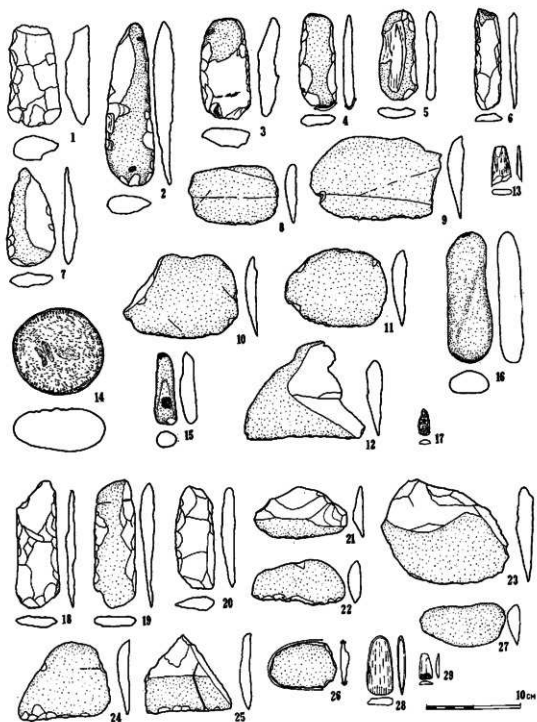
第174圖 增野川子石遺跡出土石器 (1:1)



第175图 增野川子石遺跡A地点出土石器(1:3)

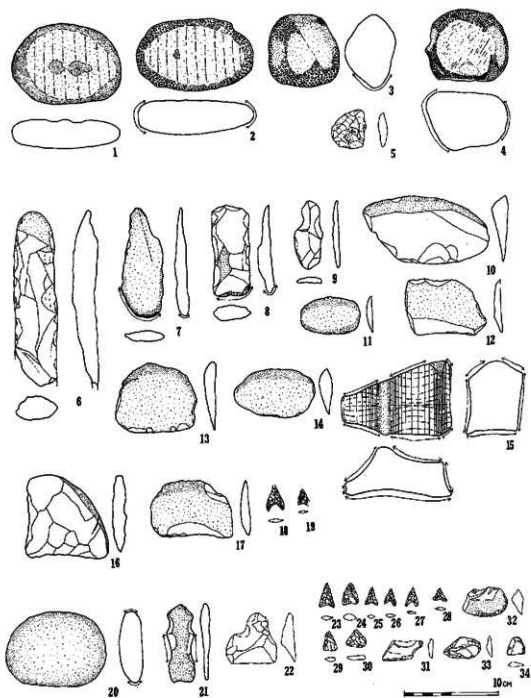


第176区 増野川子石遺跡A 地点出土石器 (1:3)



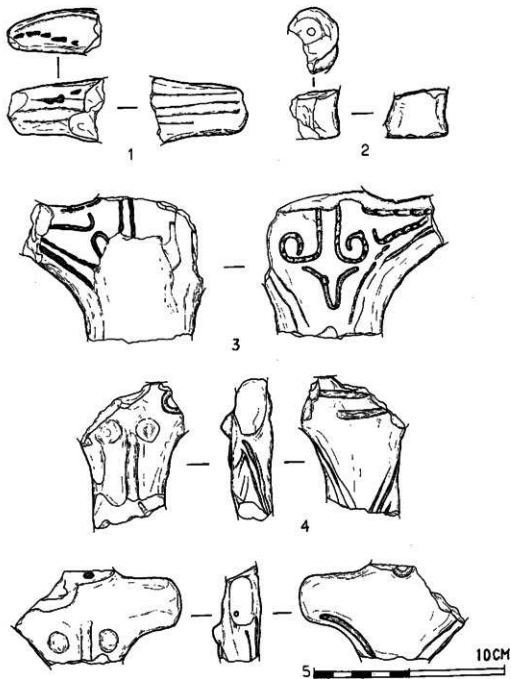
第 177 图 增野川子石遺跡出土石器 (1 : 4)

(1~17 1号住居址, 18~29 2号住居址)

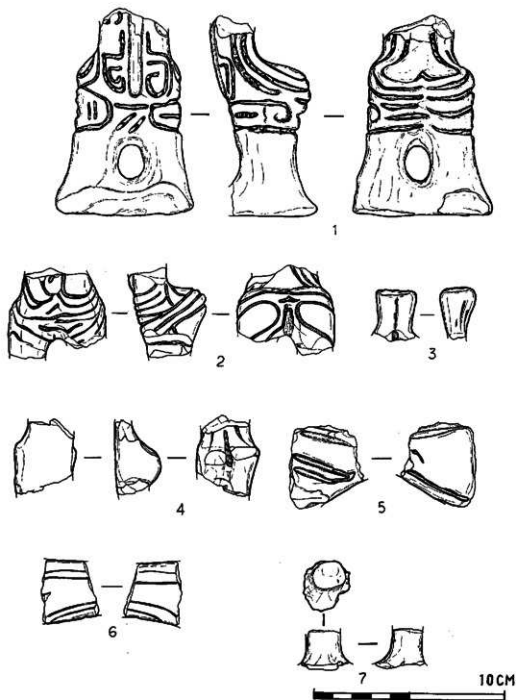


第 178 圖 増野川子石遺跡出土石器 (1 : 4)

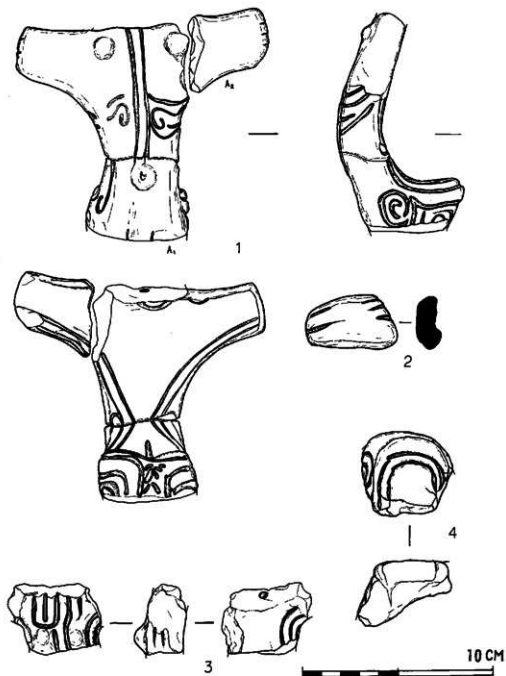
(1~5 2号住居址, 6~15 3号住居址, 16~19 4号住居址, 20~34 その他)



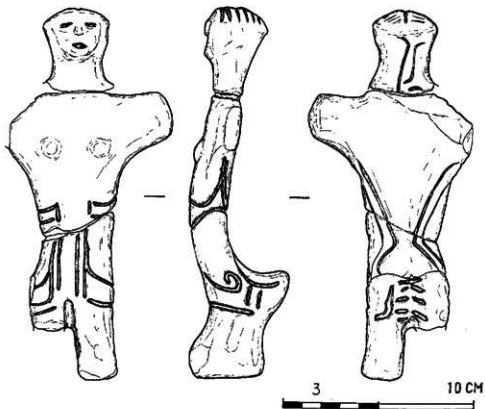
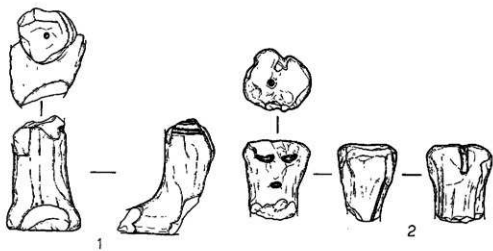
第179圖 增野新切遺跡出土土偶 (1:2) (1 A又, 2 B5号住, 3·4 B3号住, 5 H10号住)



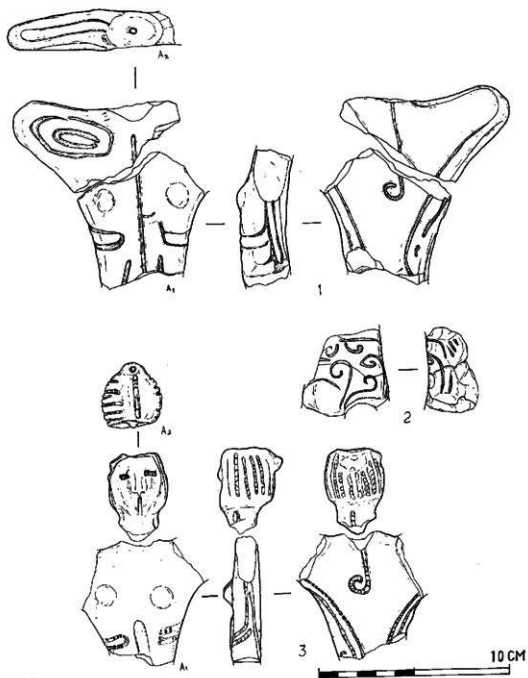
第180图 增野新切遺跡出土土偶 (1:2) (1 B 9号位, 2~6 B 12号位, 6 B 23号位, 7 B 24号位)



第181図 増野新切遺跡出土土偶 (1 : 2) (1A: B13号住, 1A: B22号住, 2 B25号住, 3 - 4 B区その他)

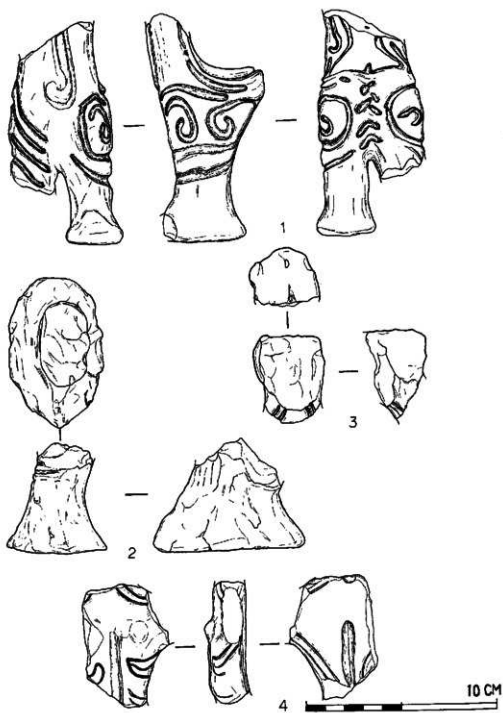


第182区 増野新切遺跡出土土偶 (1 : 2) (1 B26)注、2 D6)注?, 3 D1)注)

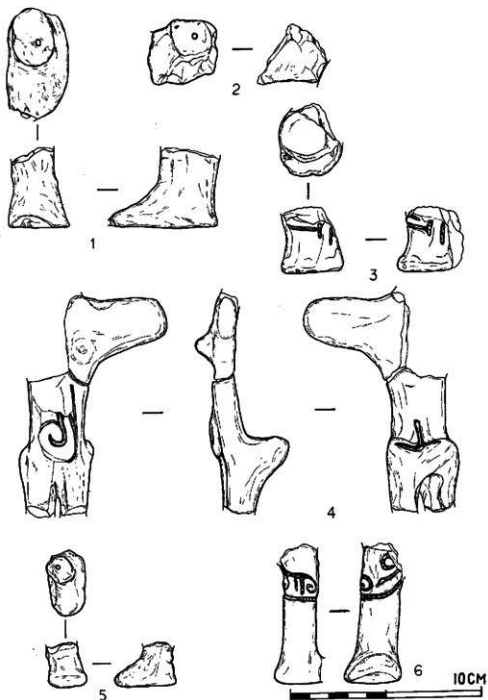


第183圖 増野新切遺跡出土土器(1:2)

(1A: D3分片, 1A₂: D1分片, 2: D8分片, 3A: D1分片, 3A₂: D14分片)

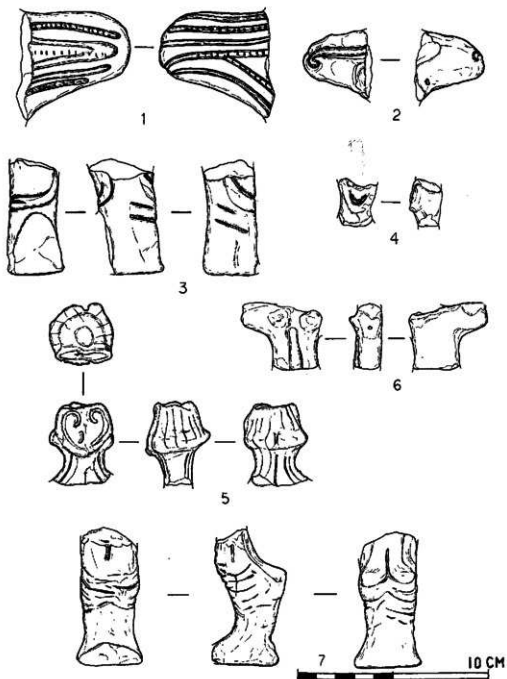


第184图 增野新切遺跡出土土偶 (1:2) (1·2 D12号位, 3 D14号位, 4 D16号位)



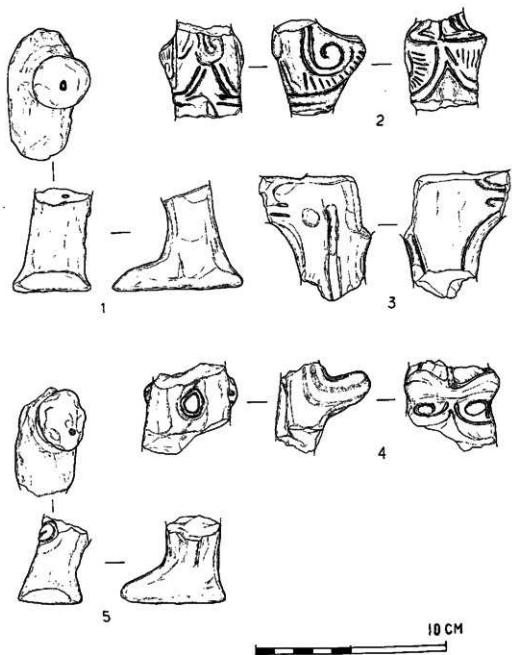
第185图 增野新切遺跡出土土器(1:2)

(1 D1号住, 2·4 D8号住, 3 D10号住, 5 D12号住, 6 D14号住)

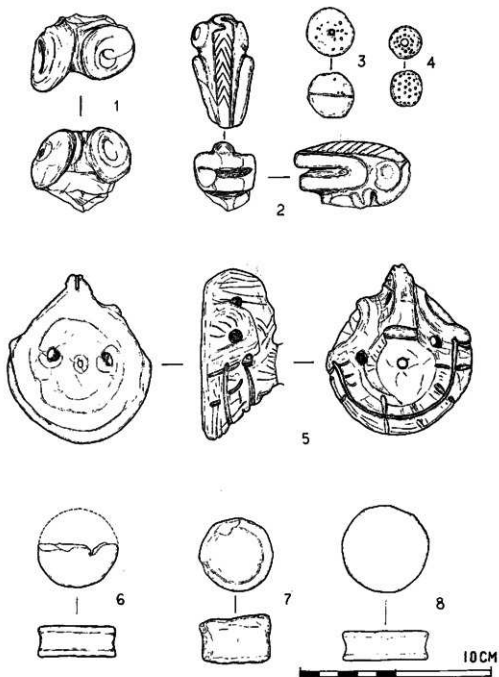


第186圖 增野新切遺跡出土土偶 (1:2)

(1 D16号住, 2 D20号住, 3 D21号住, 4 D22号住, 5·7 D24号住, 6 D32号住)

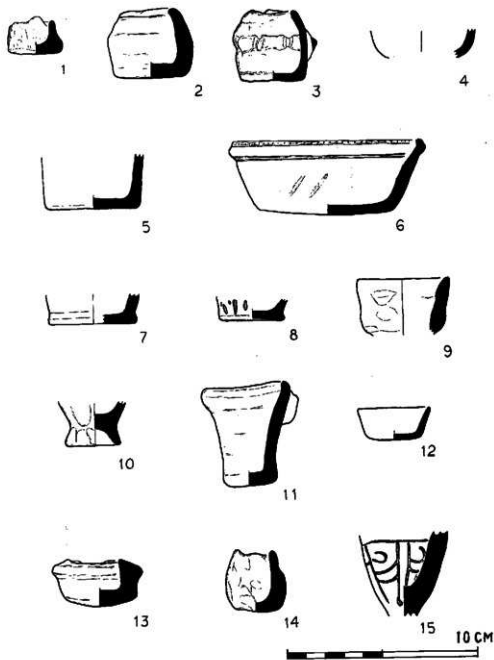


第187図 増野新切遺跡出土土俵 (1:2) (1 D26分住, 2 D30分住, 3 D46分住, 4・5 D区その他)

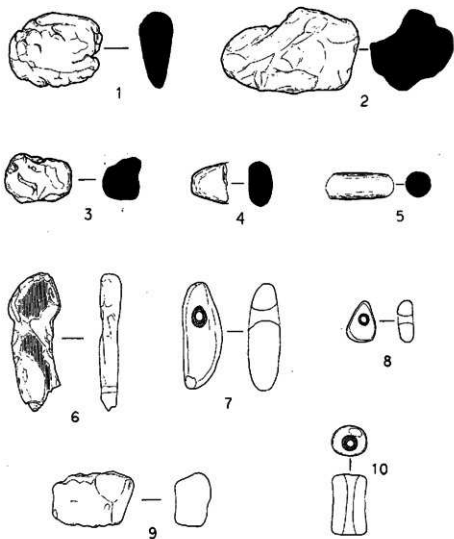


第188区 増野新切遺跡出土十製品 (1:2)

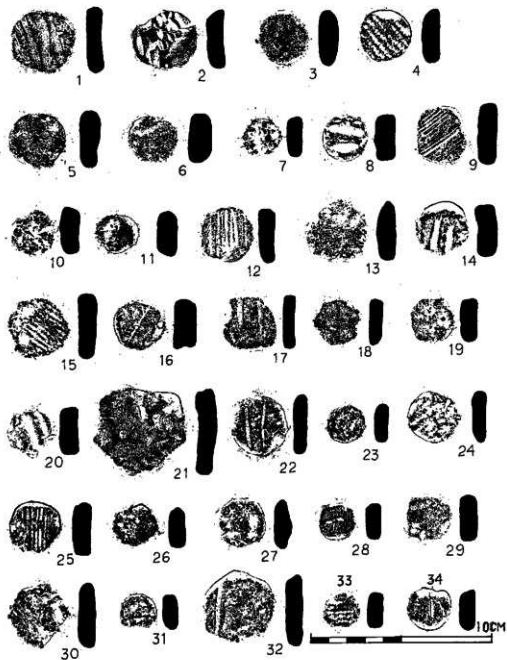
(1 B 9号件, 2 B区その他, 3 B14号件, 4 D27号件, 5 B 28号件, 6 D 23号件, 7・8 D区その他)



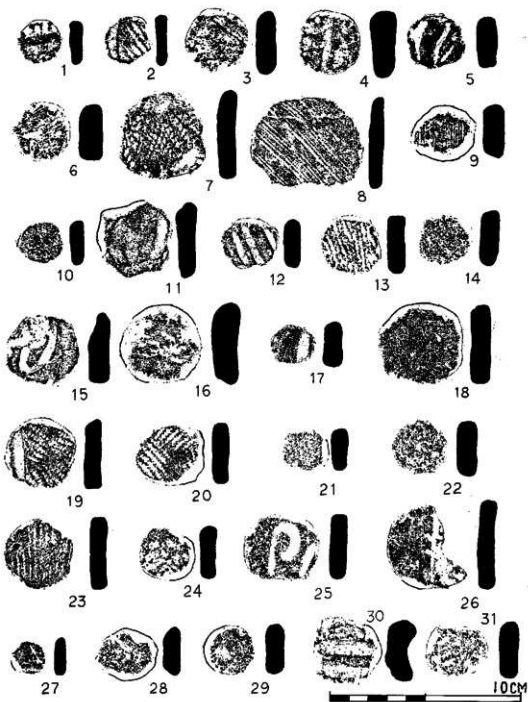
第189圖 増野新切遺跡出土小形土器(1:2)(1 B 6号住, 2・3 B 6号住, 4・5 D 2号住, 6 B 22号住, 7・8 D 13号住, 9 D 18号住, 10・11 D 24号住, 12 D 25号住, 13 D 27号住, 14 D 32号住, 15 D 47号住)



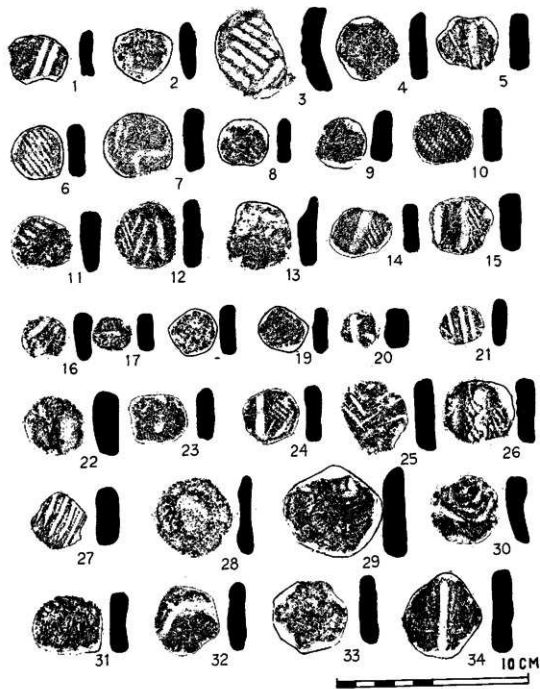
第190圖 増野新切遺跡(1~10), 増野川子石遺跡(11)出土土製品及び石製品(1:2)(1 B20号作, 2 B13号作, 3 B12号作, 4・5 B8号作, 6 B28号作, 7 D8号作, 8 B14号作, 9 D12号作, 10 D1号その他, 11 2号作)



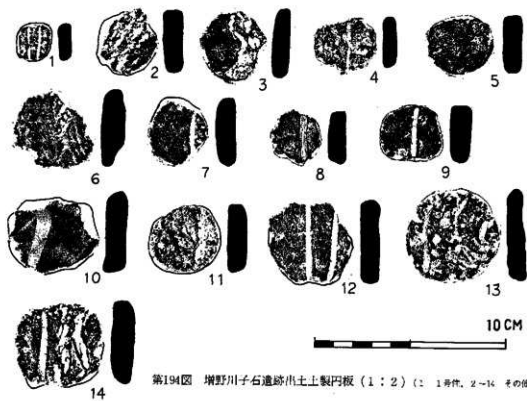
第191図 埴野新切遺跡出土土製円板 (1:2) (1-2 A区, 3 B5号位, 4 B6号位, 5 B7号位, 6 B8号位, 7-8 B9号位, 9-11 B11号位, 12-13 B12号位, 14-15 B13号位, 16-19 B16号位, 20-21 B21号位, 22 B22号位, 23 B23号位, 24 B25号位, 25-26 B26号位, 27 B土壘28, 28 B土壘35, 29 B土壘53, B土壘55, 30-34 B区その他)



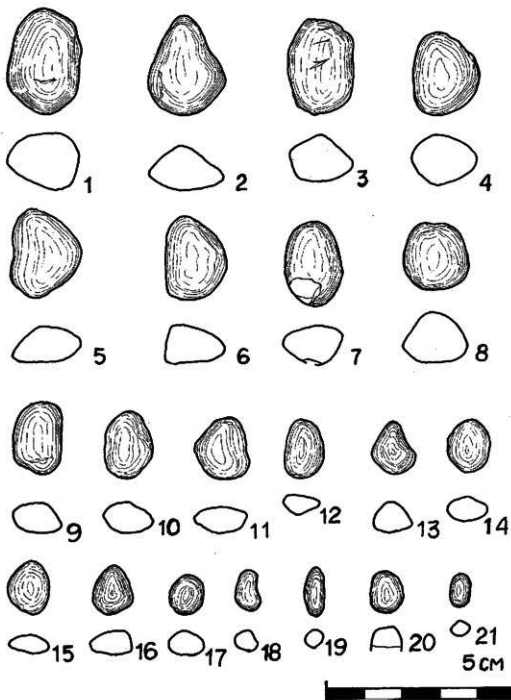
第192圖 増野新切遺跡出土土製陶板(1:2)(1-3 B区その他, 4 D2分位, 5 D3分位, 6-12 D8分位, 13 D10分位, 14-16 D11分位, 17 D12分位, 18-20 D14分位, 21-23 D15分位, 24-27 D16分位, 28 D17分位, 29-31 D20分位)



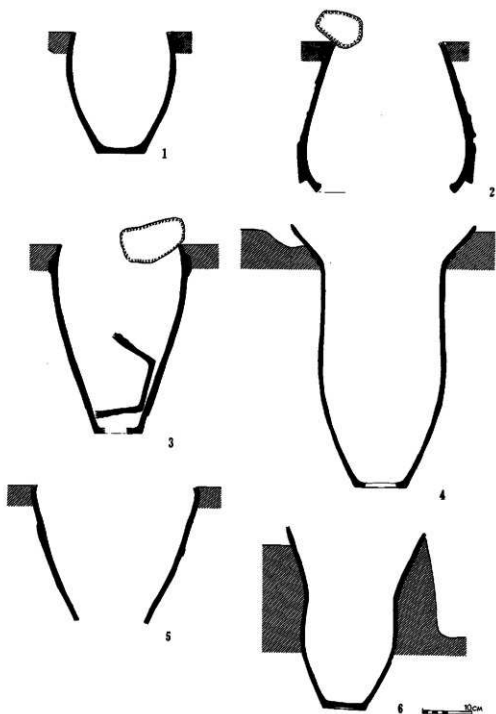
第193圖 増野新切遺跡(1~28), 増野川子石遺跡(29~34)出土土製円板 (1:2) (1 D20号生, 2 D21号生, 3 D22号生, 4-5 D23号生, 6-7 D25号生, 8-11 D26号生, 12 D33号生, 13 D45号生, 14 D土製, 15 D土製, 16 D土製, 17 D土製, 18-34 その他)



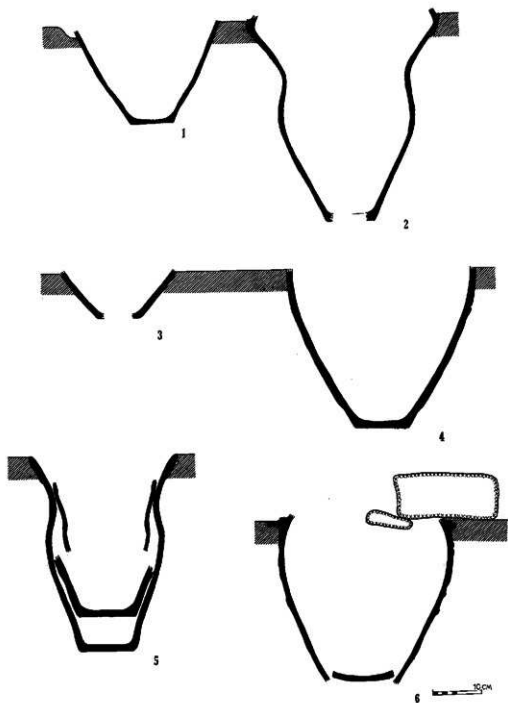
第194図 増野川子石遺跡出土土製円板(1:2)(1: 1号作、2~14: その他)



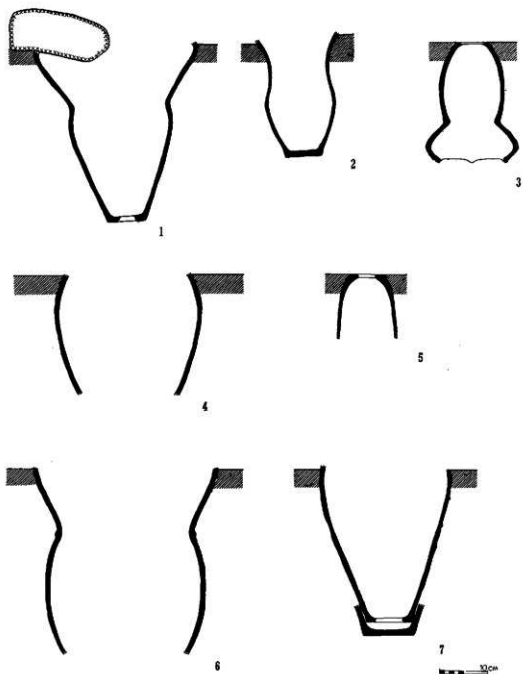
第195図 増野新切遺跡住居址, 上横出上海浜石 新切 5・6・14・15・17~20 B 8号住, 16
 B 9号住, 2・8 B土塊7 4・7・9~13・21 D 8号住, 1 D土塊35, 川子石 2 その他



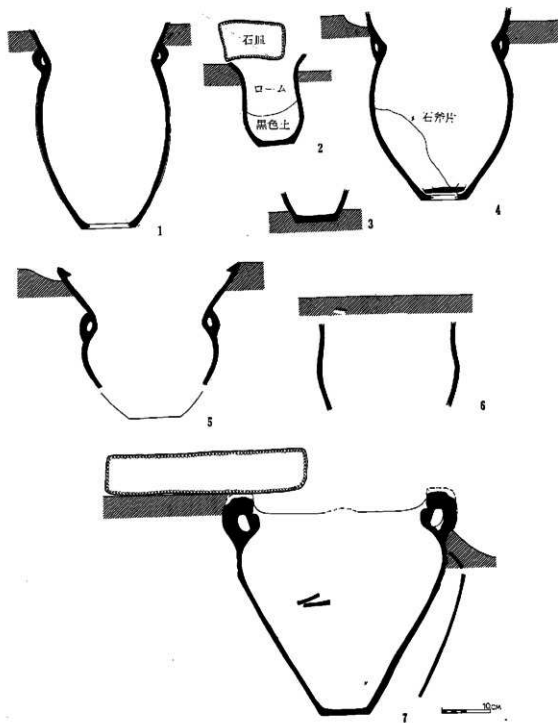
第196図 増野新切遺跡埋変状態図(1:8)(1 B3号住居址, 2 B4号住居址, 3 B7号住居址, 4 B9号住居址, 5 B10号住居址, 6 B13号住居址)



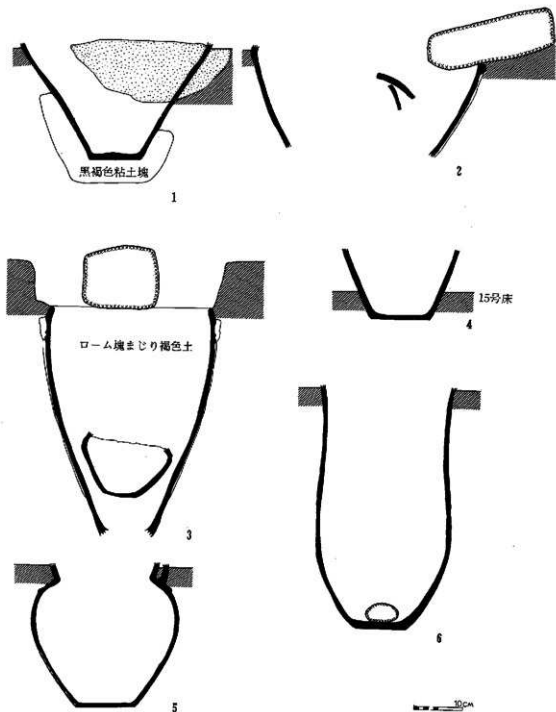
第197図 増野新切遺跡埋壙状態図(1:8)(1 B 11号住居址No.1, 2 B 11号住居址No.2, 3 B 20号住居址No.1, 4 B 20号住居址No.2, 5 B 22号住居址, 6 B 23号住居址)



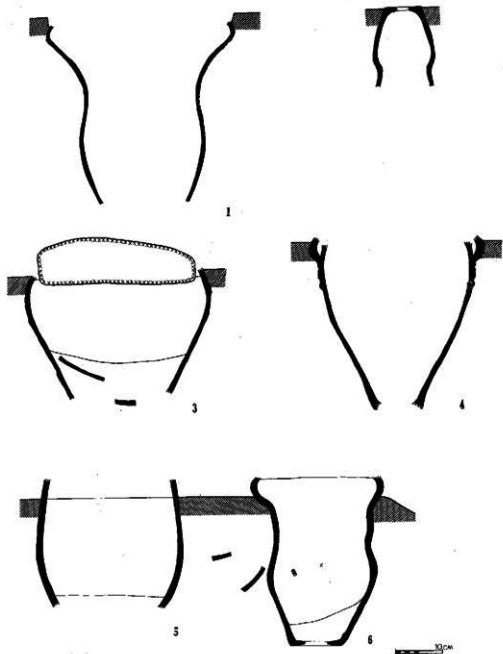
第198区 増野新切遺跡埋没状態図(1:8)(1 B 25号住居址No.2, 2 B 25号住居址No.1,
3 B 26号住居址, 4・5 B 27号住居址, 6 D 1号住居址, 7 D 1号住居址新)



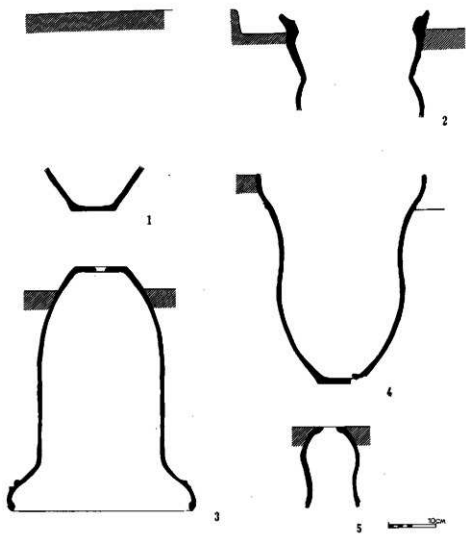
第199図 増野新切遺跡埋喪状態図(1:8)(1 D 2号住居址, 2 D 4号住居址, 3 D 10号住居址, 4 D 12号住居址, 5 D 8号住居址, 6 D 14号住居址No.1, 7 D 14号住居址No.2)



第200図 増野新切遺跡埋変状態図(1:8)(1 D13号住居址No.1, 2 D13号住居址No.2, 3 D13号住居址No.3, 4 D15号住居址, 5 D24号住居址, 6 D26号住居址)



第201圖 増野新切遺跡埋燻状態図 (1 : 8) (1・2 D 29号住居址, 3 D 30号住居址,
4 D 36号住居址, 5. D 32号住居址No. 1, 6 D 32号住居址No. 2)



第202圖 増野新切遺跡埋喪状態図 (1:80) (1 D 37号住居址No.1, 2 D 37号住居址No.2,
3 D 44号住居址, 4 D 47号住居址, 5 D 48号住居址)

圖 版



1. 山吹地区4遺跡航空写真 (1. 神田裏遺跡 2. 新田西裏遺跡 3. 増野新切遺跡 4. 増野川子石遺跡)



2. 山吹地区遠景（東対岸より）



3. 神田裏遺跡遠景（南より）



4. 神田裏遺跡 B地点(東南より)



5. 新田西裏遺跡 溝(南より)



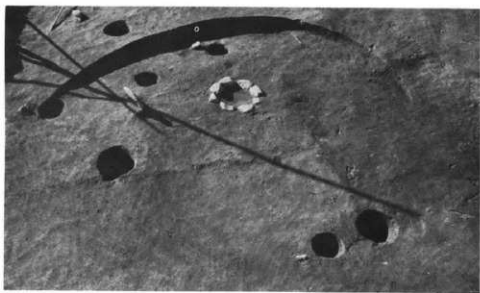
6. 遺跡遠景（南より）



7. B地区住居址群（南東より）



8. B 1号住居址



9. B 2号住居址

第六圖 增野新切邊跡出土土器



10. B・B 28号住居址出土吊土器（正面，側面）



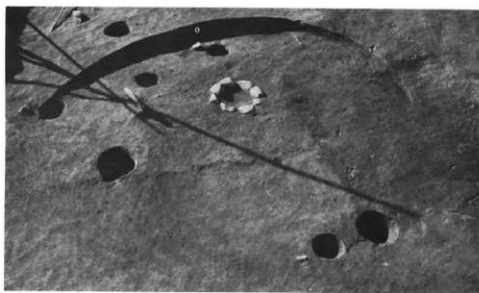
11. B・B 2号住居址出土土器



12. B・B 28号住居址出土土器

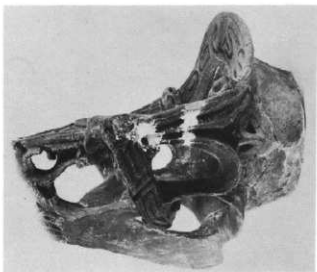


8. B 1 号住居址



9. B 2 号住居址

第六圖 增野新切遺跡出土土器



10. B 2・B 28号住居址出土器土器 (正面, 側面)



11. B 2号住居址出土状態



12. B 28号住居址出土状態



13. B 3号住居址



14. B 4号住居址

第八圖 增野新切遺跡住居址



15. B 4号住居址甕



16. B 5号住居址出土埴鉢



17. B 5号住居址



18. B 6・B 30号住居址



19 B 7号住居址



20. B 7号住居址埋喪



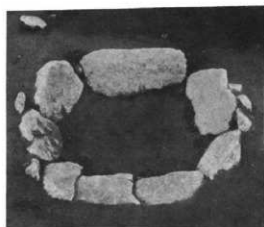
21. B 8号住居址石組



22. B 8号住居 (B 9号住居址にのる)



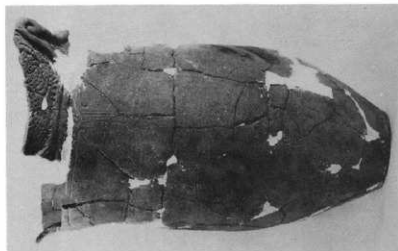
23. B 9号住居址



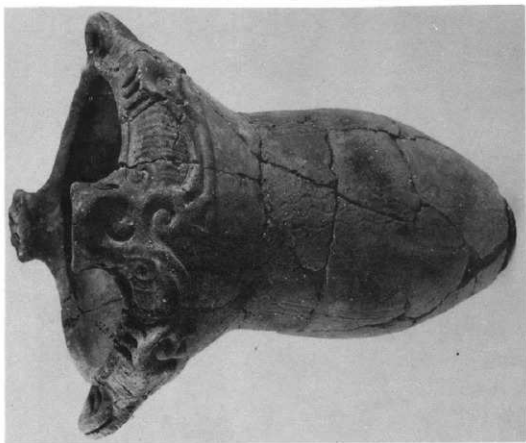
24. 同 炉



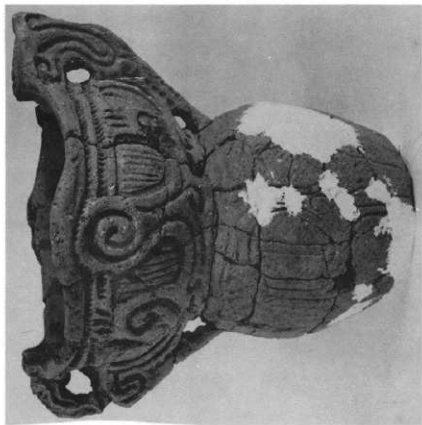
25. 同 土器出土状態



26. B 9 号住居址埋藏



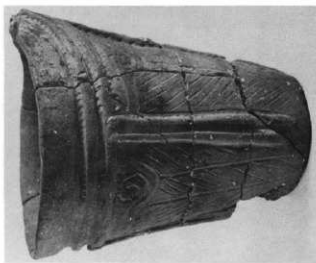
27. 同 出土深鉢



28. 同 出土深鉢



29 同出土深鉢



30 同出土鉢



31. B 10号住居址



32 同 埋甕



33. 同 出土深鉢



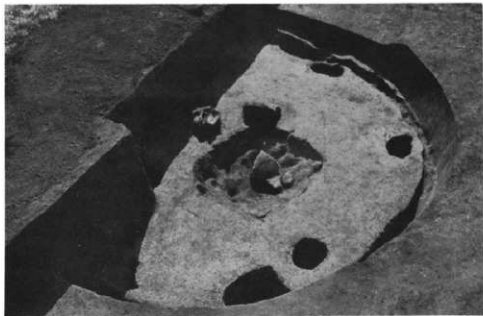
34. B11号住居址



35. 同埋壺



36. 同埋壺2



37. B 12号住居址



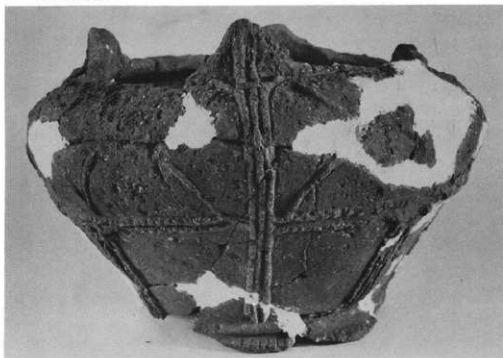
38. B 13・B 14号住居址



39. B 13号住居址



40. B 14号住居址埋甕伊



41. 同 伊埋甕



42. 手前より B 21, B 22, B 20, B 16, B 19, B 18, B 17号住居址の切りあい



43. B 22, B 20, B 16, B 19, B 18, B 17号住居址の切りあい 向うは B 23, B 24, B 25, B 26, B 27, B 28, 号住居址



44. B 17号住居址 (B 18号住居址の上ののる)



45. B 22号住居址 (B 20号住居址をきる石棒が南外にある)



46. B 22号住居址埋喪



47. B 23号住居址埋喪



48. B 23号住居址



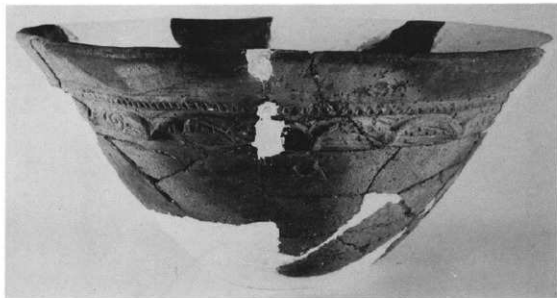
49. B 24号住居址 (B 23・B 25号住居址にきられる)



50. 同 礎



51. 同 土器出土状態



52. B 24号住居址出土浅鉢



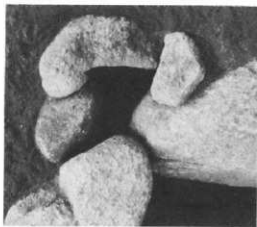
53. 同 出土深鉢



54. 同 出土鉢



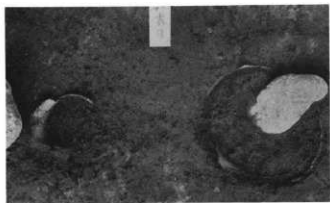
55. B25号住居址



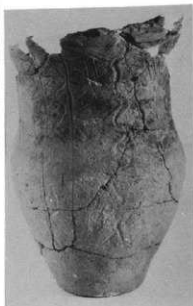
56. 同 炉厨伊



57. 同 押石製目の打石器



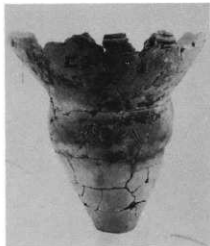
58. B 25号住居址埋壙



60. 同 埋壙 1



59. 同 埋壙



61. 同 埋壙 2